

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第606集

おほ ぼたけ
大畑皿遺跡発掘調査報告書

東北横断自動車道釜石秋田線関連遺跡発掘調査

2013

国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
(公財)岩手県文化振興事業団

大畑Ⅲ遺跡発掘調査報告書

東北横断自動車道釜石秋田線関連遺跡発掘調査

序

本県には、縄文時代をはじめとする数多くの埋蔵文化財が残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことの出来ない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりに公共事業や社会資本整備が必要となりますが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、東北横断自動車道釜石秋田線道路工事に関連して、平成23年度に発掘調査を実施した遠野市大畑Ⅲ遺跡発掘調査の成果をまとめたものです。今回の調査では今から4千年余りに営まれた縄文時代中期後葉の集落跡が確認された他、縄文時代の溝状陥し穴群、近世の井戸跡などが検出されました。これらは当地方の歴史を考える上で欠くことのできない資料になることと思われま

す。本書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財についての理解、関心をいっそう深めることに役立つことを切に願います。

最後に、これまでの発掘調査及び報告書作成にご援助、ご協力を賜りました国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所、遠野市教育委員会をはじめとする関係各位に衷心よりの謝意を表します。

平成25年2月

公益財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 池田克典

例 言

- 1 本書は、遠野市宮守町下鱒沢33地割210地内に所在する大畑Ⅲ遺跡発掘調査の成果を取録したものである。
- 2 本遺跡の発掘調査は、東北横断自動車道釜石秋田線建設工事に伴う緊急事前調査である。調査は岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課の指導と調整のもとに、国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所の委託を受け、公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが平成23年度に実施した。
- 3 岩手県遺跡台帳に示される本遺跡の遺跡番号はNE30-2300、調査略号はOB-Ⅲ-11である。
- 4 大畑Ⅲ遺跡は今回の道路建設事業に伴う県教育委員会による遺跡分布調査の結果、その存在が明らかとなったもので、平成22年度に実施した試掘調査により本調査範囲が確定された。
- 5 野外調査期間、調査面積、調査担当者は以下の通りである。
平成23年4月20日～10月3日 調査面積18,005㎡
高木 晃 北田 勲 巴 亜子
- 6 室内整理期間、担当者は以下の通りである。
平成23年11月1日～24年3月31日 高木 晃 巴 亜子
- 7 業務委託は以下の機関に委託した。
基準点測量：(株)イチイ土木コンサルタント
航空写真撮影：東邦航空株式会社
表土除去・残土処理：(株)栄組
石器類石材同定：花崗岩研究会
出土品の自然科学的分析：(株)バリノ・サーヴェイ
黒曜石産地分析：明治大学文化財研究施設
放射性炭素年代測定：(株)加速器分析研究所
- 8 遺構写真撮影は調査担当者、遺物写真撮影は写真撮影技師矢羽々朗が担当した。
- 9 本書の執筆はⅣ章2節(1)堅穴住居跡を高木・北田が分担し文責を記した。これ以外の執筆と編集は高木が担当した。
- 10 野外調査、室内整理にあたり次の機関、個人の御協力、御指導をいただいた(順不同・敬称略)。
遠野市教育委員会 近隣住民の方々
菊池一晃 黒田篤史 小向裕明 斎藤邦雄 中村良幸 羽柴直人
- 11 これまでに、調査成果の一部を現地説明会資料、調査略報等に公表しているが本書の記載内容を正式なものとする。
- 12 本遺跡の出土遺物、記録類は岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

凡 例

- 1 挿図の縮尺は各図毎にスケールを付した。
- 2 層名は基本土層にローマ数字、各遺構埋土にアラビア数字を使用した。
- 3 土層の記載には、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」を使用した。
- 4 遺構図等の方位は真北を表示している。
- 5 遺構図中で記載した座標値は世界測地系に基づく。なお平成23年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震以前の数値を使用しており、地震による移動量については第Ⅲ章第1節に記載した。
- 6 遺構図中で記載した遺物番号は遺物掲載番号である。
- 7 本書では国土地理院発行5万分の1地形図「人首」を使用した。
- 8 遺構・遺物図については必要に応じ各図に凡例を示した。
- 9 遺物写真は不定縮尺である。

目 次

I 調査に至る経過

II 遺跡の立地と環境

1 遺跡の位置・立地	1
2 遺跡周辺の地形・地質環境	3
3 調査区内の層序	4
4 歴 史 的 環 境	4

III 調査と整理の方法

1 野 外 調 査	7
2 室 内 整 理	11

IV 調 査 内 容

1 概 要	18
2 遺 構	18
(1) 竪穴住居跡	18
(2) 竪穴状遺構	31
(3) 土 坑	31
(4) 陥し穴状遺構	35
(5) 焼土遺構	35
(6) 配石遺構	37
(7) 溝 跡	37
(8) 柱穴状小土坑	38

(9) 風倒木痕	38
(10) 旧河道	38
(11) 近世墓	40
3 遺物	78
(1) 遺構内出土遺物	78
(2) 遺構外出土遺物	83

V 自然科学分析

1 大畑Ⅲ遺跡における放射性炭素年代 - (株) 加速器分析研究所	122
2 大畑Ⅲ遺跡出土遺物の自然科学分析 - (株) パリノ・サーヴェイ	128
3 大畑Ⅲ遺跡出土黒曜石製遺物の原産地推定 - 明治大学文化財研究施設	139

VI 総括

1 縄文時代中期の集落	148
2 全体の状況	153

図版目次

第1図 遺跡位置図	2	第25図 SI18・SI19住居跡	56
第2図 調査区地形図	3	第26図 SX01竪穴状遺構	57
第3図 周辺遺跡分布図第	5	第27図 土坑(1)	58
第4図 グリッド配置図	8	第28図 土坑(2)	59
第5図 調査工程	10	第29図 土坑(3)	60
第6図 遺構分布図	13	第30図 土坑(4)	61
第7図 遺構分布図部分(1)	14	第31図 土坑(5)	62
第8図 遺構分布図部分(2)	15	第32図 土坑(6)	63
第9図 遺構分布図部分(3)	16	第33図 土坑(7)	64
第10図 遺構分布図部分(4)	17	第34図 土坑(8)	65
第11図 SI01・SI02住居跡	42	第35図 土坑(9)	66
第12図 SI03・SI04住居跡(1)	43	第36図 陥し穴状遺構(1)	67
第13図 SI04住居跡(2)	44	第37図 陥し穴状遺構(2)	68
第14図 SI05住居跡	45	第38図 陥し穴状遺構(3)	69
第15図 SI06住居跡(1)	46	第39図 陥し穴状遺構(4)	70
第16図 SI06住居跡(2)	47	第40図 焼土遺構・配石遺構・柱穴状小土坑	71
第17図 SI07・SI08住居跡(1)	48	第41図 溝跡(1)	72
第18図 SI08住居跡(2)	49	第42図 溝跡(2)	73
第19図 SI09住居跡	50	第43図 溝跡(3)	74
第20図 SI10・SI11・SI13住居跡	51	第44図 旧河道(1)	75
第21図 SI12・SI14住居跡	52	第45図 旧河道(2)	76
第22図 SI15住居跡	53	第46図 近世墓	77
第23図 SI16住居跡	54	第47図 遺物(1) SI02・03	94
第24図 SI17住居跡	55	第48図 遺物(2) SI04	95

第49図	遺物 (3) SI04	96	第64図	遺物 (18) SI18	111
第50図	遺物 (4) SI04	97	第65図	遺物 (19) SI19・堅穴状遺構・土坑	112
第51図	遺物 (5) SI05・06	98	第66図	遺物 (20) 土坑	113
第52図	遺物 (6) SI06	99	第67図	遺物 (21) 土坑	114
第53図	遺物 (7) SI06・07・08	100	第68図	遺物 (22) 土坑	115
第54図	遺物 (8) SI08	101	第69図	遺物 (23) 土坑・陥穴状遺構	116
第55図	遺物 (9) SI08	102	第70図	遺物 (24) 近世墓	117
第56図	遺物 (10) SI09	103	第71図	遺物 (25) 溝跡・柱穴状小土坑	118
第57図	遺物 (11) SI10	104	第72図	遺物 (26) 遺構外	119
第58図	遺物 (12) SI10・11・12	105	第73図	遺物 (27) 遺構外	120
第59図	遺物 (13) SI12・13・14	106	第74図	遺物 (28) 遺構外	121
第60図	遺物 (14) SI15	107	第75図	縄文土器集成	148
第61図	遺物 (15) SI15・16	108	第76図	堅穴住居跡集成	150
第62図	遺物 (16) SI16	109	第77図	堅穴住居跡分布変遷	152
第63図	遺物 (17) SI17	110			

表 目 次

第1表	土坑一覧表	32	第7表	石器観察表	89
第2表	陥穴状遺構一覧表	36	第8表	土製品観察表	92
第3表	柱穴状小土坑一覧表	39	第9表	金属製品観察表	92
第4表	近世墓一覧表	41	第10表	陶磁器観察表	92
第5表	改葬墓碑銘	41	第11表	副葬品観察表	93
第6表	土器観察表	85	第12表	住居跡一覧表	151

写真図版目次

写真図版1	空撮	157	写真図版18	SI09	174
写真図版2	調査区 (1)	158	写真図版19	SI10	175
写真図版3	調査区 (2)	159	写真図版20	SI11	176
写真図版4	調査区 (3)	160	写真図版21	SI12	177
写真図版5	SI01	161	写真図版22	SI13	178
写真図版6	SI02	162	写真図版23	SI14	179
写真図版7	SI03	163	写真図版24	SI15 (1)	180
写真図版8	SI04 (1)	164	写真図版25	SI15 (2)	181
写真図版9	SI04 (2)	165	写真図版26	SI16 (1)	182
写真図版10	SI05	166	写真図版27	SI16 (2)	183
写真図版11	SI06 (1)	167	写真図版28	SI17	184
写真図版12	SI06 (2)	168	写真図版29	SI18	185
写真図版13	SI06 (3)	169	写真図版30	SI19	186
写真図版14	SI07	170	写真図版31	堅穴状遺構	187
写真図版15	SI08 (1)	171	写真図版32	土坑 (1)	188
写真図版16	SI08 (2)	172	写真図版33	土坑 (2)	189
写真図版17	SI08 (3)	173	写真図版34	土坑 (3)	190

写真図版35	土坑 (4)	191	写真図版60	旧河道 (1)	216
写真図版36	土坑 (5)	192	写真図版61	旧河道 (2)	217
写真図版37	土坑 (6)	193	写真図版62	近世墓 (1)	218
写真図版38	土坑 (7)	194	写真図版63	近世墓 (2)	219
写真図版39	土坑 (8)	195	写真図版64	出土遺物 (1)	220
写真図版40	土坑 (9)	196	写真図版65	出土遺物 (2)	221
写真図版41	土坑 (10)	197	写真図版66	出土遺物 (3)	222
写真図版42	土坑 (11)	198	写真図版67	出土遺物 (4)	223
写真図版43	土坑 (12)	199	写真図版68	出土遺物 (5)	224
写真図版44	土坑 (13)	200	写真図版69	出土遺物 (6)	225
写真図版45	土坑 (14)	201	写真図版70	出土遺物 (7)	226
写真図版46	土坑 (15)	202	写真図版71	出土遺物 (8)	227
写真図版47	土坑 (17)	203	写真図版72	出土遺物 (9)	228
写真図版48	陥し穴状遺構 (1)	204	写真図版73	出土遺物 (10)	229
写真図版49	陥し穴状遺構 (2)	205	写真図版74	出土遺物 (11)	230
写真図版50	陥し穴状遺構 (3)	206	写真図版75	出土遺物 (12)	231
写真図版51	陥し穴状遺構 (4)	207	写真図版76	出土遺物 (13)	232
写真図版52	陥し穴状遺構 (5)	208	写真図版77	出土遺物 (14)	233
写真図版53	陥し穴状遺構 (6)	209	写真図版78	出土遺物 (15)	234
写真図版54	陥し穴状遺構 (7)	210	写真図版79	出土遺物 (16) 近世基副葬品①	235
写真図版55	焼土遺構	211	写真図版80	出土遺物 (17) 近世基副葬品②	236
写真図版56	配石遺構・溝 (1)	212	写真図版81	出土遺物 (18)	237
写真図版57	溝 (2)	213	写真図版82	出土遺物 (19)	238
写真図版58	溝 (3)	214	写真図版83	出土遺物 (20)	239
写真図版59	柱穴状小土坑・風倒木痕	215			

I 調査に至る経過

「大畑Ⅲ遺跡」は、東北横断自動車道釜石秋田線（遠野～東和間）の施工に伴って、その事業区域内に存在することから発掘調査を実施することになったものである。

東北横断自動車道は、釜石市を起点として、遠野市、奥州市を経由し、花巻市にて東北縦貫自動車道（東北道）に合流し、更に北上市にて分岐し、西和賀町、横手市、大仙市を経由して秋田市に至る総延長212km（内岩手県内113kmで供用区間は45km）の高規格道路である。

本路線は、釜石港、大船渡港といった重要港湾や観光資源豊富な陸中海岸国立公園を有する三陸地方拠点都市地域と、先端技術産業の集積が著しい北上中部地方拠点都市地域等の岩手県内と秋田県を結び、周辺地域のみならず岩手・秋田両県全域の産業・経済発展を担うことを目的に平成10年度に遠野～宮守間で整備計画、宮守～東和間では施行命令が、平成15年度には新直轄方式により整備することが決定している。

「大畑Ⅲ遺跡」については、過年度において岩手県教育委員会が分布調査を実施し、埋蔵文化財がある可能性がある箇所とされ、平成22年度に試掘調査を実施した。試掘調査の結果、遺構が確認され「大畑Ⅲ遺跡」とされた。その結果に基づいて岩手県教育委員会と国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所が協議を行い、発掘調査を公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化センターの受託事業とすることにした。

これにより平成23年4月12日付けで岩手河川国道事務所長と公益財団法人岩手県文化振興事業団理事長との間で受託事業を締結し、「大畑Ⅲ遺跡」の発掘調査に着手した。

（国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所）

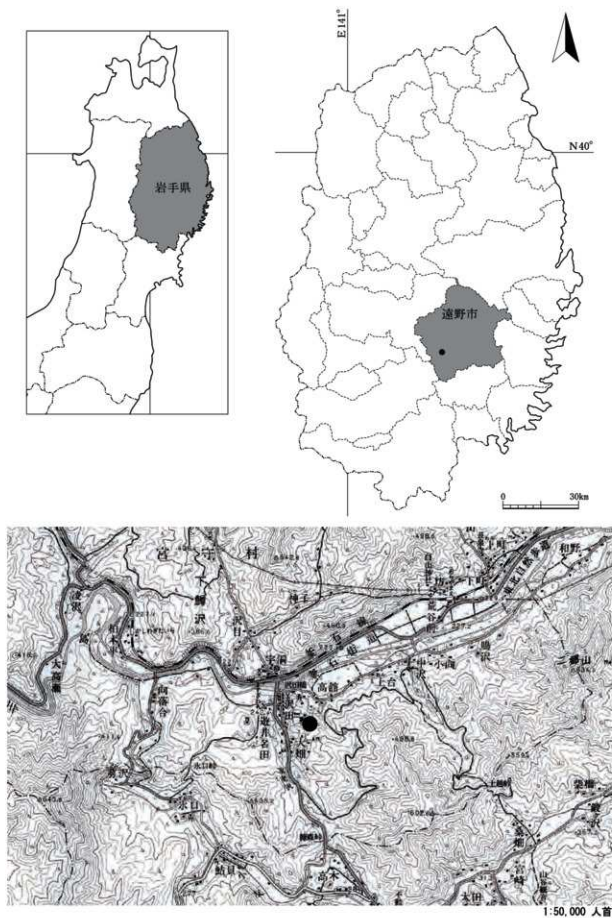
II 遺跡の立地と環境

1 遺跡の位置・立地

大畑Ⅲ遺跡は岩手県遠野市宮守町下鱒沢第33地割内に所在する。遠野市は岩手県南東部に位置し、総面積825.62km²、人口29,910人を数え（平成24年2月）、古来より内陸部と沿岸部を結ぶ要衝として発展してきた地方都市である。遺跡の所在する鱒沢地区は平成17年10月の合併以前は旧宮守村に属し、西は花巻市（旧東和町）に接する。猿ヶ石川が形成する河谷沿いの平地に集落が点在しJR釜石線、国道107号線、国道283号線が通じる。

大畑Ⅲ遺跡の位置は北緯39度17分41秒、東経141度24分21秒付近（世界測地系、調査区北西部の3級基準点No1）であり、国土地理院発行2万5千分の1地形図「小友」図幅に含まれる。JR釜石線鱒沢駅からは南東約1kmに位置し、現在の沢田・大畑集落東側の尾根筋から斜面、及び斜面裾の平坦面が遺跡範囲として把握されている。調査区の標高は245～274mである（第1・2図）。

調査着手前は斜面及び尾根上は雑木林及び植林された杉林、西側の平坦面は牧草地、畑地として利用されていた。なお地権者の方からは、尾根上の杉林は第二次大戦後に植林されたものでそれ以前は放牧地として利用されていた、最初の開墾がいつ頃なのかはわからない、という話をうかがっている。尾根上に近世後半陶磁器が出土していることから開墾は近世後半に遡ると推測される。



第1図 遺跡位置図

2 遺跡周辺の地形・地質環境

遠野盆地は北上山地のほぼ中央に位置し、北端の薬師岳（標高1644.9m）をはじめ東側の六角牛山（1294.1m）、西側の石上山（1038.1m）などの千m級の山嶺に囲まれ、全域が北上川の支流、猿ヶ石川の流域にあたる。遠野盆地は遠野中心市街地付近が最も開けており、これより下流側の大畑Ⅲ遺跡がある下鱒沢地区では西流する猿ヶ石川に沿って開けた谷底平野が東西に伸び、小友地区から流れ出た小友川がやや下流で合流する。猿ヶ石川はこれより下流の柏木平地区で大きく蛇行を繰り返し、砥森山南麓の峡谷に至る。

大畑Ⅲ遺跡が面する沢田、大畑集落は猿ヶ石川に注ぐ家老沢によって開析された山麓緩斜面から猿ヶ石川に面した谷底平野にまたがって立地し、調査区背後の丘陵は小友川流域と猿ヶ石川流域の分水嶺をなす新田山（661.2m）、二郷山（634.5m）から西に連なる稜線中の標高602.6m三角点から北に派生する支尾根末端に位置する。また猿ヶ石川北岸は笠通山（869.2m）南側山麓が急傾斜で谷底平野に接する地形となっている。

遠野盆地の主要部分は遠野花崗岩帯と呼ばれる岩帯で占められるが、盆地東縁、及び西縁においては古・中生界の粘板岩、石灰岩、輝緑凝灰岩等が分布する。この盆地の大まかな地形は、北上山地を大きく北西-南東方向に伸びる地質構造線（土淵-盛岡構造線、遠野-高館構造線、日詰-気仙沼構造線など）によりその東・西縁を限られて形成されたと推定されている。



第2図 調査区地形図

3 調査区内の層序

大畑Ⅲ遺跡の調査区内では南西端平坦面を除く斜面から尾根上にかけて、共通して腐植土、黒色土の発達が弱く、現地表から概ね20～30cm下位で所謂地山と判断される褐色粘土層に達する。表層のⅠ層（黒色～黒褐色シルト）中には近現代遺物が含まれており、重機による除去対象層とした。

Ⅰ層下位にはⅡ層（黒褐色～暗褐色粘土質シルト層）とした漸移層が広く分布する。縄文時代遺物が含まれる他、埋土がⅠ層と同相の黒色土からなる遺構は、Ⅱ層上面での検出が可能である。またⅡ層には山体を構成したと見られる安山岩・頁岩・石英等の角礫が多く含まれる。

Ⅱ層下位は調査区のはほぼ全域でⅢ層（褐色粘土層）である。Ⅲ層上面が遺構検出の最終面となる。縄文時代の住居跡、土坑等は本層上面にてⅡ層相当の暗褐色土の落ち込みとして検出したものが主体である。またⅢ層にもⅡ層同様に角礫の含有が顕著であるが遺物包含は確認されない。Ⅲ層以下は暗赤褐色に漸変する。

なお、東尾根上にある縄文時代中期の風倒木痕（SX31）内に灰白色火山灰ブロックが含まれており、分析の結果十和田大不動テフラ（To-Of）と同定された。また、西側平坦面の土坑（SK40）堆積土上部に十和田中掬テフラ（To-cu）が確認されている（V章2（1）参照）。

4 歴史的環境

（1）遠野盆地の縄文時代中期集落

国史跡として保存されている綾織新田遺跡をはじめとして、北上川流域における他地域と同様に遠野市内には多数の縄文時代遺跡分布が明らかとなっているが、ここでは大畑Ⅲ遺跡と密接な関連を持つ縄文時代中期後葉に絞って他遺跡の状況を概観する。

まず大規模な発掘調査が行われ遺跡の内容がよく把握されているものとして、附馬牛町張山遺跡（遠野市教委2006）、綾織町新田Ⅱ遺跡（岩手県文振2011）がある。張山遺跡は遠野市教育委員会による発掘調査が平成6～7年に実施され、縄文中期後葉大木9式段階から後期初頭門前式段階にかけての大規模な集落のほぼ全域が発掘された。73棟の堅穴住居跡が密集し中央部には土坑墓が集中する区域が検出されている。出土遺物も多量で翡翠大珠等も含まれ拠点集落として位置づけられる。

新田Ⅱ遺跡は大畑Ⅲ遺跡から東北東に約6kmの位置にあり、国指定史跡綾織新田遺跡の北側に隣接した地点について（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターにより平成21年度に調査が行われた。縄文中期後葉大木8b式段階大木9式段階の堅穴住居跡26棟、掘立柱建物跡4棟等が土坑墓群を囲み環状に配置される状況が明らかとなっている。大畑Ⅲ遺跡と同時期の集落であり住居形態、立地等も類似する。縄文時代の集落分布、領域、あるいは集落同士の関係を考える上で参照すべき成果であろう。

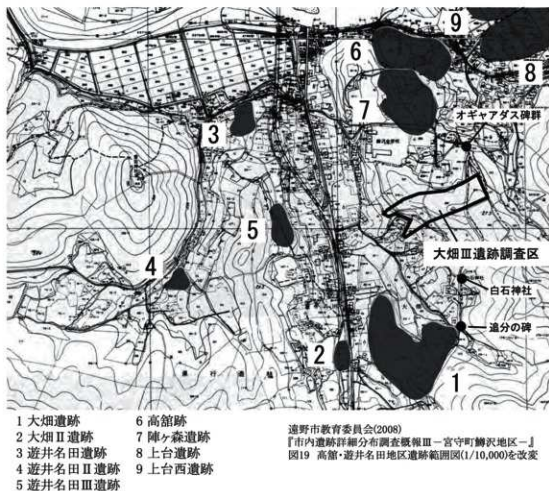
一方、この2遺跡以外には大規模な緊急調査が実施された遺跡においても縄文中期後葉集落の検出例は比較的小さい。猿ヶ石川支流の来内川流域に所在する遠野ダム建設関連で調査が行われた九重沢遺跡、栃洞Ⅱ遺跡、夫婦石袖高野遺跡ではいずれも縄文時代早期、前期、後期を主体としており、中期遺物はほぼ見られない。また遠野盆地中央部に所在する高瀬Ⅰ遺跡、新田Ⅱ遺跡の対岸に近い寒風遺跡も同様である。このように縄文中期遺跡の希薄な状況は、盛岡市周辺や北上市周辺等北上盆地及びその周辺地域において大規模な縄文中期集落遺跡が多数分布し、土器片が発見される程度の小規模な遺跡まで含めると相当の数に上るといった状況と対照的である。開発の進捗が影響している面もあ

り得るが、縄文時代集落の立地選択等が分布状況の違いを生み出している可能性について今後の検討が必要になると思われる。

(2) 大畑Ⅲ遺跡周辺の状況

続いて大畑Ⅲ遺跡が立地する鱒沢地区の歴史的環境について触れる。旧宮守村域内では全国的に著名な旧石器時代の金取遺跡をはじめ、縄文時代では大笹遺跡、大川目遺跡等の発掘調査が行われてきたが、鱒沢地区に限定すると本格的な発掘調査は今回の大畑Ⅲ遺跡が初めてであり、縄文時代における周辺の状況は遺跡分布調査成果が唯一の手がかりとなる。

近年行われた遠野市教育委員会による遺跡詳細分布調査（遠野市教育委員会2008）によると下鱒沢地区の猿ヶ石川南岸では高館跡、陣ヶ森遺跡、大畑遺跡、大畑Ⅱ遺跡、遊井名田遺跡、遊井名田Ⅱ遺跡、遊井名田Ⅲ遺跡、また北東側にあたる上台地区では上台遺跡、上台西遺跡、上台北遺跡、上台東遺跡の存在が把握されている（第3図）。いずれも縄文土器、石器が採集され、縄文時代の遺跡が点在する状況となっている。特に大畑Ⅲ遺跡から400mほど南に隔てた大畑遺跡は縄文前期の遺物が多数表採できる場所として地元では著名である。表採遺物には珠状耳飾りも含まれているとのことで、縄文前期の拠点的な集落が存在していたものと考えられる。その他、上台西遺跡では平安時代遺物、



第3図 周辺遺跡分布図

水口峠に通じる旧街道沿いに遊井名田番所が所在した遊井名田遺跡、陣ヶ森遺跡では中・近世遺物が採集されている。

大畑Ⅲ遺跡の北側に位置する高館跡は建武年間以前の築城と伝えられる。建武元年（1334）、陸奥守北畠顕家が発した国宣状によると、高館の館主であった阿曾沼氏家老面懸左衛門尉が謀反を起こし、顕家の家臣南部師行に討伐されたとある（遠野市史）。この時、面懸が籠城した高館の西側、堀割を隔てて南部師行が陣を構えたのが陣ヶ森であると伝えられる。館跡には遠野市天然記念物の指定を受けたエドヒガンザクラ（樹齢700年と推定）がある。

大畑Ⅲ遺跡の北西側にあたる沢田地区では明治初期に猿ヶ石川に木造の沢田橋が架けられ、旧街道沿いの宿場町として栄えてきた。JR釜石線鱒沢駅は大正4年（1915）に前身の岩手軽便鉄道宇洞駅として開業し、国有化後の戦後は近郷からの木材集荷などで賑わったという。現在の物資輸送は自動車専らとするが、国道107号線、283号線の交差点があり交通量が多い地区である。

大畑Ⅲ遺跡調査区内、東寄りの尾根上に通じる市道浅洞線は現在幅員約3mの未舗装路であり、山林での作業道として利用されているに過ぎないが、近世においては遠野から綾織、鱒沢、小友を経て五輪峠から江刺に通じる江刺街道の一部であった。調査区北側には「オギアダス碑群」（旅人に「お粥を出す」が訛ってオギアダスとなったと伝わる）なる石碑群が林間に所在し、宝永五年（1708）唵庚申帝碑をはじめ文政～慶応年間の10基の石碑が現存する。調査区から南に林間の旧江刺街道を辿ると約200mで兜石伝承のある白石神社を過ぎ追分の碑に至る。追分の碑には「右ハとの、左ハみやもり」とあり街道はここから糠森峠を経て小友地区に入る。

※鱒沢地区の地誌については水原義人著『鱒沢三区小誌（第一編）郷土の伝承と碑』（1998年鱒沢三区自治会発行）を参照した。

Ⅲ 調査と整理の方法

1 野外調査

(1) 基準点測量

調査区内に3級基準点2点(3-No1、3-No2)を設置し、第10系江刺電子基準点、同遠野電子基準点を使用しGPS測量により座標値を求めた。

調査区内に設置した基準点の世界測地系座標値は以下のとおりである。

3級基準点	3-No1	X = -78122.166	Y = 49403.769
	3-No2	X = -78100.053	Y = 49575.949
4級基準点	基1	X = -78130.000	Y = 49420.000
	基2	X = -78130.000	Y = 49500.000
	基3	X = -78130.000	Y = 49580.000
	基4	X = -78194.000	Y = 49420.000

実際の測量作業は平成23年5月に行ったが、同年3月に発生した平成23年東北地方太平洋沖地震によって国土地理院基準点が移動したことに伴う新座標値の公表が8月に行われたため再計算を行った結果、3級基準点の新座標値は以下の数値となる。概略、3m余り南東方向に移動している状況が判明した。調査に使用した座標値は再計算前の数値であるため留意されたい。

3-No1	X = -78123.749	Y = 49406.322
	位置誤差：3.004	X誤差：1.583 Y誤差：-2.553
3-No2	X = -78101.678	Y = 49578.508
	位置誤差：3.031	X誤差：1.625 Y誤差：-2.559

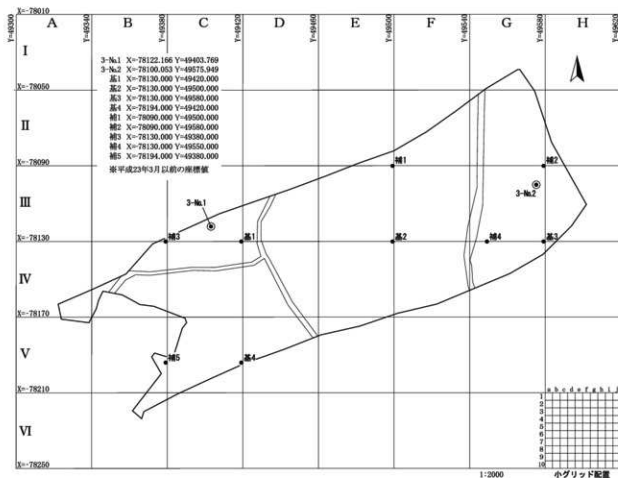
(2) グリッドの設定

グリッドは4級基準点基1～4を起点として1辺40mの大グリッドにより区画し、さらに1辺4mの小グリッドに分割している。大グリッド名は北から南方向にローマ数字のⅠ・Ⅱ・Ⅲ・・・、西から東方向にアルファベット大文字のA・B・C・・・を組み合わせ、ⅠA・ⅡBとした。小グリッド名は北から南方向に算用数字の1・2・3・・・10、西から東方向にアルファベット小文字のa・b・c・・・jを組み合わせ、1a・2bとした。実際のグリッド呼称は大小グリッド表示の組み合わせによりⅠA2bといった表示とし、グリッド杭名称はグリッド北西隅の点に与えた(第4図)。

(3) 調査区の地区割と調査の進行

調査区は西側の平坦面と斜面、尾根筋、東側の尾根筋にまたがっている。調査の進行上、次のように地区を区分した(第2図)。

①区	西端低地	2,557㎡
②区	西尾根南西斜面	4,902㎡
③区	西尾根上北西部	3,134㎡
④区	西尾根上南東部	2,196㎡
⑤・⑥区	東尾根上	2,990㎡



第4図 グリッド配置図

今回の調査にあたっては残土を調査区内に仮置きする必要があったため、調査の段取りは残土処理を効率的に進めることを優先し西側の低地部分から順次東側の根根筋へと進行した。実際の進捗状況は第5図の通りである。

②区（西尾根南西斜面）については全体が斜度10～30°程度の斜面地であり遺構、遺物検出の見込みが小さいと予想されることから、斜面方向にトレンチを掘削し遺構、遺物が確認された部分を拡張する方法を採った。②区トレンチ部分の合計面積は594㎡で②区全体の約12%である。また西尾根北側斜面下部、東尾根東斜面の合計2,226㎡については、前年度の試掘結果から大きく削平を受けていることが判明しており、表土除去対象から除外した。

以上の調査工程によって、調査予定地範囲合計18,005㎡のうち実際に表土を除去した区域の面積は合計11,471㎡である。

(4) 遺構精査及び遺物の取り上げ

遺構名は下記のように種類別の略号と登録順の2桁数字と組み合わせて登録した。

堅穴住居跡：SI、土坑：SK、焼土遺構：SF、溝跡：SD、配石遺構：SQ

これ他に検出段階で遺構種別が不明であったものはS Xを使用した。これにはS X 01堅穴状遺構、及びS X 02～71（欠番あり）とした風倒木痕が該当する。また開口部の径が概ね50cm未満となる小径

のピットについてはP001等としP+3桁の数字を遺構名とした。

遺構精査にあたってはベルト設定、もしくは半裁によって埋土を確認しながら掘り下げた。遺物の取り上げは原位置の記録を原則としたが、堅穴住居跡埋土上層、及び土坑埋土上層に包含される遺物については層別に一括して取り上げたものが多い。また、住居跡に伴う柱穴、及び柱穴状小ピットについては基本的に半裁して掘り下げ埋土を確認したが、断面実測記録と個々の写真撮影を省略したものも含まれる。遺構外遺物の取り上げは小グリッド（4m四方）、基本土層単位での取り上げを原則としているが、表土除去、及び検出段階で取り上げたものについては大グリッド単位（40m四方）の取り上げとしているものが含まれる。

なお今回の調査区内では相当数の倒木痕が分布していた。検出段階でプラン中央に地山土層の盛り上がりが見られる場合、また半裁によって同様の状況が認められた場合には倒木痕と判断し、遺物が含まれる可能性のある部分のみ全体を掘り下げ、上端輪郭の平面図を記録して終了とした。また、調査区南西端①区、及び調査区北東端⑥区で確認された旧河道については、一部をトレンチ調査し埋土、底面の状況、遺物出土状況等を確認したが、いずれも遺物出土が僅少であったため全体の掘り下げは行っていない。

（5）実測記録及び写真撮影

遺構の平面実測は株式会社CUBIC製「遺構君CUBIC2011」を使用し、炬等の細部や遺物出土状況等については簡易遺り方実測を併用した。断面図は通常の手作業による実測を行った。

写真撮影は以下の機材を使用した。

中判（645判白黒フィルム）1台 使用機材 MAMIYA 645

35mm判デジタル一眼レフカメラ 1台 使用機材 Canon EOS5D

遺跡全体および遺跡周辺の空撮（委託撮影）は67判（モノクロ・ネガカラー）での撮影を行った。

（6）調査経過

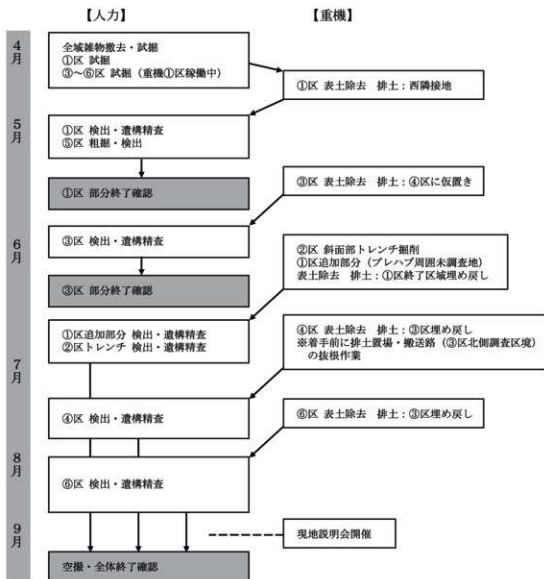
平成23年（2011年）

- 4月20日 機材搬入 設営開始 調査員2名作業員16名 以降4月28日にかけて全域の雑物撤去、試掘を行う
- 4月22日 遠野市教育委員会文化課文化政策係長新田正宏氏、同課主任黒田篤史氏来跡
- 4月25日 作業員5名増員
- 4月25～28日 ①区重機表土除去
- 5月6日 ①区検出開始
- 5月9日 ①区遺構精査開始
- 5月10日 作業員4名増員
- 5月13日 東尾根北端⑤区表土除去 遠野市教委文化課新田係長・黒田主任来跡
- 5月16～19日 西尾根北西側③区重機表土除去
- 5月19日 駐車場用地に係る現地協議 県教育委員会生涯学習文化課菅常久主査来跡 基準点測量現地作業
- 5月20日 遠野市教委文化課課長小向孝子氏他来跡
- 5月20～31日 ③区遺構検出
- 5月26日 ①区遺構精査終了

< 区域 >

- | | |
|------------|-------------|
| ①区 西端平坦地 | ④区 西尾根南東部 |
| ②区 西尾根南西斜面 | ⑤区 東尾根北端 |
| ③区 西尾根北東部 | ⑥区 東尾根中央～南半 |

< 調査工程 >



第5図 調査工程

- 5月31日～6月3日 西尾根西斜面②区重機トレンチ掘削 ①区プレハブ裏表土除去
 5月31日 ③区遺構精査開始
 6月2日 ①区プレハブ裏検出開始
 6月7日 この頃より気温上昇し作業効率落ちる
 6月13日 作業員2名増員
 6月14日 ①区プレハブ裏遺構精査開始
 6月17日 ③区近世墓域掘削開始
 6月20日 近世墓埋め戻し土から副葬品出土 猛暑続く(9月上旬まで)
 6月22日 部分終了確認(①・②・③区対象) 近世墓から人骨出土
 6月27日～7月1日 西尾根南東側④区重機表土除去
 6月30日 ④区遺構検出開始
 7月5日 ④区遺構精査開始
 7月11～19日 東尾根⑥区重機表土除去
 7月20日 ⑥区遺構検出開始
 7月26日 近世墓出土人骨・副葬品を旧地権者に引き渡し
 7月27日 ⑥区遺構精査開始
 8月1～4日 岩手県立博物館主任専門学芸員斎藤邦雄氏調査指導
 8月30日 岩手日報取材 花巻市教育委員会文化課長中村良幸氏他来路
 9月1～16日 巴調査員合流
 9月3日 現地説明会開催(13:30～ 参加80名)
 9月14日 終了確認
 9月16日 空撮
 10月3日 調査終了 撤収(新田Ⅱ遺跡へ移動)

2 室内整理

(1) 遺構記録の整理

現地において作成した遺構平面図(第1原因)は必要に応じて「遺構君CUBIC2011」上で合成等の編集作業を行い、第2原因を作成した。手書き実測による断面図はAdobe社Illustrator CS4を用いてデジタルトレースを行い、平面図と組み合わせて遺構図版を作成した。本文中に記載した遺構規模等の計測値は第1原因をもとにしている。遺構写真はデジタルカメラ撮影データを使用しIllustrator CS4上で図版編集を行った。

(2) 遺物の整理

出土遺物は野外作業の雨天時および室内作業に入ってから水洗し、種別の仕分けを行った。仕分け以降の作業は遺物種類によって多少取り扱いが異なる。土器・陶磁器は接合・復元作業を行い、掲載資料の選抜後に注記を行った。石器・土製品・金属製品は全点を登録しその中から掲載資料を選抜した。掲載資料は実測、手書きトレースを経て図版作成を行った。陶磁器のみトレース図をスキャンし写真と組み合わせてデジタル図版データを作成した。遺物写真は掲載資料選抜後にデジタル一眼レフカメラ(CanonキヤノンEOS 1D)を使用して撮影し、Adobe社Photoshop CS4を用いてコントラスト

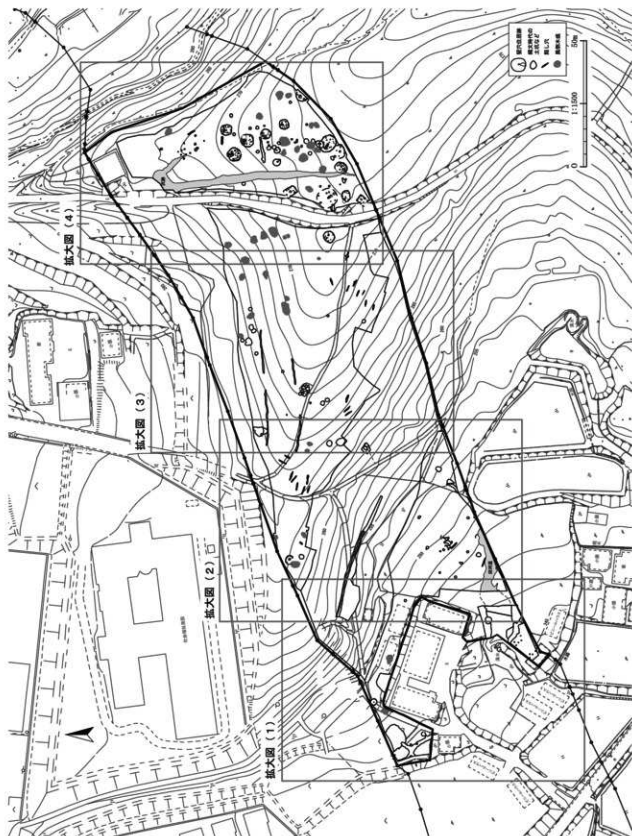
等の調整を行った後にIllustrator CS4上で図版データを作製した。

また、出土資料に関わり以下の委託分析を実施した。

石器石材鑑定は花崗岩研究会に委託し全点を対象に行った。全て肉眼による同定で岩石名称、産地、年代が特定できるものを記載している。遺構の年代観を検討する目的で遺構内、特に炉や床面出土の炭化物を選定し放射性炭素年代AMS測定を（株）加速器分析研究所に委託した。同時に一定以上の大きさを保持している炭化材、炭化種実についての種同定分析、テフラ試料の噴出源特定を目的とした屈折率測定、テフラ組成分析を（株）パリオサーヴェイに委託した。黒曜石製石器については原産地特定を目的とし明治大学文化財研究施設との共同研究形式で蛍光X線分析を実施した。以上の委託分析成果については第V章に収録している。

（3）室内整理経過

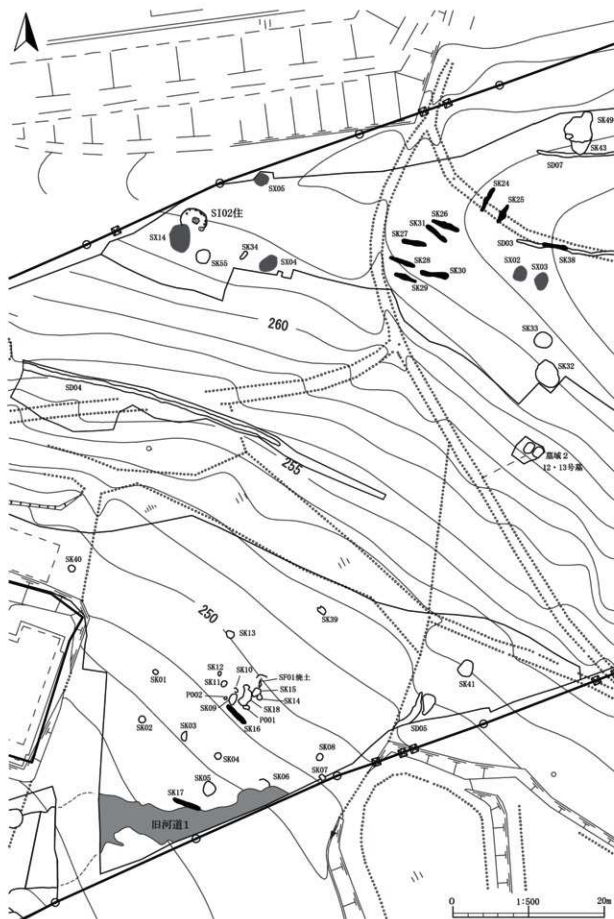
平成23年11月1日から開始し、11月上旬までに遺物水洗を終了、仕分け登録と平行して土器接合・復元を12月上旬まで行う。この時点で掲載遺物の選抜を行い各種遺物合わせて合計340点を掲載遺物として選抜した。12月下旬から2月中旬にかけて遺物実測、トレースを行い3月末までに遺物図版、遺物写真図版を完成した。遺構記録に関しては上記作業と平行し遺構図編集、図版作成、遺構写真図版作成を主にPC上で行い、同様に3月末までに完成した。



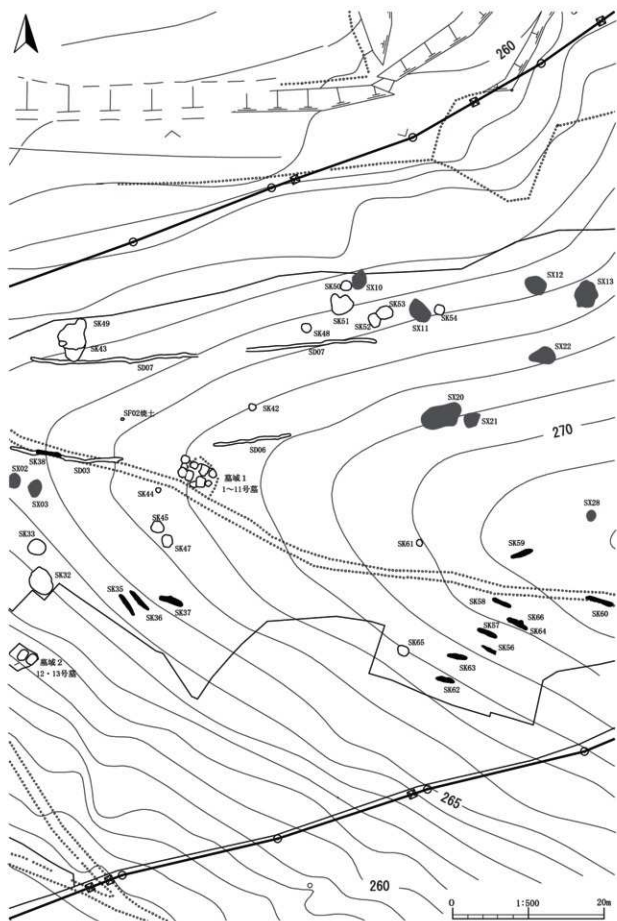
第6図 遺構分布図全体



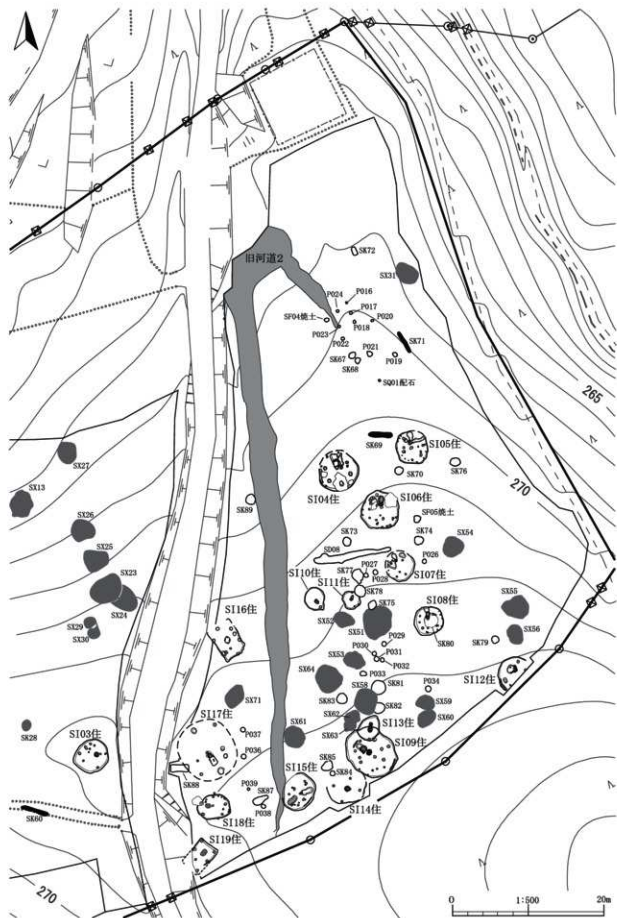
第7図 遺構分布図部分(1)



第8図 遺構分布図部分(2)



第9図 遺構分布図部分(3)



第10図 遺構分布図部分(4)

IV 調査内容

1 概要

調査区のはほぼ全域で縄文時代の遺構、遺物が確認される。特に⑥区（東尾根上南半）において縄文中期後葉を中心とする時期の竪穴住居跡17棟、土坑25基等が集中する。遺構は尾根頂部を中心に直径約70mの範囲に集中し、この外側では遺構、遺物分布が希薄になる。竪穴住居跡の平面形は円形を主体とし、炉の形態には土器埋設炉、石囲複式炉、地床炉等の種類がある。

その他、西尾根上から斜面にかけての③・④区を中心に局所的に並列する配置となる溝状の陥し穴状遺構24基、③区（西尾根上中央部）では19世紀代の土坑墓群2箇所（合計12基確認）、③区（西尾根上北西部）に縄文晩期後葉の小形竪穴住居跡1棟、①区（北西側低地部）に弥生時代後期の小形竪穴住居跡1棟、同じく北西側低地部に近世以降の水利施設の可能性がある竪穴状遺構1基、溝跡1条、南西側低地部に十和田中瀬テフラが再堆積した縄文時代前期の土坑1基、弥生時代後期と思われる小形円形土坑複数、近世以降の井戸跡と思われるやや大形の土坑2基等が検出された（第6～10図遺構分布図）。

以下、種別毎に個々の遺構について記載する。

2 遺構

(1) 竪穴住居跡

縄文・弥生時代に属する竪穴住居跡を19棟検出した。弥生時代後期の可能性が高いSI01住居跡、縄文時代晩期と思われるSI02住居跡以外の17棟は縄文時代中期後半に属し⑥区東尾根上南半に分布する。他に住居跡炉の可能性のあるSF05焼土遺構、SK87土坑もこの区域に位置する。

S I01住居跡（第11図 写真図版5）

調査区北西部の西尾根裾にあたる①区で、西方向に下がる緩斜面に位置する略円形の竪穴住居跡である。座標値はX=-78153、Y=49348付近、IV Bグリッド内である。表土除去後のⅢ層黄褐色粘土層上面で検出した。遺構北西壁は調査区境に近接している。

<形状・規模>形状は北西壁がやや直線的になる略円形で、規模は南北方向で2.7m、東西方向で2.6mである。壁高は斜面上位が32cmとやや抉れながら急斜度に立ち上がるが、斜面下位は6cmと浅い。床面は硬化が顕著で、斜面下位に緩く傾斜する。

<堆積状況>計4層で、暗褐色シルト主体で構成される。4層は初期堆積土。2層及び3層は主堆積土であるが、2層の斜面上位側には黄褐色粘土の地山崩落土が認められる。1層黒褐色シルトは後世の部分的な混入土と思われる。

<炉>床面中央からやや南西寄りに地床炉1基を検出した。北東から南西方向にやや長い不整形を呈しており、45×33cmの規模を持つ。赤褐色に強く熱変色しており、焼土上面は硬化している。

<柱穴>床面壁際に一周する小柱穴を13基検出した。壁際南半では20～30cm程の間隔で並ぶが、北半では50～100cm前後と間隔が広い。柱穴の規模は直径5～11cmの範囲に収まる小規模なもので、深さは3～15cmである。このうち断面形状を確認したP1及びP2では底面に向かって窄まる断面形を呈

する。半截せず完掘したP3～13も同様であり、また多くの柱穴は軸がやや斜めに住居の中央に向かっている。

＜遺物＞人工遺物はない。炉北側床面出土の炭化材片について同定を依頼した結果はコナラ属コナラ亜属コナラ節である（V章（2））。

＜AMS年代＞上述の炭化材片（試料№1）のAMS年代は14C年代で $1,880 \pm 20$ yrBP、暦年較正年代で80～132calADという弥生時代後期に相当する値である。

＜小結＞野外調査段階では床面壁際を巡る小柱穴の配置と中央の地床炉という構成より縄文時代後期中～後葉頃を想定しその後の概観等に記載してきたが、ここでは14C年代を採用し弥生時代後期の可能性が高い遺構と判断し、既述を訂正する。（北田）

S102住居跡（第11図 写真図版6）

調査区北西部③区の西尾根先端、南西方向に下がる緩斜面に位置する楕円形の竪穴住居跡である。座標値は $X=-78120$ 、 $Y=49405$ 付近、ⅢCグリッド内である。表土除去後のⅢ層黄褐色粘土層上面で検出した。遺構南半は 3.7×2.7 mの規模の倒木痕（SX14）により大きく攪乱されており、床面まで破壊されている。尾根上の立地から表土が薄いため木根による攪乱が著しく、全体に荒れた状態である。

＜形状・規模＞形状は南北壁がやや長い楕円形で、規模は東西方向で3.54m、南北方向で2.7m前後である。壁高は斜面上位の北壁が13cm、東西壁各8cm、南壁は残存しない。なお、床面南側や炉燃焼部は検出段階で既に露出した状況であった。

＜堆積状況＞計5層で構成されており、褐色土主体である。純粋な堆積土は2層暗褐色シルト及び4層褐色シルトで、1層は攪乱による炉石抜き取り痕に堆積したと思われる褐色シルト、3層黄褐色粘土は攪乱による地山再堆積土と考えられる。5層は炉燃焼部で弱変色している。

＜炉＞床面中央からやや東寄りに、攪乱により乱れているが石囲炉と考えられる燃焼部1基を検出した。径90cmの不整な円形を呈する。熱の影響は弱く、暗赤褐色に変色している。焼土周辺には石囲部を形成していたと考えられる10～20cm大の亜角礫が6個あり、南側3個は原位置を保っているが、その他は木根の影響で散乱している。

＜柱穴＞床面北東壁際に柱穴9基を検出した。規模は径15～30cm、深さ15cm未満の範囲である。斜面上位壁際にあるP3・4は15cm、P6は9cmと他に比べて深く、主柱穴と考えられる。P1は遺構プランから若干はみ出すため、本住居跡に伴わない可能性もある。また遺構南西側は倒木痕の影響で検出できなかったが、竪柱穴が存在したと考えられる。

＜掘り方＞炉の下層から、3基のビットを検出した。ビットはいずれも不整形を呈しており、規模はP8が111cm以上×79cm、P9が135cm×110cm以上、P10が60×55cm以上で、重なり合っている。床面中央に集中する点、上部に炉が構築されている点から、竪穴掘削時の掘り方と考えられる。

＜遺物＞土器片4点が堆積土2層～検出面にかけて出土する。床面出土遺物はない。炉上面から採取した炭化材の同定を依頼した結果はクリである（V章（2））。

＜AMS年代＞炉焼土上面の炭化材細片（試料№2）のAMS年代は14C年代で $2,560 \pm 20$ yrBP、暦年較正年代で795～671calBCの間に2つの範囲で示される。

＜小結＞出土遺物、AMS年代測定結果から、縄文時代晩期後葉と考えられる。（北田）

S103住居跡（第12図 写真図版7）

調査区中央部の④区西尾根最高部で、狭い平坦地となっている箇所位置する円形の竪穴住居跡で

ある。座標値はX=-78135、Y=49533付近、IVFグリッド内である。この区域では表土の形成が少なく、腐葉土層直下のⅢ層黄褐色粘土層上面で確認した。遺構の大半は暗褐色シルト層で覆われているが、遺構の北～西にかけては堆積土が薄く、プランが不明瞭となる。

<形状・規模>形状は南北壁がやや長い楕円形で、北～西壁がやや不整形な形状を呈している。壁高は東～南壁は11cmで外傾しながら緩やかに立ち上がるが、北～西壁は3～4cmで立ち上がりは明確でない。規模は、東西方向で4.7m、南北方向で4.3mである。

<堆積状況>2層に分層される。上部の1層は暗褐色シルトで、部分的に暗褐色の焼土粒が含まれる。下部の2層は比較的均質な黒色シルトで、大半の遺物はこの層位から出土している。

<炉>床面中央からやや東寄りに石囲炉を1基検出した。略円形を呈しており、規模は65×56cmである。炉は扁平な7個の亜角礫で形成されている。焼燃面は石囲内部の全面に拡がっており、中央付近の30×20cmが周囲より強く熱変色している。焼燃面上部には23×11cmの炭化物も認められる。また、焼燃面は石囲部の西側にも及んでいる。

<柱穴>計10基の柱穴を検出した。規則的な配置は認められず、床面北側にやや密集する傾向にある。P4は不整形であるが、その他は円形基調で、径20～30cm程度、深さ6～18cmの範囲にある。

<遺物>床面中央部を中心に土器片、剥片石器、礫石器が少量出土している。Na5土器大破片は炉に近接した位置の床面出土である。

<小結>出土遺物から、縄文時代中期後葉大木10式前半段階と考えられる。

(北田)

S104住居跡 (第12・13図 写真図版8・9)

調査区東端の⑥区東尾根中央部に位置する円形の堅穴住居跡である。座標値はX=-78095、Y=49566付近、ⅢGグリッド内である。Ⅱ層暗褐色土漸移層を除去したⅢ層黄褐色粘土層上面で検出した。付近は北に下る斜面にあたり、遺構北側ではプランが不明瞭である。また南側では風倒木痕(SX31)によって大きく攪乱され床面の広い範囲と南壁の一部が破壊される。

<形状・規模>形状はほぼ円形に近いが、東側、南西側に緩い突出が見られ全体としては不整多角形とも取れる形状となる。壁高は南壁の最高地点で50cmに達する。東、西壁では15～20cm程度で北壁側1/3周では立ち上がりが把握できない。遺構規模は南北方向で5.5m、東西方向で5.4mである。床面は中央部で硬化が進み若干の凹凸が見られる。

<堆積状況>4層に分層される。上部の1層は暗褐色～黒褐色シルト、中位2層はやや暗色になる黒褐色～黒色シルト層、下部3層は褐色シルト層で中央部には焼土ブロックが含まれる。北～西壁際では粘土質の4層褐色土が広がる。

<炉>床面中央付近から北壁際に向かって土器埋設部、石囲焼燃部、前庭部からなる複式炉を検出した。このうち土器埋設部のみが堅穴中軸線から東にずれており石囲焼燃部と前庭部は中軸線上に設置されている。土器埋設部は深鉢上半を倒立状態でピット内部に埋設しており、土器外面とピット壁面は密着する。土器周囲は非常に強い焼成を受け赤変し、土器内部には締まりのない褐色土が堆積する。

焼燃部は1.3×0.8mの楕円形の掘り込みで、中央南寄りに設置した長方形の間仕切石によって焼燃部1・2に分割されている。焼成痕は部分的に認められるのみだが、堆積土下半は炭化物を含む焼土が厚く堆積する。石囲は角礫を用いており断続的に残存するが、西側縁辺に炉石抜き取り痕が見られることから本来は全周に石囲が巡っていた可能性が高い。

前庭部は焼燃部2に接続する楕円形の掘り込みで規模は1.2×1.0m程、底面は焼燃部2から一段高く平坦である。中央にある角礫は底面に密着しており意図的に置かれた可能性がある。なお焼燃部2

と前庭部に接する東側に溝状の落ち込みがあるが、堅穴より新期の風倒木痕に生じたものである。

<柱穴>計11基の柱穴を検出した。配置、規模からP1・2・3・4・5が主柱穴と見られる。炉を通る中軸線上にP5、中軸線を挟みP1とP2、P3とP4が対称的な位置にあり全体で五角形の配置となる。また柱々間の距離は1.6~1.7mで概ね揃う。これらは開口部の径が50cm前後、深さは最大となるP1で67cmと大型のものである。断面観察では柱痕跡は認められず、堅穴埋土3層と同相の褐色~暗褐色土が堆積する。P1・2・3には中位~下部から石皿や大きな礫が出土しており柱抜き取り後の意図的な埋設も考えられる。その他、北西半壁際にP7~12がある。P7・8とP9は炉前庭部先端を挟み対称的な位置にあり出入口構造を支える柱穴、P11・12はそれぞれP4・2の補助的な柱穴と見られる。

<周溝>西壁際のP11・12間には幅30cm前後、深さ10cm程の溝が巡る。これ以外では周溝の痕跡は検出されなかった。

<遺物>床面中央部、炉の周囲から土器片、剥片石器、礫石器が出土している。炉埋設土器の上面に接してNa13・19の土器大破片、炉燃焼部1の落ち込み際にNa12土器片、P3開口部に接してNa20土器大破片があり、これらは住居廃絶直後の遺物と思われる。P1内部にNa32石皿片がある。

<テフラ>床面南側を大きく破壊するS X31倒木痕の内部（南北断面7層）に橙色の火山灰ブロックが含まれる。現地ではTo-cuの可能性が高いと判断し、採取した試料の分析を依頼した。結果は十和田大不動テフラ（To-Of）の可能性が高いとするもので、住居跡床面下位のローム層中の堆積物が攪乱されたものと思われる（V章（2））。

<小結>出土遺物から、縄文時代中期後葉大木10式前半段階と考えられる。

（高木）

S I 05住居跡（第14図 写真図版10）

調査区東端の⑥区東尾根東寄りに位置する円形の堅穴住居跡である。座標値はX=-78097、Y=49566付近、ⅢGグリッド内である。Ⅱ層暗褐色土漸移層を除去したⅢ層黄褐色粘土層上面で検出した。付近は北に下る斜面にあたり、遺構北東側ではプランが一部不明瞭である。

<形状・規模>形状はほぼ円形に近いが、南東部、南西部が緩く突出し隅丸方形に近い形状となる。遺構規模は南北方向で4.6m、東西方向で4.3m。壁高は南側で20cm、東西壁で10cm前後。床面はほぼ平坦で中央付近が硬化する。なお中央北寄りに暗褐色土が堆積する溝1・2があるが、溝1の西端は炉土器埋設部を一部破壊し、溝2は柱穴P1を切るため、両者は住居より新期の遺構もしくは雨裂等の溝と考えられる。

<堆積状況>上部1層の炭化物を含む暗褐色シルト、下部2層の褐色粘土質シルトに分層される。

<炉>床面北寄りに土器埋設部と前庭部からなる複式炉がある。土器埋設部は不整形のピット内部に略完形の深鉢を開口部を住居中央に向けて斜位に埋設している。下面側の土器側面はピット底面にほぼ密着する。また土器開口部付近からピット側壁にかけて強い焼成で赤変する。前庭部は埋設土器底部付近に接続し堅穴北壁まで楕円形に伸びる掘り込みで、1.2×0.8mの規模、深さは最大14cm程である。石囲の痕跡は見られない。

<柱穴>計20基の柱穴を検出した。中央に位置するP7、外周から一定距離にあり深さのあるP1~6・19・20、堅穴外周に沿って巡るP8~18に区分される。このうちP1~6・19が深さ、径が大きく五角形の配置となる主柱穴と見られる。P2・3、P5・19が隣接しているのは柱建て替えを示すものかも知れない。またP4・7と炉を結ぶラインが中軸線と思われる。外周に沿って並ぶ小柱穴は5~15cm程度の深さを持ち下部が外向きに掘られている。

＜遺物＞No.34埋設土器以外には土器細片が散発的に出土する。石器はP4上面に磨石がある。

＜AMS年代＞柱穴P1底面から採取した炭化材細片（試料No.4）のAMS年代は14C年代で4,050±20yrBP、暦年較正年代で2,621～2,497calBCの間に2つの範囲で示される。

＜小結＞埋設土器から、縄文時代中期後葉大木10式後半段階と考えられる。（高木）

S106住居跡（第15・16図 写真図版11～13）

調査区北東部の東尾根部で、北東方向に下がる緩斜面に位置する略円形の堅穴住居跡である。座標値はX=-78102、Y=49570付近、ⅢGグリッド内である。近接するS104住居跡は北西2.7m、S105住居跡は4.7m、S107住居跡は南東3.1mの位置にある。表土除去後の黄褐色粘土のⅢ層上面（西側は暗褐色漸移層のⅡ層上面）で、円形の暗褐色プランで検出した。検出時からプラン全体に焼土・炭化物が多量に混入する状況であった。また切株2個がプラン内にあり除去して精査を行った。その他に風倒木痕2箇所（SX40・41）がプラン内北東及び中央やや北西寄りにあり本遺構を破壊している。

＜形状・規模＞形状は炉1を軸線とした場合に斜面下方の炉側が上方に比べてやや窄まっている。東西壁ともに12°前後開いている。規模は南北方向5m、東西方向5.1mであり南北壁が若干長い。壁高は北壁8cm、南壁16cm、東壁14cm、西壁12cmでいずれも外傾しながら緩やかに立ち上がる。斜面下位の北壁は特に立ち上がりが緩やかで皿状を呈する。

＜堆積状況＞計9層で構成される。1層は倒木痕堆積土、2～4層の暗褐色・褐色シルトは主体となる住居堆積土、5層暗赤褐色シルト及び6層赤褐色シルトは住居焼失時の焼土層、7層黒褐色シルトと8層褐色シルトは初期堆積土、9層黄褐色粘土質シルトは壁際に分布する地山堆積土である。

＜炉＞床面北寄りと北西寄りに2基を検出した。前者を炉1、後者を炉2とする。

炉1は2箇所の風倒木痕（SX40・41）に挟まれる形で残存する。堅穴中央付近から北壁寄りにかけて複数の施設が直線的に並ぶ複式炉である。この付近の床面には焼土、炭化物が広がっており、その中で一際強い焼土範囲の中に床面が楕円形に硬化している範囲として検出した。全体形状は楕円形であるが、中央寄りにある楕円形の掘り込み（燃焼部1）と北寄りの楕円形の掘り込み（燃焼部2）が隣接する状態と捉えられる。境界には間仕切りの扁平礫（44×35×10cm）が南側に約30°傾いた状態で設置される。規模は炉開口部の全体が132×64cmで、周囲の硬化範囲も含めると137×80cmとなる。

燃焼部1は径60cm、深さ13cmで側壁は非常に強い被熱を受け硬化している。一方掘り込み底面には焼成面が見られない。底面直上には4層暗褐色土の弱変焼土が堆積し、その上位を被熱により硬化した焼土ブロックを含む1層が覆う。1層は側壁部分から堆積した焼土層と考えられる。南側の壁際には楕円形の黒褐色土部分が2箇所見られ、炉石抜き取り痕の可能性がある。

燃焼部2は径90×60cm、深さ18cmで側壁の焼成は燃焼部1に比較すると弱い。こちらも掘り込み底面には焼成面が見られず、硬化した焼土ブロック（2層）を含む暗赤褐色土1層が堆積する。東西両側壁に沿って楕円形、ないし帯状の黒褐色土部分があり炉石抜き取り痕の可能性がある。燃焼部2は焼成の程度から見て、主たる燃焼部1に付属する前庭部的な部分と考えられる。

この他に燃焼部1の南側、堅穴中央寄りに隣接して44×34cmの不整形の範囲で床面の被熱部分があり、これも一連の炉施設に含まれる地床炉の可能性が高く、燃焼部3とする。

炉2は倒木痕やP5・6・10に破壊されているが、燃焼部と掘り込み部をかりうじて検出した。設置箇所は炉1とほぼ同位置のやや西寄りである。簡素な作りであり、北西-南東方向に長軸がある炉開口部が136×85cm、その南東部に30×30cmの不整な円形の拡がりを持つ燃焼部がある。燃焼部底面は深さ4cmまで焼成により赤褐色に変色している。炉2の堆積土は計2層で構成されているが、均質

な褐色粘土質シルトの上部に地山を用いた明褐色シルトが貼り付けられており、人為的に埋め戻された可能性が高い。炉2を炉1掘削土などで埋め戻しながら炉1を新設したと思われる。

<柱穴>計20基の柱穴を検出した。炉1に伴う柱穴配置から、P1・4・7・14に加えて倒木痕に破壊されている箇所計5基が主柱穴と想定される。また、旧炉に伴う柱穴配置は判然としなが、P2・3・13・15と倒木痕に破壊されている箇所計5基が妥当か。もしくは、作り替えの際に柱穴は同一箇所を使用したとも考えられる。

<遺物>南側床面に土器No40・41がある。No41深鉢上半は倒立状態で口縁部を床面に接して置かれた状態で出土した。東壁際のNo43土器大破片は壁面外周に接する位置にあり、本住居跡に伴うものかどうかは微妙な位置にある。床面に分布する炭化物から一定の形状を保っているものについて同定を依頼した（V章（2））。これによると炭化材ではクリを主体としてヌルデ、エゴノキ属が見られ、種実ではトチノキ種子、クヌギ葉、クリ子葉が含まれる。

<AMS年代>3点の炭化材試料を測定用に採取した。南側床面出土の試料No5のAMS年代は14C年代で4,040±30yrBP、暦年較正年代で2,618~2,492calBCの間に4つの範囲、炉1前庭部底面出土の試料No6のAMS年代は14C年代で4,050±20yrBP、暦年較正年代で2,621~2,497calBCの間に2つの範囲、炉2脇にある柱穴P4出土の試料No7のAMS年代は14C年代で4,030±20yrBP、暦年較正年代で2,575~2,491calBCの間に2つの範囲で示される。

<小結>焼失した竪穴住居跡で壁際に寄る複式炉を持つ。炉1（新）と炉2（旧）の2時期の炉を持つ。炉の形状、出土遺物から縄文時代中期後葉大木10式後半段階と考えられる。（北田）

S I 07住居跡（第17図 写真図版14）

調査区東端の⑥区東尾根中央部に位置する円形の竪穴住居跡である。座標値はX=-78110、Y=49576付近、ⅢGグリッド内である。Ⅱ層暗褐色土漸移層を除去したⅢ層黄褐色粘土層上面で検出した。付近は北に下る斜面にあたり、遺構北西側約1/2周のプランが確定できない状況である。南東側も周囲よりわずかに硬化が進む部分を床面と想定し、サブトレンチによる観察からプランを見出した。

<形状・規模>形状はほぼ円形に近いと見られる。遺構規模は南北方向で4.1m、東西方向で3.9m。壁高は南東側で約15cm前後である。床面は概ね平坦だが北に向かいわずかに下る勾配を持つ。中央の炉周囲の硬化が見られる

<堆積状況>全体に褐色粘土質シルト（1層）が堆積し、特段の変化は見られない。

<炉>床面北寄りに燃焼部の石囲炉と前庭部からなる複式炉がある。燃焼部は小径のピット内部に板状の角礫4枚を方形に据えており礫外周を焼成面が取り囲む。内部には炭化物と焼土粒を含む締まりの弱い黒褐色土が堆積する。前庭部は90×60cmの浅い楕円形掘り込みで礫設置痕跡は見られず底面は平坦である。

<柱穴>計11基の柱穴を検出した。中央付近にP1~5・11があるが不規則な位置関係にあり主柱穴配置は不明である。炉を挟み対称的な位置にあるP4・5と中軸線上に位置するP3の三角形配置を取る可能性がある。竪穴西壁際に小柱穴のP6~10がほぼ等間隔で巡り壁柱穴の一部を構成すると見られるが、他の壁際では検出できなかった。他に不整形のPit1・2が開口するが、本住居跡より前期の攪乱と見られる。

<遺物>土器は細片が少量出土するのみである。他に床面中央付近に長40cmの角礫がある。下半が床面下位に埋まっており地山に含まれていた礫の上部が竪穴内に現れている状態である。使用痕等は見られない。

<小結>出土土器から、縄文時代中期後葉大木10式段階と考えられる。

(高木)

S108住居跡 (第17・18図 写真図版15~17)

調査区北東部の東尾根中央部で、北東方向に下がる緩斜面に位置する略円形の堅穴住居跡である。座標値はX=-78118、Y=49578付近、ⅢGグリッド内である。近接するS107住居跡は北西4.3m、S106住居跡は北西11.3m、S112住居跡は南東9.2mの位置にある。SK80土坑と遺構中央で重複しており本遺構が新しい。遺構の存在は前年度に行われた試掘調査で東半プランの一部が検出されたことにより確認済みであった。本調査では表土除去後の黄褐色粘土Ⅲ層上面(南側は暗褐色漸移層のⅡ層上面)において、円形の黒褐色土プランで全体を検出した。検出時からプラン全体に焼土・炭化物が多量に混入する状況であった。

<形状・規模>形状は東半上端がトレンチで失われたため一部不明であるが略円形の堅穴住居跡である。規模は南北方向で3.9m、東西方向で3.8m、壁高は西-南壁が約40cmと残りが良く、斜面下位の北壁は17cmである。いずれも外傾しながら緩やかに立ち上がる。検出面から床面までは最大40cmを越し、遺構内部の残存状況は非常に良好である。

<堆積状況>計12層で構成される。1層及び4層黒褐色シルト、6層暗褐色シルトは遺構廃絶後の堆積土(2層赤褐色シルトは1層混入土)、3層褐色粘土質シルト、5層及び7・8層黄褐色粘土は遺構廃絶直後に流入した地山再堆積土、9~11層赤褐色シルトは住居焼失時に崩落した初期堆積土である。9層及び10層赤褐色シルト内には多量の炭化物を含んでおり、木材の形状を保っているものもある。また、床面には大きく炭化物範囲が広がっており、層厚は1~2cm程度である。焼土層は10~20cm堆積しており床面中央部分ほど厚い。床面中央は下層にSK80土坑と重複しているが、土坑堆積土が軟質であったためか使用時から窪んでいたようである。

<炉>斜面下位の床面北寄りに1基検出した。床面には住居焼失時の焼土が多量に堆積しており、炉内も赤褐色~極暗赤褐色の焼土が覆う。規模は石囲部から前庭部までで1.53m×0.7m、石囲部の南側前面にも燃焼面が広がっており、この部分を加えると1.72m×0.7mである。炉は楕円形の掘り込みが扁平礫により3箇所仕切られており、このうち2箇所は25~30cm程度の亜角礫を配置して石囲炉を形成している。南側を燃焼部1、中央を燃焼部2、北側の掘り込みを前庭部とする。燃焼部1は幅25cm大の亜角礫4個を方形に設置しており、このうち間仕切りとしている中央の礫は25×37×10cmで長辺を縦に据えており頑丈な作りとなっている。燃焼面は人為的に破砕した礫片を平坦に敷き詰めており、この上部に厚さ2~4cmの粘土を貼り付けて使用したと考えられる。検出時は上部粘土は赤褐色に強く変色しており、敷設した破砕礫下部も赤褐色に変色していた。燃焼部2は前述の間仕切り北側にあり、これを含めた幅25~30cm大の亜角礫4個を使用して西辺以外の3辺を囲んでいる。西辺からは礫を設置した痕跡は確認できなかった。西辺はSK80土坑プランの縁で段差が生じており、あえて礫を設置しなかったのかもしれない。燃焼面は全面に熱影響を受けているが、中央付近の被熱が強く赤褐色化している。前庭部は70×65cmの不整な円形を呈しており、北側は住居壁面に接している。掘り込みは浅く、底面は燃焼部1・2よりも5~10cm程度高い位置にある。

<柱穴>計16基の柱穴を検出した。柱穴配置及び規模から、P2~7とSK80土坑精査により消失したが、P3~7間に1基の計7基が主柱穴に想定される。P1及びP9~14の計7基は壁柱穴、P8及びP15・16の計3基はP3・7の補助的な柱穴と考えられる。斜面下位側の上屋重量が掛かる部分を補強した可能性がある。

<遺物>炉燃焼部に接する床面中央にNo.59土器大破片がある。No.76石皿は東側床面の2箇所出土し

た破片が接合した。床面直上に分布する炭化材、炭化種実について一定の形状を保っているものの同定を依頼した（V章（2））。これによると種実ではオニグルミ核、クスギ子葉、炭化材ではミズキ属が得られている。

＜AMS年代＞2点の炭化材試料を測定用に採取した。東側床面出土炭化材2から採取した試料№8のAMS年代は14C年代で $4,160 \pm 20$ yrBP、暦年較正年代で2,872～2,679calBCの間に6つの範囲、南東部床面出土の試料№9のAMS年代は14C年代で $4,120 \pm 30$ yrBP、暦年較正年代で2,852～2,621calBCの間に3つの範囲で示される。

＜小結＞焼失した竪穴住居跡で、壁際に寄る複式炉を持つ。中でも炉燃焼部底面に破砕礫を敷設するなど炉構築に特徴を有する。SK80土坑に溜まる湿気から燃焼部を防湿する意図があったか。炉の形状、出土遺物から縄文時代中期後葉大木10式前半段階と考えられる。（北田）

S I 09住居跡（第19図 写真図版18）

調査区東端の⑥区東尾根南端に位置する楕円形の竪穴住居跡である。座標値は $X = -78137$ 、 $Y = 49574$ 付近、IV Gグリッド内である。II層暗褐色土漸移層を除去したIII層黄褐色粘土層上面で検出した。北側でSI13住居跡を切る。ただし精査過程では新旧関係を掴みず両者を同時に掘り下げており北壁の一部はプラン不確定である。また南西部はSI14住居跡に接する状態だが、SI14住居跡の北半はプラン不明瞭であったため直接重複するかどうかはわからない。

＜形状・規模＞形状は南東-北西方向に長軸を持つ楕円形。遺構規模は長軸方向で7.2m、短軸方向で5.9m。壁高は残存状況の良い南壁で約30cm、他は20cm程度の残存である。床面は概ね平坦で中央部の硬化が進んでいる。

＜堆積状況＞4層に分層される。中央最上部の1層は黒褐色シルト、中位2層は締まりが弱く夾雑物を含まない黒色シルト、下部3層は褐色～暗褐色シルト、壁際に堆積する4層は褐色粘土質シルトである。レンズ状の自然体積の様相を示す。

＜炉＞床面中央付近から北西壁際に向かって石囲燃焼部（燃焼部1）、掘り込み燃焼部（燃焼部2）、前庭部からなる複式炉を検出した。このうち燃焼部1は 50×40 cmの楕円形ピット壁面に亜角礫を設置しており、底面と周辺が強い焼成を受け赤変する。内部には焼土粒を含む黒褐色土が堆積する。燃焼部2と前庭部は 1.5×0.8 mの楕円形掘り込み内に段差を設けて分割されており、燃焼部2が一段低く側壁の高さは60cmに達する。周囲に礫が散乱するが石囲の設置痕跡は見られない。燃焼部2の底面から燃焼部1側の側壁は強い焼成を受け赤変する。

他に住居跡中央部と東側に2箇所の床面焼成範囲がある（焼土1・2）。両者とも焼成は弱く地床炉として使用されたものではないと思われる。

＜柱穴＞計12基の柱穴を検出した。中軸線を挟むP1-4、P2-5が40cm前後の深さを持ち、これに中軸線上に位置するP3を加え5基が主柱穴と見られる。炉前庭部を挟むP6-7が出入口構造を支える柱穴、南西壁際のP10・11は主柱穴P4・5に対応する補助的な柱穴と考えられる。

＜周溝＞炉前庭部外側に溝1、南東壁際に溝2を検出した。いずれも10～15cm程の深さである。これ以外では周溝の痕跡は検出されなかった。

＜遺物＞床面に土器片、石器類の散発的な出土があるが、竪穴規模に比して出土遺物は少ない。

＜小結＞出土遺物から、縄文時代中期後葉大木10式前半段階と考えられる。（高木）

S I 10住居跡 (第20図 写真図版19)

調査区東端の⑥区東尾根中央部、北西方向に下る緩斜面に位置する楕円形の竪穴住居跡である。座標値はX=-78114、Y=49564付近、ⅢGグリッド内である。Ⅱ層暗褐色土漸移層を除去したⅢ層黄褐色粘土層上面で検出した。中央東側では木根により床面まで攪乱を受ける部分がある。

<形状・規模>形状は南北方向に長軸を持つ楕円形。遺構規模は長軸方向で3.1m、短軸方向で2.7mと小規模である。壁高は残存状況の良い南壁側で42cmに達するが、北西部では立ち上がりが見られない場所もある。床面は概ね平坦で全体に硬化が進んでいる。

<堆積状況>上部1層暗褐色シルトと下部2層褐色粘土質シルトの2層に分層される。1層には炭化物が含まれる。レンズ状の自然体積の様相を示す。

<炉>床面中央やや北寄り付近で石囲炉を検出した。前庭部を持たない単独の石囲炉である。65×45cmの規模でやや胴張形の方形に亜角礫が組まれ、内部は15cm程掘り下げられる。底面中央には焼成による変色部が見られる。

<柱穴>北西壁際にP1がある。炉と北西側の竪穴突出部を結ぶ軸線上に位置する。検出した柱穴はこの1基のみである。

<遺物>竪穴南壁際床面から縄文土器大破片Na91・93・95がまとまって出土している。また北西部壁際床面に石皿Na99がある。

<小結>出土遺物から、縄文時代中期後葉大木9式後半段階と考えられる。(高木)

S I 11住居跡 (第20図 写真図版20)

調査区東端の⑥区東尾根中央部、北西方向に下る緩斜面に位置する円形の竪穴住居跡である。SI10住居跡の東2.2mの距離にある。座標値はX=-78116、Y=49569付近、ⅢGグリッド内である。Ⅱ層暗褐色土漸移層を除去したⅢ層黄褐色粘土層上面で検出した。北東部がSK78土坑に切られる。

<形状・規模>やや歪な円形で南北方向2.5m、東西方向2.3mと小規模である。壁高は25~20cm前後、床面はほぼ平坦である。硬化はさほど進んでいない。

<堆積状況>上部褐色粘土質シルトの1層と下部暗褐色シルトの2層に分層される。

<炉>床面中央で土器埋設炉を検出した。北側に小径の楕円形掘り込みがあり前庭部と見られる。土器埋設部は口縁部を欠く小型深鉢を正立状態で埋設しており、土器外面は掘り方側壁に密着する。周囲には円形の弱い焼成変色部が見られる。土器内は締まりの弱い黒色土が堆積する。前庭部は45×30cmの浅い掘り込みである。

<柱穴>南壁際のP1・2と北壁際のP3がある。いずれも20cm以下の浅いものである。

<遺物>炉埋設土器以外では堆積土中に土器片が散発的に出土するのみである。

<小結>炉埋設土器から、縄文時代中期後葉大木10式後半段階と考えられる。(高木)

S I 12住居跡 (第21図 写真図版21)

調査区東端の⑥区東尾根東側調査区境に位置する竪穴住居跡である。座標値はX=-78126、Y=49586付近、ⅢHグリッド内である。Ⅱ層暗褐色土漸移層上面で検出した。南東側が調査区外側になるため精査したのは北西側の半分である。中央北西寄りの床面でPit1を検出したが、精査の結果石囲炉を破壊しており、本住居跡に伴うものではなく新期の別遺構と捉えられる。

<形状・規模>形状は円形と見られ、北東-南西方向で4.8m前後である。壁高は斜面上部にあたる南西側で35cm、北東側で15cm程の残存。床面は概ね平坦で中央の炉周囲が硬化する。

<堆積状況>暗褐色粘土質シルトの1層が全体を覆う。基本土層Ⅱ層漸移層と色調や含有物はほとんど差がないが締まりが弱い点で区別される。床面直上には2層褐色粘土ブロックが局所的に分布する。
<炉>住居中央部北西寄りて石囲炉を検出した。炉の北西側はPit 1によって約1/3周が切られている。炉は円形の掘り込み側壁に石囲を巡らす。礫は15×10cm前後の扁平な重円礫で大きさが揃っており、長軸を縦に使い密着して並べられた状態である。また南東側では二重に巡らされた部分がある。掘り込み底面には弱い熱変色部分が見られる。

<柱穴>計4基の柱穴を検出した。炉の北東側にP 1・2、南西側にP 3・4があり、竪穴中軸線を挟み対称的な位置にある。

<周溝>西壁際に深さ10cm強の周溝が巡る。これ以外では周溝の痕跡は検出されなかった。

<遺物>堆積土中に縄文土器片、剥片石器、礫石器が散発的に出土する。このうちPit 1内の出土遺物も本住居跡出土遺物に準じて取り扱っている。

<小結>出土遺物から、縄文時代中期後葉大木10式前半段階と考えられる。(高木)

S I 13住居跡 (第20図 写真図版22)

調査区東端の⑥区東尾根南端に位置する楕円形の竪穴住居跡である。座標値はX=-78132、Y=49568付近、IV Gグリッド内である。南側で重複するSI09住居跡の精査段階で検出した。当初はSI09の張り出し部分と見て掘り下げたが、中央に炉を検出した時点で重複する別遺構と確認した。本住居跡埋土中にSI09の床面が伸びておりSI09より古い。

<形状・規模>形状は北東-南西方向に長軸を持つ楕円形で北東部は突出し卵形とも取れる形状である。ただし、埋土と地山の区別が困難で北西側のプランを正確に把握できていない恐れもある。規模は長軸方向で3.4m、短軸方向で2.7m。壁高は概ね15cm前後、床面はほぼ平坦であるが硬化はあまり見られない。

<堆積状況>一部に暗褐色シルトの1層が含まれるが、全体には褐色粘土質シルトの2層が堆積する。2層と地山褐色粘土層との差異は不明瞭である。

<炉>床面中央部に石囲炉と掘り込み前庭部からなる複式炉を検出した。全体が1.3×0.6mの楕円形に掘り込まれており、中央寄りに60×50cmの長方形に扁平な重角礫を用いて石囲部が設けられる。炉内部底面には弱い焼成面が形成される。石囲部に接続し一段浅い掘り込みの前庭部があり、周縁に礫設置痕跡は見られないが埋土中に礫が散乱する。

<柱穴>南壁際に深さ16cmのP 1がある。重複するSI09住居跡に伴う柱穴の可能性もある。

<遺物>炉埋土、住居跡堆積土中に縄文土器片、剥片石器が少量出土する。

<小結>SI09との新旧関係、及び出土遺物から、縄文時代中期後葉大木10式前半段階と考えられる。

(高木)

S I 14住居跡 (第21図 写真図版24)

調査区東端の⑥区東尾根南端調査区境に位置する竪穴住居跡である。座標値はX=-78139、Y=49570付近、IV Gグリッド内である。Ⅲ層褐色土上面で石囲炉を検出した。竪穴の掘り込みが浅いため当初は全体のプランが把握できず、南東側を拡張した結果わずかな立ち上がりを確認した。中央部から北西側の竪穴輪郭は推定線で示している。SI09住居跡に接すると思われるが新旧関係は不明である。

<形状・規模>形状は楕円形と見られるが正確にはわからない。北東-南西方向で5m程の規模と見られる。南東部で確認した立ち上がりでは壁高が5cm前後である。床面は概ね平坦で炉の周囲がやや

硬化している。

<堆積状況>基本土層Ⅱ～Ⅲ層と同相の暗褐色～褐色粘土質シルトであり遺構堆積土を明確には把握していない。

<炉>住居中央部で単独の石砌炉を検出した。60×50cm程のやや歪な掘り込み周縁に亜角礫が設置される。掘り込み底面には赤変した4層があるが、内部に炭化物を含むためこれも燃焼面上の堆積土の可能性もある。

<柱穴>計4基の柱穴を検出した。炉を中心としてP1～4が長方形に配置される。いずれも深さ20cm前後と浅いがこれらが主柱穴を構成すると思われる。

<遺物>炉埋土内に土器片№118・119がある。石皿№121は南壁際の床面出土。

<小結>出土遺物から、縄文時代中期後葉大木10式前半段階と考えられる。(高木)

S I 15住居跡 (第22図 写真図版24・25)

調査区南東部の東尾根部で、北方向に下がら緩斜面に位置する楕円形の堅穴住居跡である。座標値はX=-78140、Y=49560付近、IV Gグリッド内である。近接するSII4住居跡とは1.8m離れる。また西側で沢跡と重複しており本遺構が旧期である。

<形状・規模>形状は北東-南西方向に長軸を持つ楕円形の堅穴住居跡である。規模は北東-南西方向が4.9m、北西-南東方向が4.15mと北西壁及び南東壁がやや長い。ただし本住居跡には2基の炉が存在するため拡張を行っている可能性がある。壁高は東壁20cm、南壁6cm、北壁4cmで西壁は沢跡に切られており残存しない。壁面はいずれも緩やかに立ち上がる。

<堆積状況>計13層で構成される。木根の影響で遺構堆積土がかなり荒れた状態である。2・6層暗褐色シルト及び5層・7層褐色シルトを主体とし、1層暗褐色シルトは倒木痕または攪乱、3層は5層の上部に堆積する焼土層、4層黒褐色シルトはプラン中央、8層明褐色粘土質シルト及び9層明黄褐色粘土質シルトは東-南壁際に認められる地山流入土及び壁面崩落土、10層暗褐色シルトは炉堆積土、12層は旧炉堆積土、11層は重複する東尾根沢跡2堆積土、13層は黄褐色粘土の地山層である。

<炉>斜面上側の床面北東寄りに1基と、斜面下側の南西寄りに1基の計2基を検出した。前者を炉1、後者を炉2として扱う。炉1は1.6×0.8mの掘り込み部の南西側に50×30cmの不整形を呈する燃焼部1を持ち、燃焼部1中央に深鉢下半を正位に埋設する土器埋設の複式炉である。燃焼部と掘り込み部の境には21×12cmの扁平礫を間仕切りとして設置している。燃焼面は礫を挟んで燃焼部2の底面まで及んでおり、深さ2～3cmまで赤褐色に弱変色している。焼土中から埋設土器底部にかけては、土器を設置した際の掘り込みが確認され褐色粘土で据え固められている。掘り込み部は埋設土器から60cm程のところで幅57cmほどに括れており、これより南西側が燃焼部2、北東側が前庭部となる。掘り込み部の堆積土は3層で構成され、底面付近には暗赤褐色シルトの弱焼土層、遺構堆積土の5層や7層褐色シルトと同一である2層褐色シルトは炭化物を微量混入、1層暗赤褐色シルトは遺構南西床面に広がる焼土層である。前庭部では長59cmの石皿と長40cmの扁平礫が出土しており、廃絶時の原位置を留めていると考えられる。

炉2は1.45×0.7mの掘り込みからなり、検出時は多量の焼土と炭化物に覆われていた。堆積土は4層で構成され、1層暗褐色シルトは遺構堆積土12層と同一で多量の炭化物を含む。2層赤褐色シルト及び3層極暗赤褐色シルトは遺構堆積土3層、また炉1の1層と同一と考えられ、焼失時に流れ込んだ焼土層である。これにより炉1及び炉2は同時存在していたと考えられる。4層は赤褐色粘土で、熱の影響を受けている弱焼土層である。以上、2基の炉は堆積状況から同時存在していたと考えられ

るが、構築時期など新旧関係は不明である。

<柱穴>計15基の柱穴を検出した。柱穴配置及び規模からP1・2・4・7等が支柱穴となり得るが、検出できた柱穴位置は散在しており、明確な配置は想定できない。検出できなかった柱穴も存在する可能性がある。

<遺物>炉1土器埋設部に接する床面に縄文土器深鉢上半№122がその場で潰れた状態で出土した。また炉と南東壁の間の床面に複数の石皿がある(№138・不掲載登録番号267)。堆積土中から出土した器台破片№133は、同一個体が北西に約6m離れたP036内より出土している。

<小結>土器埋設の複式炉を持つ焼失した竪穴住居跡である。2基の炉が存在しており、プランを拡張した可能性がある。炉の形状、出土遺物から縄文時代中期後葉大木9式後半段階と考えられる。(北田)

S I 16住居跡 (第23図 写真図版26・27)

調査区東端の⑥区東尾根西斜面上部に位置する長方形の竪穴住居跡である。座標値はX=-78120、Y=49553付近、ⅢGグリッド内である。Ⅱ層暗褐色土漸移層を除去したⅢ層黄褐色粘土層上で検出した。斜面下部の北西側は遺構プランが不明瞭であり、検出した壁際にあると思われる柱穴P8の位置から推定した。

<形状・規模>形状は南東-北西方向に長軸を持つ長方形である。遺構規模は長軸方向で推定4.8m、短軸方向で3.5m。壁高は残存状況の良い南東壁で約20cm、北東・南西壁は10cm程度の残存である。床面は北西に向かって下る傾斜を持ち中央部の硬化が進んでいる。

<堆積状況>3層に分層される。斜面下部側の1層は褐色粘土質シルト、炉上位から斜面上部側の2層は黒褐色シルト、下位3層は締まりの弱い暗褐色粘土質シルトである。

<炉>床面中央に石囲炉を検出した。90×70cmの楕円形の掘り込み周囲に亜角礫が断続的に設置されている。周囲に散乱する礫も石囲を構成していた可能性がある。内部には焼成面が形成されていないが礫の周囲に弱く熱変色した部分が見られる。

<柱穴>計9基の柱穴を検出した。中軸線を挟み亀甲形の配置となるP1・2・4・5・7・8が支柱穴と考えられる。

<遺物>炉周囲の床面を中心に縄文土器片、石器類が出土している。石囲に使用された礫のうち複数が分割された石皿片である(№160他)。

<小結>出土遺物から、縄文時代中期後葉大木9式前半段階と考えられる。(高木)

S I 17住居跡 (第24図 写真図版28)

調査区東端の⑥区東尾根西斜面上部に位置する推定楕円形の竪穴住居跡である。座標値はX=-78134、Y=49545付近、ⅣGグリッド内である。一帯はⅡ層暗褐色土漸移層が削平を受けⅢ層黄褐色粘土層が表土直下で露出しており、竪穴プランは全く確認できなかった。本住居跡は複式炉の検出を受け周囲の柱穴配置から範囲を推定したものである。

<形状・規模>炉を通る軸線上のP1・4の間隔から最大で7m以上の規模を持つ楕円形の竪穴と推測される。また床面と思われる硬化部分は見当たらず削平されている可能性が高い。

<炉>土器埋設部と石囲燃焼部、前庭部からなる全長約2mの複式炉を検出した。土器埋設部は深鉢上半を倒立状態で埋設しており底面と周囲に強い熱変色範囲が見られる。石囲燃焼部との間には埋め戻した3層に接するように仕切り石が設置されており、一体の掘り込み内部を土器埋設部と石囲燃焼

部に区分したことがわかる。石囲燃焼部はコの字形に扁平な角礫が設置される。底面は土器埋設部側に強い変色があり前庭部側は弱い。前庭部は一段浅く側壁が平行して延びる。

<柱穴>計7基の柱穴を検出した。中軸線を挟み炉の両側にあるP2・3・5・6は本住居跡に伴うと考えられる。中軸線上にあるP1は楕円形で柱の抜き取りが行われている可能性がある。反対側のP4は浅いPitである。北側にやや離れるP7は本住居跡に伴うかどうかは微妙である。

<遺物>柱穴埋土出土遺物に加えて、炉周辺の精査時に出土した遺物も本住居跡に伴うものとして登録した。炉石囲を構成する礫に分割された石皿片(Na170・171)が含まれる。

<小結>炉埋設土器から、縄文時代中期後葉大木10式前半段階と考えられる。(高木)

S I 18住居跡 (第25図 写真図版29)

調査区南東部の西尾根頂部付近で、北西方向にやや下がる緩斜面に位置する楕円形の堅穴住居跡である。座標値はX=-78142、Y=49549付近、IV Gグリッド内である。近接するSI15住居跡は東7.1m、SI19住居跡は南2.5mの位置にある。表土除去後の黄褐色粘土のⅢ層上面で、楕円形の暗褐色プランで検出した。遺構北西端にSX70倒木痕があり本遺構を破壊している。

<形状・規模>形状は東西方向が長い楕円形の堅穴住居跡である。規模は東西方向が4.4m、南北方向が3.1m。壁高は、概ね10cm前後だが南壁のみ3cmと低く立ち上がりが判然としない。概ね外傾しながら緩やかに立ち上がる。

<堆積状況>2層に分層される。1層暗褐色シルトは主体となる堆積土で大半を占める。2層暗褐色粘土質シルトは斜面上側の東～南壁にかけて認められる。

<炉>床面中央やや西寄りに2箇所の地床炉を検出した。74×57cmの楕円形の燃焼部1と29×23cmの不整な円形を呈する燃焼部2に分かれる。赤褐色の燃焼部1よりも赤色を呈する燃焼部2のほうが、より熱の影響を受けていると考えられる。いずれも4～5cmの深さまで被熱している。

<柱穴>計15基の柱穴を検出した。柱穴配置及び30cm前後の深さを持つP1～5・14の6基が支柱穴と考えられる。炉を通る中軸線上の反対側にあるP15ではピット上部に長34cmの棒状礫No181が立位で出土した。棒状礫下部のみがピット内に貫入している状態だが意図的に立石として埋設されたものと捉えている。ピット内部には褐色シルトが堆積する。その他の柱穴は壁柱穴と考えられる。

<遺物>堆積土中に縄文土器片、剥片石器、礫石器が散発的に出土している。

<小結>床面東端に立石を伴う堅穴住居跡である。出土遺物から、縄文時代中期後葉大木10式後半段階と考えられる。(北田)

S I 19住居跡 (第25図 写真図版30)

調査区東端の⑥区東尾根西斜面上部に位置する長方形の堅穴住居跡である。座標値はX=-78148、Y=49550付近、IV Gグリッド内である。Ⅱ層暗褐色土漸移層上面で検出した。当初は住居跡と確認できず自然地形の沢跡と判断して掘り進め、地床炉と壁面の立ち上がりを見て住居跡に登録した。斜面下部の南西側は削平を受け南西壁を中心とした半周前後のプランは不明である。南コーナー付近と思われるP6の位置から全体では長方形を呈すると判断した。

<形状・規模>形状は北東～南西方向に長軸を持つ長方形と推定される。遺構規模は長軸方向で推定4.3m、短軸方向で3.0m。壁高は残存状況の良い北東壁で約20cm、北東～南西壁は10cm程度の残存である。床面は北西に向かって下る傾斜を持ち炉の周囲は硬化が進んでいる。

<堆積状況>精査手順の手違ひから堆積土記録を欠くが、黒褐色～暗褐色の粘土質シルトである。

<炉>床面北東壁寄りに地床炉を検出した。95×60cmの楕円形に焼成範囲が及んでおり石圍の設置痕跡は確認できない。焼成は強く赤褐色に熱変色する。

<柱穴>計6基の柱穴を検出した。北・東コーナーに位置するP1・3、壁面中間付近と思われるP2・4、南コーナー付近と思われるP6が主柱穴を構成すると見られる。西コーナー部分は削平のため柱穴は確認できない。

<遺物>堆積土中央部床面上から縄文土器片がまとまって出土している。

<小結>出土遺物から、縄文時代中期後葉大木9式後半段階と考えられる。(高木)

(2) 堅穴状遺構

SX01堅穴状遺構 (第26図 写真図版31)

①区低地部北端の調査区域に位置し座標値はX=-78160、Y=49333付近、IV Aグリッド内である。北西部は調査区外に広がっており全体の正確な形状は不明だが、概ね歪な隅丸方形を呈する規模の大きい掘り込みで、東西方向では約11m以上に達する。底面には細かな凹凸が局部的に見られるが全体としては平坦。壁面は全周にわたり緩やかな立ち上がりを見せており壁高は40~50cm程である。堆積土は下部を覆う10層にラミナが発達し水成堆積と見られる。炉の痕跡や柱穴は確認できないが、南側に楕円形のPit1・2がある。両者共に長軸約1m、短軸約50cm、深さ15cm程の規模で、遺構本体と同相の堆積土である。遺構堆積土内出土遺物は縄文土器片数点のみと少ない。

本遺構の南西部、斜面下部側でSK21土坑、及びSD01溝跡が隣接する。SK21土坑と接する部分では低い土手状の高まりがありここから土坑壁面の急斜面に連続する。上述したPit1・2の位置はSK21土坑を基点とすれば対称的な位置にあり、堅穴状・土坑・溝が一連の施設を形成していたと思われる。SX01堅穴状遺構下部が水成堆積の状況と見られることから、溜池と水路として設けられた可能性が高い。時期は出土遺物が僅少なため確定し難いが、はっきりした黒褐色土で検出が容易であることから近世以降と考えられる。

(3) 土坑 (第27~35図 写真図版32~47)

検出した土坑は63基である。区域別では①区西側低地部23基、③区西尾根北西部17基、④区西尾根南東部3基、⑥区東尾根20基。年代別では縄文時代20基、弥生時代2基、近世4基、時代不詳37基となる。ここでは各土坑の説明を第1表に記載し、特徴的な土坑について以下に述べる。

SK02・04土坑

両者は①区低地部緩斜面に位置する小規模な円筒形の土坑。規模は径90cm程度で深さ40cm前後である。出土遺物に弥生時代後期土器片が含まれており、SK04土坑では底面から出土する。遺物から弥生時代後期の土坑と考えられる。規模から見て土壇墓の可能性があるとと思われるが、明確な人為堆積とは言いがたい。両者は約14mの距離を隔てるが規模、形状は類似する。またこの周囲にあるSK01・08・11・13土坑も同様の遺構の可能性はある。

SK21土坑

①区低地部北側のSX01堅穴状遺構とSD01溝の接続部にあり、溝の先端が突出した部分にあたる。内部下半には大きめの礫が詰まった状態であり一部は意図的に石組を設置した状況と見られる。SX01堅穴状とSD01溝が水利に関係した施設の可能性が高く、本土坑も一連の施設の一部と考えられる。

第1表-1 土坑一覽表

遺構名	遺構図	写真図版	区域	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	重複・形状・堆積土	出土遺物	時期
SK01	27	32	①区	70	60	20	楕円形、浅い皿状	なし	不明
SK02	27	32	①区	92	90	26	円形、底面平坦、壁面急傾斜	1層弥生土器片、石器	弥生
SK03	27	32	①区	130	72	28	不整楕円形、亀裂状、地山褐色土再堆積	なし	不明
SK04	27	32	①区	90	86	30	円形、底面平坦、壁面急傾斜	底面弥生土器片	弥生
SK05	27	33	①区	190	162	20	不整多角形、浅い皿状	なし	不明
SK06	27	33	①区	>190	>155	54	旧河道より古、底面平坦、壁面下部急傾斜	なし	不明
SK07	27	33	①区	>80	64	40	一部調査区外、楕円形、底面凹凸顕著	なし	不明
SK08	27	33	①区	88	82	18	円形、浅い皿状	なし	不明
SK09	27	34	①区	156	91	22	楕円形、風倒木痕の凹みか?	埋土中弥生土器片	不明
SK10	27	34	①区	70	50	10	楕円形、浅い皿状、小規模	底面弥生土器片	不明
SK11	27	34	①区	88	66	16	楕円形、浅い皿状	なし	不明
SK12	28	34	①区	62	42	12	楕円形、浅い皿状、小規模	なし	不明
SK13	28	35	①区	114	90	24	楕円形、浅い皿状	なし	不明
SK14	28	35	①区	80	65	24	SK15より古、楕円形、底面凹凸	なし	不明
SK15	28	35	①区	134	94	10	不整多角形、浅い皿状	なし	不明
SK18	28	35	①区	282	164	15	不整長楕円形、断面形皿状	なし	不明
SK19	28	36	①区	174	174	28	不整多角形、浅い皿状	なし	不明
SK20	28	36	①区	66	58	50	円筒形、小規模	なし	近世?
SK21	28	36	①区	>180	135	60	SD01溝に接続、楕円形、下部に石組井戸跡か	なし	近世?
SK22	29	36	①区	250	>130	180	深い円筒形、井戸跡か、底部精査不能、深さは推定値、南半調査区外	なし	近世?
SK23	29	37	①区	270	246	90	楕円形、下部に角礫集中、井戸跡か	なし	近世?
SK32	29	37	③区	354	296	120	大規模な楕円形、風倒木痕に生じた凹みの可能性あり	なし	不明
SK33	30	37	③区	220	210	15	円形、斜面の浅い凹み	なし	不明
SK34	30	37	③区	136	52	15	長楕円形、内部に炭化材集中	なし	不明
SK39	30	38	③区	124	76	24	不整形、浅い皿状	なし	不明
SK40	30	38	①区	92	88	45	円筒形、壁面一部ハンク、上面にTo-cuブロックあり、自然堆積	なし	縄文
SK41	30	38	①区	220	186	95	深い円筒形、自然堆積	なし	縄文
SK42	30	38	③区	96	92	50	円形、揺鉢状	なし	不明
SK43	31	39	③区	370	>300	160	SK49土坑より古、不整形、深い大規模	なし	不明
SK44	30	39	③区	78	66	14	不整多角形、浅い皿状	なし	不明
SK45	30	39	③区	170	152	40	円形、浅い皿状、小規模	なし	不明
SK47	31	39	③区	140	110	45	楕円形、浅い皿状	なし	不明

第1表-2 土坑一覧表

遺構名	遺構図	写真図版	区域	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	重複・形状・堆積土	出土遺物	時期
SK48	31	40	③区	130	120	32	円形、浅い皿状	なし	不明
SK49	31	39	③区	370	260	55	SK43土坑より新、不整形、底面平坦、規模は推定値	なし	不明
SK50	31	40	③区	150	130	45	円形、浅い皿状	なし	不明
SK51	31	40	③区	250	200	45	不整形、浅い皿状、底面凹凸あり	1層縄文土器片、石器	不明
SK52	32	40	③区	180	160	20	SK53より古、楕円形、浅い皿状	なし	不明
SK53	32	41	③区	230	180	28	SK52より新、楕円形、浅い皿状	なし	不明
SK54	32	41	③区	140	140	20	円形、浅い皿状	なし	不明
SK55	32	41	③区	200	190	140	円形、フラスコ状、自然堆積	1層縄文土器片	縄文
SK61	32	41	④区	90	80	24	円形、浅い皿状、小規模	なし	不明
SK65	32	42	④区	160	120	40	楕円形、底面平坦	なし	不明
SK66	32	42	④区	105	100	65	SK64土坑より新、フラスコ状、小規模	なし	縄文
SK67	33	42	⑥区	100	80	10	楕円形、浅い皿状、小規模	なし	縄文
SK68	33	42	⑥区	90	75	22	楕円形、浅い皿状、小規模	埋土上部に礎礎敷	縄文
SK70	33	43	⑥区	115	100	20	楕円形、浅い皿状、小規模	1層縄文土器片、石皿	縄文
SK72	33	43	⑥区	110	60	40	楕円形	1層上部縄文中期土器大破片	縄文
SK73	33	43	⑥区	115	105	24	円形、浅い皿状	なし	不明
SK74	33	44	⑥区	140	110	68	不整形、楕円状	埋土上部縄文土器片	縄文
SK75	33	44	⑥区	130	105	32	SX51より古、楕円形、浅い皿状	なし	縄文
SK76	33	44	⑥区	135	110	82	円形、楕円状	なし	縄文
SK77	33	44	⑥区	190	150	28	不整形、浅い皿状	埋土中縄文土器片	不明
SK78	34	45	⑥区	170	150	150	深い円筒形、自然堆積	なし	縄文
SK79	34	45	⑥区	100	100	18	円形、小規模、浅い皿状	埋土中縄文土器片	不明
SK80	34	45	⑥区	190	185	68	SI08住より古、円形、フラスコ状	埋土中縄文土器片	縄文
SK81	34	45.46	⑥区	190	190	95	SX58風倒木根より古、円形、フラスコ状、底面副穴	7層縄文土器片集中	縄文
SK82	34	46	⑥区	160	140	60	SX58風倒木根より古、円形、壁面急傾斜の立ち上がり、自然堆積	1・2層縄文土器片集中	縄文
SK83	34	46	⑥区	140	140	50	円形、フラスコ状、崩落土の褐色粘土堆積	3層縄文土器大破片	縄文
SK84	35	46	⑥区	66	62	18	円形、小規模、浅い皿状	なし	縄文
SK85	35	47	⑥区	160	130	20	不整形楕円形、浅い皿状	埋土下部縄文土器片	縄文
SK87	35	47	⑥区	210	100	16	長楕円形、底面段差、一端の底面に焼土、住居跡複式炉の可能性あり	なし	縄文
SK88	35	47	⑥区	240	95	30	長方形でやや深い、締まりのない褐色土単層	なし	不明
SK89	35	47	⑥区	135	130	70	深い円筒形、自然堆積	なし	縄文

S K22土坑

①区低地部南東端の調査区境に位置する円筒形の土坑。半周のみ精査した。深さ1.2mまで掘り下げたが、下部は湧水が著しく掘り下げが不可能であった。ボーリング棒で底面を確認したところ検出面から約1.9mで礫層に達する。壁面は急傾斜で地山粘土層を掘り下げている。堆積土は粘土層とシルト層が互層状、レンズ状に堆積しており自然堆積の状況を示す。中位の4・5層には大礫が集中する。形状、規模、及び本土坑にSD02溝が接続している点から近世～近代の井戸跡と考えられる。

S K23土坑

SK22土坑から旧河道を挟んだ対岸側にある楕円形の土坑。開口部は長軸方向で2.7mに達する。堆積土には角礫と黄褐色粘土ブロックが多量に含まれ底面は礫層中に掘り込まれる。旧河道に接する位置等から見て溜池等の用途が考えられる。

S K40土坑

①区低地部に位置する円筒形の土坑。壁面は垂直な立ち上がりで一部はハンクする。堆積土最上部の1層は十和田中振テフラ (To-cu) からなる明黄褐色火山灰ブロックで構成されており二次堆積と見られる。今回の調査区内でTo-cuが検出された箇所は本土坑内のみである (V章 (2))。遺物出土はないが縄文時代前期前葉以前の構築と見られる。

S K41土坑

①区低地部の中で西尾根西斜面裾部の緩斜面に位置する深い円筒形の土坑。壁面は上部まで急傾斜で立ち上がり底面は平坦である。褐色粘土質シルト主体でレンズ状の自然堆積の状況を示す。形状から円筒形の陥穴状土坑の可能性がある。

S K55土坑

③区西尾根北西端の緩斜面に位置するフラスコ形土坑。開口部径は2m程で深さは1.4mに達する。壁面は全周にわたって垂直気味に立ち上がり、多くの部分では下部がハンクする。堆積土は断面で見ると中央が凹む自然堆積の状態で、4層褐色粘土層は壁面の崩落に起因する部分と見られる。

S K78土坑

⑥区東尾根中央部に位置する深い円筒形の土坑で平面形は楕円形に近い。南西側でSI11住居跡を切る。壁面は垂直に近い立ち上がりで底面は平坦である。堆積土は中央が凹む自然堆積で下半は褐色粘土質シルト主体である。

S K80土坑

⑥区東尾根南側でSI08住居跡の床面で検出されたフラスコ状土坑。平面形は円形で壁面はほぼ垂直か部分的にハンクして立ち上がる。堆積土下部3層は地山起源の明褐色シルトで、壁面の崩落によるものと思われる。上部1層は黄褐色粘土質シルトで構成され、完全に埋没した後にSI08住居跡の床面と炉が構築されている。

SK81土坑

⑥区東尾根南側で検出したフラスコ状土坑。南西側はSX58風倒木痕に切られる。平面形はほぼ円形で壁面下部は全周にわたりハングする部分が見られる。堆積土は下部8・9層と中位の6層が壁面崩落に起因すると思われる粘土で占められ、この隙間に炭化物和焼土ブロックを含む7層黒褐色シルトが挟まる。7層からの遺物出土が多く縄文土器大破片が見られる。底面中央付近に副穴と思われる小径のピット（深さ15cm）を伴う。

SK83土坑

⑥区東尾根南側で検出した小規模なフラスコ状土坑。平面形はやや歪で壁面の一部がハングする。堆積土の層界は北西-南東方向に傾斜しており、下部4層は地山と同相の褐色粘土で構成される。北西側から順次埋め戻した可能性がある。3層と2層の間から縄文土器大破片№225が出土した。

SK87土坑

⑥区南西部の遺構集中区域内に位置する楕円形の土坑で、内部に2箇所の段差があり3つの部分に分割される。北東端の円形掘り込み底面には弱い焼成を受けた部分が見られることから、住居跡の複式炉である可能性も考えられる。ただし周囲には関連する柱穴状ピット等は確認できない。

(4) 陥し穴状遺構（第36～39図 写真図版48～54）

溝状に深く掘り込まれた陥し穴状遺構は合計24基検出した。個々の遺構特徴については第2表に記載する。分布は①区西側低地部2基、③・④区西尾根上及び斜面20基、⑥区東尾根上2基である。出土遺物を見ない遺構が過半数で、土器片等が出土していても大半は上部の最終段階に堆積した土層に含まれる。また検出面や重複関係からも時期の特定は困難である。

規模は長軸2.6～3.9mで3m台前半が多く、開口部の幅は70cm前後、底面付近の幅は10～20cm前後に狭く掘り込まれる。深さは1m前後の残存が多い。下部は地山の黄褐色、赤褐色粘土層に達し壁面は垂直に近い。上半は地山の1層目褐色～黄褐色粘土質シルト層で上方に向かい広がるものが多数である。堆積土下半が地山上部と同相の褐色粘土層で埋没している場合が多く、壁面上部の崩落が頻繁であったことを示すと考えられる。

西尾根に集中する陥し穴状遺構群の分布状況は概ね3つの群をなしており、西側のやや鞍部をなす尾根上にSK24～31・38の9基、中央の南西斜面上部にSK35～37の3基、南東部の斜面上部にSK56～60・62～64の8基がそれぞれまとまっている。長軸方向は等高線に平行するように西北西-東南東を中心としており、複数の陥し穴状遺構が斜面の最大傾斜方向に直交配列する状況である。この中では西端のSK24・25が北北東-南南西の長軸を持っており、かつこの2基は浅く幅が広い。平面形状は他の陥し穴状遺構に類似するが、雨裂等の自然現象を誤認している可能性も考えられる。

(5) 焼土遺構（第40図 写真図版55）

単独の焼土遺構として登録したものが3基（SF01・02・04焼土遺構）、石囲を伴う掘り込み底面に形成されたものが1基ある（SF05焼土遺構）。なおSF03焼土遺構として検出したものは精査の結果、地山面の酸化色を誤認したものと判明したため登録抹消した。

第2表 陥し穴状遺構一覧表

遺構名	遺構図	写真図版	区域	長 (cm)	幅 (cm)	深 (cm)	長軸方位	出土遺物	時期
SK16	36	49	①区	355	75	105	N42° W	-	
SK17	36	49	①区	390	70	85	N65° W	-	
SK24	36	49	③区	360	65	65	N28° E	1層土器片(縄文中期)	浅い溝状
SK25	36	49	③区	285	100	55	N30° E	-	浅い溝状
SK26	36	50	③区	390	90	110	N70° W	上面土器片(縄文晩期) 1層土器片(縄文中期)	
SK27	36	50	③区	335	75	130	N81° W	-	
SK28	37	50	③区	365	65	100	N73° W	-	
SK29	37	50	③区	315	90	115	N70° W	-	
SK30	37	51	③区	385	95	140	N85° W	1層土器片(縄文中期)	
SK31	37	51	③区	350	65	120	N51° W	2層土器片(縄文中期)	
SK35	37	51	③区	340	65	120	N35° W	-	
SK36	37	51	③区	360	70	120	N46° W	-	
SK37	38	52	③区	330	95	145	N73° W	-	
SK38	38	52	③区	350	65	95	N80° W	-	SD03溝より古
SK56	38	52	④区	280	55	110	N62° W	-	
SK57	38	52	④区	280	70	110	N68° W	1層土器片(縄文中期)	
SK58	38	53	④区	275	60	105	N67° W	-	
SK59	38	53	④区	310	80	125	N70° E	-	
SK60	39	53	④区	385	65	105	N75° W	1層土器片(縄文中期)	
SK62	39	53	④区	260	70	115	N78° W	-	
SK63	39	54	④区	270	65	125	N81° W	-	
SK64	39	54	④区	310	75	115	N64° W	-	SK66土坑より古
SK69	39	54	⑥区	315	70	120	EW	1層土器片(縄文中期)	
SK71	39	54	⑥区	310	45	80	N32° W	1層土器片(縄文中期)	

S F01焼土遺構

①区低地部の緩斜面に位置する細長い焼成面である。規模は95×30cm。明赤褐色に強い焼成を受ける。焼土上面には炭化物層が分布する。年代、性格不明である。

S F02焼土遺構

③区西尾根上部の平坦面に位置する楕円形の焼成面である。規模は45×33cm。明赤褐色に焼成を受ける。周囲には関連するPit等は見られない。

S F04焼土遺構

⑥区東尾根北側の緩斜面に位置する楕円形の焼成面である。規模は63×48cm。明赤褐色に強い焼成を受ける。本遺構の周囲には小径の柱穴状小土坑が複数検出されており(P022・023・024他)、これらと組み合う窪穴住居跡の炉である可能性もある。

S F05焼土遺構

⑥区東尾根上中央部に位置する単独の石囲炉である。楕円形の掘り込み底面に焼成面が形成され、周囲に断続的に角礫が巡る。掘り込みは105×60cm、深さ15cmの規模で底面はやや傾斜する。焼成面

は中央部の30×20cm程の範囲で明赤褐色に強い焼成を受ける。住居跡石囲炉に類似する施設と捉えられるが、周囲に関連するPitや堅穴プランは確認できず、単独の炉跡として登録した。

(6) 配石遺構 (第40図 写真図版56)

SQ01配石遺構

⑥区東尾根中央部の平坦面で検出した。小径のビット上部に重円礫が直立した状態であり、意図的に立石を設置したものと判断している。礫は長18cm程で使用痕等は観察できない。ビット内部は暗褐色シルトの1層があり、埋め戻し等の痕跡は不明である。ビット上部に立石が見られるものとしては他にSI18住居跡のP15があり、本遺構と類似した状況である。SQ01配石遺構も住居跡に伴う可能性を考慮したが周辺に関連づけられる他のビット等は確認できない。

(7) 溝跡 (第41～43図 写真図版56～58)

SD01溝

①区北西部平坦面にありSX01堅穴状遺構、SK19・21土坑と接続する溝である。延長18m程を精査したが両端は調査区外に延びる。本体と思われる北西-南東方向にやや蛇行しながら1.5～2.0m幅で掘り込まれた部分と、これに直交して分岐しSK21土坑に接続する部分、この反対側で調査区西端に延びる部分、SK19土坑に接続する部分が見られる。それぞれの重複関係は確認できず一体となっていたと判断している。

北西側の分岐部分ではやや広い底面を持つ皿状の断面を呈するが、南東側では狭い底面に向かって壁面が直線的に落ち込むV字状の断面形となる。また全体として南東側の方が深く掘り込まれる。堆積土は黒褐色シルトが主体であり、ラミナ等水成堆積の状態は観察されない。

出土遺物は縄文土器片№259があるのみで遺物からは時期の判断はできない。前述のSX01堅穴状遺構等と一体となった近世以降の水路の可能性が高いと考えられる。

SD02溝

①区南西部平坦面にありSK22土坑を起点として北西方向に延びる浅い溝である。北東側の旧河道に一部で接する。延長約10mを検出したが北西部は湧水のため掘り下げが不可能で、精査したのは中央から南東側の6m余りの範囲である。幅は2.5～5m程、深さは30cm前後で底面はほぼ平坦である。堆積土は黒褐色シルト主体で、旧河道内の堆積土と連続する。重複関係にあるというよりは同時に開口し同時期に埋没した可能性が高いと思われる。

SD01溝同様に縄文土器片№260の出土があるのみで、SK22土坑が近世以降の井戸と捉えられることから、これに接続した水路として掘削されたと考えられる。

SD03・06・07溝

③・④区西尾根頂部から北斜面にあり、ほぼ東西方向に延びる浅く狭い溝群である。SD03とSD06は尾根頂部付近にあり、本来は一連の溝であったものが途中で削平により断続したものと考えられる。SD07はSD03・06に約10m余りの間隔を開けてほぼ平行し、尾根北斜面中段を東西に延びる。約45m程にわたり検出精査した。いずれも幅50cm前後、深さ10～20cm程で、暗褐色の粘土質シルトが堆積する。遺物は一切出土せず時期判断も難しい。尾根筋の作業用に切られた通路の痕跡、または牧草地として利用されていた時代の排水路等が可能性として挙げられる。

SD04溝

②区西尾根南西斜面の中央部にある浅い溝である。標高256m等高線に沿って概ね水平かつ直線的に延びる。延長約35m程を検出精査した。東端は途中で途切れており、削平を受けたものと思われる。幅は100～70cm程、深さは40～20cm程である。堆積土は小礫を含む暗褐色～褐色シルト主体で、出土遺物はない。SD03等と同様に時期の確定は困難だが、斜面の通路や水路の痕跡と思われる。

SD05溝

①区東側の斜面裾縁斜面にある溝である。北東-南西に延び、南西端は調査区外に連なる。検出したのは延長6m程の範囲でやや曲線的に蛇行する。平均して幅50cm程、深さ20cm程である。堆積土は角礫を含む暗褐色シルトで、隣接する楕円形の掘り込みも同相の堆積土が見られる。剥片石器No.261があるが土器は見られず時期の確定はできない。斜面に生じた雨裂等の自然現象の可能性もある。

SD08溝

⑥区東尾根中央部で東西に延びる短い溝である。延長約10.5mを検出精査した。幅は100～50cm程、深さは20～10cm程である。暗褐色シルトが堆積し縄文土器片等が出土する。底面が比較的平坦でしっかり掘り込まれていることから人為的に掘られた溝と考えられる。周囲に展開する縄文時代中期後半の住居跡等と同時期の可能性が高いが溝の機能等は不明である。

(8) 柱穴状小土坑 (第40図 写真図版59)

①区西側低地部に15基、⑥区東尾根上26基を確認した。概ね直径が50cm未満の小規模なピットである。①区では近世以降の小屋等簡易な建物の柱穴や杭痕が主体となると思われる。⑥区の縄文時代遺構集中区域に分布するものは、縄文時代の掘立柱建物跡柱穴や検出できなかった竪穴住居跡柱穴を含んでいる可能性があるが、明確な配置を抽出することはできなかった。個々の規模等については第3表に記載する。⑥区で検出したやや規模の大きいP034・036・037・038については実測図を第40図に掲載した。

(9) 風倒木痕 (写真図版59)

④・⑥区の尾根上から斜面部分を中心に風倒木痕を合計35箇所検出した。検出状況は地山褐色粘土層の盛り上がりや黒褐色土の落ち込みが一体となっているものを認定しており、落ち込み部分のみ掘り下げたものが大部分である。重複関係では③区で縄文時代晩期のSI02住居跡を破壊するもの、⑥区で縄文時代中期のSI04住居跡を破壊するもの等があり、縄文時代より新しいものが多いと思われる。

(10) 旧河道 (第44・45図 写真図版60・61)

①区南側緩斜面を東西方向に延びるもの、⑥区東尾根上で尾根筋に沿って南北に延びるものの2箇所が確認された。前者を旧河道1、後者を旧河道2とする。

旧河道1は緩斜面中に緩い落ち込みが東西方向に延びる。一部をトレンチ調査により底面まで掘り下げたが全体の掘り下げは行っていない。規模は調査区内で延長約45m、幅は最大13m程度、深さは1m程である。全体に水成堆積の状況が顕著に確認され、黒色土・黒褐色土主体のブラックバンド的なシルト層が2枚認められる。埋没の進行と停止が繰り返された結果と考えられる。西側では近世以降の溝と思われるSD02溝と堆積土上部が同相であり、完全に埋没したのはそれほど古くない時期で

第3表 柱穴伏小土坑一覧表

通構名	区域	径 (cm)	深 (cm)	埋土	出土遺物	時期	備考
P001	①区南部	48	20	暗褐色シルト			
P002	①区南部	43	37	黒褐色シルト			斜位
P003	①区南部	32	35	黒褐色シルト			
P004	①区南部	24	47	黒褐色シルト			
P005	①区南部	32	37	黒褐色シルト			
P006	①区南部	25	15	黒褐色シルト			
P007	①区南部	46	10	黒褐色シルト			
P008	①区南部	30	10	黒褐色シルト			
P009	①区南部	32	5	黒褐色シルト			
P010	①区南部	32	10	黒褐色シルト			
P011	①区南部	27	11	黒褐色シルト			
P012	①区北部	54	12	黒褐色シルト			
P013	①区北部	47	24	黒褐色シルト			
P014	①区北部	30	16	黒褐色シルト			
P015	①区北部	58	18	黒褐色シルト			SD01と重複
P016	⑥区	26	28	暗褐色シルト			
P017	⑥区	44	33	暗褐色シルト			
P018	⑥区	38	16	暗褐色シルト			
P019	⑥区	63	31	暗褐色シルト	土器片 2	中期後葉	
P020	⑥区	37	30	暗褐色シルト			
P021	⑥区	81	13	暗褐色シルト	土器片 7	中期後葉	
P022	⑥区	42	10	暗褐色シルト			
P023	⑥区	30	36	暗褐色シルト			
P024	⑥区	36	27	暗褐色シルト			
P025	⑥区	56	40	暗褐色シルト			
P026	⑥区	58	20	暗褐色シルト			
P027	⑥区	60	20	暗褐色シルト			
P028	⑥区	62	16	暗褐色シルト			
P029	⑥区	62	23	暗褐色シルト	石皿片 1		
P030	⑥区	59	20	暗褐色シルト			
P031	⑥区	69	43	暗褐色シルト	凹石 1		
P032	⑥区	58	36	暗褐色シルト	スクレイパー 1		
P033	⑥区	88	32	暗褐色シルト			
P034	⑥区	74	36	暗褐色シルト	土器片 3	中期後葉	
P035	⑥区	-	-	-			記録欠落
P036	⑥区	67	62	暗褐色シルト	土器片 1	中期後葉	
P037	⑥区	62	36	暗褐色シルト	土器片 4 剥片 1	中期後葉	
P038	⑥区	62	41	暗褐色シルト	土器片 1 剥片 1	中期後葉	
P039	⑥区	33	30	暗褐色シルト			
P040	⑥区	-	-	-			記録欠落
P041	⑥区	-	-	-			記録欠落

あろうと推測される。遺物は下部黒色土帯からNo298の弥生後期土器片が出土する。

旧河道2は東尾根筋に平行してほぼ南北に延びる。北端は調査区際の削平区域まで達しており延長75m程を検出した。南端は尾根頂部に至り規模が小さくなることから源頭に近い状況と思われる。全体としては幅2.5～3.5m程、深さ30～50cm程で、黒褐色シルトの単層堆積土である。水成堆積の状況ははっきりしない。遺物はほとんど出土していないため全体の掘り下げは行わず北半は検出のみで輪郭を記録した。また北端では枝状に分岐する10m程の旧河道があり、旧河道2bとした。時期については周囲の縄文時代住居跡等の遺構に比べ堆積土の黒色土が顕著であること等から、縄文時代より新しい可能性が高いと見られるが、遺物が伴わないため時期不詳とせざるを得ない。

(11) 近世墓 (第46図 写真図版62・63)

西尾根上のほぼ中央、及び西尾根南西斜面上部にそれぞれ近世墓が所在していたとの情報は、調査着手時に委託者から伝えられていた。また尾根上の墓域管理者であった旧地権者からは、用地売却前に墓域を取り囲む位置関係にあった樹木の根株が残存していることを目安として、墓域の正確な位置を教えていただいた。墓標の撤去、及び重機と人手による改葬は平成20年度内に終了しているとのことであったが、万一、発掘調査中に埋葬人骨、もしくは副葬品が出土した場合の対処として、当埋蔵文化財センターとしては遺構精査の手法に準じて取り上げを行い、出土品等についての記録を採った後に旧地権者に引き渡すという方針を確認し、県教育委員会、委託者、旧地権者の3者から了承を得た。

③区西尾根中央の墓域(以下、墓域1とする)では表土除去を行ったところ、改葬による掘削、埋め戻しの痕跡が明瞭に確認されたが、この埋め戻し土の上部に鉄銭破片と思われる不明鉄製品の断片が混入していた。このため埋め戻し土内の副葬品、被葬者人骨の回収、また改葬掘削が最底面まで及んでいるかどうかの確認を目的として埋め戻し土を再度掘り上げる作業に着手した。

改葬による掘削の痕跡は概ね6×4mの楕円形の範囲である。埋め戻し土を深さ80cm程除去し箱形に掘り込まれた掘削底面まで達した段階で、墓坑埋土と思われる複数の円形、もしくは方形のプランが見られ、改葬による掘削が及んでいない部分が下位に残存しているものと判断した。プランは11基分を確認し個々に1～11号墓の仮名称を付して掘り下げを行った結果、そのうちの9基から人骨、副葬品の出土を見た。また当初8号墓として掘り下げたプランは不明瞭な段差に過ぎず、墓坑とは認識しがたい状態であったため欠番とし、合計10基の墓坑が残存しているものと判断した。

一方、②区西尾根西斜面上部の墓域(以下、墓域2とする)では、管理者が不明で現在は無縁仏扱いであり、改葬も行われていないとのことであった。該当する区域の表土除去を行ったところ、地表直下には墓標の基礎構造物の残骸と思われる複数の板石が集中していた。板石の平面記録後にこれを除去すると、3箇所の板石集中地点のうち2箇所を下位に方形の掘り込みプランが認められ、埋土の状態から墓坑と判断し12・13号墓の名称を付して掘り下げた。結果は12号墓底部付近から下顎大臼歯歯冠が出土したのみで副葬品は出土していない。各墓坑の特徴、出土副葬品、出土被葬者人骨については第4表に記載した。

出土品は前述のように現場事務所にクリーニング、観察を経て、主要な副葬品については実測、写真撮影を行った後に人骨と共に旧地権者に引き渡した。納骨には調査担当者も立ち会い、改葬墓碑銘に記録された没年、戒名を確認させていただいた。墓碑銘の内容は第5表の通りである。没年は安永十年(1781)～明治十五年(1882)にわたる。残念ながら墓標の原位置は確認できず、墓坑と墓標の対応関係は不明である。

なお、上述した調査区内の近世墓の他に、西尾根北側の調査区外には墓地が現存している。こちらは別の方の名義墓地で合計10基の墓標が確認できる。墓標は自然石を板状に加工したもので年号は宝暦十二年（1762）～嘉永二年（1849）にわたる。

第4表 近世墓一覧表

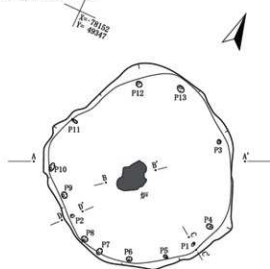
遺構名	形状	特徴	人骨	副葬品	副葬銭	他出土遺物	獣骨
1号墓	円形		肋骨片数点	-	新寛永1、鉄銭6	釘17	-
2号墓	正方形	3号墓より古	大歯1、大腿骨・頭四肢骨片数点	煙管吸口1	新寛永1	板状鉄製品1、釘15	イヌ科頭骨、肋骨、頸椎
3号墓	円形		頭骨、大腿骨	-	-	釘5	-
4号墓	正方形		頭骨、四肢骨、椎骨 大白歯4 小臼歯2	陶器小碗（大塚相馬）1、煙管雁首・吸口1、銅製簪1、木製数珠玉3	古寛永2、新寛永1、鉄銭2	釘26	-
5号墓	正方形		四肢骨1	煙管雁首・吸口1、鉄1	古寛永2、新寛永3、鉄銭6	釘11	-
6号墓	正方形		なし	-	-	-	-
7号墓	長方形		左右大腿骨、管骨 左右上腕骨	煙管雁首1、刀子1	鉄銭2	棺箱部材	イヌ科経骨・肋骨・椎骨、獣皮
8号墓	改葬により消失か		-	-	-	-	-
9号墓	正方形	蓋石あり	頭骨、大腿骨・頭		鉄銭30	釘5	イヌ科下顎骨
10号墓	長方形		頭骨、下顎骨、大白歯4、左右大腿骨等	煙管雁首1、刀子1	古寛永1、新寛永1、鉄銭8	釘30	-
11号墓	不整形	10号墓より古	肋骨片1	-	-	釘3	-
12号墓	正方形		下顎大白歯2 （咬耗進行）	-	-	-	-
13号墓	正方形		なし	-	-	-	-

第5表 改葬墓碑銘

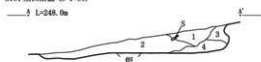
戒名	没年	(西暦)
高林縮叟柳定門	安永十年四月十二日	1781
押咄道得善男	文政三年八月十一日	1820
雪峰了庭善男	天保二年十月二十九日	1831
寒林自松善女	天保三年十一月十七日	1832
蓬室妙香善女	天保六年	1835
花室妙容善女	嘉永三年三月九日	1850
桃陵智源善女	嘉永五年三月二日	1851
寿嶽道慶信士	慶応三年十月二十七日	1867
惠林自性童子	明治四年十二月十四日	1871
秋山惠勝信士	明治八年	1874
優安妙鏡大姉	明治十五年	1882

※平成二十年十一月吉日移転

S101住居跡 (S=1:50)

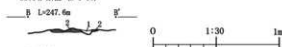


S101 東西断面 (S=1:50)



- 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや強
- 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まり中
北東側の下部4層層界には黄褐色粘土ブロックが存在する
- 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まり中 2層と同相
- 10YR2/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや弱 床面付近に炭化物少量含む

S101 伊断面 (S=1:30)



S101 伊'

- 10YR3/2黒褐色シルト 粘性弱 締まり中 杭痕か?
- 9YR4/7赤褐色 床面の焼成 上面は硬化する

S101 柱穴断面 (S=1:20)



S101 P1

- 10YR3/3暗褐色シルト 粘性弱 締まり中

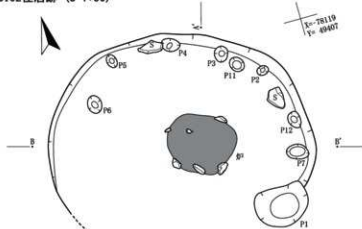
S101 P2

- 10YR3/3暗褐色シルト 粘性弱 締まり中

S101 柱穴

No.	径 (cm)	深 (cm)
P1	6	6
P2	5	4
P3	6	-
P4	9	15
P5	6	3
P6	8	5
P7	9	5
P8	9	6
P9	9	8
P10	11	7
P11	9	10
P12	9	8
P13	11	10

S102住居跡 (S=1:50)



S102 南北断面 (S=1:50)

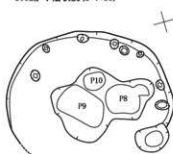


S102 東西断面 (S=1:50)



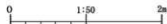
- 10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや弱へ中 炭化物(径1cm以下)少量含む
- 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや弱 炭化材(径1~5cm)少量含む
- 10YR5/6黄褐色 粘土質シルト 粘性弱 締まり中
- 10YR4/4褐色シルト 粘性やや弱 締まり中
- 5YR5/6明赤褐色シルト 粘性やや弱 締まり中
御家地上: 意図的に敷設した褐色土が被覆した状態か
南側はブロック張り
- 10YR5/6黄褐色 粘土質シルト 粘性やや弱 締まり中

S102 伊下層状況 (S=1:80)



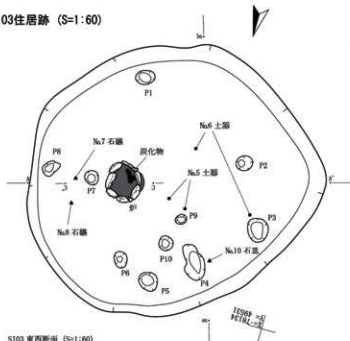
S102 柱穴

No.	径 (cm)	深 (cm)
P1	75×52	25
P2	15×12	6
P3	21×18	15
P4	25×17	15
P5	18×13	5
P6	24×18	9
P7	30×20	6
P8	-	-
P9	-	-
P10	-	-
P11	21×18	6
P12	22×16	7



第11図 S101・S102住居跡

S103住居跡 (S=1:60)



S103 東西断面 (S=1:60)



S103 南北断面 (S=1:60)

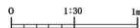


S103 炉断面 (S=1:30)



S103 炉

1. SYR4/6赤褐色 粘土 中強度・塊状を受けた部分
2. SYR2/1黒褐色 炭化物層
3. SYR6/8橙色 粘土 粘性や全固 締まり中 炉石設置痕跡

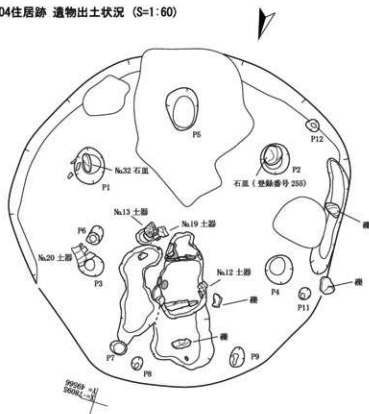


S103柱穴

No.	径 (cm)	深 (cm)
P1	31×23	6
P2	27×23	13
P3	37×32	11
P4	59×33	13
P5	33×29	9
P6	26×20	13
P7	23×21	18
P8	29×20	10
P9	18×15	10
P10	24×23	15

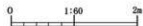
1. 7.SYR3/3暗褐色 シルト 粘性弱 締まり中 炭土粒を含み部分的に赤褐色
2. 7.SYR2/1黒色 シルト 粘性弱 締まり中 比較的均質

S104住居跡 遺物出土状況 (S=1:60)



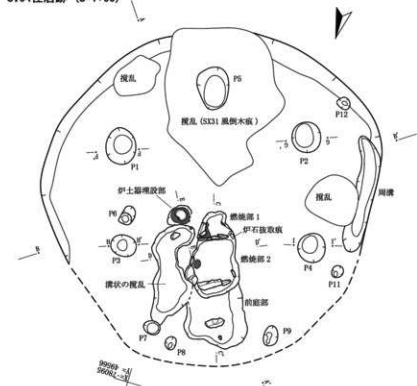
S104柱穴

No.	径 (cm)	深 (cm)
P1	58×48	67
P2	48×45	57
P3	40×35	64
P4	47×44	52
P5	67×51	28
P6	30×20	15
P7	27×22	20
P8	22×17	22
P9	33×21	36
P10	-	-
P11	20×17	22
P12	21×18	15

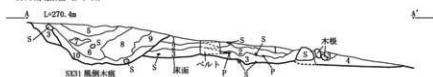


第12図 S103-S104住居跡 (1)

S104住居跡 (S=1:60)



S104 南北断面 (S=1:60)



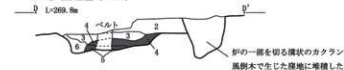
S104 東西断面 (S=1:60)



S104 伊 南北断面 (S=1:30)



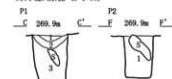
S104 伊 東西断面 (S=1:30)



S104 伊

1. 7.5YR2/2黒褐色 シルト 伊石割に生じた隙間の堆積土
 2. 7.5YR2/3暗褐色 シルト 焼土粒・炭化物含む
 3. 10YR5/1に5~7黄褐色 粘土質シルト 締まり強
 4. 7.5YR2/3暗褐色 ~5YR2/3暗赤褐色 シルト 焼土粒・炭化物含む
 5. 5YR4/4に5~7赤褐色 シルト 焼土の堆積
 6. 7.5YR2/2黒褐色シルトと10YR4/6褐色粘土の互層状堆積 伊石抜き取り痕か?
 7. 5YR2/3暗赤褐色 シルト 4層と同層
 8. 5YR4/4に5~7赤褐色 シルト 4層と同層
 9. 7.5YR2/3暗褐色 シルト 4層と同層 焼土粒含まず
 10. 7.5YR2/2黒褐色 シルト 2層の上位
- ※ 伊焼土部に焼成面確認できず

S104 柱穴断面 (S=1:60)



S104 P1

1. 7.5YR2/2黒褐色 シルト 炭化物含む
2. 7.5YR2/3暗褐色 シルト
3. 7.5YR4/4褐色 粘土質シルト 炭化物含む

S104 P2

1. 7.5YR4/4褐色 粘土質シルト

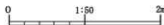


S104 P3

1. 7.5YR2/3暗褐色 シルト 炭化物・焼土粒含む

S104 P4

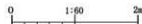
1. 7.5YR4/4褐色 粘土質シルト 炭化物含む



S104 埋土

1. 7.5YR2/3暗褐色~7.5YR2/2黒褐色 シルト 粘性弱 締まり中
2. 7.5YR2/2黒褐色~7.5YR2/1黒色 シルト 粘性弱 締まり中
3. 7.5YR4/4褐色 シルト 粘性弱 ~中 締まり中 焼土ブロック偏在
4. 7.5YR4/6褐色 粘土質シルト 粘性中 締まり中
5. 7.5YR2/1黒色 シルト 粘性弱 締まり中
6. 7.5YR4/6褐色 粘土質シルト 粘性中 締まり中
7. 5YR2/6褐色 テフツブロック
8. 7.5YR5/6明褐色 粘土 粘性中 締まり強
9. 10YR2/2黒褐色 シルト 粘性弱 締まり弱
10. 7.5YR2/2黒褐色 シルト 粘性弱 締まり弱

※ 基本的には1層~3層に分層される
3層の中央部~東半は焼土粒多い
北~西側部に4層が広がるが東~南側では
その存在不明瞭
S104を9号SSX13風倒木版は2層~10層

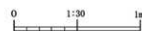


S104 伊 土器埋設部断面 (S=1:30)



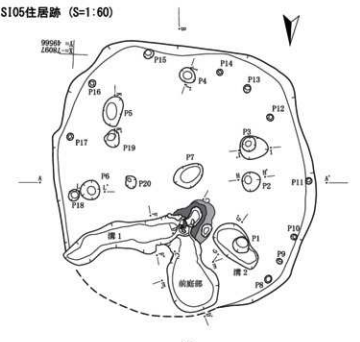
S104 伊土器埋設部

1. 7.5YR4/4褐色 シルト しまりなし 小礫含む 埋設土器内堆積土
2. 5YR5/6明赤褐色 シルト 強い焼成受ける
3. 5YR4/6赤褐色 シルト 焼土ブロックの集中
4. 7.5YR2/2黒褐色 シルト 締まりなし



第13図 S104住居跡②

S105住居跡 (S=1:60)



S105東西断面 (S=1:60)

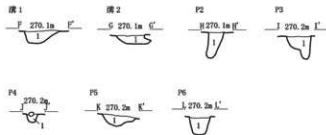


S105南北断面 (S=1:60)



- 7.5YR3/3暗褐色シルト 粘性弱 締まり面 中央部はより暗色 炭化物細片・焼土粒含む
- 7.5YR4/4褐色 粘土質シルト 粘性弱 締まり中

S105 柱穴・溝断面 (S=1:50)



S105 溝1

- 7.5YR3/3暗褐色シルト 粘性弱 締まり中 炭化物・焼土粒含む

S105 溝2

- 7.5YR4/4褐色シルト 粘性弱 締まり中 炭化物・焼土粒含む

S105 P2

- 7.5YR4/4褐色シルト 粘性弱 締まり中 炭化物多い

S105 P3

- 7.5YR4/4褐色シルト 粘性弱 締まり中

S105 P4

- 7.5YR4/4褐色シルト

S105 P5

- 7.5YR4/4褐色シルト

S105 P6

- 7.5YR4/6褐色 粘土質シルト

伊賀段土層出土状況 (S=1:30)



伊賀段断面 (S=1:30)



伊賀段埋土

- 5YR4/4に多い赤褐色シルト 粘性弱 締まり中 焼土粒・炭化物含む

伊賀段断面 (S=1:30)



伊賀段埋土

- 7.5YR4/4褐色シルト 粘性弱 締まり中 炭化物含む
- 7.5YR3/4暗褐色シルト 粘性弱 締まり中 炭化物・焼土粒含む

S105柱穴

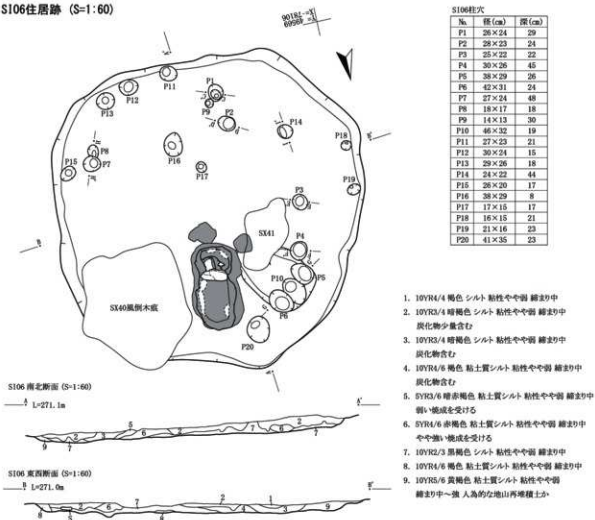
No.	径(cm)	深(cm)
P1	28×26	28
P2	30×28	38
P3	44×37	33
P4	27×23	15
P5	48×30	16
P6	31×30	24
P7	51×36	11
P8	12	5
P9	10	10
P10	10	11
P11	10	11
P12	11	16
P13	13	15
P14	10	8
P15	16	19
P16	12	11
P17	12	9
P18	19×17	12
P19	26×22	47
P20	21×18	27

0 1:30 1m

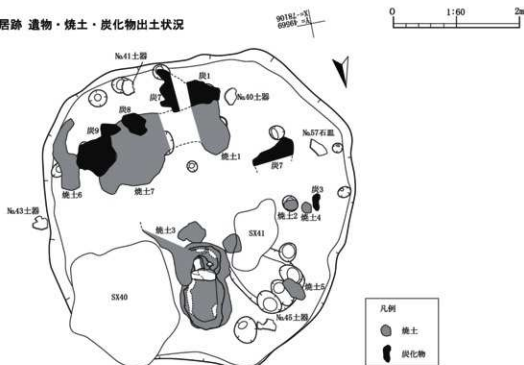
0 1:60 2m

0 1:50 2m

S106住居跡 (S=1:60)



S106住居跡 遺物・焼土・炭化物出土状況

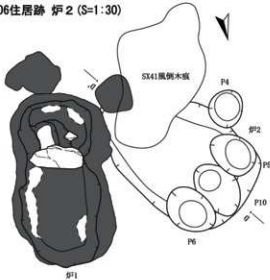


第15図 S106住居跡 (1)

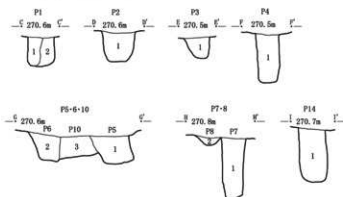
S106住居跡 炉1 (S=1:30)



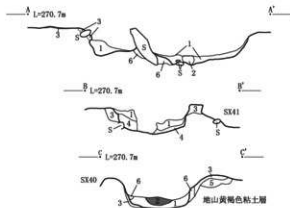
S106住居跡 炉2 (S=1:30)



S106住居跡柱穴断面 (S=1:30)



S106 炉1 断面 (S=1:30)



S106 炉1

1. 5YR3/6 暗赤褐色 シルト 粘性やや弱 締まりやや弱 焼土ブロック
2. 2.5YR5/8 暗赤褐色 シルト 粘性弱 締まりやや強 強度低土
3. 5YR4/6 赤褐色 シルト 粘性弱 締まり強 強度低土 炭灰による硬化顯著
4. 5YR3/3 暗赤褐色 シルト 粘性やや弱 締まりやや弱 弱炭灰土 1層積層以前の堆積
5. 5YR3/4 暗赤褐色 シルト 粘性中 締まり中 最も旧層の炉堆積土か
6. 7.5YR5/6 明褐色 粘土質シルト 粘性中 締まりやや弱 炉石敷え方

S106 炉2 断面 (S=1:30)



S106 炉2

1. 7.5YR5/6 明褐色 シルト 粘性中 締まりやや強 人為的な地山再堆積土
2. 7.5YR4/6 褐色 粘土質シルト 粘性中 締まり中 人為的な堆土
3. 2.5YR4/6 赤褐色 強い焼成を受ける

S106 P1

1. 10YR3/2 黒褐色 シルト 粘性中 締まり中 炭灰に炭化物含む
2. 10YR4/4 暗褐色 シルト 粘性中 締まり中

S106 P2

1. 5YR3/6 暗赤褐色 シルト 粘性中 締まり中 炭化物含む

S106 P3

1. 5YR3/6 暗赤褐色 シルト 粘性中 締まり中 炭化物含む

S106 P4

1. 5YR3/3 暗赤褐色 シルト 粘性中 締まり中 炭化物含む

S106 P5・P6・P10

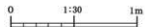
1. 10YR3/4 暗褐色 シルト 粘性やや弱 締まり中 炭化物含む P5 堆土
2. 5YR3/6 暗赤褐色 シルト 粘性中 締まり中 炭化物含む P6 堆土
3. 7.5YR4/6 褐色 シルト 粘性中 締まり中 P10 堆土

S106 P7・P8

1. 5YR3/4 暗褐色 シルト 粘性中 締まり中 炭化物含む P7 堆土
2. 10YR3/4 暗褐色 シルト 粘性中 締まり中 P8 埋土

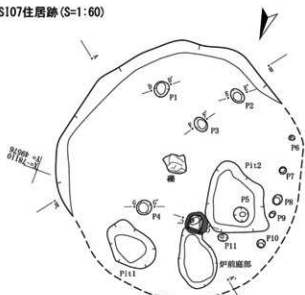
S106 P14

1. 7.5YR4/3 褐色 シルト 粘性中 締まり中 炭化物含む



第16図 S106住居跡(2)

S107住居跡 (S=1:60)



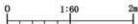
S107 南北断面 (S=1:60)



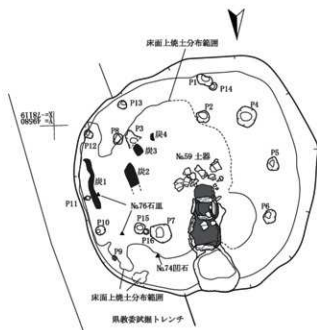
S107 東西断面 (S=1:60)



1. 7.5YR/4褐色粘土質シルト 粘性中～やや弱 締まり弱 炭化物中 小礫含む
※ 床面下12.5YR/6褐色土で1層との境界不明瞭



S108住居跡 遺物・焼土・炭化物出土状況 (S=1:60)

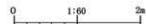


S107柱穴・P1

No.	径 (cm)	深 (cm)
P11	90×60	32
P112	128×103	26
P1	25×22	19
P2	25×16	28
P3	25×18	26
P4	23×22	24
P5	23×21	41
P6	8	11
P7	12	11
P8	16	14
P9	8	14
P10	10	19
P11	14×10	23

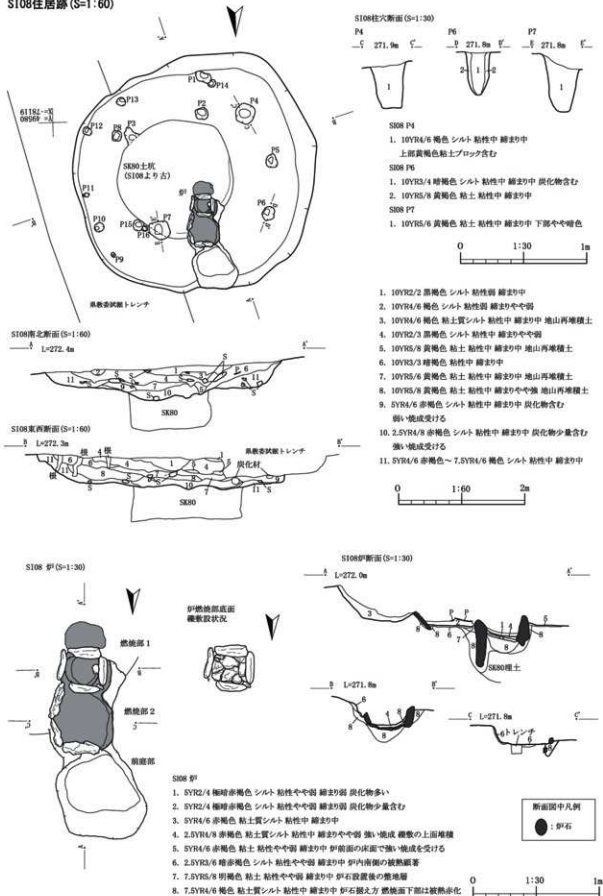
S108柱穴

No.	径 (cm)	深 (cm)
P1	27×14	28
P2	21×20	13
P3	22×23	44
P4	33×33	38
P5	20×17	26
P6	23×20	34
P7	34×29	47
P8	16×14	17
P9	7×6	11
P10	15×14	23
P11	11×7	4
P12	14×12	28
P13	14×14	24
P14	12×11	7
P15	17×16	19
P16	9×9	5



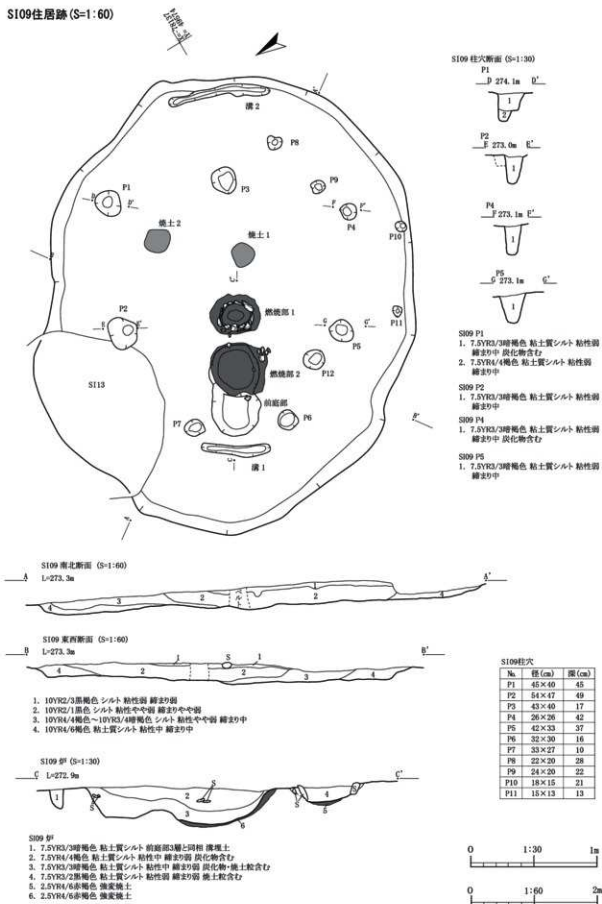
第17図 S107-S108住居跡 (1)

S108住居跡 (S=1:60)



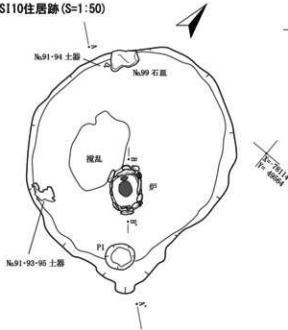
第18図 S108住居跡②

S109住居跡(S=1:60)



第19図 S109住居跡

S110住居跡 (S=1:50)



1. 7.5YR3/3暗褐色シルト粘性弱 締まり中 炭化物含む
2. 7.5YR4/4褐色 粘土質シルト 粘性中 締まりやや弱

S110 伊断面 (S=1:30)



1. 7.5YR3/3暗褐色シルト粘性弱 炭化物・焼土を含む 伊埋土
2. 7.5YR4/4褐色 粘土質シルト 締まり中～強 伊石設置痕跡

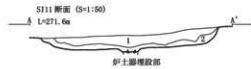
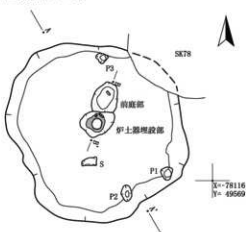
S110柱穴

No.	径 (cm)	深 (cm)
P1	46×38	17

S110 伊

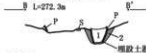
1. 7.5YR3/3暗褐色シルト粘性弱 炭化物・焼土を含む 伊埋土
2. 7.5YR4/4褐色 粘土質シルト 締まり中～強 伊石設置痕跡

S111住居跡 (S=1:50)



1. 7.5YR4/4褐色 粘土質シルト 粘性弱 締まり中
2. 7.5YR3/3暗褐色シルト粘性弱 締まり中

S111 伊断面 (S=1:30)



1. 10YR2/1黒色シルト粘性弱 締まり弱 埋設土器内埋積土
2. 5YR4/4に5Y1-赤褐色 弱い焼成を受ける

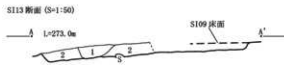
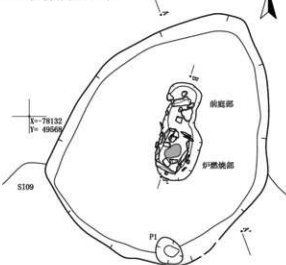
S111柱穴

No.	径 (cm)	深 (cm)
P1	18×17	17
P2	25×17	15
P3	15×15	11

S111 伊

1. 10YR2/1黒色シルト粘性弱 締まり弱 埋設土器内埋積土
2. 5YR4/4に5Y1-赤褐色 弱い焼成を受ける

S113住居跡 (S=1:50)



1. 7.5YR3/3暗褐色シルト～粘土質シルト 粘性弱 締まり中～やや弱
2. 7.5YR4/4褐色 粘土質シルト 粘性弱 締まり中
※ 地山と2層の違いは不明瞭

S113 伊断面 (S=1:30)



1. 7.5YR3/3暗褐色 粘土質シルト 粘性弱 締まり弱 炭化物含む

S113柱穴

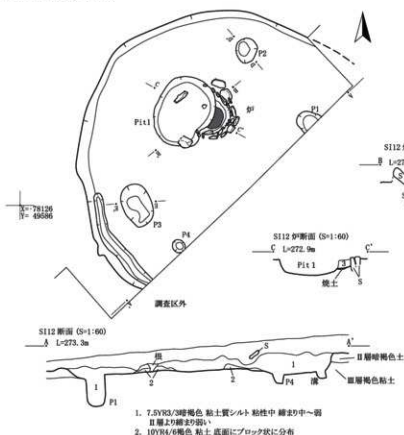
No.	径 (cm)	深 (cm)
P1	41×32	16

断面中凡例

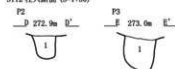


第20図 S110-S111-S113住居跡

S112住居跡 (S=1:60)



S112 柱穴断面 (S=1:60)



S112 P2

1. 7.5YR3/3暗褐色 粘土質シルト 粘性中 締まり弱 炭化物含む

S112 P3

1. 7.5YR3/3暗褐色 粘土質シルト 粘性中 締まり弱 炭化物含む

S112 伊・Pit1 断面 (S=1:30)



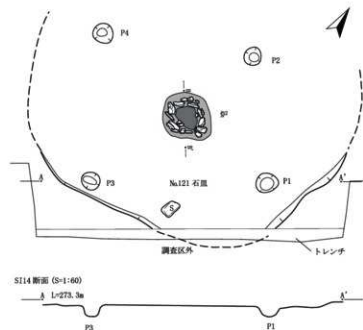
S112-伊

- 7.5YR3/3暗褐色 粘土質シルト 粘性弱～中 締まり弱 炭化物含む 土層片多し
- 7.5YR3/3暗褐色～3/2黒褐色 粘土質シルト 粘性中 締まり弱
- 7.5YR3/3暗褐色 粘土質シルト 底面に弱い塊状成層 層1:2層:3層=1埋土:3層:石礫土

S112 柱穴・Pit

No.	径(m)	深(m)
Pit1	115×92	30
P1	38×-	53
P2	40×34	37
P3	68×47	46
P4	20×18	13

S114住居跡 (S=1:60)



S114 柱穴

No.	径(m)	深(m)
P1	38×30	19
P2	30×28	23
P3	28×28	21
P4	33×31	17

断面図中凡例



S114 伊断面 (S=1:30)



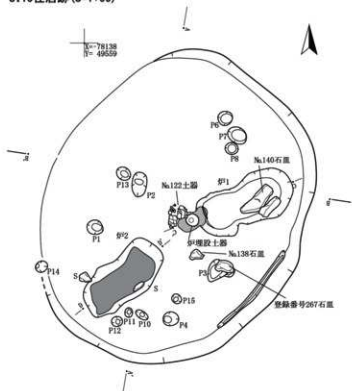
S114 伊

- 7.5YR3/3暗褐色 粘土質シルト 粘性弱 締まり弱 均質
- 7.5YR2/2黒褐色 シルト 粘性弱 締まり弱 塊土ブロック含む
- 7.5YR3/3暗褐色 シルト 粘性弱 締まり弱 炭化物含む
- 5YR4/6暗褐色 シルト 炭化物混入 炭化物を含み塊状物の可能性あり
- 5YR4/4暗赤褐色 シルト 伊石外側の割変塊土
- 5YR4/4にぶい赤褐色 シルト 伊石外側の割変塊土
- 7.5YR2/2黒褐色 シルト 伊石抜き取り痕か?

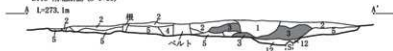


第21図 S112-S114住居跡

S115住居跡 (S=1:60)



S115 南北断面 (S=1:60)



S115 東西断面 (S=1:60)



- 10YR3/4暗褐色 シルト 粘性中 締まりや中間 覆瓦
- 10YR3/3暗褐色 シルト 粘性中 締まり中
- 5YR3/6暗赤褐色 シルト 粘性中 締まり中 炭化物含む 掘土層
- 10YR2/3黒褐色 シルト 粘性中 締まりや中間～中
- 7.5YR/4暗褐色 シルト 粘性中 締まり中
- 10YR3/3暗褐色 シルト 粘性中 締まりや中間～中 2層と同相
- 7.5YR/4暗褐色 シルト 粘性中 締まり中 炭化物含む 炉内部またはピット埋土

- 7.5YR5/6明褐色 粘土質シルト 粘性中 締まり中 地山起源
- 10YR6/6明黄褐色 粘土質シルト 粘性中 締まり中 地山崩落土
- 10YR3/4暗褐色 シルト 粘性中 締まり中 炭化物含む 炉内部またはピット埋土
- 10YR2/3黒褐色 シルト 粘性中 締まり中 炭化物質2層土
- 10YR3/3暗褐色 シルト 粘性中 締まり中 炭化物含む

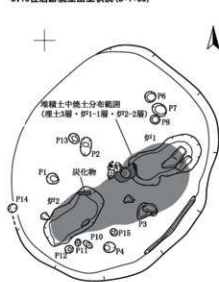
S115 炉1断面 (S=1:30)



S115 炉1

- 5YR3/4暗赤褐色 シルト 粘性中 締まり中 炭化物含む 弱変焼土
- 7.5YR/6暗褐色 シルト 粘性中 締まり中 炭化物含む
- 5YR3/6暗赤褐色 シルト 粘性中 締まり中 弱変焼土
- 10YR3/3暗褐色 シルト 粘性中 締まりや中間 埋設土層内堆積土
- 5YR/8赤褐色 弱変焼土
- 7.5YR/4暗褐色 粘土 粘性中 締まり中 埋設土層設置後北方堆土 弱変焼土

S115住居跡焼土出土状況 (S=1:80)



S115柱穴

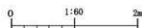
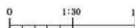
No.	径(cm)	深(cm)
P1	26×23	20
P2	39×23	37
P3	37×30	11
P4	24×22	18
P5	—	—
P6	23×22	16
P7	32×24	19
P8	20×19	8
P9	16×14	14
P10	22×12	17
P11	15×12	7
P12	18×16	9
P13	23×20	14
P14	20×17	30
P15	19×12	7

S115 炉2断面 (S=1:30)



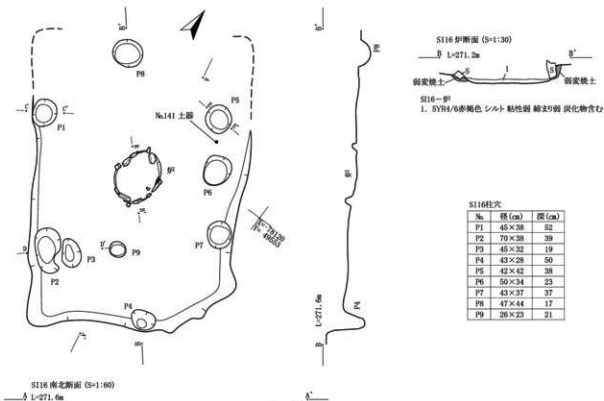
S115 炉2

- 10YR3/3暗褐色 シルト 粘性中 締まりや中間 炭化物多い
- 5YR/8赤褐色 シルト 粘性中 締まり中
- 5YR2/4暗赤褐色 シルト 粘性中 締まり中 弱い焼土層
- 5YR/6赤褐色 弱い焼土層を受け受

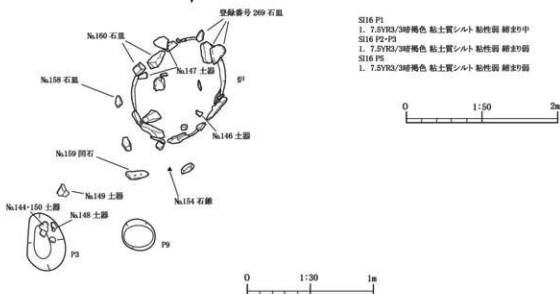


第22図 S115住居跡

SI16住居跡 (S=1:60)

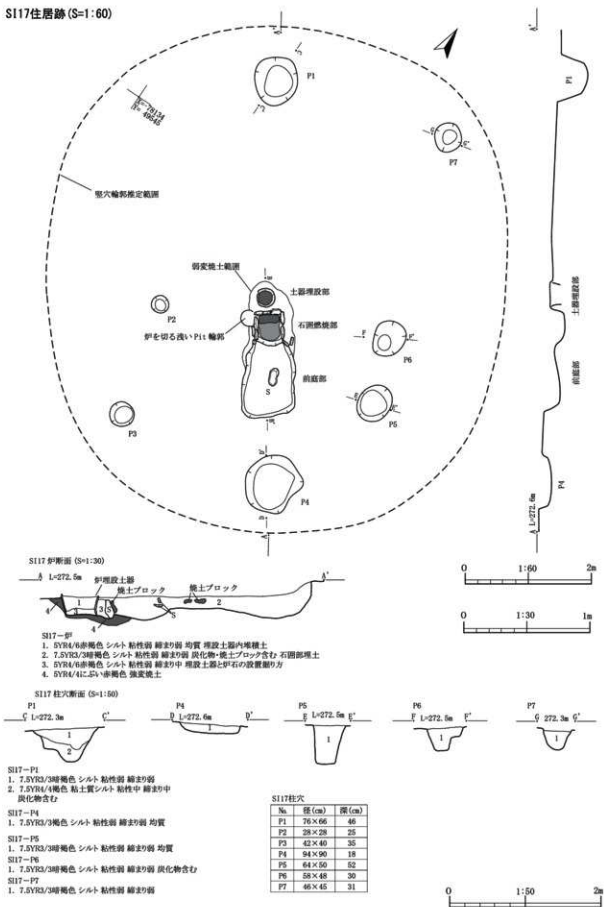


SI16住居跡伊周辺遺物出土状況 (S=1:30)



第23図 SI16住居跡

SI17住居跡 (S=1:60)



第24図 SI17住居跡

S118住居跡(S=1:60)



S118 東西断面 (S=1:60)



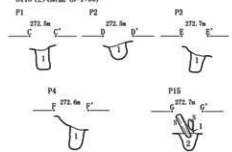
1. 10YR3/3暗褐色 シルト 粘性中 締まり中
2. 10YR3/4暗褐色 粘土質シルト 粘性中 締まりやや強

S118 伊断面 (S=1:30)



- S118 伊
1. 5YR4/6赤褐色 微成壤土
2. 10R4/8赤色 強成壤土

S118 柱次断面 (S=1:50)



S118 P1

1. 10YR4/6褐色 粘土質シルト 粘性中 締まり中 炭化物含む

S118 P2

1. 10YR4/6褐色 粘土質シルト 粘性中 締まり中 炭化物含む

S118 P3

1. 10YR4/6褐色 粘土質シルト 粘性中 締まり中 炭化物含む

S118 P4

1. 10YR5/8黄褐色 粘土 粘性中 締まり中

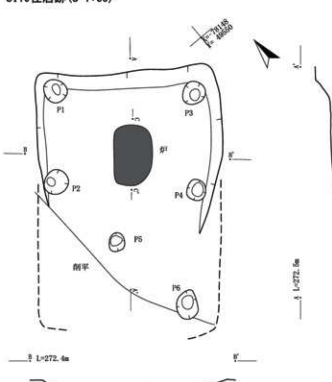
S118 P15

1. 10YR4/6褐色 シルト 粘性中 締まり中
2. 10YR4/4褐色 シルト 粘性中 締まり中 炭化物含む

S118柱穴

No.	径(cm)	深(cm)
P1	42×31	29
P2	30×25	21
P3	25×22	29
P4	27×22	31
P5	21×18	27
P6	22×20	13
P7	27×23	18
P8	20×19	5
P9	21×18	17
P10	18×17	19
P11	12×11	5
P12	14×12	10
P13	17×15	8
P14	48×45	42
P15	36×32	29

S119住居跡(S=1:60)



S119 伊断面 (S=1:30)

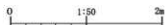
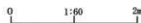
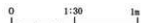


S119 伊

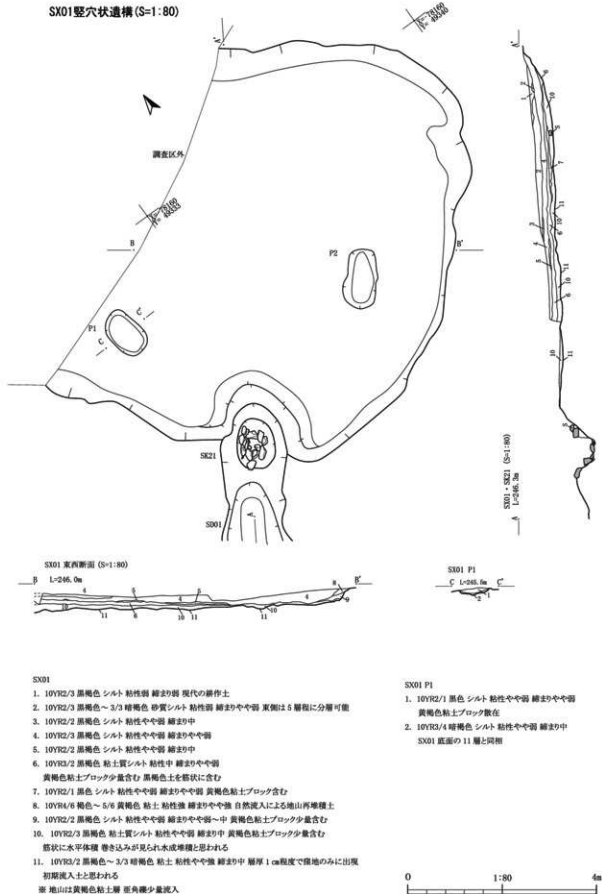
1. 5YR4/6赤褐色 微成壤土

S119柱穴

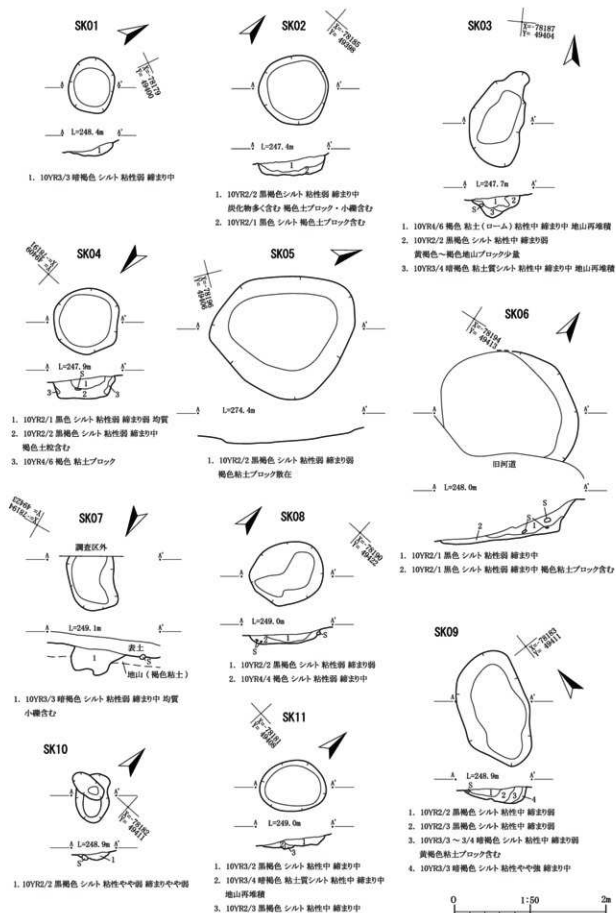
No.	径(cm)	深(cm)
P1	38×35	42
P2	40×38	39
P3	40×35	28
P4	34×30	34
P5	30×24	21
P6	46×34	47



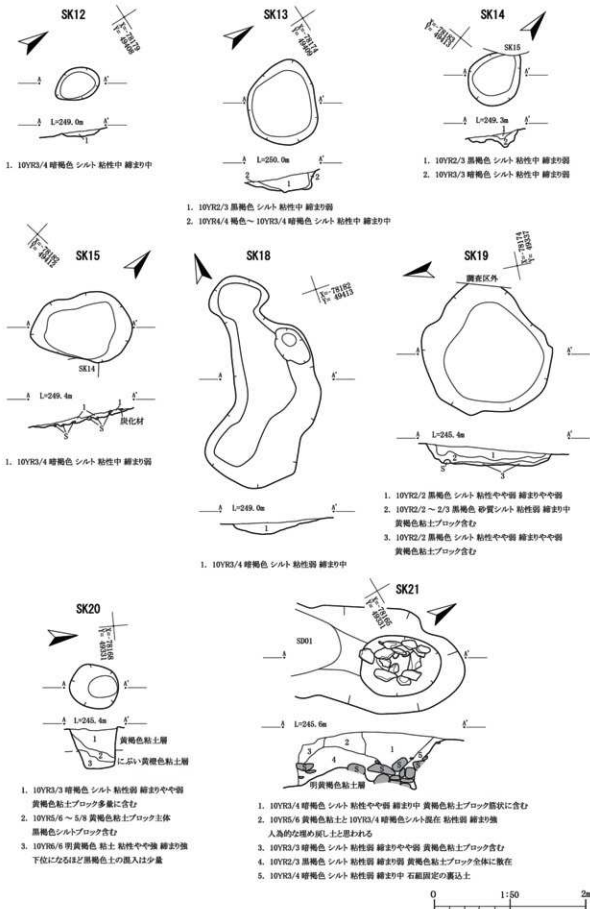
第25図 S118-S119住居跡



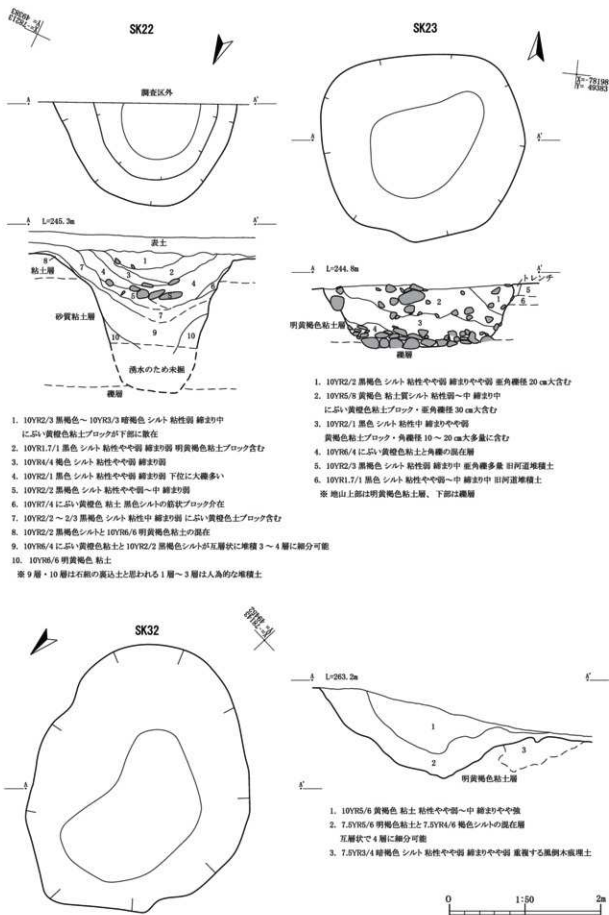
第26図 SX01竪穴状遺構



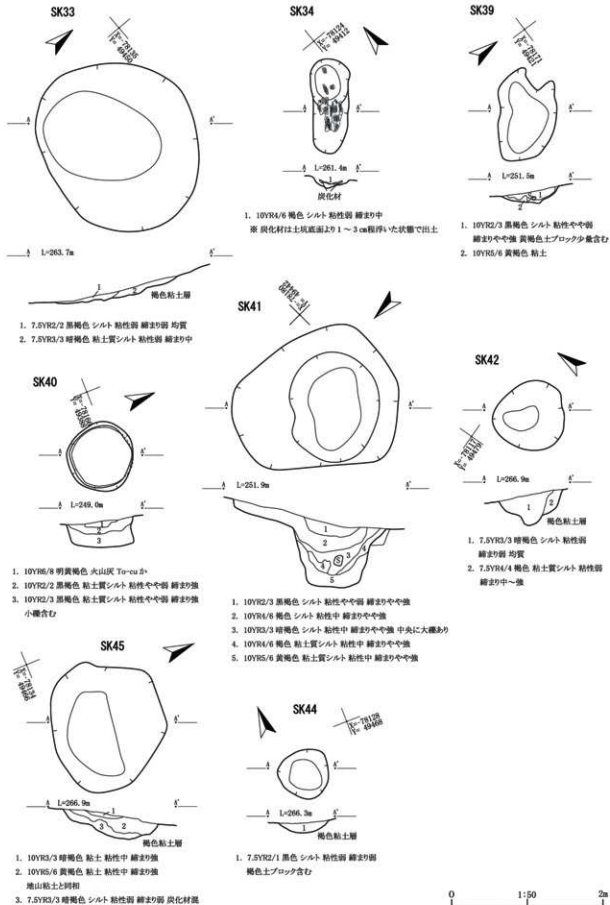
第27図 土坑 (1)



第28図 土坑②

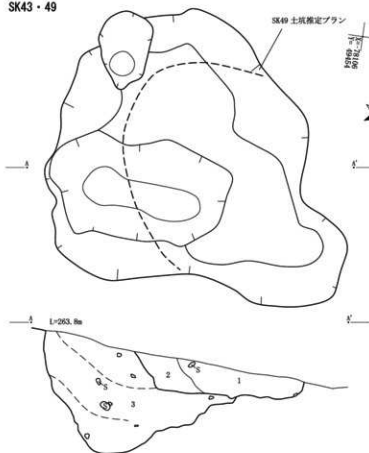


第29図 土坑 (3)



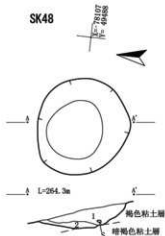
第30図 土坑 (4)

SK43・49



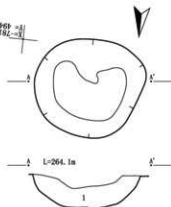
1. 10YR4/4 褐色シルト粘性弱 締まり中
 2. 10YR5/6 黄褐色粘土質シルト粘性弱 締まりやや強
 3. 10YR5/6 黄褐色粘土粘性中 締まりやや強 大小礫含む 人為堆積土か
- ※1・2層：SK49 土坑埋土
3層：SK43 土坑埋土

SK48



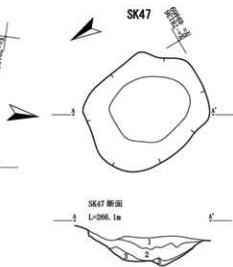
1. 10YR4/4 褐色シルト粘性弱 締まり弱 均質
 2. 7.5YR4/3 褐色シルト粘性弱 締まり弱
- ※ 底面硬化

SK50



1. 10YR4/4 暗褐色シルト粘性弱 締まり極めて弱 夾雑物無し

SK47

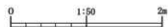


1. 10YR5/6 黄褐色粘土粘性中 締まり強 埋め戻された土層
2. 1層と3層の間に在る
3. 7.5YR3/3 暗褐色シルト粘性弱 締まり中

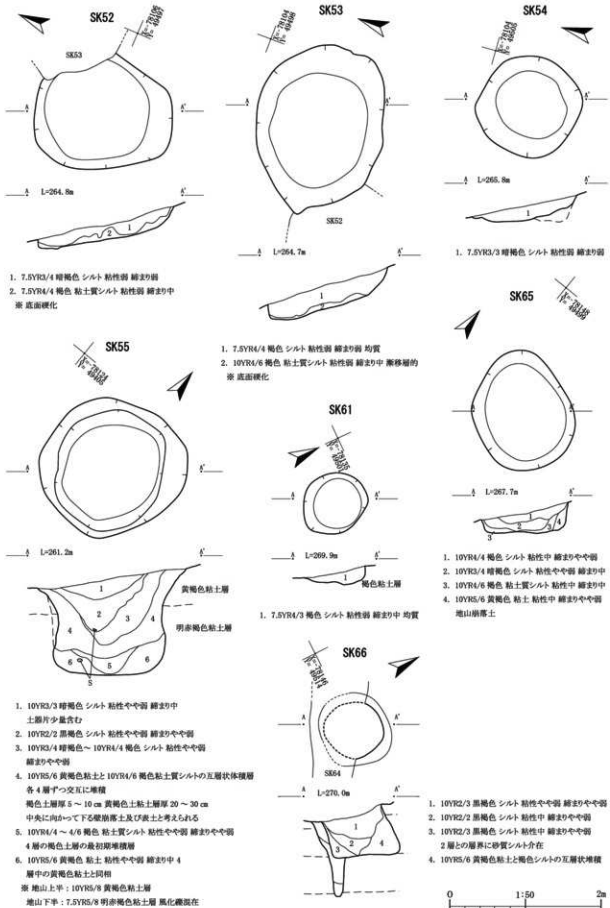
SK51



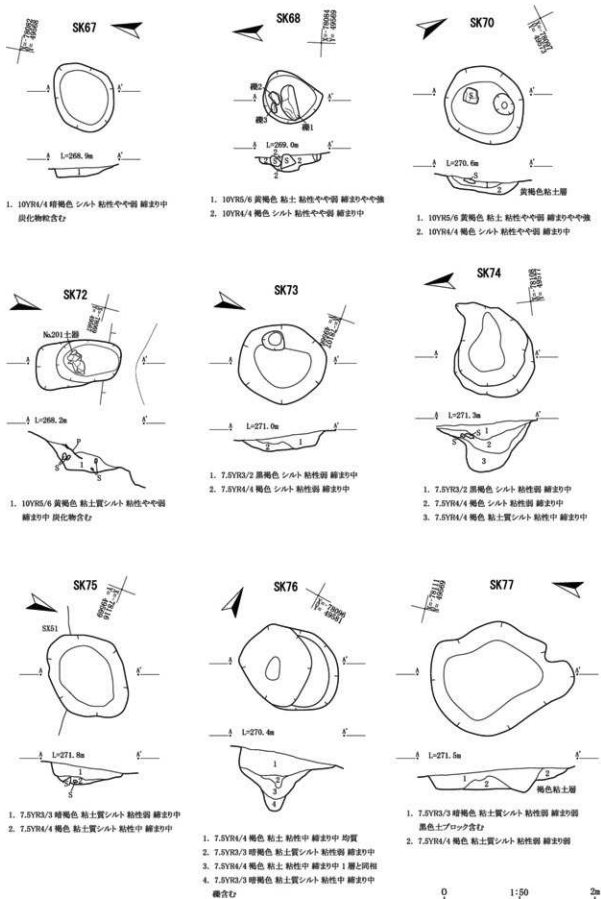
1. 10YR4/4 暗褐色シルト粘性弱 締まり中 均質
2. 7.5YR4/6 褐色粘土質シルト粘性弱 締まり中
3. 7.5YR3/3 暗褐色シルト粘性弱 締まり弱



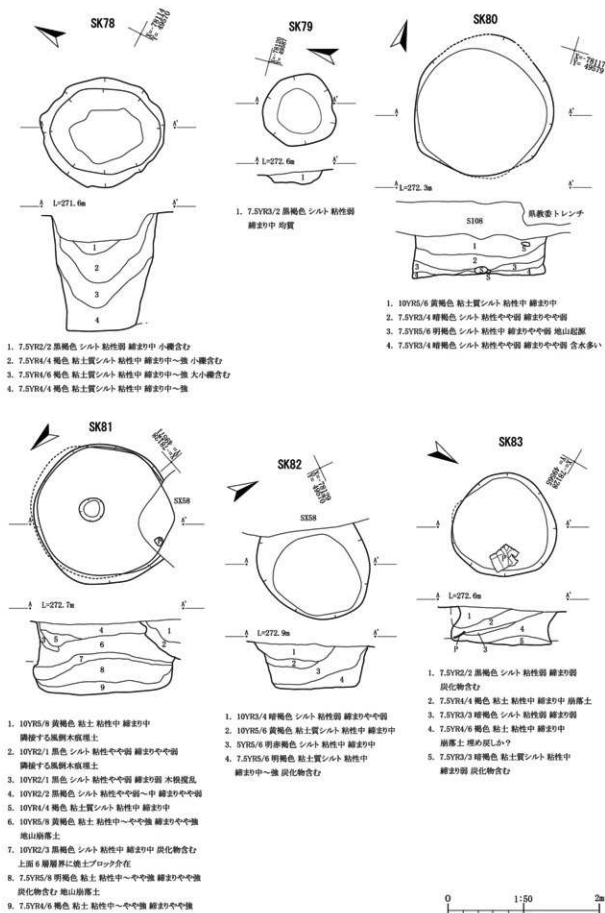
第31図 土坑(5)



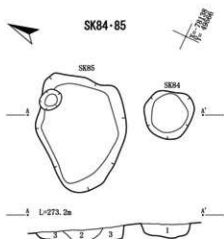
第32図 土坑(6)



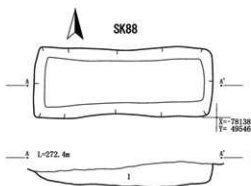
第33図 土坑 (7)



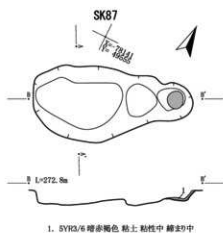
第34図 土坑 ⑧



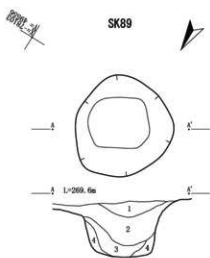
1. 7.5YR3/2 黒褐色 粘土質シルト 粘性弱 締まり弱 均質 SK84 埋土
2. 7.5YR3/3 暗褐色 粘土質シルト 粘性弱 締まり弱 SK85 埋土
3. 7.5YR4/6 褐色 粘土質シルト 粘性弱 締まり弱 SK85 埋土



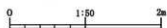
1. 7.5YR4/4 褐色 粘土質シルト 粘性弱 締まり弱 下半やや暗色



1. 5YR3/6 暗赤褐色 粘土 粘性中 締まり中

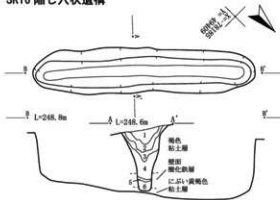


1. 7.5YR2/1 黒色 シルト 粘性弱 締まり弱 均質
2. 7.5YR2/3 暗褐色 シルト 粘性弱 締まり弱 均質
3. 7.5YR2/2 黒褐色 シルト 粘性弱 締まり弱
4. 7.5YR4/6 褐色 粘土質シルト 粘性弱 締まり中



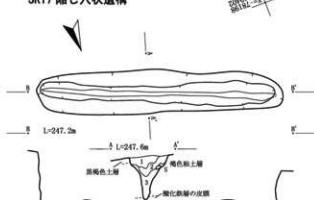
第35図 土坑 (9)

SK16 陥し穴状遺構



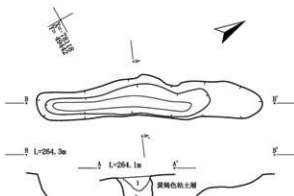
1. 7.5V92/1 褐色シルト粘性土 締り層 均質
2. 10V92/2 黒褐色シルト粘性土 締り層 締り層中 褐色土粒混入を含む
3. 10V94/4 褐色粘土質シルト粘性土 締り層中 締り層中
4. 10V94/4 褐色粘土質シルト粘性土 締り層中 締り層中 均質 締り層中
5. 10V93/3 暗褐色砂質シルト粘性土 締り層中 締り層中
6. 10V94/4 褐色粘土質シルト粘性土 締り層中 締り層中

SK17 陥し穴状遺構



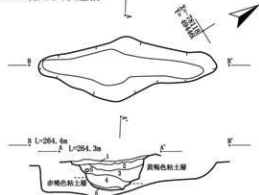
1. 10V92/1 褐色シルト粘性土 締り層 均質
 2. 10V93/3 暗褐色シルト粘性土 締り層中 褐色土粒混入を含む
 3. 10V94/4 褐色粘土質シルト粘性土 締り層 締り層中
- ※ 3層は地山褐色粘土と見た目区別困難だが締り層は認められる

SK24 陥し穴状遺構



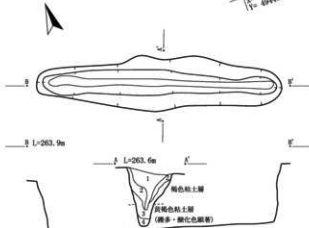
1. 7.5V94/4 褐色粘土質シルト粘性土 締り層 比較的均質 小礫を含む
2. 7.5V93/3 暗褐色粘土質シルト粘性土 締り層 小礫を含む

SK25 陥し穴状遺構



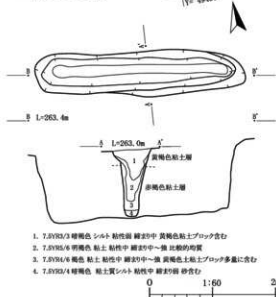
1. 10V93/4 暗褐色シルト粘性土 締り層 締り層中 基本土層に層状状
2. 7.5V94/4 褐色粘土質シルト粘性土 締り層 締り層中
3. 7.5V94/3 褐色粘土質シルト粘性土 締り層 締り層中
4. 7.5V95/4 明褐色粘土質シルト粘性土 締り層 締り層中 地山粘土と大別し
5. 7.5V95/4 に近い明褐色粘土質シルト粘性土 締り層 締り層中 締り層中 締り層中

SK26 陥し穴状遺構



1. 10V93/3 暗褐色シルト粘性土 締り層 締り層中
2. 7.5V94/4 褐色粘土質シルト粘性土 締り層中 締り層中
3. 10V94/4 褐色粘土質シルト粘性土 締り層中 締り層中 均質
4. 7.5V94/4 褐色粘土質シルト粘性土 締り層 締り層中

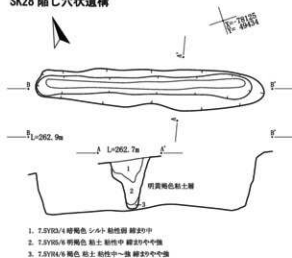
SK27 陥し穴状遺構



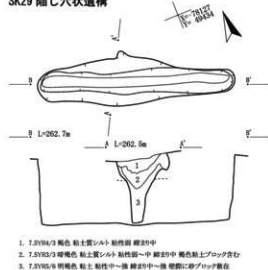
1. 7.5V93/3 暗褐色シルト粘性土 締り層 締り層中 黄褐色土ブロックを含む
2. 7.5V95/4 明褐色粘土質シルト粘性土 締り層中 締り層中 比較的均質
3. 7.5V94/4 褐色粘土質シルト粘性土 締り層中 締り層中 均質
4. 7.5V93/3 暗褐色シルト粘性土 締り層 締り層中

第36図 陥し穴状遺構 (1)

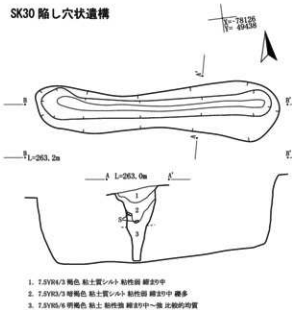
SK28 陥し穴状遺構



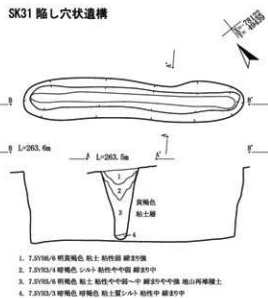
SK29 陥し穴状遺構



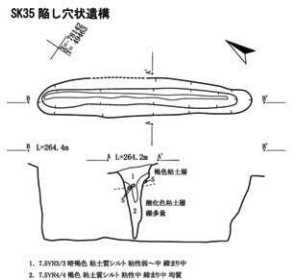
SK30 陥し穴状遺構



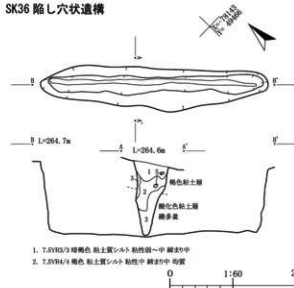
SK31 陥し穴状遺構



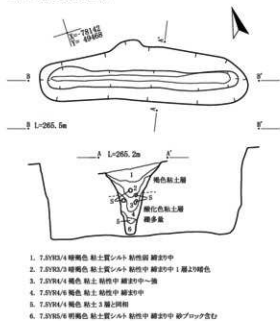
SK35 陥し穴状遺構



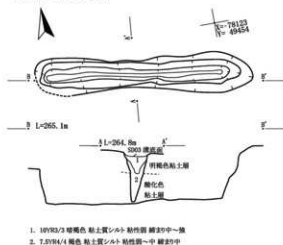
SK36 陥し穴状遺構



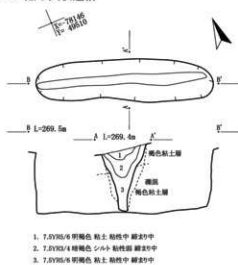
SK37 陥し穴状遺構



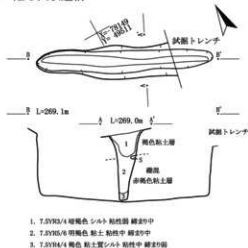
SK38 陥し穴状遺構



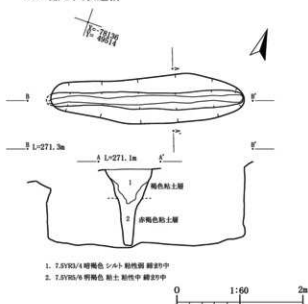
SK57 陥し穴状遺構



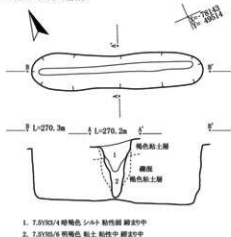
SK56 陥し穴状遺構



SK59 陥し穴状遺構

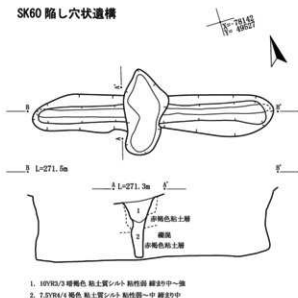


SK58 陥し穴状遺構

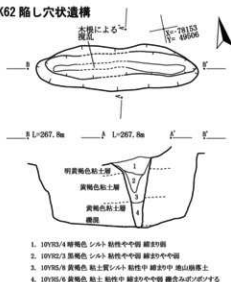


第38図 陥し穴状遺構 (3)

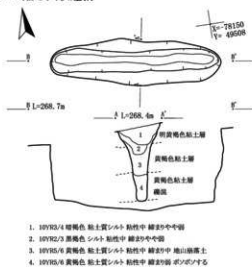
SK60 陥し穴状遺構



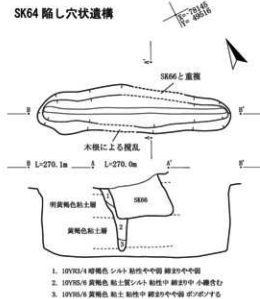
SK62 陥し穴状遺構



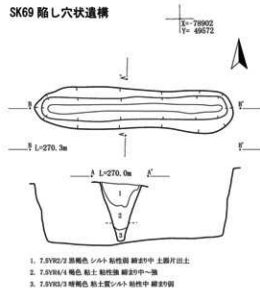
SK63 陥し穴状遺構



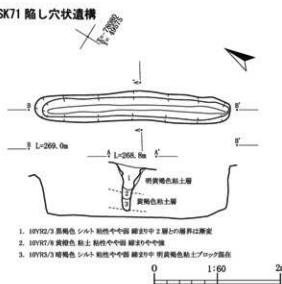
SK64 陥し穴状遺構



SK69 陥し穴状遺構

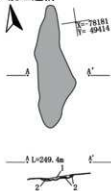


SK71 陥し穴状遺構



第39図 陥し穴状遺構 (4)

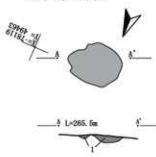
SF01 焼土遺構



SF01

1. 10YR1.7/1 黒色炭化物層
2. 2.5YR5/8 明赤褐色強変焼土

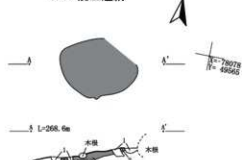
SF02 焼土遺構



SF02

1. 7.5YR5/8 明赤褐色弱変焼土

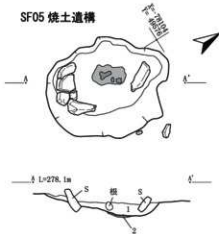
SF04 焼土遺構



SF04

1. 10YR4/6 褐色シルト粘性やや弱 締まり弱 根による擾乱
2. 2.5YR5/8 明赤褐色強変焼土

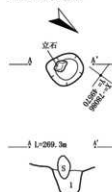
SF05 焼土遺構



SF05

1. 7.5YR2/2 黒褐色シルト粘性弱 締まり中
2. 5YR5/8 明赤褐色強変焼土

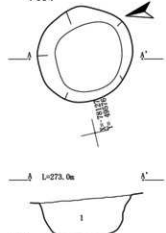
SQ01 配石遺構



SQ01

1. 7.5YR3/3 暗褐色シルト粘性弱 締まり中 均質

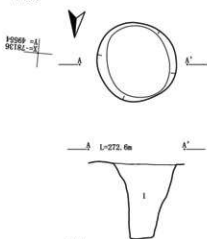
P034



P034

1. 10YR2/3 黒褐色シルト粘性中 締まり中

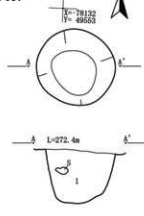
P036



P036

1. 7.5YR3/3 暗褐色粘土質シルト粘性中 締まり弱 均質

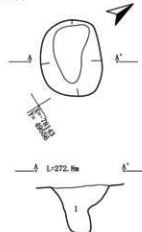
P037



P037

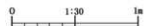
1. 7.5YR3/3 暗褐色シルト粘性弱 締まり弱 均質

P038



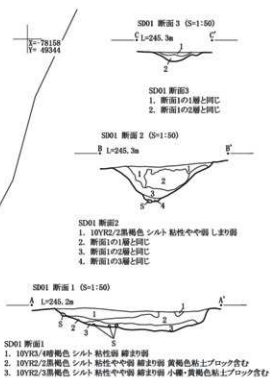
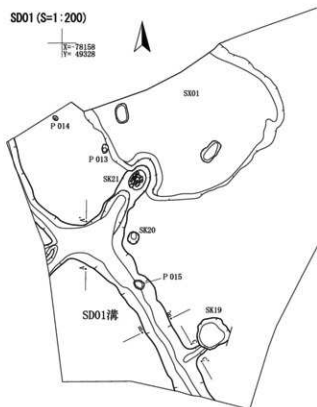
P038

1. 10YR4/4 褐色シルト粘性中 締まり中

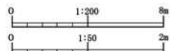
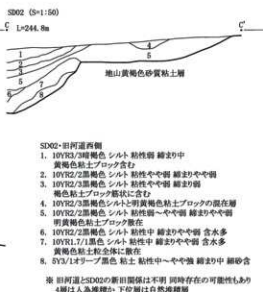
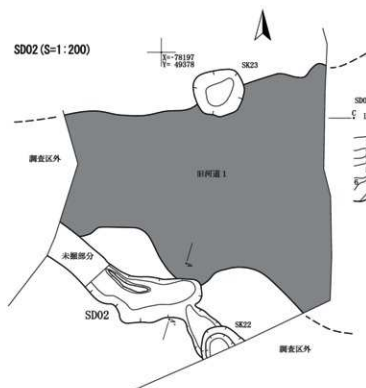


第40図 焼土遺構・配石遺構・柱状小土坑

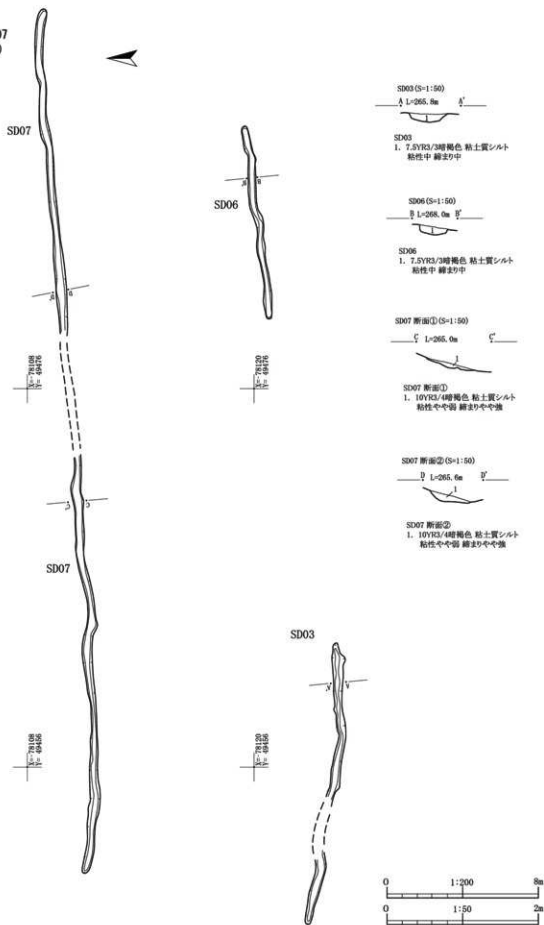
SD01 (S=1:200)



SD02 (S=1:200)

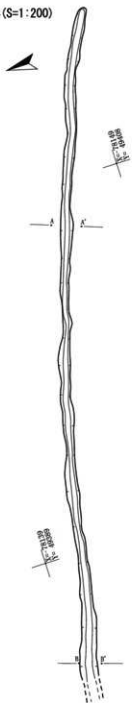


第41図 溝跡(1)

SD03-06-07
(S=1:200)

第42図 溝跡②

SD04 (S=1:200)



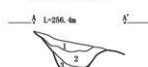
SD04 断面① (S=1:50)



SD04 断面①

1. 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや強 表土
2. 10YR3/3-3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まり中
3. 10YR4/4褐色~10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まり中

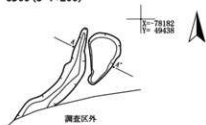
SD04 断面② (S=1:50)



SD04 断面②

1. 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まり中
2. 10YR3/6褐色シルト 粘性弱 締まりやや強 小礫含む
3. 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まり中 黄褐色粘土ブロック混在

SD05 (S=1:200)

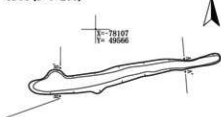


SD05 (S=1:50)

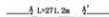


1. 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや強 角礫あり
2. 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや強 1層と同相

SD08 (S=1:200)



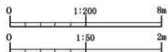
SD08 断面① (S=1:50)



SD08 断面② (S=1:50)

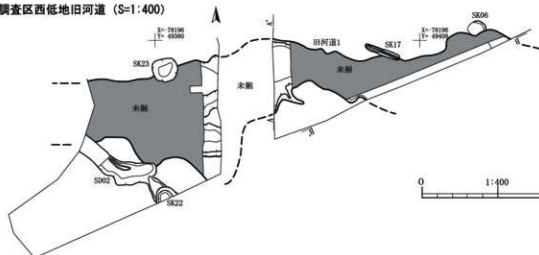


1. 7.5YR3/3暗褐色シルト 粘性弱 締まり弱

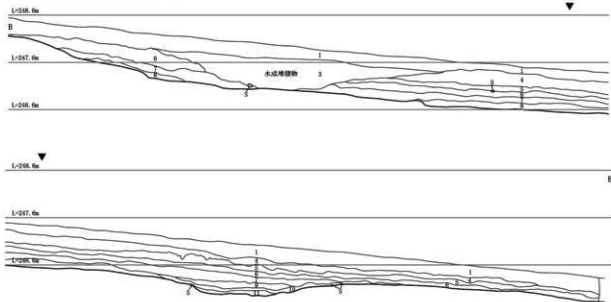


第43図 溝跡 (3)

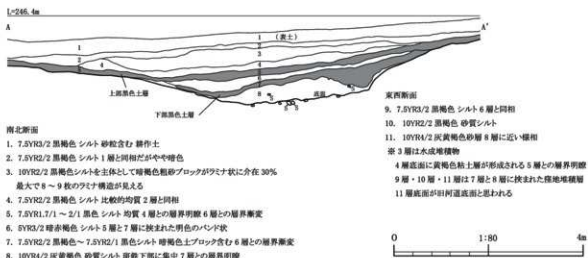
調査区西低地旧河道 (S=1:400)



旧河道1南東断面(調査区境界線面)(S=1:80)



旧河道1南北断面(S=1:80)



南北断面

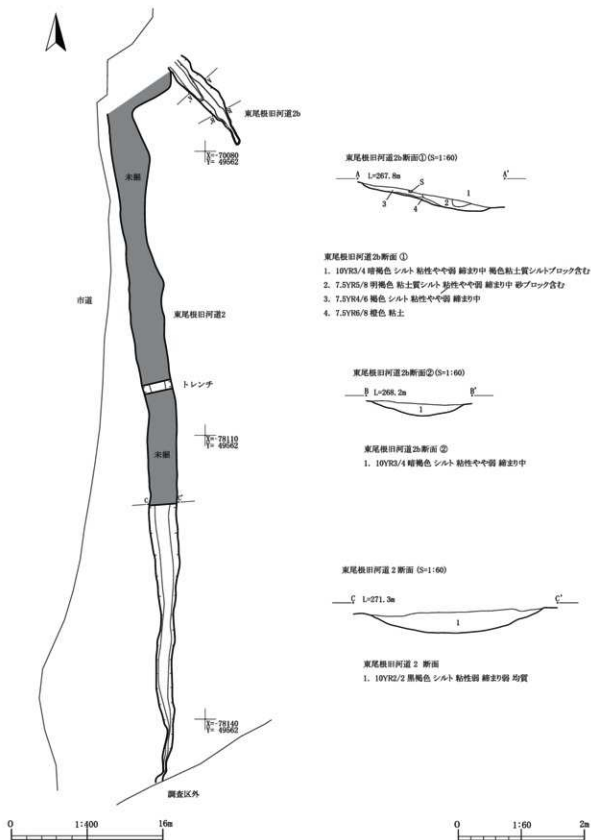
1. 7.5YR3/2 黒褐色シルト 砂粒含む 耕作土
2. 7.5YR2/2 黒褐色シルト 1層と同相だがやや暗色
3. 10YR2/2 黒褐色シルトを主体として暗褐色粗砂ブロックがツミナ状に介在 30%
最大で8~9枚のツミナ構造が見える
4. 7.5YR2/2 黒褐色シルト 比較的均質 2層と同相
5. 7.5YR1.7/1 ~ 2/1 黒色シルト 均質 4層との層界明瞭 6層との層界漸変
6. 5YR3/2 暗赤褐色シルト 5層と7層に挟まれた明色のバンド状
7. 7.5YR2/2 黒褐色 ~ 7.5YR2/1 黒色シルト 暗褐色土ブロック含む 6層との層界漸変
8. 10YR4/2 灰黄褐色 砂質シルト 底面下部に集中 7層との層界明瞭

東西断面

9. 7.5YR3/2 黒褐色シルト 6層と同相
 10. 10YR2/2 黒褐色 砂質シルト
 11. 10YR4/2 灰黄褐色砂層 8層に近い層相
- ※ 3層は水成堆積物
4層底面に黄褐色粘土層が形成される5層との層界明瞭
9層・10層・11層は7層と8層に挟まれた窪地堆積層
11層底面が旧河道底面と思われる

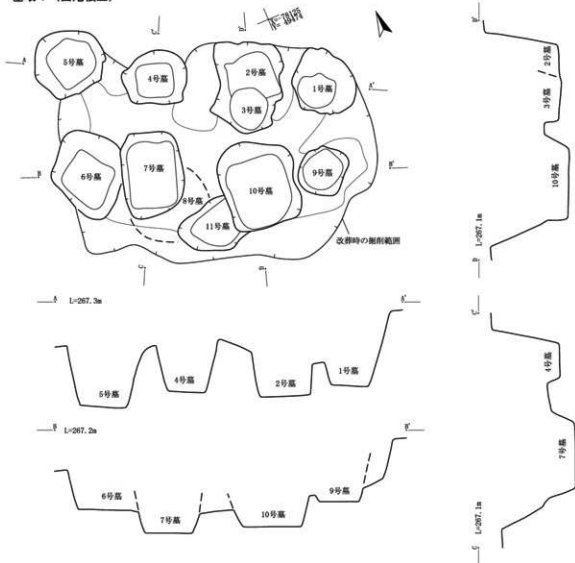
第44図 旧河道(1)

東尾根旧河道 (S=1:400)

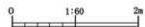
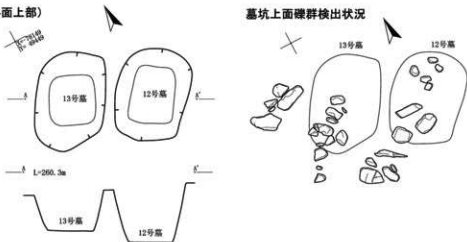


第45図 旧河道②

墓域 1 (西尾根上)



墓域 2 (西斜面上部)



3 遺物

土器の総量は重量で107.154kg、40Lコンテナで10箱である。破片数は集計していない。このうち、203点を掲載遺物として選抜した。石器は283点、重量の合計は192.361kgである。92点を掲載遺物として選抜した。土製品は斧形土製品と円盤状土製品の合計4点、金属製品は釘、銭貨、鉄滓の3点を登録、掲載。陶磁器は近世末期～近代の製品24点を登録、掲載した。この他、近世墓の精査で出土した副葬品や棺箱部材破片、釘等については第Ⅲ章で記載したように、実測、写真撮影等の記録をとった後に出土人骨と共に改葬墓地に埋葬供養した。

本節では遺構内出土遺物、遺構外出土遺物に分けて述べる。個々の特徴等については第6～10表遺物観察表に記載した。

(1) 遺構内出土遺物 (第47～71図 写真図版64～77)

1 住居跡出土遺物

<SI02住居跡> №1・2は工字文が施文される大洞A～A'式の浅鉢口縁部片。№3は深鉢底部片、№4は小形の鉢類の底部破片で底縁に沈線が巡る。

<SI03住居跡> №5 a bは同一個体と思われる深鉢胴部破片で器面の荒れが著しい。単節縄文縦位回転施文。№6は単軸絡条体施文。両者とも縄文中期末頃と判断される。石器は№7・8の石鏃、№9の凹石、№10の台石がある。№10は周縁に剥離痕を持ち片面中央部が摩滅する。

<SI04住居跡> 本住居跡では大木10式前半段階に比定される深鉢がまとまって出土している。№11は炉の埋設土器に使用されていた深鉢上半部で、LRL縄文が充填された沈線区画の横位S字状文様が2単位施される。№12も同様な文様構成の深鉢大破片。№13は口縁部に段差を持ち、胴部文様は無文部が一段高くなるように縄文施文部が彫去される。№14は小形の4単位波状緑深鉢で3単位の曲線文様が横位に連続する。うち1単位では文様割付が上手くいかなかったのか未端の渦巻きが片方のみとなる。小片では№16は縦位楕円形の隆線に縄文施文部が沿う図形で、大木9式に比定される。縦に伸びる沈線末端が小渦巻文となる№18、底部付近で2条平行する縦位隆線が見られる№21も同様である。№19・20は平縁で縄文のみが施された深鉢上半。粘土帯の接合痕は外傾する。

剥片石器は№24の縦型石匙、№25の平基無茎石鏃、№26の石錐があるがいずれも堆積土中の出土。礫石器は№27～30の凹石、№31～33の石皿・台石類等がある。№29の凹石は亜角礫の片面中央に凹部があり、凹部周囲と反対面には顕著な擦痕、線状痕が集中する。№31の砂岩製有縁石皿片は下面にD字形の脚部を作り出している。また全面に整形痕と見られる浅い溝状の凹みがある。№32は周縁に剥離痕を持ち片面が摩滅して平坦になる。№33は扁平な蛇紋岩の片面に擦痕が散在する。

<SI05住居跡> 炉埋設土器に使用されていた№34は4単位の波状口縁深鉢で、底部から口縁部に向かい直線的に開く器形である。施文は沈線区画内の縄文充填手法だが、J字文様の下部が横に連結される構成、細く浅い沈線等の特徴は大木10式でも後半段階の様相を備えている。小片の№36では口縁直下に刺突列点が施され、№34と同様に大木10式では新期の特徴である。№39は楕円形の磨石で柱穴P4の上面から出土した。平坦面の摩滅が顕著に見られる。

<SI06住居跡> №40は頸部に巡る2条の隆帯を結んだ橋状把手を持つ広口の変形土器。口縁部は短く外反する。胴部上半にはJ字状文様の下部が連結した図形が横位に4単位展開する。№41は緩い4単位の波状口縁を持つ深鉢で胴上半の窄まりは弱い。口縁部から無文部が垂下した2段のC字状文様が4単位施文される。№43は口縁部に円形刺突文が2条巡り胴部には横位の縄文充填S字状文が横位

に組み合わせる。No48は沈線で縁取られた縦位隆線を持つもので他の個体より古い大木9式の特徴と見られる。

剥片石器ではNo49～51の石鏃、No52の尖頭器、No53・54の石錐が出土している。No52は側面形が湾曲する剥片の一端に両面剥離で尖頭部が作り出される。No55は両面に浅い凹部を持つ凹石。No56は堅穴壁面の外周から出土した。扁平な頁岩の周縁に剥離痕、平坦面に敲打痕が顕著である。No57では敲打痕や摩擦痕は観察できないが平坦面の中央部に黒褐色の付着物が見られる。

<SI07住居跡> No58の摩擦した土器片は辛うじて縄文が施文されているのが確認できる。器面の状態から縄文時代中期後半と考えられる。

<SI08住居跡> No59の深鉢上半は推定4単位の低い波状口縁を持ち、器面を彫去した縄文充填文様と円形、U字状の小単位を組み合わせた施文となる。胴部文様は推定6単位で展開する。下半の文様構成は不明。No60・61は細い沈線区画にLR縄文が充填される。施文の特徴から同一個体の可能性が高い。No63は頸部に2条巡る沈線内に竹管状工具による刺突列点文が加えられる。No67の底面に観察される網代痕は中央付近でナデ消される。No68は深鉢胴部破片を利用した円盤状土製品。No69の四基無茎石鏃は両面中央部にアスファルトが付着。No70の縦位石匙も背面側の括れ部周囲と両側縁に沿った位置にアスファルト付着が見られる。No73は岩手山起源の安山岩質溶岩を石材とした断面三角形の凹石で3面に溝状の凹部が見られる。No75は角柱状礫の3面に凹部、平坦面全面に擦痕が発達する。No76は床面から出土した3片が接合した。中央付近に黒褐色の付着物が見られる。

<SI09住居跡> No77は頸部に段差を持ち沈線で縁取られた幅広隆帯の文様が施文される。No78・80はいずれも2本平行する沈線が縦位に伸びる大木9式の特徴を備える。一方、炉埋土から出土したNo79は曲線的な充填縄文文様で大木10式前半段階と捉えられる。No81は小形土器の下半部。No84は平基無茎石鏃に類するが両側縁形状が非対称となる。No86は大きめの剥片縁辺に急角度の連続剥離を施しスクレイパーエッジを作り出している。No87・88は楕円形の礫を利用した凹石。No89は扁平な台石破損品の中央両面に凹部が見られ転用品と判断される。No90は片面に摩擦が観察される台石である。

<SI10住居跡> No91～93は3単位の波状縁となるやや小形の略完形深鉢。3点とも器高は13～15cmの範囲に取りまり、縦位のRLR縄文充填楕円形文様を基調とする文様構成が共通する。No94は小形土器の下半部。No95は胴部上半が大きく膨らむ壺形土器で頸部には上面に渦巻文を伴う突起を持つ隆帯が巡る。口縁部は無文で加飾されない。この土器の下半部破片と思われるものがNo95bで底部直上まで施文される。No98は両面浅い凹部がある。No99は扁平な板状の礫で平坦面は摩擦し片面中央部に黒褐色付着物が小さい範囲に観察される。

<SI11住居跡> 炉埋設土器に使用されていたNo100はやや小形の深鉢で口縁から上半を欠く。文様は刺突を沿わせた沈線文が上半に展開し、胴部下半の縄文部分との境界となる沈線は波頭状に巡る。炉体として使用されたことに伴う内面の焼け弾けが顕著に見られる。No101はやや大きめの深鉢胴部片で無文部は隆線が縁取る。

<SI12住居跡> 炉Pit底面から出土したNo102は頸部隆線に刺突列に沿う口縁部小片である。その他も一部に磨消文様を含む小片が大部分で、No109は器壁が薄く小形の深鉢胴部片と思われる。No111は断面が扁平な楕円形を呈し両面にLR縄文が施文された斧形土製品の一部。両端が欠損している。No112は剥片末端縁辺に急角度の連続剥離を施しスクレイパーエッジを作り出した不定形石器。No113は両面に対向する深い凹部を持つ。No114は扁平な頁岩で片方の平坦面に擦痕、線状痕、敲打痕が見られる。また周縁の大部分に剥離痕を持つ。

<SI13住居跡> 土器片で図示できるのはNo115・116の2点のみである。隆線、沈線により施文され

る。No117はP2内部から出土した不定形石器で側縁一部に両面加工が施される。

<SI14住居跡> 炉埋土から土器片が2点出土している。No118は逆U字形の沈線で区画された内部に刺突文を充填した口縁部片。No119は小径のミニチュア土器口縁部破片と思われるが頸部以下を欠くため確実ではない。No120は列状に凹部が連なる凹石。No121は床面出土の石皿で片面に敲打痕と擦痕が散在する。

<SI15住居跡> 床面中央部からやや大型の太木9式深鉢上半部No122がその場で潰れた状態で出土している。並列する縦位の楕円形沈線区画内にRLR縄文が充填される。炉埋設土器に使用されていたNo123は同一の文様構成を取るとされる別個体の深鉢下半部である。二次被熱により器面の荒れが著しい。その他太木9式段階に該当する個体はNo126・127・129・130・131が埋土中、P5埋土等から出土している。No133は台付深鉢の台部破片で、端部に向かって肥厚し半円形の沈線区画文様が施文される。同一個体の可能性が高いNo270が北東に約6m程離れたP036埋土内より出土している。No134も台部破片で、底部に近い位置に推定円形の透かしが連続する。No135は縦位に平行する隆帯の一部を繋ぐ橋状突起が見られる壺形土器の破片である。

石器では床面付近からNo136の石鏃が出土した。片翼を欠く無茎石鏃である。No137は片面に擦痕が発達した石皿の破損品を転用したと考えられる凹石。No138は片面に敲打痕が散在する石皿台石類である。No139は長さ20cmを超す断面三角形の棒状礫を素材とした凹石で3面に凹部が列状に連なる。炉1の前庭部に置かれていた状態のNo140は長さ59cm、重量21kgに達する扁平礫。片面の大きく抉れた面の中央部は摩滅し黒褐色の付着物が見られる。ただしこの抉れが使用または加工によるものとは断定できず、またこの抉れた面は床面に接する状態で出土している。

<SI16住居跡> No141～144はいずれも隆線による渦巻文が施文される太木9式土器。No148は縦位楕円形沈線区画が並列する。No152は円形の透かしが開けられた台部破片で端部へ向かいハの字状に開く。透かしは推定4単位である。No153は折り返し口縁を持つ小型の鉢形土器。器壁は非常に薄い。No159の石鏃は棒状の錐部先端が欠損している。また基部側に両面加工により石匙と同じような握み部が作り出される。No156は楕円形の礫両端に敲打面を持つ小型の敲石。No157・158は安山岩質溶岩を素材とした磨石、石皿である。No160は扁平礫の平坦面が摩滅した石皿で破損後に炉石として設置されていた。

<SI17住居跡> 炉埋設土器に設置されたNo161は無文の深鉢上半部で二次被熱により器面の荒れが著しい。柱穴P5から出土したNo164は円形の刺突が加えられた連鎖状隆線が山形を描く小片で太木10式段階と思われるが確証を得ない。柱穴P7から出土したNo168は燃糸文が施された深鉢底部付近の大破片である。No169は柱穴P5出土の磨石で平坦面と側縁には敲打痕が見られる。No171は炉石に転用された安山岩質溶岩を素材とした石皿で側縁が立ち上がる有縁に整形される。No172も同じく炉石として設置された3片が接合したもので扁平な長方形の礫の片面に敲打痕がある。

<SI18住居跡> 土器は埋土中出土の小片が主体である。No172は口縁部の山形突起部分に楕円形の刺突文が充填される。No174は推定縦位楕円形の沈線区画で太木9式に比定される。No175・176は曲線的なモチーフが用いられる太木10式段階の胴部破片である。No178は基部両翼端がやや開き気味となる無茎石鏃。No179は長三角形の扁平礫を素材とした凹石で両平坦面と側面の一部に線状痕が見られる。No180は側縁に敲打剝離痕を持つ台石で両面中央部の摩滅が著しい。No181はP15上面に直立して出土した角柱状の礫で、図の上端側には整形痕とみられる階段状の剝離痕が集中する。平坦面の一部は摩滅し擦痕、線状痕が観察される。

<SI19住居跡> 土器は中央部の埋土上層から出土したものが大半でNo182・183・187・188の太木9

式段階が主体となる。Na186は胴部下半に最大径を持つ長胴形の壺破片で平行する縦位隆線を結ぶ橋状突起が加えられる。Na189は扁平な碟の両面中央部に複数の凹部が見られる、所謂「蜂の巣石」に類するものと思われる。断面形碗形の凹部内部は摩滅する。

2 堅穴状遺構出土遺物

<SK01堅穴状遺構> 縄文土器小片数点が出土している。Na190は縦位平行沈線が施される縄文中期後葉の土器片。Na191は異方向羽状縄文の胴部破片で縄文後期後半と考えられる。

3 土坑出土遺物

<SK02土坑> Na192は深鉢底部付近の無文部の小片。Na193は側縁に両面加工が施された不定形石器。Na194は棒状碟の両面に凹部を持つ凹石である。

<SK04土坑> 底面から出土したNa195は附加条縄文が縦走する地文に横位の細い沈線が施文される土器片で弥生時代後期に比定される。

<SK09土坑> Na196はNa195と同様の附加条原体が回転施文された弥生時代後期に比定される土器片である。

<SK51土坑> Na197は深鉢底部付近の無文部の土器片。

<SK55土坑> Na198は細い沈線が不規則な図形を描く。縄文後期前半と思われるが確証はない。

<SK70土坑> Na199は弧状の沈線文様が施文された大木10式段階の土器。Na200は扁平な板状の碟で平坦面の片が摩滅し痕が顕著である。

<SK72土坑> Na201はJ字状もしくはS字状の文様が展開する大木10式段階の大型深鉢胴部破片で、胴下部を区画する沈線が波頭状に巻き込む。

<SK74土坑> Na202は縦位沈線が施される大木9式段階の土器片。

<SK77土坑> Na203は地文のみの深鉢胴部小片で縄文中期後葉と考えられる。

<SK79土坑> Na204は地文のみの深鉢胴部小片で縄文中期後葉と考えられる。

<SK80土坑> Na205は波状口縁の頂部下に楕円形の文様が施文される大木9式段階の口縁部破片。Na207は頸部の沈線内に円形刺突文が加えられた大木10式段階の胴部片である。

<SK81土坑> 埋土中に集中して縄文土器大破片が出土している。Na208は波状口縁下に刺突文を加えた沈線が4条廻り胴部にはS字状に入り組む磨消縄文が施文される。Na210は口縁下にくの字状に隆帯が張り出し、基部に貫通孔が開けられる。小片のため不明瞭ではあるが貫通孔は一定間隔で全周にわたっていると見られる。Na213は球形の胴部を持つ小型深鉢下半で曲線的な磨消縄文文様が展開する。内面の調整は丁寧なミガキが施される。Na214は底面に網代痕が残る深鉢下半。Na215は全面にLR縄文縦位回転施文の深鉢上半で外面に炭化物の付着と二次被熱による器面の劣化が見られる。

<SK82土坑> 出土土器は大木8b式～9式段階のものが主体となる。Na220は沈線区画の無文部が平行して垂下する大木9式深鉢の下半部。Na222は隆沈線による曲線的な胴部文様を持ち大木8b式段階に相当する。Na223は隆線に沿って赤彩の痕跡が残る。

<SK83土坑> Na225は全面にRL縄文が縦位回転施文され推定では器高が50cmを超す大型の深鉢だが、上半と下半の破片に接点が見られず図上復元ができなかったものである。Na226は横位楕円形の沈線文を持つ球形の小片。Na227の凹石は両面中央に深い凹部を持つ。Na228は凹碟を素材とした磨石で両面平坦面の摩滅が著しい。

<SK85土坑> Na229はRLR縄文充填文様を持つ大木9式段階の土器片である。

4 陥し穴状遺構出土遺物

- <SK24陥し穴状遺構> No.230は器面の荒れが著しい小片。
- <SK26陥し穴状遺構> No.231は大洞A式に比定される鉢形口縁部片で、対向する矢羽根状沈線が施文される。口唇部上面には斜位の刻みが連続する。No.232はLR縄文縦位回転の深鉢胴部片。
- <SK30陥し穴状遺構> No.233はRLR縄文縦位回転の深鉢胴部片。No.234は深鉢底部片である。
- <SK31陥し穴状遺構> No.235はLR縄文縦位回転の深鉢胴部片。
- <SK57陥し穴状遺構> No.236は胎土に繊維を含み羽状縄文が施こされる縄文前期の小片である。
- <SK60陥し穴状遺構> No.237は隆沈線文様を持つ大木8b式段階の胴部片。
- <SK69陥し穴状遺構> No.238はLR縄文縦位回転の深鉢口縁部片で補修孔が開けられる。No.239は沈線区画文様が施文される大木10式段階の胴部片。No.240は直角に立ち上がる底部片である。
- <SK71陥し穴状遺構> No.241はLR縄文縦位回転の深鉢胴部片である。

5 近世墓出土遺物

- <1号墓> 図示資料はないが、副葬品として銅銭新寛永1枚、鉄銭6枚（いずれも写真掲載）、釘17本がある。
- <2号墓> 副葬品として図示した以外に新寛永1枚（写真掲載）、他に釘15本がある。No.242の煙管吸口は全長が4.5cmと短く中央に稜線がある。No.243の板状鉄製品は側縁の片方が折れ曲がり目釘跡を残す。ほぼ同一の製品が墓域埋め戻し土中にもあり（No.257）複数で組み合わせられ何らかの部材を構成するものと思われる。
- <4号墓> 副葬品として図示した以外に古寛永2枚、新寛永1枚、鉄銭2枚（いずれも写真掲載）、他に釘26本前後がある。No.244は煙管雁首と吸口で羅字の一部が残る。雁首は脂返し湾曲が緩く火皿は比較的大きめである。No.245は銅製管で基部が耳掻き状に丸い。No.246は内外面灰釉のかかる陶器小碗で、灰白色の胎土、釉の色調等から大堀相馬産18世紀代の製品と判断される。No.247は依形を呈する木製の数珠の一部で3個が残存する。
- <5号墓> 副葬品として図示した以外に古寛永2枚、新寛永3枚、鉄銭6枚（いずれも写真掲載）、他に釘11本がある。No.248は煙管雁首と吸口で羅字の一部が残る。雁首の形状は4号墓出土No.244に類似し中程が膨らむ。No.249は鉄製鉄。
- <7号墓> 図示資料はないが、副葬品として煙管雁首1点、刀子状の鉄製品破片1点、鉄銭2枚、他に棺箱部材と思われる板片が出土している（いずれも写真掲載）。
- <9号墓> 副葬品として図示した以外に鉄銭約30枚、他に釘5本がある（いずれも写真掲載）。No.250は煙管吸口で羅字の一部が残る。比較的細身で全長が長く、No.242と同様に中程に稜線がある。
- <10号墓> 副葬品として図示した以外に古寛永1枚、新寛永1枚、鉄銭8枚（いずれも写真掲載）、他に釘30本前後がある。No.251の煙管雁首は火皿が小さく脂返しはきつく折れ曲がる。No.252は刀子破片で柄の木質の一部が残存する。
- <11号墓> 図示資料はないが鉄釘3本が出土している。
- <12号墓> 副葬品として図示した以外に古寛永1枚、新寛永6枚、私鑄銭1枚（銭銘不明）、鉄銭3枚がある（いずれも写真掲載）。No.253は煙管雁首と吸口で羅字の一部が残る。雁首の火皿は比較的大きめである。No.254は刀子破片。
- <墓域一括> No.255～258は改葬に伴い重機で埋め戻された掘削土中から出土しており、本来的には埋葬時に納められた副葬品を含むと考えられるがどの墓坑に伴うのかは不明である。No.255の煙管雁

首は10号墓出土No251と同様に火皿が小さく全長は短い。No256は刀子片。No257は2号墓出土No243と同一の形状であり組み合わせになっていた可能性が高い。No258は三日月形に摩耗した刃を持つ鎌で、副葬品として墓坑に埋納されたものかもしくは葬送習俗で墓上に設置された可能性もあるが出土状況からは判断がつかない。

6 その他の遺構内出土遺物

<SD01溝跡> No259は複節RLR縄文の縄文中期後葉土器片。

<SD02溝跡> No260は隆線の一部が見られ大木10式に比定される小片。

<SD04溝跡> No261は剥片末端に片面からの急角度二次加工が施された不定形石器。

<SD08溝跡> No262は口縁部に多段の円形刺突文が配列される縄文中期末の土器片。No264は周縁が研磨された円盤状土製品である。No265は板状の角礫片面中央に凹部が形成される凹石で、石皿破損品の転用と思われる。

<P019> No266は口縁部に調整された隆帯が巡る大木9式段階の小片。

<P029> No267は風化した閃緑岩の扁平礫を利用した有緑石皿と思われるが、風化が進んでおり整形痕、使用痕は明確でない。

<P031> No268は棒状礫の3面に深い凹部が観察される。

<P032> No269は1側縁に急角度の二次加工が施された不定形石器。

<P036> No270は楕円形の透かしを持つ台付深鉢の台部破片で、SI15住居跡出土のNo133と同一個体の可能性が高い。

(2) 遺構外出土遺物 (第72～74図 写真図版77～83)

1 縄文土器

No271～273は縄文前期初葉の繊維土器片。調査区南西部斜面裾からの出土である。No272は組縄縄文が施される。No274は刻みが連続する隆線を持つ小片で前期の可能性が高い。No275は口縁部に半截竹管による連続刺突文、頸部に刻みを持つ隆帯が巡り縦に垂下する隆線が加えられる。胴部はいわゆるS字状連鎖沈文が間隔を開けて施される。前期中葉、大木2b式段階に比定される。

No276は口縁部に縦位隆線を持ち平行沈線間に短沈線が施される。大木7a式段階か。No277は調査区北西部の平坦面から出土した。口縁部に貫通孔を伴う装飾的な突起を持ち、細い粘土紐貼付による隆線を用いた渦巻文等が施文される。施文の特徴から大木8a式に比定される。

No278～287は大木9式段階の土器片。No278は口縁部に沿う2条の隆帯間に半月形の刺突列が施される。No280は内湾する口縁部に隆線による楕円形文様が配置される。No283～287は細い沈線による楕円形の区画文様が施文される。

No288～290は大木10式段階の土器片。No288は沈線区画内にL摺糸文が充填される。No289は口縁部に2条の刺突列が巡る。No291の網代痕を持つ深鉢底部、No292の櫛歯状工具による条痕を持つ胴部破片は、器面の状態等から縄文中期後葉と考えられる。

No293は頸部無文部の上下を原体圧痕で区画する後期前葉の深鉢口縁部片。No294は小片で明確ではないが後期の磨消縄文文様と思われる。No295は後期中葉の小片。No297は変形工字文が施された鉢口縁部片で大洞A式に相当する。

3 遺物

2 弥生土器

No298は調査区南西部の旧河道内から出土した小片で、附加条縄文と器壁が薄い特徴から弥生時代後期に比定される。

3 土製品

No299は縄文時代中期後葉土器片を利用した円盤状土製品。側縁は研磨され円形に仕上げられる。遺構外出土土製品はこの1点のみである。

4 石器

石鏃 (No.300～303)、石匙 (No.304)、不定形石器 (No.305)、尖頭器 (No.306)、小型磨製石斧 (No.307)、敲石 (No.308)、磨石 (No.309・310)、凹石 (No.311)、石皿台石類 (No.312) 等の出土がある。この他に不掲載資料では石鏃：5点、石錐：1点、不定形石器：3点、使用痕ある剥片：3点、凹石：4点、石皿・台石類：8点、剥片：32点が⑥区 (東尾根上南側) を中心に出土している。

No300の石鏃は中央部両面にアスファルト付着痕跡が残る。No304の石匙は握み部側の短辺に素材剥片の打面を残す。No306の尖頭器は両面加工により尖頭部が作出される。No308の敲石は直角礫1端に顕著な敲打面が形成される。No312は扁平な棒状礫の平坦面両面中央が摩滅し、微細な線状痕が観察される。

5 金属製品

No313は角釘。SI19住居跡検出面から出土した。他に南西部低地から複数の鉄製品出土があるが、いずれも小片で種別判断は不能。No315の銅銭古寛永は⑥区 (東尾根上) のⅢGグリッドから出土した。付近には近世遺構は確認されず出土の経緯は不明である。

6 鉄滓

No314は片面が丸みを帯びる椀形滓で弱く磁着する。出土した鉄滓はこの1点のみである。

7 陶磁器

陶磁器は近世後半～現代にかけての製品が②区 (西尾根西斜面)、及び①区 (西尾根西斜面裾の平坦面) に集中して分布する。しかし伐採作業に伴う重機走行により攪乱された表土に含まれており、原位置は明確ではない。いずれも写真図版に実測図を掲載した。

No316～318は磁器染付碗皿小片で肥前産18世紀代の製品。No319～327は近世末～近代の磁器碗。同一意匠の製品が見られる。No328～332は近世末～近代の磁器皿で碗と同様に同一意匠の製品がある。No333は近代以降の磁器鉢。

No334は内外面灰釉の陶器鉢で大堀相馬産18世紀代の製品。内面に胎土目が見られる。No335・337は内外面灰釉のかかる陶器鉢で瀬戸産18世紀代の製品と思われる。No336は褐釉のかかる陶器小型壺、No338は外面鉄釉の壺破片、No339は褐釉の挿鉢でいずれも年代産地不明である。

第6表-1 土器観察表

No	出土地点	器種	部位	特徴	計測値	時期	備考	登録番号	
1	S02住居跡 埋土層	鉢	口縁	口唇部-内面に沈線		縄文晩期後葉		2	
2	S02住居跡 上面	浅鉢	口縁	変形工字文の一部		縄文晩期後葉		1	
3	S02住居跡 埋土層	深鉢	底部	LR縄文	底径11.5cm	不明		3	
4	S02住居跡 埋土層	鉢	底部	糖漬粘土	底径4cm	縄文晩期後葉		4	
5	S03住居跡 床面	深鉢	体部	LR縄文器面欠れ		縄文	2片割化	5	
6	S03住居跡 床面	深鉢	体部	LR赤土文		大木10		6	
11	S04住居跡 炉埋設上部	深鉢	口縁-体部	沈線・LR縄文光塊・流状口縁・器面二次沈線	口径20.5cm	大木10前半		14	
12	S04住居跡 床面・ベルト北2層	深鉢	口縁-体部	沈線・LR縄文光塊・流状口縁		大木10前半		13	
13	S04住居跡 炉上面-QNE埋土	深鉢	口縁-体部	沈線・LR縄文光塊	口径36cm	大木10前半		18	
14	S04住居跡 QNE埋土	深鉢	口縁-底部	沈線・LR縄文光塊・4単位流状口縁・体部文様3単位・器面二次沈線	口径17.5cm底径6cm 器高17cm	大木10前半		12	
15	S04住居跡 QNE埋土	深鉢	口縁	沈線		大木10前半		7	
16	S04住居跡 QSE埋土	深鉢	体部	沈線・LR縄文光塊		大木9後半		9	
17	S04住居跡 P3埋土・ベルト東2層	深鉢	体部	沈線・LR縄文光塊		大木10前半		17	
18	S04住居跡 QNE埋土	深鉢	口縁	沈線・LR縄文光塊		大木9後半		8	
19	S04住居跡 床面・ベルト東3層→床面	深鉢	口縁-体部	LR縄文・内面欠け跡・口縁部著	口径26cm	大木10		15	
20	S04住居跡 床面3層→床面-QNE埋土	深鉢	口縁-体部	LR縄文	口径32cm	大木10		16	
21	S04住居跡 QSE床面直上	深鉢	底部	漆線(色調異なる土)・LR縄文		大木9		30	
22	S04住居跡 QNE埋土	深鉢	体部-底部	LR縄文・底面十字	底径9cm	大木10		19	
23	S04住居跡 ベルト東3層→床面	深鉢	体部	沈線・LR縄文		大木9後半		11	
34	S05住居跡 炉埋設上部	深鉢	口縁-底部	沈線・LR縄文光塊・流状口縁4単位・器面二次沈線	口径20cm器高21cm	大木10後半		24	
35	S06住居跡 P1上面	深鉢	口縁	漆線・流状口縁		大木10		21	
36	S05住居跡 南側埋土下層	深鉢	口縁	沈線・刺突・LR縄文光塊・流状口縁		大木10後半		23	
37	S05住居跡 P1上面	深鉢	体部	沈線・LR縄文		大木10		20	
38	S05住居跡 南側埋土下層	深鉢	体部	沈線・LR縄文光塊		大木9		22	
40	S06住居跡 床面直上-QSW2層	盆	口縁-底部	照原部著・横状把手・体部沈線文様4単位・LR縄文光塊	口径5cm器高22.5cm	大木10後半		32	
41	S06住居跡 床面	深鉢	口縁-体部	沈線・LR縄文光塊・流状口縁4単位	口径25.5cm	大木10後半		33	
42	S06住居跡 QSE1層	深鉢	口縁	LR縄文		大木10		27	
43	S06住居跡 東壁外・横出面 S04住居跡 埋土上部	深鉢	口縁-体部	沈線・刺突・LR縄文光塊・流状口縁	口径30cm	大木10前半		31	
44	S06住居跡 北側重葺風割木根上位 S06住居跡 QNE・ベルト1層	深鉢	口縁	LR縄文		大木10		29	
45	S06住居跡 床面直上-QNW床面直上	深鉢	体部-底部	LR縄文・底面十字	底径9cm	大木10		30	
46	S06住居跡 炉前庭部横出面・炉前庭部下空-QNE2層	深鉢	体部	沈線・LR縄文光塊		大木10後半		25	
47	S06住居跡 QSE1層	深鉢	体部	沈線・LR縄文光塊		大木10		36	
48	S06住居跡 QSW2層	深鉢	体部	沈線・LR縄文		大木9		38	
58	S07住居跡 床面	深鉢	体部	器面漆漬		縄文中期後葉		34	
59	S08住居跡 床面-S080上見埋土	深鉢	口縁-体部	幅広隆部(縄文部分一段低く)・沈線・刺突・LR縄文光塊・体部文様6単位・流状口縁4単位	口径40cm	大木10前半		43	
60	S08住居跡 東・ベルト1層-QNE2層	深鉢	口縁	沈線・LR縄文光塊		大木10		61上同一 製体	41
61	S08住居跡 QSE1層-2層	深鉢	口縁	沈線・LR縄文光塊		大木10		40	
62	S08住居跡 東・ベルト2層	深鉢	体部	沈線・LR縄文光塊		大木10		36	
63	S08住居跡 北・ベルト1層-QNE床面	深鉢	口縁	沈線・刺突		大木10		37	
64	S08住居跡 QNW床面	深鉢	体部	沈線・LR縄文		大木10		39	
65	S08住居跡 北・ベルト1層	深鉢	体部	沈線・LR縄文光塊		大木10		38	
66	S08住居跡 QSE床面・南・ベルト1層	深鉢	口縁-体部	LR縄文		縄文中期後葉		35	
67	S08住居跡 東側・埋込区1層	深鉢	底部	底面網代肌	底径17.5cm	縄文中期後葉		42	
77	S09住居跡 QNW3層	深鉢	口縁	幅広隆部・流状口縁		大木10前半		45	
78	S09住居跡 QNE4層	深鉢	体部	沈線・LR縄文		大木9後半		47	
79	S09住居跡 炉中央部埋土・横出面	深鉢	体部	沈線・LR縄文光塊		大木10前半		44	
80	S09住居跡 ベルト東3層	深鉢	体部	沈線・LR縄文		大木9後半		46	
81	S09住居跡 QSE4層	深鉢	底部	小形土器・LR縄文	底径4cm	縄文中期後葉		49	

第6表-2 土器観察表

No	出土地点	器種	部位	特徴	計測値	時期	備考	登録番号
82	S109住居跡 QSE3層	深鉢	底部	底面十字	底径6.5cm	縄文中期後葉		48
91	S110住居跡 床面・南西壁際床面	深鉢	口縁～底部	小型土器・液状口縁・沈線・R.R.縄文文焼	口径15cm底径7cm器高15cm	大木9後半		54
92	S110住居跡 様土・べらト1層	深鉢	口縁～底部	小型土器・液状口縁・沈線・R.R.縄文文焼	口径12.5cm底径8cm器高13cm	大木9後半		52
93	S110住居跡 床面・南西壁際床面	深鉢	口縁～底部	小型土器・液状口縁3単位・沈線・R.R.縄文文焼	口径12cm底径15cm器高13.5cm	大木9後半		53
94	S110住居跡 床面	鉢	口縁～底部	小型土器・沈線・R.R.縄文文焼・底面十字	底径5cm	大木9後半		55
95	S110住居跡 床面・南西壁際床面	壺	口縁～体部	頸部隆帯・貫通孔付突起4単位・体部・沈線・R.R.縄文文焼	口径12.5cm	大木9後半	2片固化	56
96	S110住居跡 様土	深鉢	口縁	沈線・R.R.縄文文焼		大木9		51
97	S110住居跡 様土	深鉢	体部	隆線・R.R.縄文		大木9		50
100	S111住居跡 炉埋設上部	深鉢	体部～底部	沈線・刺突・R.R.縄文文焼・体部文様4単位・底面十字	底径6.5cm	大木10後半		58
101	S111住居跡 様土	深鉢	体部	隆線・R.R.縄文文焼		大木10後半		57
102	S112住居跡 炉埋土	深鉢	口縁	隆線・刺突・液状口縁		大木10		59
103	S112住居跡 炉埋土	深鉢	口縁	隆線・刺突		大木10		62
104	S112住居跡 様土上部	深鉢	口縁	沈線・R.R.縄文文焼		大木10		66
105	S112住居跡 炉埋土	深鉢	口縁	R.R.縄文		大木10		60
106	S112住居跡 炉埋土	深鉢	体部	沈線・R.R.縄文文焼		大木10		61
107	S112住居跡 様土上部	深鉢	体部	沈線・R.R.縄文		大木10		63
108	S112住居跡 様土上部	深鉢	体部	沈線・R.R.縄文		大木10		64
109	S112住居跡 様土上部	深鉢	体部	沈線・R.R.縄文文焼		大木10		65
110	S112住居跡 様土上部	深鉢	底部	底面十字	底径7cm	縄文中期後葉		67
115	S113住居跡 炉埋土	深鉢	体部	隆線		縄文中期後葉		68
116	S113住居跡 様土	深鉢	体部	隆線		大木10		69
118	S114住居跡 炉埋土	深鉢	口縁	沈線・刺突・R.R.縄文文焼・液状口縁		大木10		71
119	S114住居跡 炉埋土下位	深鉢	口縁	無文部	口径2cm	縄文		70
122	S115住居跡 床面	深鉢	口縁～体部	沈線・R.R.縄文文焼	口径22cm	大木9後半		84
123	S115住居跡 炉埋設上部	深鉢	体部～底部	沈線・R.R.縄文文焼・器面荒れ	底径8.5cm	大木9後半		82
124	S115住居跡 QSE埋土下位	深鉢	口縁～体部	沈線・R.R.縄文文焼		大木10		73
125	S115住居跡 QSE埋土	深鉢	口縁～体部	沈線・R.R.縄文文焼		大木10		74
126	S115住居跡 様土	深鉢	口縁	沈線・R.R.縄文文焼・液状口縁		大木9後半		78
127	S115住居跡 QSE埋土	深鉢	体部	隆線・R.R.縄文文焼		大木9後半		77
128	S115住居跡 P5	深鉢	体部	沈線・R.R.縄文文焼		大木10		79
129	S115住居跡 東べらト	深鉢	体部	隆線・R.R.縄文文焼		大木9後半		80
130	S115住居跡 P5	深鉢	体部	沈線・R.R.縄文文焼		大木9後半		72
131	S115住居跡 QSW埋土	深鉢	体部	隆線・R.R.縄文文焼		大木9後半		81
132	S115住居跡 QSE埋土	深鉢	口縁	R.R.縄文		縄文中期後葉		75
133	S115住居跡 QSE埋土	器台	台部	沈線・R.R.縄文文焼		大木10	270と同一個体	76
134	S115住居跡 QSE埋土	器台	台部	円形貫通孔・R.R.縄文		縄文中期後葉		83
135	S115住居跡 QSW埋土	壺	体部	貫通孔付把手・隆線		大木10		203
141	S116住居跡 溝埋土	深鉢	口縁	隆線・R.R.縄文		大木9前半		89
142	S116住居跡 様土	深鉢	体部	隆線		大木9前半		90
143	S116住居跡 炉埋土	深鉢	体部	隆線		大木9前半		88
144	S116住居跡 P3上部	深鉢	体部	隆線・R.R.縄文文焼		大木9前半		86
145	S116住居跡 様土	深鉢	体部	沈線・刺突・R.R.縄文		大木10		91
146	S116住居跡 炉埋土	深鉢	体部～底部	小型土器・沈線・R.R.縄文・底面十字	底径4.8cm	大木9後半		95
147	S116住居跡 床面・炉埋土	深鉢	口縁～体部	R.R.縄文	口径27.5cm	縄文中期後葉		87
148	S116住居跡 P3上部	深鉢	体部	沈線・R.R.縄文文焼		大木9後半		85
149	S116住居跡 床面・様土	深鉢	口縁～体部	R.R.縄文	口径18cm	縄文中期後葉		92
150	S116住居跡 P3上部	深鉢	体部～底部	隆線・R.R.縄文・底面十字	底径14cm	大木9前半		93
151	S116住居跡 様土	深鉢	底部	R.R.縄文・底面十字	底径11.5cm	縄文中期後葉		94
152	S116住居跡 検出面	器台	台部	円形貫通孔・R.R.縄文		縄文中期後葉		97

第6表-3 土器観察表

No	出土地点	器種	部位	特徴	計測値	時期	備考	登録番号
153	SI16住居跡 中央部2層	ミナチヌア土器	口縁-体部	鉢形・折り返し口縁	口径37cm	縄文中期後葉		96
161	SI17住居跡 軒梁直上部	深鉢	口縁-体部	外面無文・器面寛丸	口径35.5cm	大木10		105
162	SI17住居跡 埋土	深鉢	体部	沈線・L.R縄文文焼		大木10		102
163	SI17住居跡 P6	深鉢	体部	沈線・L.R縄文文焼		大木10		101
164	SI17住居跡 P5	深鉢	体部	通筋伏線縞		縄文中期		99
165	SI17住居跡 P6	深鉢	体部	沈線・L.R縄文文焼		大木10		100
166	SI17住居跡 埋土	深鉢	体部	沈線・L.R縄文文焼		大木10		103
167	SI17住居跡 埋土	深鉢	体部	沈線・L.R縄文文焼		大木9後半		104
168	SI17住居跡 P7	深鉢	体部	L.R赤文		縄文中期後葉		98
172	SI18住居跡 ベルト	深鉢	口縁	沈線・刺突・L.R縄文・波状口縁		大木10		106
173	SI18住居跡 埋土	深鉢	口縁	器部隆帯		大木10		107
174	SI18住居跡 埋土	深鉢	体部	沈線・L.R縄文文焼		大木9後半		108
175	SI18住居跡 埋土	深鉢	体部	沈線・L.R縄文文焼		大木10		109
176	SI18住居跡 ベルト	深鉢	体部	沈線・L.R縄文文焼		大木10		110
182	SI19住居跡 埋土上部	深鉢	口縁	沈線・L.R縄文文焼		大木9後半		113
183	SI19住居跡 埋土上部	深鉢	口縁	隆線・L.R縄文文焼		大木9後半		112
184	SI19住居跡 埋土上部	深鉢	口縁	L.R縄文		縄文中期後葉		111
185	SI19住居跡 中央部埋土下部	深鉢	口縁	L.R縄文		縄文中期後葉		115
186	SI19住居跡 埋土上部	甕	体部	隆線・貫通孔付把手・L.R縄文文焼		大木10		117
187	SI19住居跡 中央部埋土下部	深鉢	体部	沈線・L.R縄文文焼		大木9後半		116
188	SI19住居跡 埋土上部	深鉢	体部	沈線・L.R縄文文焼		大木9後半		114
190	SK01聖穴状遺構 南側底面	深鉢	体部	沈線・L.R縄文		縄文中期後葉		174
191	SK01聖穴状遺構 南東部底面	深鉢	体部	異方向羽状縄文(L.R・R.L)		縄文後期小?		204
192	SK02土坑 埋土	浅鉢	体部	底部直上・無文部		縄文中期後葉		123
195	SK04土坑 底面	深鉢	体部	沈線・附加条縄文軸+L・外面炭化物付着顕著		弥生前期		125
196	SK09土坑 埋土	深鉢	体部	附加条縄文L.R+?		弥生前期		124
197	SK51土坑 1層	深鉢	体部	底部直上・無文部		縄文		132
198	SK55土坑 1層	深鉢	体部	沈線・L.R・縄文(?)・器面寛丸		縄文後期小?		133
199	SK70土坑 埋土上部	深鉢	体部	沈線・L.R縄文		大木10		139
201	SK72土坑 埋土	深鉢	体部	沈線・縞状隆線(洞帯)・L.R縄文文焼		大木10後半		141
202	SK74土坑 埋土上部	深鉢	体部	沈線・L.R縄文		大木9		142
203	SK77土坑 埋土	深鉢	体部	L.R縄文		縄文中期後葉		143
204	SK79土坑 埋土	深鉢	体部	L.R縄文・器面寛丸		縄文中期後葉		144
205	SK80土坑 埋土13層	深鉢	口縁	沈線・L.R縄文文焼・波状口縁		大木9後半		159
206	SK80土坑 12層	深鉢	口縁	L.R縄文		縄文中期後葉		146
207	SK80土坑 1層	深鉢	体部	沈線・刺突		大木10		145
208	SK81土坑 7層	深鉢	口縁-体部	沈線・刺突・L.R縄文文焼・波状口縁	口径33.5cm	大木10前半		150
209	SK81土坑 7層	深鉢	口縁	沈線・刺突・波状口縁		大木10		147
210	SK81土坑 7層	深鉢	口縁	折り返し口縁・貫通孔付		縄文中期		154
211	SK81土坑 埋土	深鉢	口縁	沈線・L.R縄文文焼・波状口縁		大木10		148
212	SK81土坑 7層	深鉢	体部-底部	沈線・L.R縄文・底面十字	底径4.8cm	大木10		153
213	SK81土坑 7層	深鉢	体部-底部	沈線・L.R縄文文焼・内面ミ字斗	底径5.5cm	大木10前半		152
214	SK81土坑 7層	深鉢	体部-底部	沈線・L.R縄文・底面網代直	底径9.5cm	大木10		151
215	SK81土坑 7層	深鉢	口縁-体部	L.R縄文・外面炭化物付着	口径20cm器高21cm	大木10		149
216	SK81土坑 底面	深鉢	体部-底部	器面寛丸	底径6.5cm	縄文中期		155
217	SK81土坑 7層	深鉢	底部	底面十字	底径6.8cm	縄文中期		156
218	SK82土坑 埋土	深鉢	口縁	沈線・L.R縄文・波状口縁		大木10		158
219	SK82土坑 埋土	深鉢	口縁	沈線・刺突		大木10		160
220	SK82土坑 1層・2層	深鉢	体部	沈線・L.R縄文		大木9後半		157
221	SK82土坑 1層	深鉢	体部	隆線・L.R縄文		大木9後半		163
222	SK82土坑 埋土	深鉢	体部	隆線・L.R縄文		大木8B		161
223	SK82土坑 2層	深鉢	体部	隆線・L.R縄文文焼・赤白		大木9後半		162
224	SK82土坑 埋土	深鉢	体部	底部直上・沈線・L.R縄文		大木9		164

第6表-4 土器観察表

No	出土地点	器種	部位	特徴	計測値	時期	備考	登録番号
225	SK83土坑 2層-SK81土坑 7層	深鉢	口縁-底部	IR, 縄文	口径26cm底径11cm	縄文中期後葉	同上復元	366
226	SK83土坑 埋土	深鉢	底部	沈線-IR, 縄文光填		大木10		365
229	SK85土坑 埋土下部	深鉢	底部	沈線-IR, IR縄文		大木9		367
230	SK24土坑 埋土上部(検出面-5cm)	深鉢	底部	器面荒丸		縄文中期		126
231	SK26土坑 上面	鉢	口縁-底部	沈線-IR, 縄文, 口唇部部割目		縄文晩期後葉		128
232	SK26土坑 埋土上部(検出面-20cm)	深鉢	底部	IR, 縄文		縄文中期		127
233	SK30土坑 埋土上部(検出面-5cm)	深鉢	底部	IR, IR縄文		縄文中期		129
234	SK30土坑 埋土上部(検出面-5cm)	深鉢	底部	器面荒丸	底径1cm	縄文中期		130
235	SK31土坑 北側2層	深鉢	底部	IR, 縄文		縄文中期		131
236	SK57土坑 埋土上部	深鉢	底部	横線流, 引状縄文(IR-IR)		縄文前期小?		134
237	SK60土坑 1層(検出面-20cm)	深鉢	底部	隆線-IR, IR縄文		大木8b		135
238	SK69土坑 1層	深鉢	口縁-底部	IR, 縄文, 補修孔		縄文中期後葉		136
239	SK69土坑 1層	深鉢	底部	沈線-IR, 縄文光填		大木10		137
240	SK69土坑 1層	深鉢	底部	底面十字	底径1cm	縄文中期		138
241	SK71土坑 1層	深鉢	底部	IR, 縄文		縄文中期		140
259	SD01溝 埋土	深鉢	底部	IR, IR縄文		縄文中期後葉		170
260	SD02溝 北端底面	深鉢	底部	隆線-IR, 縄文		大木10		171
262	SD06溝 埋土	深鉢	口縁	隆線-刺突, 器面荒丸		大木10		173
263	SD08溝 埋土	深鉢	底部	隆線-刺突-IR, 縄文		大木10		172
266	P019 埋土	深鉢	口縁	隆線-IR, 縄文		大木9		179
270	P036 埋土上部	唇台	右部	沈線-IR, IR縄文光填, 酒門形透小し		大木10	133上同一動体	178
271	V D区 II層	深鉢	底部	IR, 縄文-横線流		縄文前期初葉		188
272	V D区 II層	深鉢	底部	ビツチリ縄文-横線流		縄文前期初葉		189
273	V D区 II層	深鉢	底部	1層結安引状縄文(IR-IR)-横線流		縄文前期初葉		190
274	V D区 II層	深鉢	口縁	隆帯+割目		縄文前期小?		187
275	SX28風洞水痕 黒褐色土	深鉢	口縁-底部	隆線+割目+半截竹管刺突列+十字状透孔土文		縄文前期後葉	3片同化	176
276	SX28風洞水痕 黒褐色土	深鉢	底部	隆線+割目+写沈線-IR, 縄文		縄文中期前葉		175
277	V A区 I層	深鉢	口縁	隆線-口縁部突起		大木8a		180
278	V B区 II層	深鉢	口縁	隆線-刺突-IR, IR縄文光填		大木9前半		202
279	V G区 II層	深鉢	口縁	口縁部突起-隆線+割目		大木9		168
280	SX64風洞水痕 黒色土	深鉢	口縁-底部	隆線-器面荒丸		大木9前半		177
281	V G10b区 II層	深鉢	口縁	引り返し口縁-IR, 縄文		大木9		201
282	V D7a区 II層	深鉢	底部	隆線-IR, IR縄文光填		大木9		191
283	V G2c区 II層	深鉢	口縁	沈線-IR, 縄文光填, 液状口縁		大木9後半		199
284	V G2c区 II層	深鉢	底部	沈線-IR, 縄文		大木9後半		200
285	V G10c区 II層	深鉢	口縁	沈線-IR, IR縄文光填		大木9後半		194
286	V G3-4a区 II層	深鉢	口縁	沈線-IR, IR縄文光填		大木9後半		193
287	V G7区 II層	深鉢	口縁	沈線-IR, IR縄文光填, 液状口縁		大木9後半		197
288	V G10c区 II層	深鉢	口縁	沈線-IR, 赤土光填		大木10		195
289	V G7区 II層	深鉢	口縁	沈線-刺突-液状口縁		大木10		196
290	V G1c区 II層	深鉢	底部	沈線-IR, 赤土光填		大木10後半		198
291	V B区 I層	深鉢	底部	IR, 縄文-底面網代肌	底径10cm	縄文中期		181
292	V C区 II層	深鉢	底部	断線状沈線		縄文中期小?		183
293	V G区 II層	深鉢	口縁	断線無文-IR, 縄文帯付底肌		縄文後期前葉		169
294	V F5a-b区 II層	深鉢	底部	沈線-IR, 縄文光填		縄文後期小?		192
295	V C区 I-II層	深鉢	底部	沈線-IR, 縄文		縄文後期中葉		185
296	V C区 II層	深鉢	口縁	IR, 縄文		縄文晩期小?		182
297	V C区 II層	鉢	口縁	沈線(安彩工字文)		縄文晩期末		184
298	V C区旧河道西側?部黒色土	深鉢	底部	附加染織文輪+L		弥生後期		186

第7表-1 石器観察表

36	器種	細分類	出土地点	特 徴	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	石 質	産地・年代	相対 番号
7	石 鏃	S303住居跡 東面		円盤形葉、先端欠損	27.0	1.40	0.30	1.04	頁岩	鷹引山麓 新石器最第三紀	1
8	石 鏃	S303住居跡 東面		円盤形葉、片翼欠損	1.40	1.20	0.30	0.53	頁岩	鷹引山麓 新石器最第三紀	2
9	凹石	S303住居跡 QN51層		片面に浅い凹部何枚	13.30	5.80	4.30	321.10	砂岩凝灰岩	北上山麓小豆原遺跡・中生代白礫紀	34
10	石 鏃	S303住居跡 東面		片面中央に顕著な葉状痕上、側面に凹部何枚	17.40	13.30	1.20	398.70	粘灰岩	北上山麓 古生代	35
24	石 鏃	S304住居跡 54cト穴3層		楕型	5.25	2.65	0.90	8.69	頁岩	北上山麓 古生代・中生代	5
25	石 鏃	S304住居跡 54cト穴2層		葉状形葉、先端欠損	27.0	1.70	0.65	2.62	頁岩	鷹引山麓 新石器最第三紀	3
26	石 鏃	S304住居跡 Q5E(SX31埋土)		葉状形葉	33.0	2.70	0.30	6.26	頁岩	鷹引山麓 新石器最第三紀	4
27	凹石	S304住居跡 Q5W2層		楕円形に葉形、片面に浅い凹部何枚	8.90	5.70	3.10	127.00	安山岩	岩手小山山 新石器最第四紀	40
28	凹石	S304住居跡 埋土		片面に浅い凹部何枚	16.20	5.70	3.60	348.80	頁岩	北上山麓 古生代・中生代	37
29	凹石	S304住居跡 54cト穴埋跡2層		片面中央に浅い凹部、側面に線状痕	12.50	10.50	6.00	101.90	頁岩	北上山麓 古生代・中生代	38
30	凹石	S304住居跡 埋土		片面に浅い凹部何枚	13.80	7.10	2.90	345.60	凝灰岩	北上山麓 古生代・中生代	36
31	石 鏃・石 鏃	S304住居跡 (SX33埋土)		断片有線石鏃、断片はD字形	13.80	9.30	5.30	353.10	砂岩	北上山麓 古生代・中生代	39
32	石 鏃・石 鏃	S304住居跡 凹埋土		片面葉状	33.50	2.00	0.50	708.00	凝灰岩	北上山麓小豆原遺跡・中生代白礫紀	41
33	石 鏃・石 鏃	S304住居跡 Q5E(SX33埋土)		片面葉状、浅い凹部何枚	26.90	23.80	5.90	546.00	凝灰岩	北上山麓宮内遺跡 古生代トルドピス北の層石	42
39	磨石	S305住居跡 P4上面		平型同葉状形	13.50	7.80	6.50	972.40	砂岩	北上山麓 古生代・中生代	43
49	石 鏃(葉状形)	S306住居跡 QN5W前面直上		約1/2割に二次加工	13.50	11.15	0.50	0.65	磨石	北上系	6
50	石 鏃	S306住居跡 Q5E埋土		片面葉状、先端欠損、やや紅色が少し透明感のある層石	1.34	0.85	0.25	0.30	磨石	北上系	7
51	石 鏃	S306住居跡 P1下部		片面葉状、先端欠損	2.00	0.95	0.20	0.40	頁岩	鷹引山麓 新石器最第三紀	8
52	丸磨石	S306住居跡 QN5W2層		一端に海面加工で丸磨部何枚	3.20	2.10	0.70	3.18	頁岩	鷹引山麓 新石器最第三紀	11
53	石 鏃	S306住居跡 QN5W2層		断面が顕著に欠る	3.60	2.05	0.90	4.64	頁岩	鷹引山麓 新石器最第三紀	9
54	石 鏃	S306住居跡 P2下部		棒状断面	2.45	1.85	0.45	1.17	頁岩	鷹引山麓 新石器最第三紀	10
55	凹石	S306住居跡 Q5E後面直上 (埋土中)		片面中央に浅い凹部	9.80	7.80	2.80	262.20	粘灰岩	北上山麓 古生代	44
56	石 鏃・石 鏃	S306住居跡 埋跡外		両側面直線断面、両面に平型断面線行断面状	34.20	21.80	4.90	386.00	頁岩	北上山麓 古生代・中生代	45
57	石 鏃・石 鏃	S306住居跡 埋跡直上		両面に広く凹部何枚何枚	41.20	17.90	4.50	410.00	凝灰岩	北上山麓小豆原遺跡・中生代白礫紀	46
69	石 鏃	S306住居跡 54cト穴2層		円盤形葉、7スフェラル付着、片翼欠損	2.45	1.20	0.35	0.54	頁岩	鷹引山麓 新石器最第三紀	12
70	石 鏃	S306住居跡 QN5W前面		楕型、狭み部7スフェラル付着	4.90	1.75	0.70	3.35	頁岩	鷹引山麓 新石器最第三紀	13
71	不定形磨石	S306住居跡 QN5E埋土		楕型・断面角状断面	3.50	3.10	0.70	5.66	頁岩	鷹引山麓 新石器最第三紀	14
72	凹石	S306住居跡 QN5W2層下部		片面中央に浅い凹部、断片一部に線状痕	9.30	8.70	4.00	349.50	断片在凹部凝灰岩	北上山麓 中生代白礫紀	47
73	凹石	S306住居跡 QN5E埋跡直上(埋土中)		断面二角形、3面に浅い凹部	10.10	6.20	3.30	156.30	安山岩	岩手六白山 新石器最第四紀	48
74	凹石	S306住居跡 埋跡直上		片面に浅い凹部何枚	13.80	6.40	4.70	683.10	凝灰岩	北上山麓小豆原遺跡・中生代白礫紀	49
75	凹石	S306住居跡 QN5W前面		2面に浅い凹部、各面に線状痕	25.10	9.20	6.80	1749.80	断片在凹部凝灰岩	北上山麓 中生代白礫紀	50
76	石 鏃・石 鏃	S306住居跡 埋跡直上(埋土中)		3片葉状、両面葉状、両面中央に顕著な葉状痕	38.60	19.30	7.30	3570.00	頁岩	北上山麓 中生代白礫紀	51
83	石 鏃	S306住居跡 QN5W前面		片面葉状	2.00	1.35	0.30	0.27	頁岩	鷹引山麓 新石器最第三紀	15

第7表-2 石器観察表

36	図種	細分類	出土地点	特 徴	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	材質	産地・年代	図録 番号
84	石鏃	S302E原形 QNW4層		平直断面、左右不対称	2.35	1.35	0.40	1.05	頁岩	鷹羽山遺 新牛代第三紀	16
85	不定形石鏃	S302E原形 北側トレンチ内層		右側面縁部破損状態	2.80	4.00	1.65	1054	頁岩	鷹羽山遺 新牛代第三紀	17
86	不定形石鏃	S302E原形 舞土		縁部一部鋭角欠損	6.15	5.80	1.30	2461	頁岩	鷹羽山遺 新牛代第三紀	18
87	凹石	S302E原形 東トレンチ3層(床面直上)		両面に深い凹痕何枚	10.20	5.30	3.30	2763.0	ホルンフェルス	北上山遺 古牛代~中牛代(中牛代白曜岩に属ス)	52
89	凹石	S302E原形 QN23層		両面に深い凹痕何枚	14.30	9.40	3.20	2030.0	凝灰岩	北上山遺小友川層遺少 中牛代白曜岩	53
89	凹石	S302E原形 舞舞舞土		両面に深い凹痕、右側面凸	14.20	5.30	3.30	4903.0	凝灰岩	北上山遺小友川層遺少 中牛代白曜岩	54
90	石鏃・台石鏃	S302E原形 QSE1層		片面縁部、浅い凹痕、鋭角欠	17.80	13.30	5.60	13053.0	凝灰岩	北上山遺小友川層遺少 中牛代白曜岩	55
98	凹石	S112E原形 舞土		両面に浅い凹痕	14.40	11.10	7.30	15166.0	滑石凝灰岩	北上山遺小友川層遺少 中牛代白曜岩	56
99	石鏃・右石鏃	S112E原形 舞舞		片面中央に短型色付凸物、平直面縁部	44.00	28.50	9.50	18000.0	頁岩	北上山遺 中牛代白曜岩	57
112	不定形石鏃	S112E原形 P2舞土		縁部一部鋭角欠損	4.15	6.55	1.00	27.89	頁岩	鷹羽山遺 新牛代第三紀	19
113	凹石	S112E原形 中央部断面		両面に深い凹痕何枚	11.30	6.90	3.50	273.20	頁岩	北上山遺 古牛代~中牛代	58
114	石鏃・右石鏃	S112E原形 伊内東層		片面縁部縁部打痕部凸物、頂部縁部	27.10	19.30	4.20	2800.0	頁岩	北上山遺 古牛代~中牛代	59
117	不定形石鏃	S112E原形 P2舞土		縁部一部凹痕部	3.90	4.85	1.20	193.56	頁岩	鷹羽山遺 新牛代第三紀	20
120	凹石	S112E原形 舞土		両面に深い凹痕何枚	16.30	8.00	3.20	541.30	凝灰岩	北上山遺小友川層遺少 中牛代白曜岩	60
121	凹石	S112E原形 舞舞舞土上層		片面縁部、縁打痕何枚、縁部凸	36.10	20.60	7.40	6700.0	凝灰岩	北上山遺小友川層遺少 中牛代白曜岩	61
126	石鏃	S112E原形 QN2E床面直上		凹部に浅い凹痕、片割欠損	1.85	1.40	0.30	0.85	頁岩	鷹羽山遺 新牛代第三紀	21
137	凹石	S112E原形 QSE舞土下層		両面に浅い凹痕、右側面凸物	12.50	5.80	3.70	282.10	頁岩	北上山遺 古牛代~中牛代	62
138	石鏃・右石鏃	S112E原形 舞舞		片面縁部、縁打痕何枚	19.90	19.70	5.00	2880.0	凝灰岩	北上山遺古河層遺 古牛代オムドリス配の層石	64
139	凹石	S112E原形 QNW舞土		断面三角形、3面に凹痕	20.30	6.30	4.30	6837.0	滑石凝灰岩	北上山遺小友川層遺少 中牛代白曜岩	63
140	石鏃・右石鏃	S112E原形 舞舞舞土		片面大きく鋭角者平直部、平直部色付凸物何枚	39.00	26.50	14.00	21800.0	凝灰岩	北上山遺小友川層遺少 中牛代白曜岩	91
154	石鏃	S112E原形 舞舞		縁部欠損、縁部欠損	4.60	2.45	0.80	5.77	頁岩	鷹羽山遺 新牛代第三紀	22
155	石鏃	S112E原形 P2舞土上層		全面縁部縁部、片面凹痕打痕何枚	12.00	8.90	5.90	954.60	凹岩	北上山遺 中牛代白曜岩	66
156	石鏃	S112E原形 舞舞舞土		両面に打痕何枚	7.20	3.80	2.50	103.90	滑石凝灰岩	北上山遺小友川層遺少 中牛代白曜岩	67
157	石鏃	S112E原形 舞舞舞土		片面に三角形、2片接合	9.10	5.10	4.20	84.70	凹岩	岩手山小友 新牛代第四紀	69
158	石鏃・右石鏃	S112E原形 舞舞		片面縁部、凹痕部凸	8.40	6.10	3.50	78.20	安山岩	岩手山小友 新牛代第四紀	68
160	凹石	S112E原形 床15cm		両面に浅い凹痕、片面に縁部凸	18.10	8.80	3.20	568.40	凹岩	北上山遺 中牛代白曜岩	65
169	石鏃・右石鏃	S112E原形 伊内		2片接合、片面縁部、二次縁部	24.30	18.30	7.60	3560.0	安山岩	北上山遺小友川層遺 中牛代白曜岩	70
169	石鏃	S112E原形 P2舞土		片面凹痕部縁部、片面中央と縁部に縁打痕何枚	9.90	8.80	4.60	661.10	滑石凝灰岩	北上山遺 中牛代白曜岩	71
170	石鏃・右石鏃	S112E原形 伊内(右側面直上)		2片接合、片割欠損、中央部使用による凹痕部	14.70	11.90	4.40	2753.00	安山岩	岩手山小友 新牛代第四紀	72
171	石鏃・右石鏃	S112E原形 伊内(右側面直上)		3片接合、片面縁部縁部打痕何枚	26.20	17.90	5.30	3520.00	凹岩	北上山遺小友川層遺 中牛代白曜岩	73
177	石鏃	S112E原形 舞土		凹痕部	3.10	1.70	0.30	0.94	頁岩	鷹羽山遺 新牛代第三紀	23
178	凹石	S112E原形 舞舞舞土上層		両面に浅い凹痕何枚	18.60	6.20	3.40	486.00	滑石凝灰岩	北上山遺小友川層遺少 中牛代白曜岩	75
179	凹石	S112E原形 舞舞舞土上層		両面に深い凹痕、3面に縁部凸	15.70	6.80	2.90	359.10	凝灰岩	北上山遺小友川層遺少 中牛代白曜岩	74

第7表-3 石器観察表

No.	器種	細分類	出土地点	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	材質	産地・年代	相対 数値
180	石皿・台石類	S18柱形器	埋土	両面敲打痕存在。中央部減、磨状痕	18.60	12.80	3.70	121.830	磁灰岩	北上山遺 古生代	76
181	石皿・台石類	B	S18柱形器 P15立石	角柱状。平ら面磨減。両面敲打痕	34.00	11.90	8.90	280.000	磁灰岩	北上山遺小友間辺沖・中年代白濁紀	77
189	円石	S19円形器	埋土上部	両面に深い凹部存在。轉角石状。片側磨減縁状痕	15.60	11.90	6.60	130.840	磁灰岩	北上山遺小友間辺沖・中年代白濁紀	78
193	不定形石鈔	S202土坑	1層	両縁一部に両面磨減	3.40	1.60	0.60	2.67	頁岩	興引山遺 新牛代第壹三紀	24
194	円石	S202土坑	埋土	両面に深い凹部。一部両縁敲打痕跡	17.80	5.80	3.40	410.010	磁灰岩	北上山遺小友間辺沖・中年代白濁紀	79
200	石皿・台石類	B	S202土坑 埋土上部	片側に敲打痕。縁状痕顯著	21.30	20.10	6.60	342.010	頁岩	北上山遺 古生代・中年代	80
227	円石	S203土坑	埋土	両面に深い凹部	10.30	7.00	2.40	253.860	滑石類磁灰岩	北上山遺小友間辺沖・中年代白濁紀	81
228	磨石	S208土坑	埋土	平ら面磨減	8.30	7.20	3.60	294.770	細粒花崗閃緑岩	北上山遺 中年代白濁紀	82
265	不定形石鈔	S204溝	北溝ベル土埋土上部	両縁一部急角状磨減	3.20	3.15	0.55	3.42	頁岩	興引山遺 新牛代第壹三紀	25
267	円石	S208溝	埋土	片側に深い凹部。石面縦線状痕用字?	15.70	8.50	5.30	388.900	砂岩	北上山遺 古生代・中年代	83
268	石皿・台石類	A	P029 埋土	右縁急角状?	12.60	6.80	3.70	442.660	閃緑岩	北上山遺 中年代白濁紀	84
297	円石	P031 埋土		3面にやや深い凹部	17.90	4.70	4.30	435.520	砂岩	北上山遺 古生代・中年代	85
299	不定形石鈔	P032 埋土		両縁一部急角状磨減	4.45	3.55	1.40	17.280	頁岩	興引山遺 新牛代第壹三紀	26
300	石皿	P-G06区I層		凹部無蓋。アスファルト付着	1.80	1.30	0.35	0.65	頁岩	興引山遺 新牛代第壹三紀	28
301	石皿	P-G06区II層		凹部無蓋	1.60	1.00	0.25	0.30	頁岩	興引山遺 新牛代第壹三紀	27
302	石皿	P-G06区III層		凹部無蓋	2.00	1.30	0.30	0.44	頁岩	興引山遺 新牛代第壹三紀	29
303	石皿	P-G06区IV層		字面無蓋。先端欠損	2.90	1.30	0.45	1.29	頁岩	興引山遺 新牛代第壹三紀	30
304	石鈔	P-G06区V層		楕型。素材磨打の打点残存	3.15	5.30	0.80	9.58	頁岩	興引山遺 新牛代第壹三紀	31
305	不定形石鈔	東化朝田河辺2-PG区内		両縁一部急角状磨減	3.60	3.15	1.00	12.27	頁岩	興引山遺 新牛代第壹三紀	33
306	尖頭器	東G17区I層		両面加工により先端部欠損	2.90	2.45	0.75	4.03	頁岩	興引山遺 新牛代第壹三紀	32
307	磨石台券	東G26区II層		成角式。片方付け	7.70	4.10	1.50	68.100	閃緑岩	北上山遺 中年代白濁紀	86
308	磨石	東G17区I層		1端より平型面に敲打痕	6.70	5.30	3.60	215.570	カルデワールス	北上山遺 古生代・中年代(中年代白濁紀に属成)	87
309	磨石	東G17区II層		平ら面磨減顯著	10.30	8.60	5.60	762.960	花崗閃緑岩	北上山遺 中年代白濁紀	89
310	磨石	東G17区I層		平ら面磨減顯著。中央部敲打痕	11.70	7.80	6.12	612.590	細粒花崗閃緑岩	北上山遺 中年代白濁紀	90
311	円石	P-G06区I層		片面に深い凹部	14.60	9.80	4.50	644.990	磁灰岩	北上山遺小友間辺沖・中年代白濁紀	88
312	石皿・台石類	B	P-G06区II層	平ら面磨減。磨状痕	53.30	33.80	7.50	8620.090	東花崗閃緑岩	北上山遺宮守朝田 古生代オムルデス紀の磨石	92

第8表 土製品観察表

No	出土地点	器種	特徴	重量(g)	計測値	備考	登録番号
68	SI08住居跡 埋土	円盤状土製品	RL縄文	130	径3.2cm		2
111	SI12住居跡 埋土上部	斧形土製品	両端欠損、LR縄文	22.0	幅2.7cm 厚1.3cm		1
264	SD08溝 埋土	円盤状土製品	RL縄文	118	径3.3cm		3
299	II G区 II層	円盤状土製品	LR縄文	22.1	径4.4cm		4

第9表 金属製品観察表

No	出土地点	器種	特徴	重量(g)	計測値	備考	登録番号
313	IV G5b区 II層	釘	頭折釘	30.7	長10.5cm	SI19住居跡上部	6
314	III G区 II層	鉄滓	板形滓	141.2	径7.5cm	7	
315	III G1h区 II層	寛永通寶	古寛永	3.0	径2.47cm 厚0.09cm	5	

第10表 陶磁器観察表

No	出土地点	器種	特徴	時代産地	備考	登録番号
316	IV D区 I層	磁器碗	染付	肥前 18c	10	
317	IV D区 I層	磁器碗	染付	肥前 18c	9	
318	VC区 I層	磁器皿	染付	肥前 18c	8	
319	IV D区 I層	磁器碗	染付型紙摺	不明 19c	18	
320	IV D区 I層	磁器碗	染付型紙摺	不明 19c	15	
321	IV D区 I層	磁器碗	染付型紙摺	不明 19c	13	
322	IV D区 I層	磁器碗	染付型紙摺	不明 19c	16	
323	IV D区 I層	磁器碗	染付型紙摺	不明 19c	14	
324	IV D区 I層	磁器碗	染付型紙摺	不明 19c	17	
325	IV D区 I層	磁器碗	染付	不明	23	
326	IV D区 I層	磁器碗	染付	不明	24	
327	IV D区 I層	磁器碗	染付	不明	22	
328	IV D区 I層	磁器皿	染付	不明 19c	11	
329	IV D区 I層	磁器皿	染付	不明 19c	328と同類	12
330	IV D区 I層	磁器皿	染付	不明	19	
331	IV D区 I層	磁器皿	染付	不明	20	
332	IV D区 I層	磁器皿	染付	不明	332と同類	21
333	IV D区 I層	磁器鉢	染付	不明	25	
334	IV D区 I層	陶器鉢	内外面灰釉	大塚相馬 18 c	26	
335	東尾根沢跡2b埋土上部	陶器鉢	内外面灰釉	瀬戸 18 c	337と同一個体か	31
336	IV D区 I層	陶器壺	内外面褐釉	不明	27	
337	II G区 I層	陶器鉢	内外面灰釉	瀬戸 18 c	30	
339	IV D区 I層	陶器搥鉢	内外面褐釉	不明	28	
338	IV D区 I層	陶器壺	外面鉄釉	不明	29	

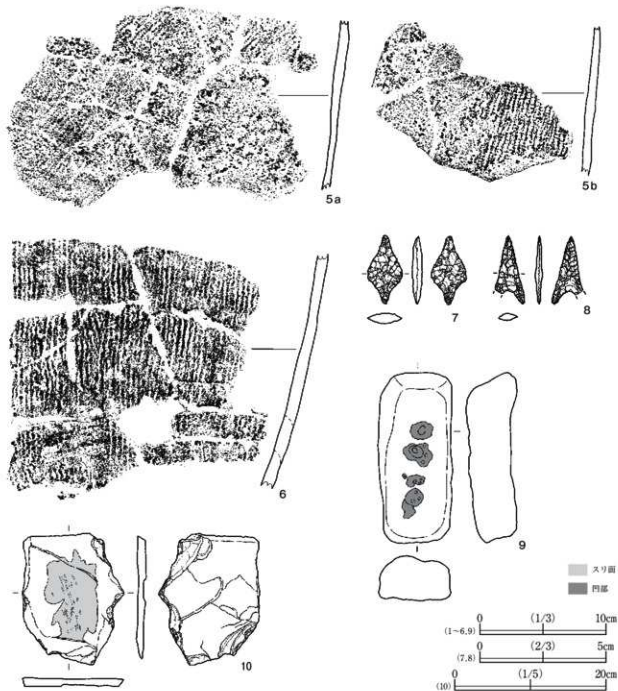
第11表 副葬品観察表

掲載番号	出土遺構	種類	材質	特徴	計測値
242	2号墓	煙管	銅製	吸口 羅字一部残存	吸口長4.5cm
243	2号墓	刀子	鉄製	刃部欠損	茎長8.6cm
244	4号墓	煙管	銅製	雁首と吸口 羅字一部残存	雁首長4.9cm 吸口長8.0cm
245	4号墓	簪	銅製	先端耳かき(吉丁簪)	残存長11.0cm
246	4号墓	小碗	陶器	大塚相馬 灰釉	口径6.8cm 器高3.5cm
247	4号墓	数珠	木製	依形 3個	径0.8cm
248	5号墓	煙管	銅製	雁首と吸口 羅字一部残存	雁首長4.1cm 吸口長7.8cm
249	5号墓	鉄	鉄製	裁ち鉄 基部側欠損	全長推定15.4cm
250	9号墓	煙管	銅製	羅字一部残存	吸口長6.8cm
251	10号墓	煙管	銅製	雁首 羅字一部残存	雁首長5.8cm
252	10号墓	刀子	鉄製	鉄銭鑄着 茎一部残存	刃部長12.5cm
253	12号墓	煙管	銅製	雁首と吸口 羅字一部残存	雁首長4.3cm 吸口残存長5.2cm
254	12号墓	刀子	鉄製	先端茎欠損	残存長9.0cm
255	不明	煙管	銅製	雁首 羅字一部残存	雁首長4.3cm
256	不明	刀子	鉄製	先端茎欠損	残存長9.1cm
257	不明	不明	鉄製	側縁短く折れ曲がる 目釘穴あり	残存長17.6cm
258	不明	鎌	鉄製	柄欠損	刃部長18.0cm

SI02住居跡

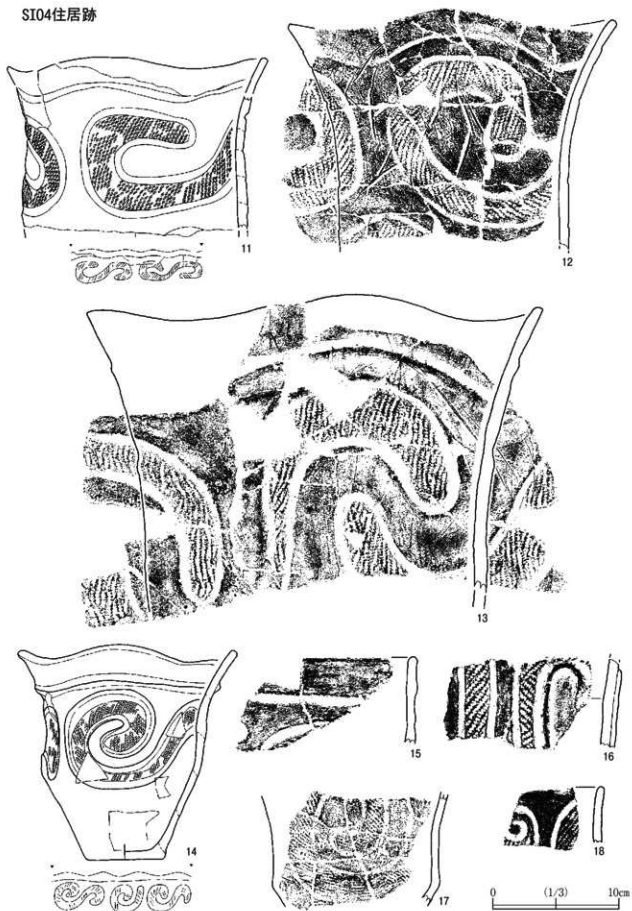


SI03住居跡



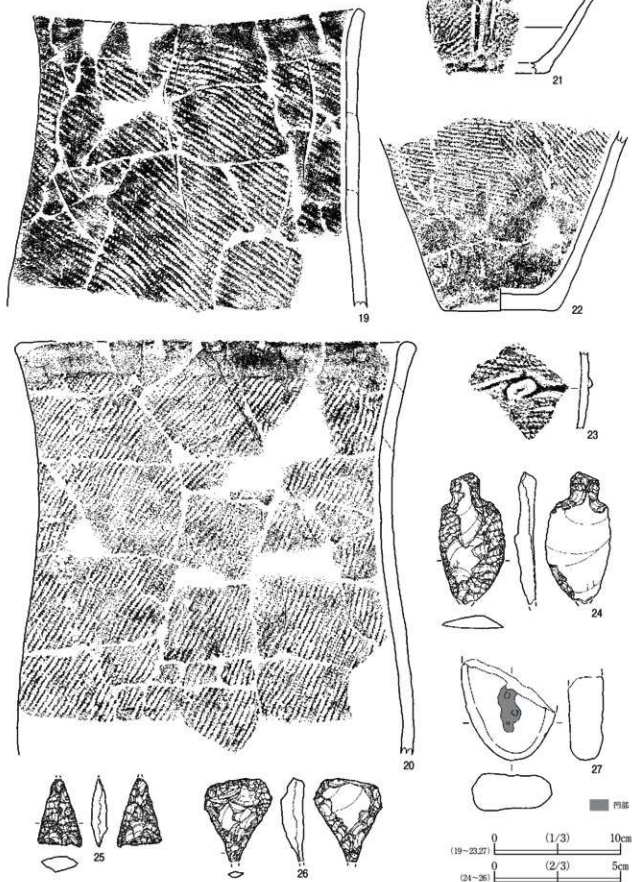
第47図 遺物 (1) SI02-03

SI04住居跡



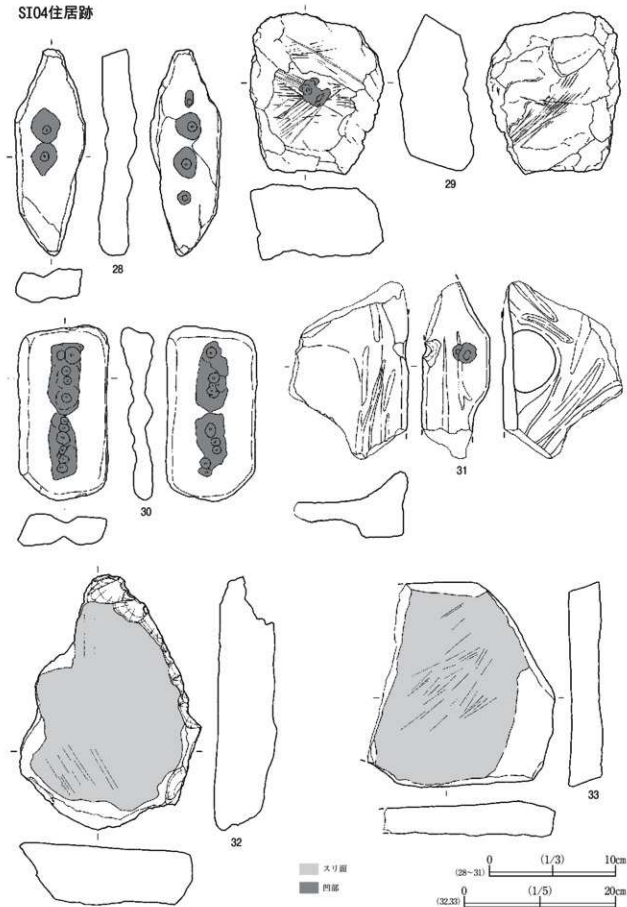
第48図 遺物 ② SI04

SI04住居跡



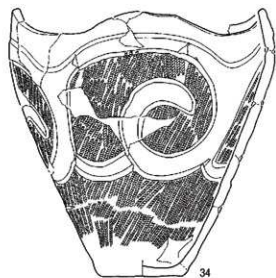
第49図 遺物 ③ SI04

SI04住居跡



第50図 遺物(4) SI04

SI05住居跡



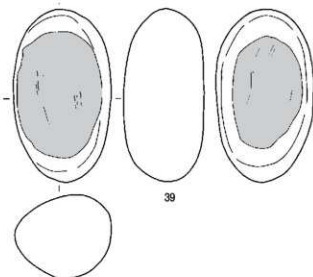
34



35



36



39

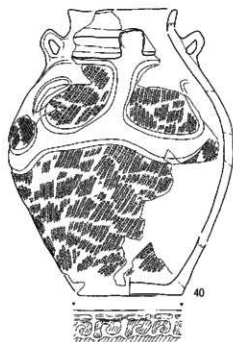


37

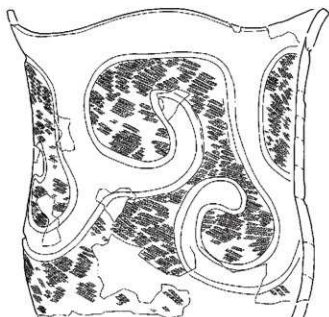


38

SI06住居跡



40



41



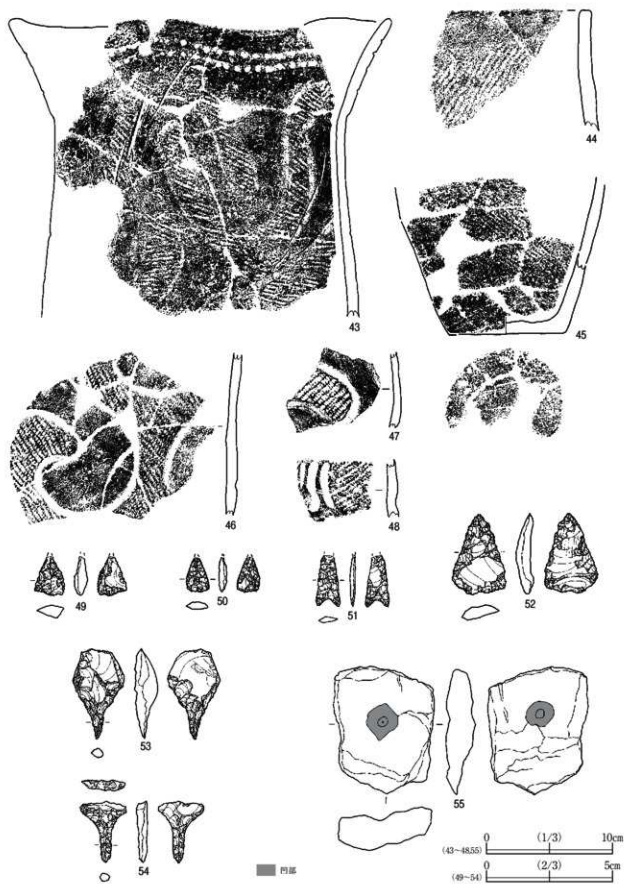
42

スリ面

0 (1/3) 10cm

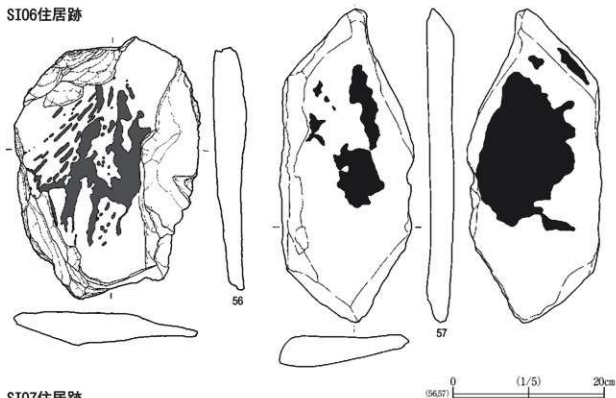
第51図 遺物 (5) SI05-06

SI06住居跡



第52図 遺物 (6) SI06

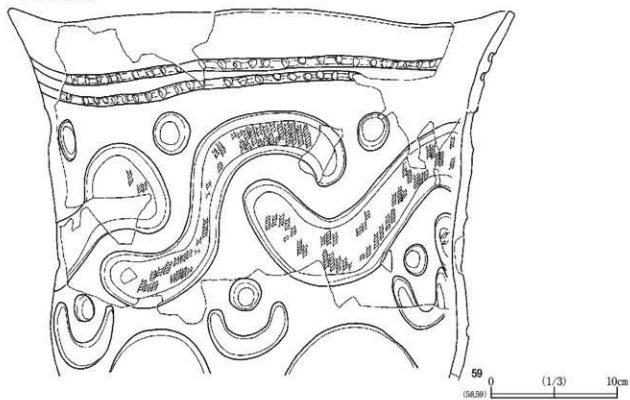
SI06住居跡



SI07住居跡

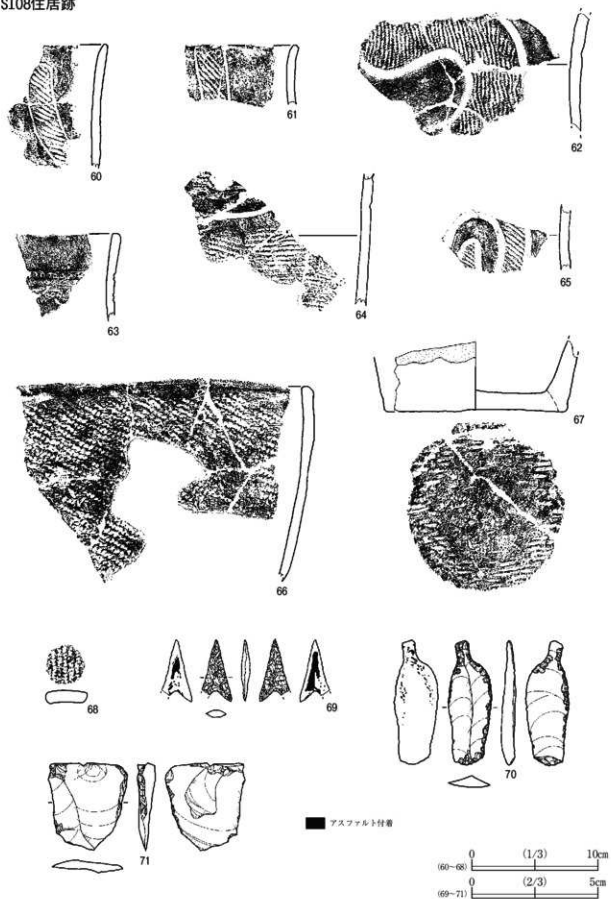


SI08住居跡



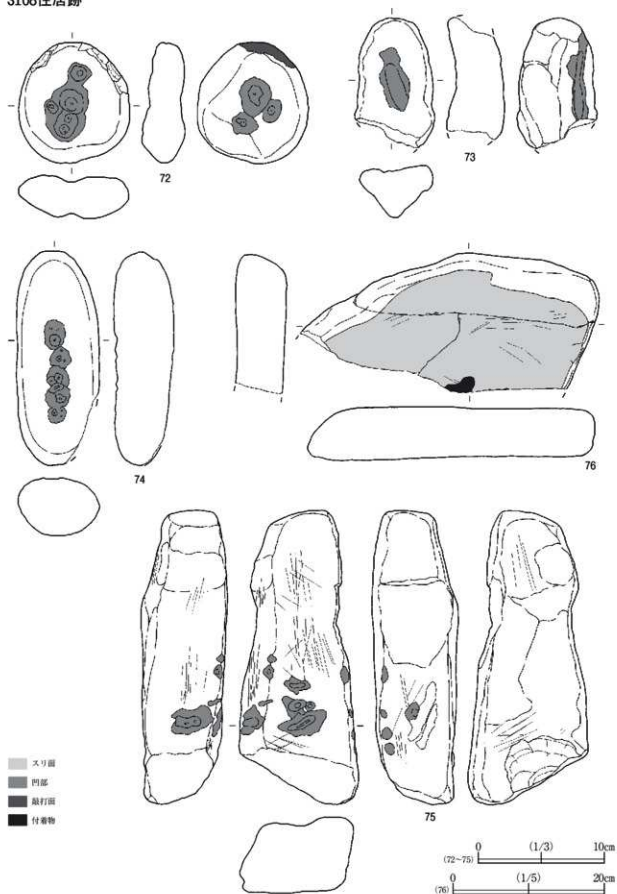
第53図 遺物 ⑦ SI06-07-08

SI08住居跡



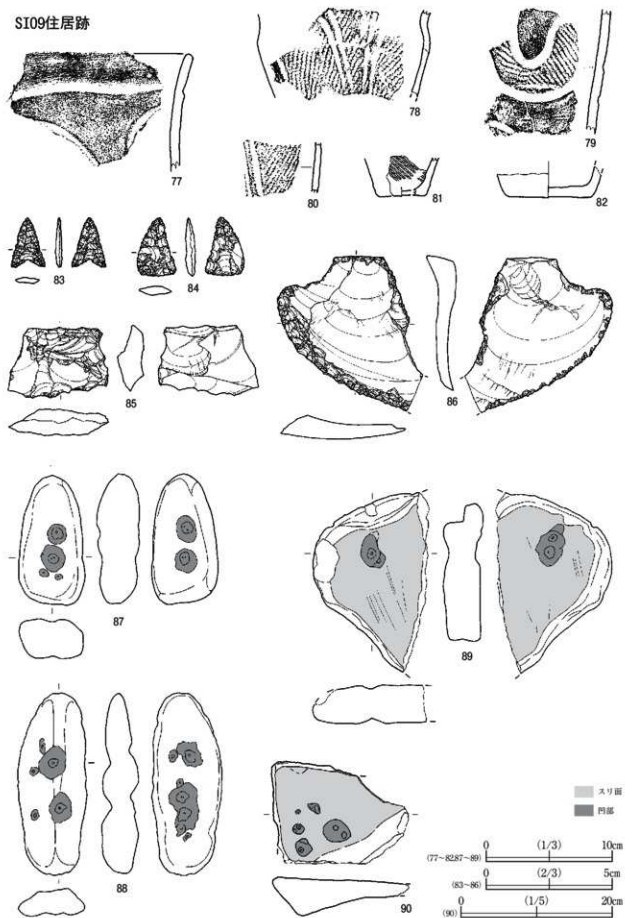
第54図 遺物 ⑧ SI08

SI08住居跡



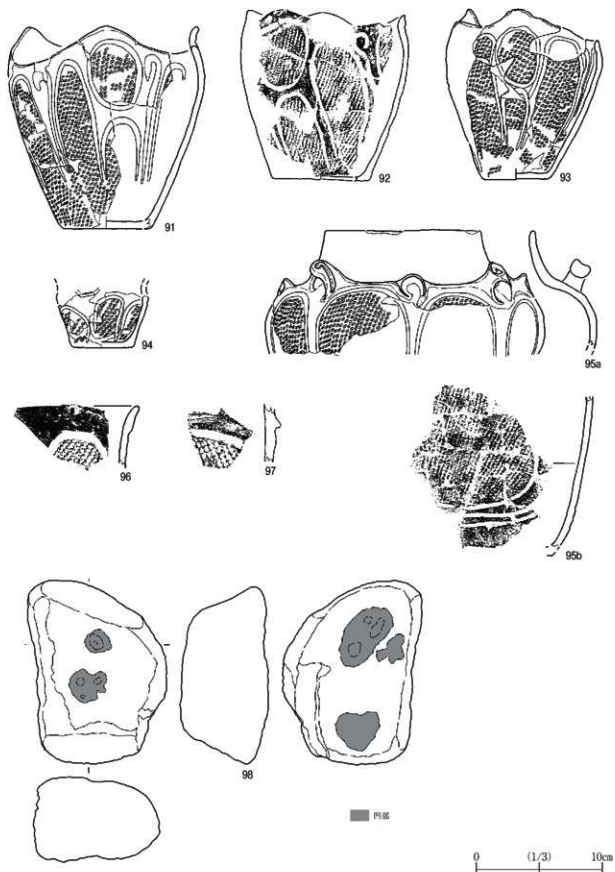
第55図 遺物 ⑨ SI08

SI09住居跡



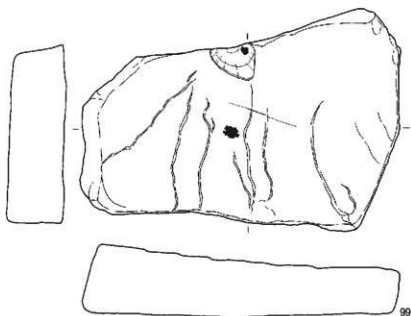
第56図 遺物 (10) SI09

SI10住居跡

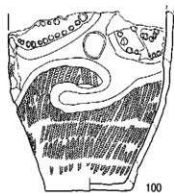


第57図 遺物 (11) SI10

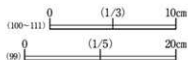
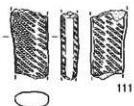
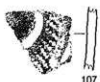
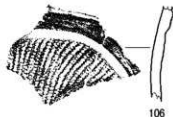
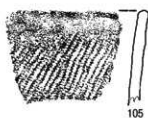
SI10住居跡



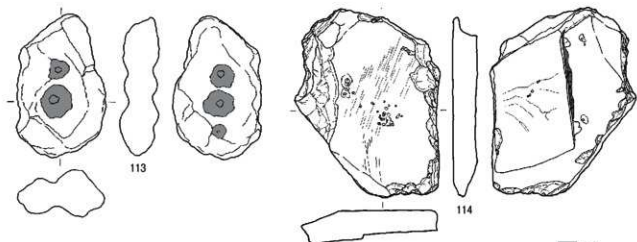
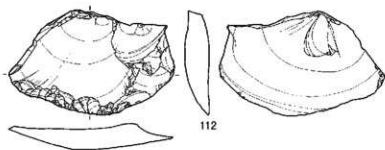
SI11住居跡



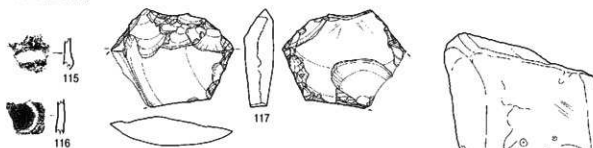
SI12住居跡



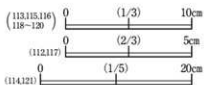
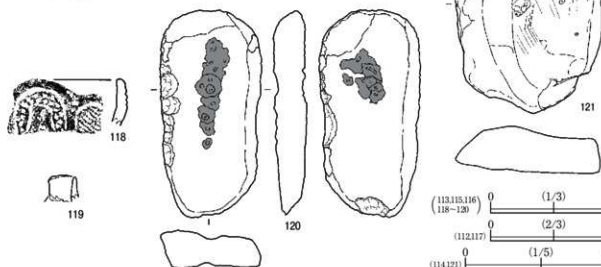
SI12住居跡



SI13住居跡

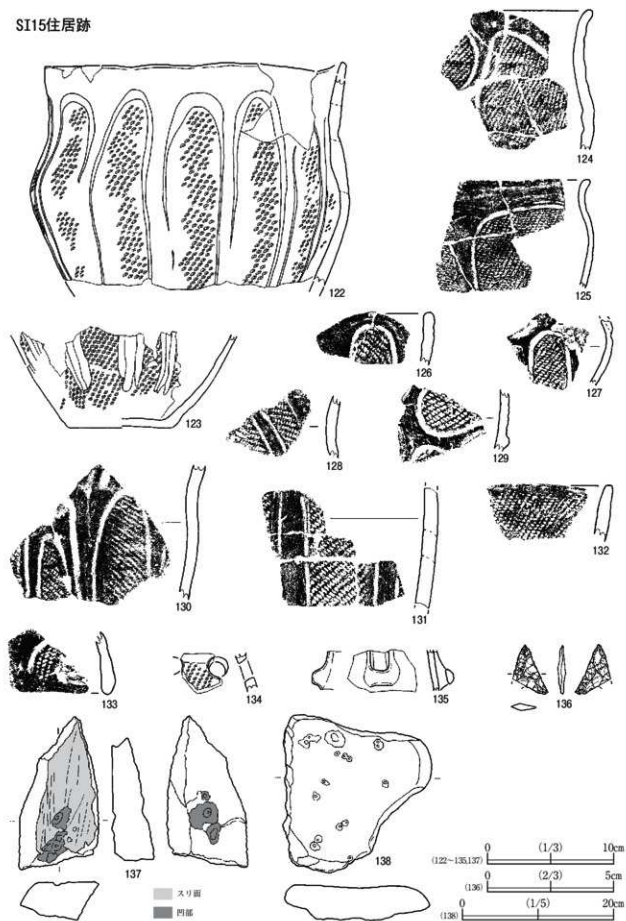


SI14住居跡



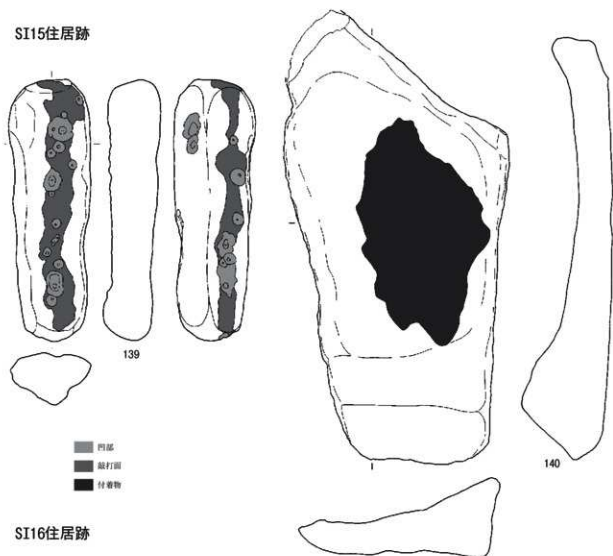
第59圖 遺物 (13) SI12-13-14

SI15住居跡

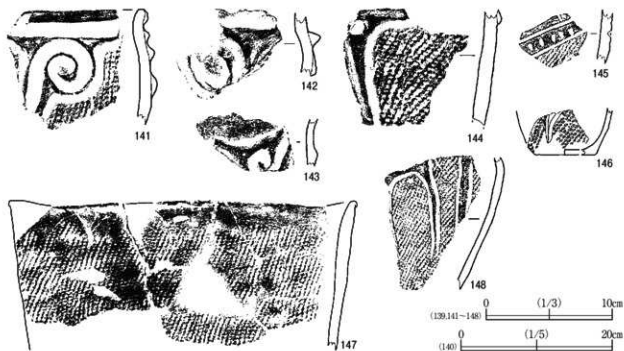


第60図 遺物 (14) SI15

SI15住居跡

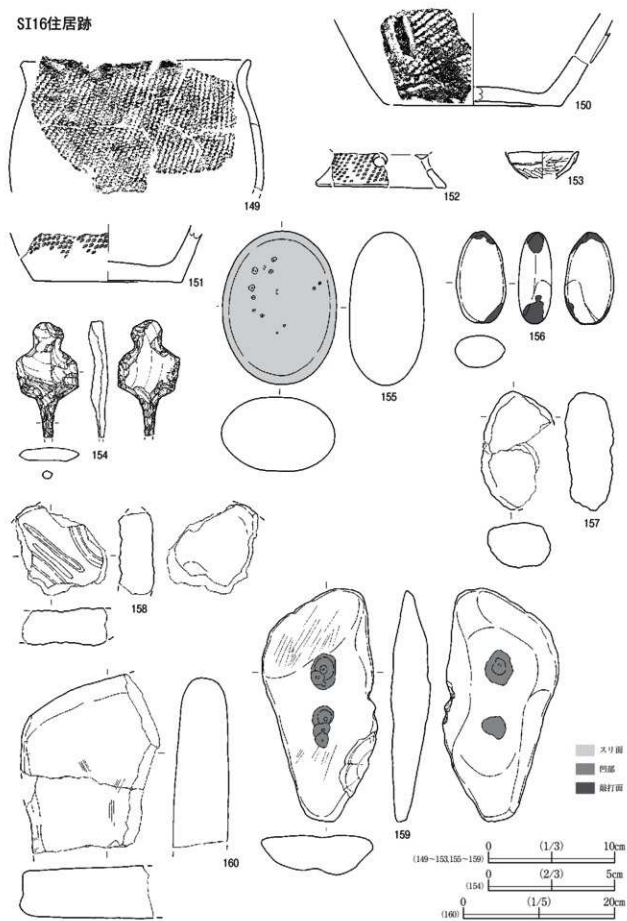


SI16住居跡



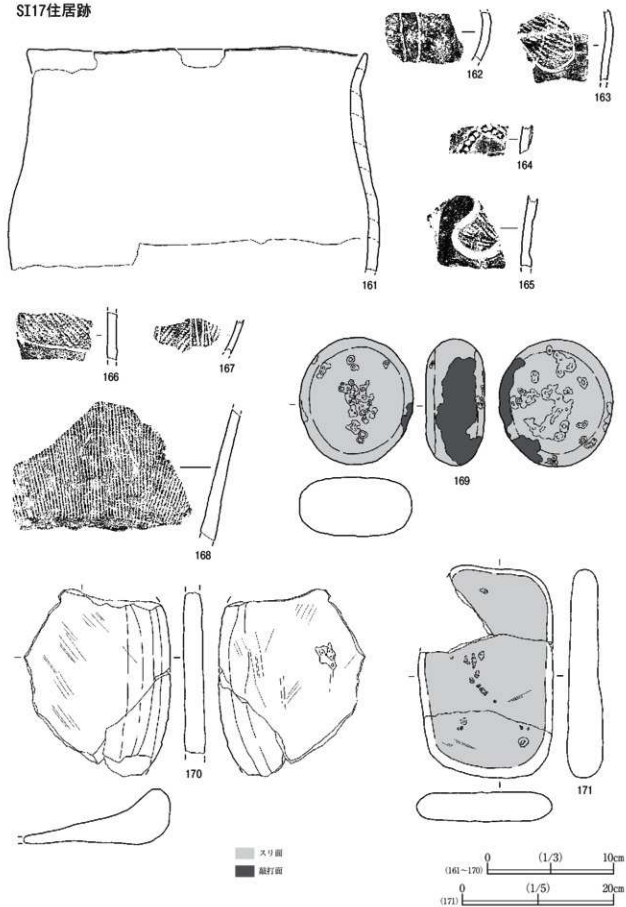
第61圖 遺物 (15) SI15・16

SI16住居跡



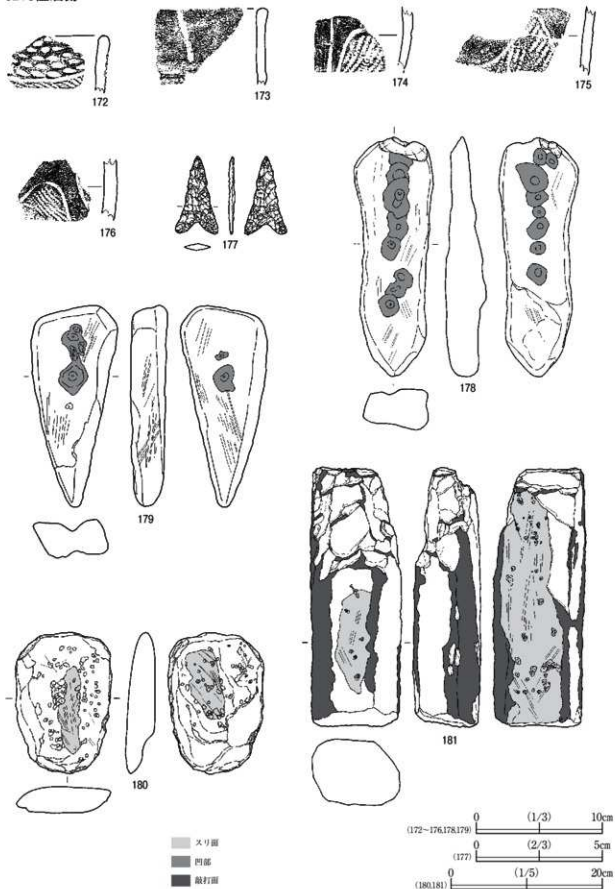
第62図 遺物 (16) SI16

SI17住居跡



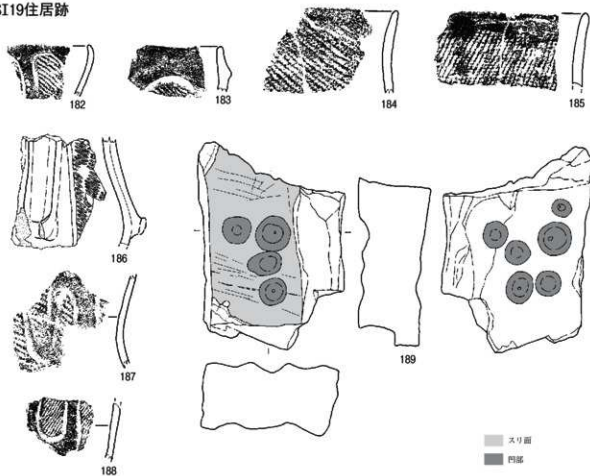
第63図 遺物 (17) SI17

SI18住居跡

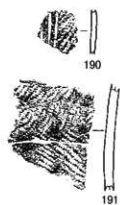


第64図 遺物 (18: SI18)

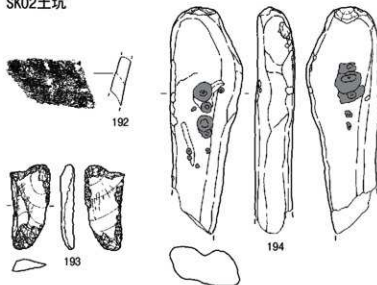
SI19住居跡



SX01竪穴状遺構



SK02土坑



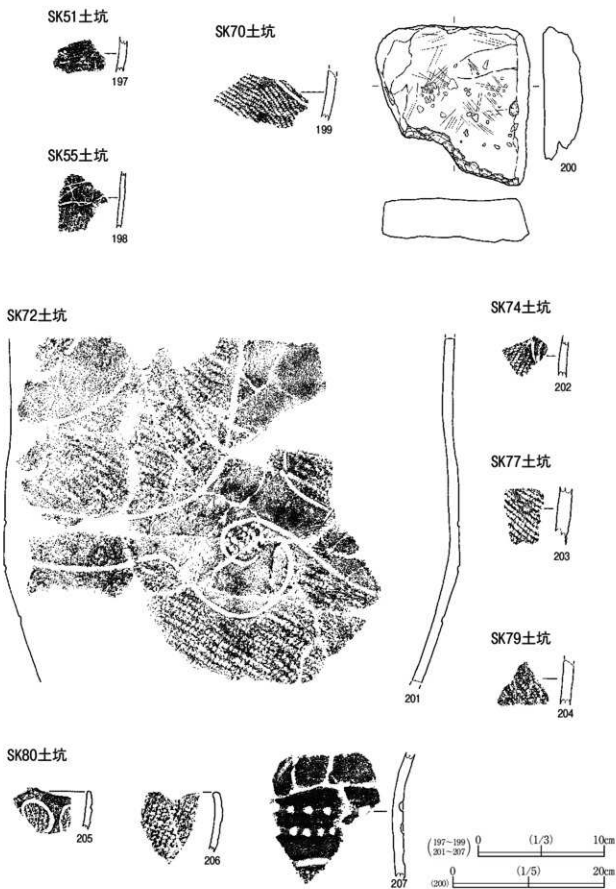
SK04土坑



SK09土坑

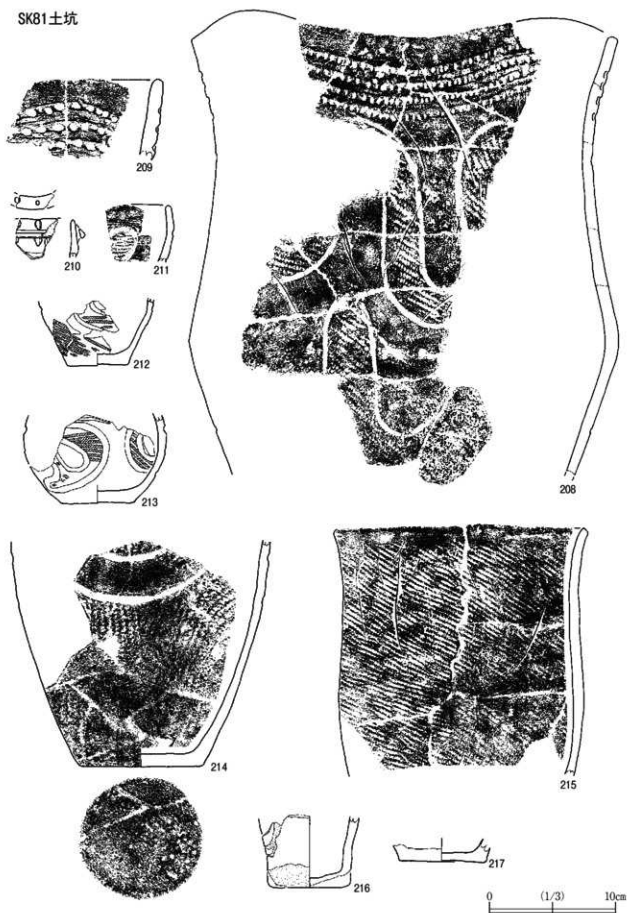


第65図 遺物 (19) SI19・竪穴状遺構・土坑



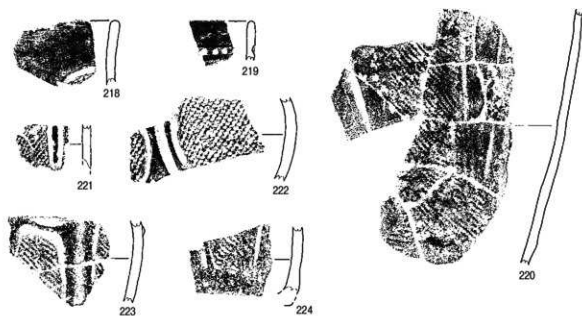
第66図 遺物 20 土坑

SK81土坑

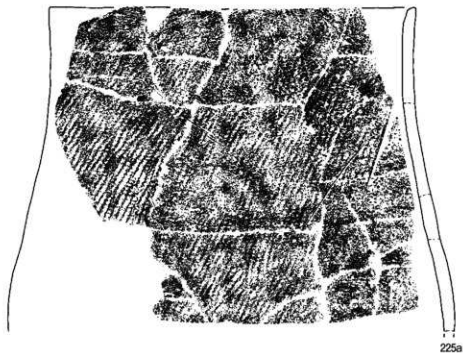


第67図 遺物 (21) 土坑

SK82土坑



SK83土坑

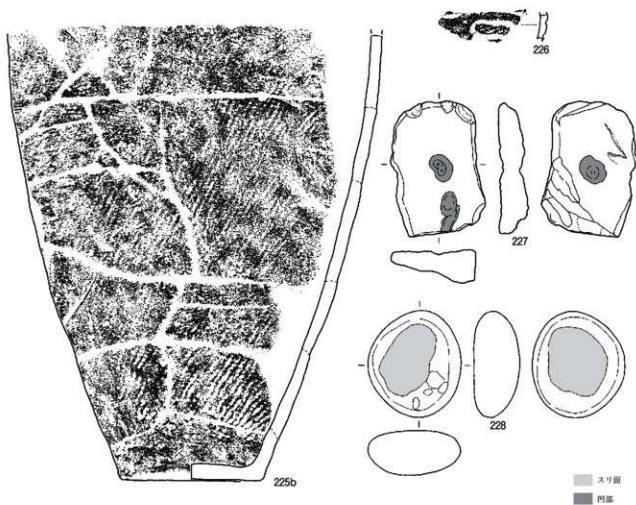


SK85土坑



0 (1/3) 10cm

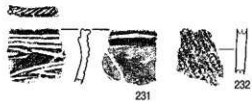
SK83土坑



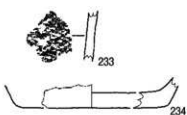
SK24陥し穴



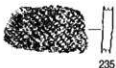
SK26陥し穴



SK30陥し穴



SK31陥し穴



SK57陥し穴



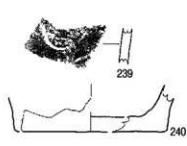
SK69陥し穴



SK60陥し穴



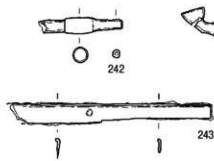
SK71陥し穴



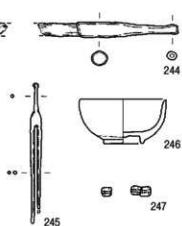
0 (1/3) 10cm

第69図 遺物 23: 土坑・陥し穴状遺構

2号墓



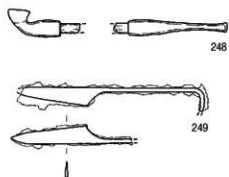
4号墓



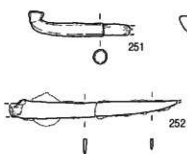
9号墓



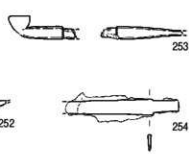
5号墓



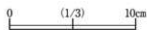
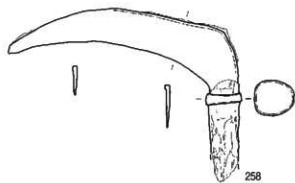
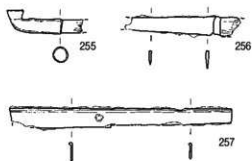
10号墓



12号墓



墓域一括



第70図 遺物(24) 近世墓

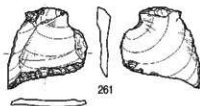
SD01溝跡



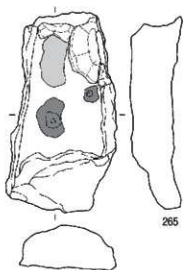
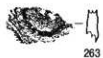
SD02溝跡



SD04溝跡



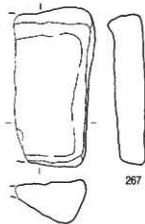
SD08溝跡



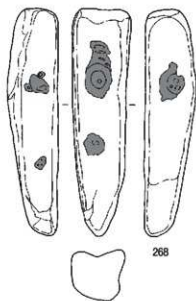
P019



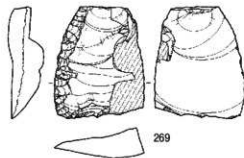
P029



P031



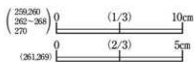
P032



P036

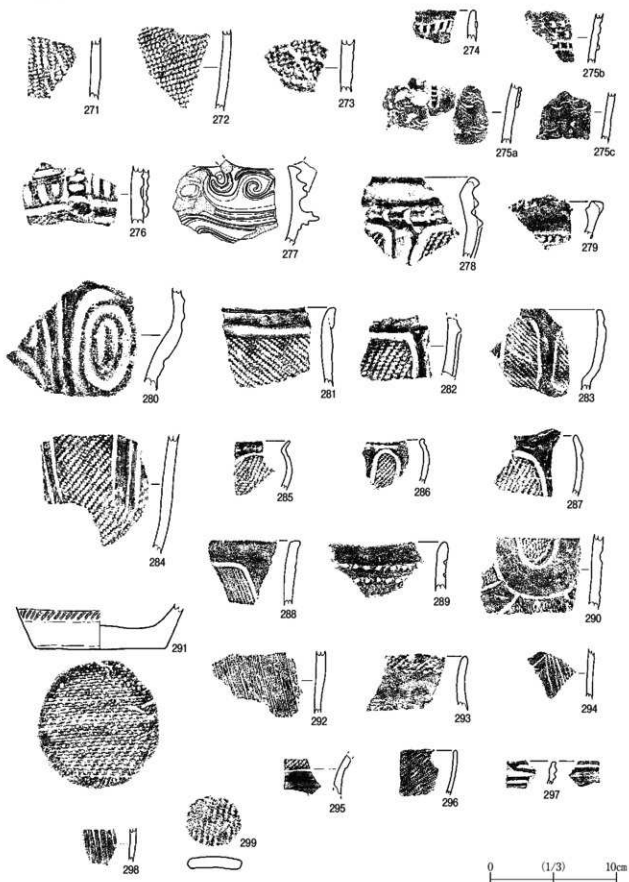


■ スリ面
■ 凹部

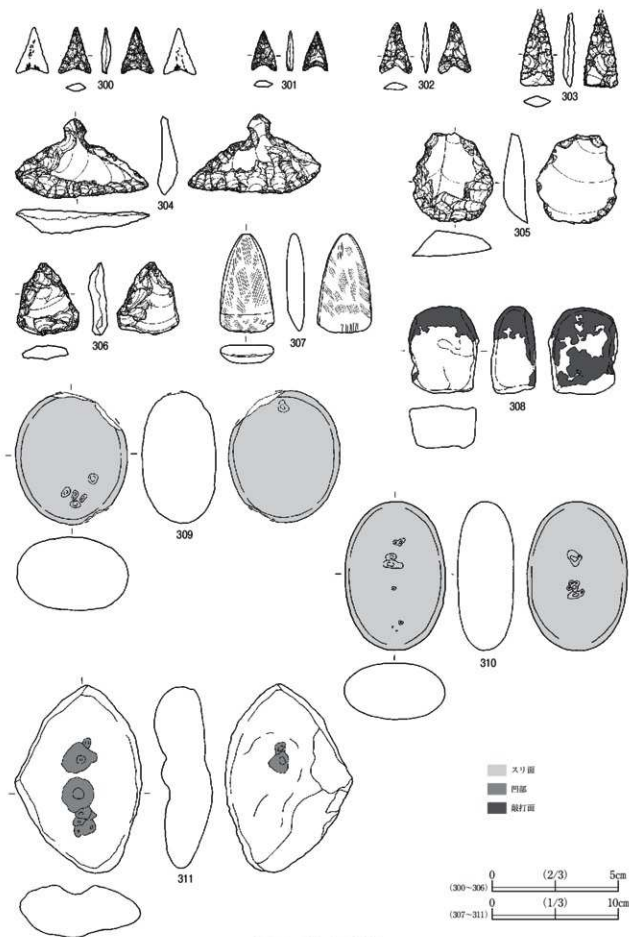


第71図 遺物 (25) 溝跡・柱穴状小土坑

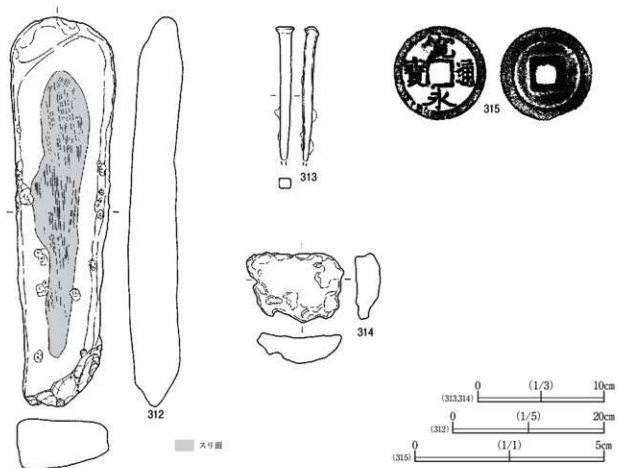
遺構外



第72図 遺物 (26) 遺構外



第73図 遺物(27)遺構外



第74図 遺物(28)遺構外

V 自然科学的分析

1 大畑Ⅲ遺跡における放射性炭素年代 (AMS測定)

(株) 加速器分析研究所

(1) 測定対象試料

大畑Ⅲ遺跡は、岩手県遠野市下鱒沢33地割210地内(北緯39° 17' 41"、東経141° 24' 21")に所在し、猿ヶ石川南岸の丘陵上に立地する。測定対象試料は、SI01住居跡床面出土木炭 (No. 1: IAAA-112704)、SI02住居跡炉内部出土木炭 (No. 2: IAAA-112705)、SI10住居跡炉埋土出土炭化物 (No.14: IAAA-112706)、SI05住居跡柱穴P1底面出土木炭 (No. 4: IAAA-112707)、SI06住居跡床面出土木炭 (No. 5: IAAA-112708)、SI06住居跡炉底面出土木炭 (No. 6: IAAA-112709)、SI06住居跡柱穴P4中位出土木炭 (No. 7: IAAA-112710)、SI08住居跡床面出土木炭 (No. 8: IAAA-112711、No. 9: IAAA-112712)、SI10住居跡炉焼土上面出土木炭 (No.10: IAAA-112713)、SI12住居跡柱穴P3底面出土木炭 (No.11: IAAA-112714)、SI15住居跡床面出土木炭 (No.12: IAAA-112715)、SI16住居跡炉埋土下部出土炭化物 (No.13: IAAA-112716) の合計13点である(表1)。No.13、14は炭化種実(オニグルミ核)と同定されている。

試料はすべて堅穴住居跡の床面、炉、柱穴等から出土している。SI06は焼失家屋で、埋土下半に焼土ブロックが散在し、その下位から炭化材が出土した。

出土土器の様相より、SI02が縄文時代晩期中葉から後葉、SI05、SI06、SI08、SI12が中期末、SI10、SI15、SI16が中期後葉と推定されている。SI01は堅穴の形状より縄文時代後期中葉から後葉と推定されるものの、土器が出土していないため明確でない。

(2) 測定の意義

遺跡内に位置する複数の住居跡の前後関係および集落の継続期間を明らかにする。特にSI01では土器が出土していないため、No. 1の測定が年代決定の唯一の手がかりとなる。また、SI06のNo. 5～7、SI08のNo. 8、9、SI10のNo. 10、14は各々同一遺構で出土しており、採取地点によって測定年代に差が生じるか確認する。

(3) 化学処理工程

- ① メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- ② 酸-アルカリ-酸 (AAA: Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/ℓ (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001M から1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- ③ 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO₂) を発生させる。
- ④ 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- ⑤ 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。

- ⑥ グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

(4) 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度(¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹²C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOxII)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

(5) 算出方法

- ① $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度(¹³C/¹²C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(表1)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- ② ¹⁴C年代(Libby Age: yrBP)は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。¹⁴C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。¹⁴C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- ③ pMC(percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。pMCが小さい(¹⁴Cが少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(¹⁴Cの量が標準現代炭素と同等以上)の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- ④ 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、¹⁴C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma=68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma=95.4\%$)で表示される。グラフの縦軸が¹⁴C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない¹⁴C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal09データベース(Reimer et al. 2009)を用い、OxCalv4.1較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、¹⁴C年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」)という単位で表される。

(6) 測定結果

試料の¹⁴C年代は、SI01住居跡床面のNo.1が $1880 \pm 20\text{yrBP}$ 、SI02住居跡炉内部のNo.2が $2560 \pm 20\text{yrBP}$ 、SI10住居跡炉埋土のNo.14が $4120 \pm 30\text{yrBP}$ 、SI05住居跡柱穴P1底面のNo.4が $4050 \pm 20\text{yrBP}$ 、SI06住居跡床面のNo.5が $4040 \pm 30\text{yrBP}$ 、SI06住居跡炉底面のNo.6が $4050 \pm 20\text{yrBP}$ 、SI06住居跡柱穴P4中位のNo.7が $4030 \pm 20\text{yrBP}$ 、SI08住居跡床面のNo.8が $4160 \pm 20\text{yrBP}$ 、No.9が $4120 \pm 30\text{yrBP}$ 、SI10住居跡炉焼土上面のNo.10が $4180 \pm 30\text{yrBP}$ 、SI12住居跡柱穴P3底面のNo.11が $4200 \pm$

30yrBP, SI15住居跡床面のNo.12が 4180 ± 30 yrBP, SI16住居跡炉埋土下部のNo.13が 4100 ± 30 yrBPである。同一遺構から出土したSI06のNo.5~7, SI08のNo.8, 9の値は各々誤差($\pm 1\sigma$)の範囲で重なり、近い年代を示す。SI10のNo.10, 14の値もおおむね近接している。

暦年較正年代(1 σ)は、No.1が80~132cal ADの範囲、No.2が795~671cal BCの間に2つの範囲、No.14が2854~2622cal BCの間に3つの範囲、No.4が2621~2497cal BCの間に2つの範囲、No.5が2618~2492cal BCの間に4つの範囲、No.6が2621~2497cal BCの間に2つの範囲、No.7が2575~2491cal BCの間に2つの範囲、No.8が2872~2679cal BCの間に6つの範囲、No.9が2852~2621cal BCの間に3つの範囲、No.10が2879~2702cal BCの間に3つの範囲、No.11が2883~2712cal BCの間に3つの範囲、No.12が2877~2700cal BCの間に3つの範囲、No.13が2840~2580cal BCの間に2つの範囲で示される。No.1は弥生時代後期頃に相当する値で、堅穴の形状から推定された時期とは異なる結果となった。No.2は縄文時代晩期中葉から後葉に当たる年代値で、土器から推定される時期と合致する。No.4~14の値はすべて縄文時代中期後葉から末葉頃に相当し、土器から推定される時期におおむね整合的であるが、遺構相互の前後関係や土器型式との対応関係等の詳細については、さらなる検討を要する。

なお、No.1が含まれる1~3世紀頃の暦年較正に関しては、北半球で広く用いられる較正曲線 IntCal09に対して日本産樹木年輪試料の測定値が系統的に異なるとの指摘がある(尾嵩2009, 坂本2010など)。その日本版較正曲線を用いてNo.1の測定結果を暦年較正した場合、ここで報告する較正年代値よりも新しくなる可能性がある。

試料の炭素含有率はすべて50%を超え、化学処理、測定上の問題は認められない。

文献

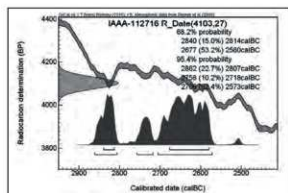
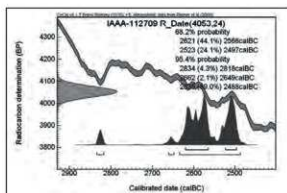
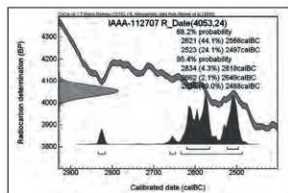
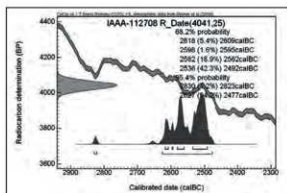
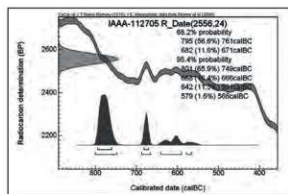
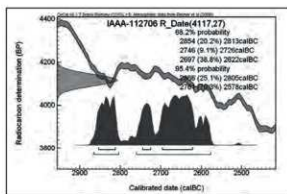
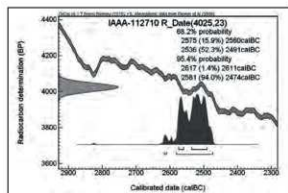
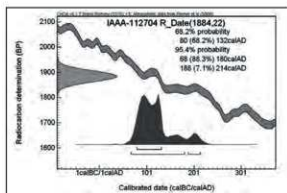
- Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19(3), 355-363
 Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360
 Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50000 years cal BP, Radiocarbon 51(4), 1111-1150
 尾嵩大真 2009 日本産樹木年輪試料の炭素14年代からみた弥生時代の実年代, 弥生時代の考古学1 弥生文化の輪郭, 同出版社, 225-235
 坂本 2010 較正曲線と日本産樹木-弥生から古墳へ-, 第5回年代測定と日本文化研究シンポジウム予稿集, (株) 加速器分析研究所, 85-90

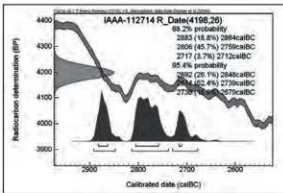
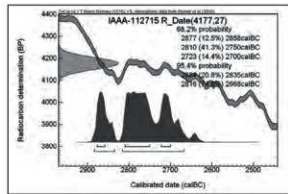
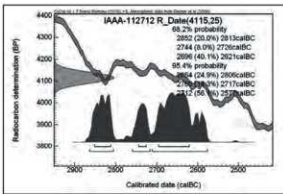
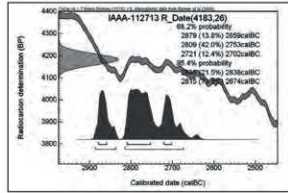
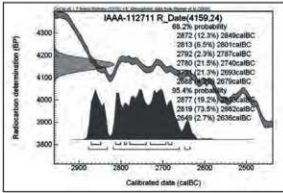
表 1

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-112704	No.1	SI01住居跡 床面	木炭	AAA	-29.51 \pm 0.43	1,880 \pm 20	79.09 \pm 0.22
IAAA-112705	No.2	SI02住居跡 炉内部	木炭	AAA	-30.53 \pm 0.46	2,560 \pm 20	72.74 \pm 0.22
IAAA-112706	No.14	SI10住居跡 炉埋土	炭化物	AAA	-32.22 \pm 0.52	4,120 \pm 30	59.89 \pm 0.21
IAAA-112707	No.4	SI05住居跡 柱穴P1底面	木炭	AAA	-31.46 \pm 0.46	4,050 \pm 20	60.37 \pm 0.18
IAAA-112708	No.5	SI06住居跡 床面	木炭	AAA	-29.09 \pm 0.28	4,040 \pm 30	60.46 \pm 0.19
IAAA-112709	No.6	SI06住居跡 炉底面	木炭	AAA	-27.48 \pm 0.36	4,050 \pm 20	60.38 \pm 0.18
IAAA-112710	No.7	SI06住居跡 柱穴P4中位	木炭	AaA	-28.46 \pm 0.38	4,030 \pm 20	60.59 \pm 0.18
IAAA-112711	No.8	SI08住居跡 床面	木炭	AAA	-29.17 \pm 0.40	4,160 \pm 20	59.58 \pm 0.18
IAAA-112712	No.9	SI08住居跡 床面	木炭	AAA	-31.08 \pm 0.54	4,120 \pm 30	59.91 \pm 0.19
IAAA-112713	No.10	SI10住居跡 炉埋土上面	木炭	AAA	-32.10 \pm 0.41	4,180 \pm 30	59.40 \pm 0.20
IAAA-112714	No.11	SI12住居跡 柱穴P3底面	木炭	AAA	-30.67 \pm 0.41	4,200 \pm 30	59.29 \pm 0.19
IAAA-112715	No.12	SI15住居跡 床面	木炭	AAA	-30.03 \pm 0.41	4,180 \pm 30	59.45 \pm 0.20
IAAA-112716	No.13	SI16住居跡 炉埋土下部	炭化物	AAA	-28.72 \pm 0.51	4,100 \pm 30	60.00 \pm 0.20

表 2 (1)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年校正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-112704	1.960 ± 20	78.36 ± 0.21	1.884 ± 22	80calAD - 132calAD (68.2%)	68calAD - 180calAD (88.3%) 188calAD - 214calAD (7.1%)
IAAA-112705	2.650 ± 20	71.92 ± 0.20	2.556 ± 24	795calBC - 761calBC (56.6%) 682calBC - 671calBC (11.6%)	682calBC - 671calBC (11.6%) 801calBC - 749calBC (65.9%) 688calBC - 666calBC (16.4%) 642calBC - 591calBC (11.5%) 579calBC - 566calBC (1.6%)
IAAA-112706	4.240 ± 30	59.01 ± 0.19	4.117 ± 27	285calBC - 2813calBC (20.2%) 2746calBC - 2726calBC (9.1%) 2697calBC - 2622calBC (38.8%)	2866calBC - 2805calBC (25.1%) 2761calBC - 2578calBC (70.3%)
IAAA-112707	4.160 ± 20	59.58 ± 0.17	4.053 ± 24	2621calBC - 2566calBC (44.1%) 2523calBC - 2497calBC (24.1%)	2834calBC - 2818calBC (4.3%) 2662calBC - 2649calBC (2.1%) 2635calBC - 2488calBC (89.0%)
IAAA-112708	4.110 ± 30	59.96 ± 0.19	4.041 ± 25	2618calBC - 2609calBC (5.4%) 2598calBC - 2595calBC (1.6%) 2582calBC - 2562calBC (18.9%) 2536calBC - 2492calBC (42.3%)	2830calBC - 2823calBC (1.2%) 2627calBC - 2477calBC (94.2%)
IAAA-112709	4.090 ± 20	60.07 ± 0.18	4.053 ± 24	2621calBC - 2566calBC (44.1%) 2523calBC - 2497calBC (24.1%)	2834calBC - 2818calBC (4.3%) 2662calBC - 2649calBC (2.1%) 2635calBC - 2488calBC (89.0%)
IAAA-112710	4.080 ± 20	60.16 ± 0.17	4.025 ± 23	2575calBC - 2560calBC (15.9%) 2536calBC - 2491calBC (52.3%)	2617calBC - 2611calBC (1.4%) 2581calBC - 2474calBC (94.0%)
IAAA-112711	4.230 ± 20	59.07 ± 0.17	4.159 ± 24	2872calBC - 2849calBC (12.3%) 2813calBC - 2801calBC (6.5%) 2792calBC - 2787calBC (2.3%) 2780calBC - 2740calBC (21.5%) 2731calBC - 2693calBC (21.3%) 2688calBC - 2679calBC (4.3%)	2877calBC - 2833calBC (19.2%) 2819calBC - 2662calBC (73.5%) 2649calBC - 2636calBC (2.7%)
IAAA-112712	4.220 ± 20	59.17 ± 0.18	4.115 ± 25	2852calBC - 2813calBC (20.0%) 2744calBC - 2726calBC (8.0%) 2696calBC - 2621calBC (40.1%)	2864calBC - 2806calBC (24.9%) 2760calBC - 2717calBC (14.3%) 2712calBC - 2577calBC (56.1%)
IAAA-112713	4.300 ± 30	58.54 ± 0.19	4.183 ± 26	2879calBC - 2859calBC (13.8%) 2809calBC - 2753calBC (42.0%) 2721calBC - 2702calBC (12.4%)	2886calBC - 2838calBC (21.5%) 2815calBC - 2674calBC (73.9%)
IAAA-112714	4.290 ± 30	58.61 ± 0.19	4.198 ± 26	2883calBC - 2864calBC (18.8%) 2806calBC - 2759calBC (45.7%) 2717calBC - 2712calBC (3.7%)	2892calBC - 2848calBC (26.1%) 2814calBC - 2739calBC (52.4%) 2730calBC - 2679calBC (16.8%)
IAAA-112715	4.260 ± 30	58.84 ± 0.19	4.177 ± 27	2877calBC - 2858calBC (12.5%) 2810calBC - 2750calBC (41.3%) 2723calBC - 2700calBC (14.4%)	2884calBC - 2835calBC (20.8%) 2816calBC - 2668calBC (74.6%)
IAAA-112716	4.170 ± 30	59.54 ± 0.19	4.103 ± 27	2840calBC - 2814calBC (15.0%) 2677calBC - 2580calBC (53.2%)	2862calBC - 2807calBC (22.7%) 2758calBC - 2718calBC (10.2%) 2706calBC - 2573calBC (62.4%)





[参考] 暦年較正年代グラフ

2 大畑Ⅲ遺跡出土遺物の自然科学分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

遠野市に所在する大畑Ⅲ遺跡は、北上山地南部を流れる猿石川上流域の支流である家老沢の右岸に分布する丘陵上に位置する。調査区は、丘陵裾部の緩斜面上から丘陵頂部までおよび、その標高は245～274mを測るとされている。発掘調査では、縄文時代中期後葉～末とされる集落が確認されており、堅穴住居跡や土坑などの遺構が多数検出され、これらの遺構に伴う縄文土器や石器などの遺物も多数出土している。

本報告では、縄文時代の遺構を埋積する覆土に認められた火山灰（テフラ）とされる堆積物の特性を明らかにすることにより、遺構に関する年代資料を作成し、住居跡の炉や床面から出土した炭化材および炭化種実の種類を同定することにより、当該期の植物利用について考察する。

I. 火山灰の分析

1. 試料

試料は、縄文時代中期後葉とされる堅穴住居跡であるSI04住居跡の覆土の攪乱部（風倒木痕埋土）から採取された番号1と時期の特定されていないSK40土坑の覆土の1層から採取された番号2の2点である。番号1は、黄褐色を呈するシルト混じりの中砂～細砂である。試料の肉眼観察では、径1mm程度の非常に淘汰のよい軽石粒が多く含まれていることがわかる。番号2は黄褐色を呈する砂質シルトであり、砂分は主に細砂径である。肉眼観察からは、細粒火山灰の外観を呈すると言える。

発掘調査所見では、両試料はともに十和田中振テフラ（To-Cu:Hayakawa, 1985）に相当する可能性があると考えられている。

2. 分析方法

(1) テフラの検出同定

試料約20gを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。

各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状等の塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

(2) 重鉱物・火山ガラス比分析および屈折率測定

試料約40gに水を加え超音波洗浄装置により分散、250メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた粒径1/4mm-1/8mmの砂分をボリタングステン酸ナトリウム（比重約2.96に調整）により重液分離、重鉱物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。重鉱物同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可

能な粒子は「その他」とする。火山ガラス比は、重液分離した軽鉱物分における砂粒を250粒数え、その中の火山ガラスの量比を求める。火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。また、火山ガラス比における「その他」は、主に石英および長石などの鉱物粒と変質等で同定の不可能な粒子を含む。

屈折率測定は、古澤(1995)のMAIOTを使用した温度変化法を用いた。測定の対象は火山ガラスおよび重鉱物組成で多量に含まれる斜方輝石を対象とする。

3. 結 果

(1) テフラの検出同定

結果を表1に示す。番号1のSI04住居跡採取試料では、少量の火山ガラスと多量の軽石が検出された。火山ガラスは、無色透明の軽石型がほとんどであるが、極めて微量の無色透明のバブル型も含まれる。軽石は、最大径約1.7mmであり、粒径の淘汰度は非常に良好である。色調は白色を呈し、発泡は良好～やや良好である。軽石の中には、不透明鉱物(おそらく磁鉄鉱が多い)の斑晶を包有するものも認められた。

番号2のSK40土坑採取試料では、中量の火山ガラスが検出された。火山ガラスの多くは、無色透明の軽石型であるが、極めて微量の褐色を帯びた軽石型も認められた。

表1 テフラ分析結果

番号	出土年月日	遺構名	出土地点	スコリア		火山ガラス		軽石		
				量	量	色調・形態	量	色調・発泡度	最大粒径	
1	110809	SI04住居跡	攪乱(風倒木炭埋土)	-	++	cl・pm>>cl・bw	++++	W・g-sg(opq)		1.7
2	110615	SK40土坑	1層	-	+++	cl・pm>>br・pm	-			

凡例 - :含まれない。(+) :きわめて微量。+ :微量。++ :少量。+++ :中量。++++ :多量。

cl :無色透明。br :褐色。bw :バブル型。md :中間型。pm :軽石型。

W :白色。

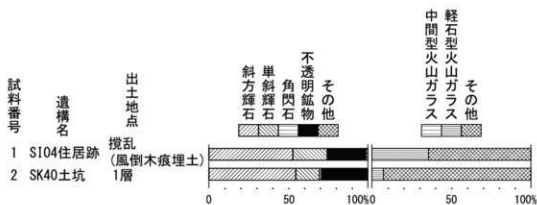
g :良好。sg :やや良好。sb :やや不良。b :不良。(opq) :不透明鉱物斑晶包有。最大粒径はmm。

(2) 重鉱物・火山ガラス比分析および屈折率測定

結果を表2、第1図に示す。重鉱物組成は、2点の試料ともにはほぼ同様であり、斜方輝石が最も多く、約50%を占め、次いで不透明鉱物が20~30%程度を占め、単斜輝石が10~20%を占める。なお、番号2には極めて微量の角閃石も含まれる。火山ガラス比では、番号1に中量の軽石型火山ガラスが含まれ、番号2には少量の軽石型と極めて微量の中間型が含まれる。

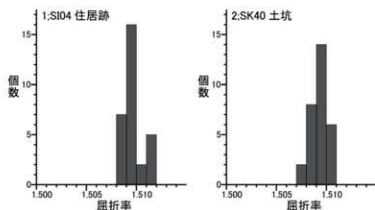
表2 重鉱物・火山ガラス比分析結果

番号	出土年月日	遺構名	出土地点	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	不透明鉱物	その他	合計	火山ガラス型	火山方間ラス型	火山軽石型	その他	合計
1	110809	SI04住居跡	攪乱(風倒木炭埋土)	132	54	0	61	3	250	0	0	89	161	250
2	110615	SK40土坑	1層	136	37	3	73	1	250	0	2	18	230	250

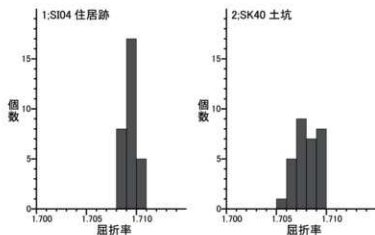


第1図 テフラ試料の重鉱物組成および火山ガラス比

火山ガラスの屈折率の測定結果を第2図に示す。番号1は、 $n_{1.508-1.511}$ のレンジを示し、 $n_{1.509}$ 付近にモードがある。番号2は、番号1とは同様の $n_{1.507-1.510}$ のレンジを示し、モードも同様の $n_{1.509}$ 付近を示す。斜方輝石の屈折率の測定結果を第3図に示す。番号1は、 $\gamma_{1.708-1.710}$ のレンジを示し、 $\gamma_{1.709}$ 付近にモードがある。番号2は、番号1より若干低い側にレンジが広がり、 $\gamma_{1.705-1.709}$ のレンジを示し、モードは $\gamma_{1.707-1.709}$ になる。



第2図 火山ガラスの屈折率



第3図 斜方輝石の屈折率

4. 考 察

テフラ分析により、番号1からは、細粒の白色軽石を主体とし、軽石型火山ガラスと極めて微量のバブル型火山ガラスを伴うテフラが検出され、番号2からは、軽石型火山ガラスを主体とし、極めて微量の褐色を帯びた軽石型火山ガラスを伴うテフラが検出された。発掘調査所見で

は、両試料ともにTo-Cuの可能性があるとされたが、上述した碎屑物の特徴の違いから、両試料は互いに異なるテフラであると考えられる。

これまでに研究された東北地方におけるテフラの産状(町田ほか(1981;1984), Arai et al. (1986), 町田・新井(2003)など)との比較から、今回の試料のうち、番号2については、To-Cuに対比される可能性があると考えられる。To-Cuの噴出年代については、暦年で約6,200年前とされている(工藤・佐々木, 2007)ことから、東日本の縄文時代の暦年による年代観(小林, 2008)では前期中頃に

相当する。SK40土坑の構築年代あるいは埋積年代とTo-Cuの噴出年代との関係を明らかにするためには、番号2が採取された覆土断面におけるテフラの産状と土坑周囲の土層におけるテフラの産状とを確認し、比較検討する必要がある。

番号1は、バブル型火山ガラスが含まれることと、斜方輝石のレンジがTo-Cuのそれに比べると高い側に狭いことから、To-Cuには対比されない可能性がある。その特性に近いテフラとしては、十和田大不動テフラ (To-Of Hayakawa, 1985) があげられる。To-Ofの降下堆積物は東北北部に広範に認められ、さらに火砕流堆積物も十和田湖周辺域だけでなく、秋田県北部および岩手県北部まで分布が認められている (町田・新井, 2003)。また、その噴出年代は、3.2万年前より若干古いとされている (町田・新井, 2003)。番号1は、縄文時代中期末とされる竪穴住居跡の覆土より採取されているが、採取された位置は攪乱された風倒木痕埋土である。このことを考慮すれば、番号1のTo-Ofは、住居跡の構築されているローム層中に堆積しているTo-Ofの降下堆積層に由来すると考えられる。

II. 炭化材の樹種同定

1. 試料

試料は、竪穴住居跡や土坑から出土した炭化材11点 (番号1-11) である。各試料の出土した遺構名、出土地点などは、結果を呈示した表3に併記する。

2. 分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口 (横断面)・柃目 (放射断面)・板目 (接線断面) の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東 (1982) や Wheeler 他 (1998) を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林 (1991) や伊東 (1995, 1996, 1997, 1998, 1999) を参考にする。

3. 結果

樹種同定結果を表3に示す。炭化材は、広葉樹5分類群 (コナラ属コナラ亜属コナラ節・クリ・スルデ・ミズキ属・エゴノキ属) に同定された。同定された各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Prinus*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1-3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火災状に配列す

表3 炭化材樹種同定結果

番号	遺構	位置・層位等	時代	形状	樹種
1	SI01住居跡	炉北欄床面	縄文時代後期	破片	コナラ属コナラ亜属コナラ節
2	SI02住居跡	炉内部	縄文時代晩期	破片	クリ
3	SI06住居跡	QSE床面炭化物7	縄文時代中期末	破片	クリ
4	SI06住居跡	QSE床面炭化物8	縄文時代中期末	破片	クリ
5	SI06住居跡	床面炭化物6	縄文時代中期末	破片	スルデ
6	SI06住居跡	QSE床面	縄文時代中期末	破片	エゴノキ属
7	SI06住居跡	P14堆積土中位	縄文時代中期末	破片	クリ
8	SI08住居跡	東壁際床面	縄文時代中期末	破片	ミズキ属
9	SI08住居跡	床面No.1	縄文時代中期末	破片	ミズキ属
10	SI08住居跡	QSE床面	縄文時代中期末	破片	ミズキ属
11	SK34土坑	埋土		破片	コナラ属コナラ亜属コナラ節

る。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は3-4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高。

・スルデ (*Rhus javanica* L.) ウルシ科ウルシ属

環孔材で、孔圏部は1列分のみ確認できるが、後は破損している。晩材部の小道管は2-5個が塊状に複合して配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-3細胞幅、1-30細胞高。

・ミズキ属 (*Swida*) ミズキ科

散孔材で、管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、ほぼ単独で散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～交互状に配列する。放射組織は上下縁辺部が直立細胞となる異性、1-4細胞幅、1-30細胞高。

・エゴノキ属 (*Styrax*) エゴノキ科

散孔材で、横断面では楕円形、単独または2-4個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-3細胞幅、1-20細胞高。

4. 考 察

炭化材には、合計5分類群が認められた。いずれも二次林等の落葉広葉樹林に生育する種類である。各分類群の材質をみると、スルデを除く4分類群は、比較的重硬で強度が高い。スルデは、軽軟な部類に入り、強度は低いが、耐水性があるとされる。

炭化材が出土した遺構は、縄文時代中期末の堅穴住居跡を中心に、縄文時代晩期および弥生時代後期の堅穴住居、土坑がある。遺構別にみると、縄文時代中期末のSI06住居跡では、床面の炭化材にクリ、スルデ、エゴノキ属、P14から出土した炭化材にクリが認められ、3分類群が利用されていたことが推定される。強度の高いクリやエゴノキ属は強度を要する部位、強度の低いスルデはクリやエゴノキ属とは異なる部位に利用された可能性がある。一方、同じく縄文時代中期末のSI08住居跡では、床面から出土した炭化材3点が全てミズキ属に同定された。強度の高い木材を利用している点ではSI06住居跡と同様であるが、利用される種類が異なる。

弥生時代後期のSI01住居跡の炭化材は、炉北側床面から出土しており、コナラ節に同定された。コナラ節は、縄文時代中期末の住居跡出土炭化材には認められないことから、縄文時代中期末とは異なる木材の利用が推定される。また、縄文時代晩期のSI02住居跡の炭化材は、炉内部から出土していることから燃料材の可能性があり、クリに同定された。

なお、周辺地域では、縄文時代中期～晩期にかけての住居跡出土炭化材を対象とした調査例がほとんど無い。岩手県内でみると、縄文時代中期では、御野野遺跡（一戸町）の住居跡から出土した炭化材にクリを中心にオニグルミ、ニガキ、ハリギリ、サクラ属、コナラ節、ヤマグワ、ケヤキ等が混じる組成が確認されている（バリノ・サーヴェイ株式会社、1993、2004）。また、縄文時代後期では、大日向Ⅱ遺跡でクリを中心にアサダ、が混じる組成が確認されている（バリノ・サーヴェイ株式会社、1996）。

III. 炭化種実の同定

1. 試料

試料は、縄文時代中期後葉～末とされるSI06住居跡の炉燃焼部中央（番号1）、QSE焼土下床面（番号2～5）と、SI08住居跡のQNE炉脇床面（番号6）、ベルト北1層（番号7）、QNW床面（番号8）より出土した炭化種実8点21個である。

2. 分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察する。種実遺体の同定は、現生標本および石川（1994）、中山ほか（2000）等との対照から実施し、結果を一覧表に示す。分析後は、炭化種実を容器に入れて保管する。

3. 結果

結果を表4に示す。炭化種実は、落葉広葉樹4分類群（オニグルミ、クスギ、クリ、トチノキ）に同定された。

SI06住居跡は、トチノキの種子の破片が6個（番号1）、クリの子葉の完形が2個（番号2、3）、破片が1個（番号5）、クスギの子葉の破片が7個（番号4）の、計16個が確認された。SI08住居跡は、オニグルミの核の破片が4個（番号7、8）と、クスギの子葉の破片が1個（番号6）、計5個が確認された。

種実遺体は全て炭化しており、黒色を呈す。各分類群の写真を図版3に示し、形態的特徴等を以下に記す。また、主な炭化種実の大きさをデジタルノギスで計測した結果を表1に示す。欠損等で完全な計測値を得られない場合は、残存値にプラス（+）で表示する。

・オニグルミ (*Juglans mandshurica* Maxim. var. *sachalinensis* (Miyabe et Kudo) Kitamura) クルミ科クルミ属

核は、完形ならば、長さ3～4cm、径2.5～3cm程度の広卵形で頂部が尖り、1本の明瞭な縦の縫合線がある。破片の大きさは、最大16.4mm（番号7）。核は硬く緻密で、表面には縦方向の浅い彫紋が走り、ごつごつしている。内部には子葉が入る2つの大きな窪みと隔壁がある。

・クスギ (*Quercus acutissima* Carruthers) ブナ科コナラ属

子葉は、完形ならば径1.5～2cm程度の偏球体で頂部はやや尖り、基部は切形。破片は、2枚からなる子葉の合わせ目に沿って縦に割れた半分以下で、長さ12.1mm、幅10.4mm、半分の厚さは4.7mm（番号

表4 炭化種実同定結果

番号	遺構名	出土地点	種名	部位	状態	個数	重量(g)	計測値(mm)			備考
								長さ	幅	厚さ	
1	SI06住居跡	炉燃焼部中央	トチノキ	種子	破片	6	1.34	15.54 +	-	-	計約1個分
2	SI06住居跡	QSE焼土下床面	クリ	子葉	完形	1	1.52	20.92	20.48	9	
3	SI06住居跡	QSE焼土下床面	クリ	子葉	完形	1	2.13	21.83	22.79	9.74	
4	SI06住居跡	QSE焼土下床面	クスギ	子葉	破片	7	0.75	13.82 +	-	-	計約1/2個分
5	SI06住居跡	QSE焼土下床面	クリ	子葉	破片	1	0.54	15.66	14.91	7.26 +	半分未満
6	SI08住居跡	QNE炉脇床面	クスギ	子葉	破片	1	0.15	12.14	10.37	4.73 +	半分
7	SI08住居跡	ベルト北1層	オニグルミ	核	破片	1	0.35	15.72 +	16.44 +	5.99 +	半分未満
8	SI08住居跡	QNW床面	オニグルミ	核	破片	3	0.35	14.17 +	-	-	計1/2個未満

注) 計測値はデジタルノギスによる。欠損等で完全な計測値を得られない場合は、残存値にプラス(+)で示す。

号6)。子葉は硬く緻密で、表面には縦方向に走る維管束の圧痕がみられる。合わせ目の表面は平滑で、正中線上は僅かに窪み、頂部には径1mm程度の小さな孔（主根）がある。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

子葉は、長さ20.9mm、幅20.5mm、厚さ9.0mm（番号2）と、長さ21.8mm、幅22.8mm、厚さ9.7mm（番号3）の三角状広卵形で一側面は偏平、反対面は丸みがある。頂部は尖り、基部は切形。子葉は硬く緻密で、表面には内果皮（渋皮）の圧痕の縦筋が粗く波打つ。また、2枚からなる子葉の合わせ目の線に沿って割れた半分未満の破片もみられる（番号5）。子葉合わせ目の表面は平滑で、正中線上はやや窪み、頂部には小さな孔（主根）がある。

・トチノキ (*Aesculus turbinata* Blume) トチノキ科トチノキ属

種子は、完形ならば径2.5～4cm程度の偏球体で、表面にはほぼ赤道面を蛇行して一周する曲線を境に、不規則な流理状模様がある光沢の強い黒色の上部と、粗面で光沢のない灰褐色の下部の着点に別れる。種皮は薄く硬く、不規則に割れ、破片は最大15.5mm（番号1）。種皮内部に残存する胚は、クリやクスギの子葉よりも粗くボソボソとしており、不規則に割れている。

4. 考 察

縄文時代中期後葉～末の集落中心部より検出されたSI06住居跡とSI08住居跡からは、オニグルミ、クスギ、クリ、トチノキの炭化種実が確認された。オニグルミやトチノキは川沿いなどの湿潤な肥沃地を好んで生育し、クスギやクリは丘陵や山地に生育する二次林要素の落葉高木である。本遺跡の立地等を考慮すると、猿ヶ石川流域の河畔等に林分を形成した樹種や、周辺の丘陵地に生育した樹種を反映していると考えられる。

また、これらの樹種は、堅果が食用可能で、収量も多く長期保存も可能なことから、古くより植物質食糧として利用され、遺跡出土例も多い有用植物である（渡辺、1975など）。SI08住居跡のベルト北1層、QNW床面から出土したオニグルミは核内部の種子が、SI06住居跡のQSE焼土下床面から出土したクリは子葉が生食可能である。SI06住居跡のQSE焼土下床面とSI08住居跡のQNE炉脇床面から出土したクスギは子葉が、SI06住居跡の炉燃焼部中央から出土したトチノキは種子内部の胚が食用可能であるが、何度も茹でこぼしたり、灰汁を加えるなどのあく抜きを要する。以上のことから、出土した炭化堅果類は、当時の遺跡周辺域の森林より採取され、住居内に持ち込まれた植物質食糧と示唆され、火を受けたことが推定される。

なお、堅果類の出土部位は、クスギ、クリ、トチノキは、可食部である子葉や種子が確認され、クリには完形個体も確認された。これらは、住居内に貯蔵保管された食用前の状態で火を受け炭化した状況が推定される。一方、オニグルミは、非可食部である核の破片が確認されたことから、可食部を取り出した後の残渣の処理や燃料材としての利用、廃棄などの状況が窺え、クリやトチノキとは異なる履歴が推定される。

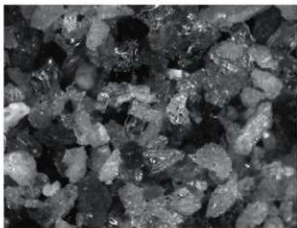
引用文献

- Arai, F., Machida, H., Okumura, K., Miyauchi, T., Soda, T., Yamagata, K. 1986, Catalog for late quaternary marker-tephras in Japan II - Tephras occurring in Northeast Honshu and Hokkaido -, Geographical reports of Tokyo Metropolitan University No. 21, 223-250.
- 古澤 明, 1995, 火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別, 地質学雑誌, 101, 123-133.
- Hayakawa, Y., 1985, Pyroclastic Geology of Towada Volcano, Bulletin of The Earthquake Research Institute University of Tokyo, vol. 60, 507-592.
- 林 昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集, 京都大学木質科学研究所.

- 石川茂雄, 1994, 原色日本植物種子写真図鑑, 石川茂雄図鑑刊行委員会, 328p.
- 伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ, 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
- 伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ, 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
- 伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ, 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
- 伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ, 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
- 伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ, 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
- 小林謙一, 2008, 縄文土器の年代(東日本), 小林達雄先生古希記念企画 総覧 縄文土器, 株式会社アム・プロモーション, 896-903.
- 工藤 崇・佐々木 寿, 2007, 十和田火山後カルデラ期噴出物の高精度噴火史編年, 地学雑誌, 116, 653-663.
- 町田 洋・新井房夫, 2003, 新編 火山灰アトラス, 東京大学出版会, 336p.
- 町田 洋・新井房夫・森脇 広, 1981, 日本海を渡ってきたテフラ, 科学, 51, 562-569.
- 町田 洋・新井房夫・杉原重夫・小田静夫・遠藤邦彦, 1984, テフラと日本考古学-考古学研究と関連するテフラのカタログ-, 渡辺直経(編)古文化財に関する保存科学と人文・自然科学, 同朋舎, 865-928.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志, 2000, 日本植物種子図鑑, 東北大学出版会, 642p.
- バリノ・サーヴェイ株式会社, 1993, 花粉分析・炭化材同定・種子同定, 「御所野遺跡I 縄文時代中期の大集落跡」-戸町教育委員会, 341-355.
- バリノ・サーヴェイ株式会社, 1996, 大日向II遺跡 自然科学分析, 「国道395号線改良工事関連遺跡発掘調査 大日向II遺跡発掘調査報告書 -第2次~第5次調査- 第1分冊」, 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第225集, (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター, 492-521.
- バリノ・サーヴェイ株式会社, 2004, 鑑定及び分析, 「御所野遺跡II」, 戸町文化財調査報告書第48集, 戸町教育委員会, 276-287.
- 島地 謙・伊東隆夫, 1982, 国説木材組織, 地球社, 176p.
- 渡辺 誠, 1975, 縄文時代の植物食, 雄山閣出版, 187p.
- Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].



1. 軽石 (1: S104住居跡 攪乱 (風倒木痕埋土))



2. 火山ガラス (2: SK40土坑 1層)



3. 重鉱物 (1: S104住居跡 攪乱 (風倒木痕埋土))



4. 重鉱物 (2: SK40土坑 1層)



5. 軽鉱物 (1: S104住居跡 攪乱 (風倒木痕埋土))

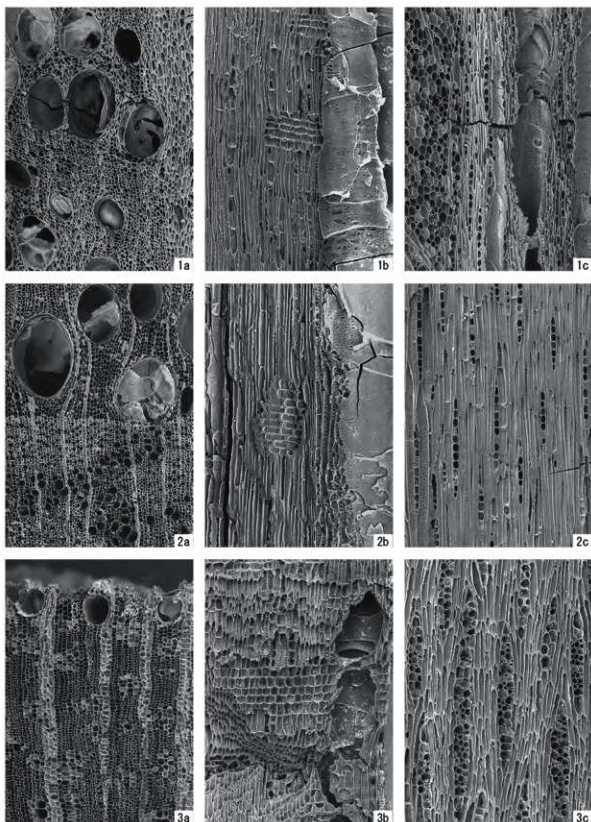


6. 軽鉱物 (2: SK40土坑 1層)

Opx: 斜方輝石, Cpx: 単斜輝石, Ho: 角閃石, Op: 不透明鉱物,
Vg: 火山ガラス, Qz: 石英, Pl: 斜長石.

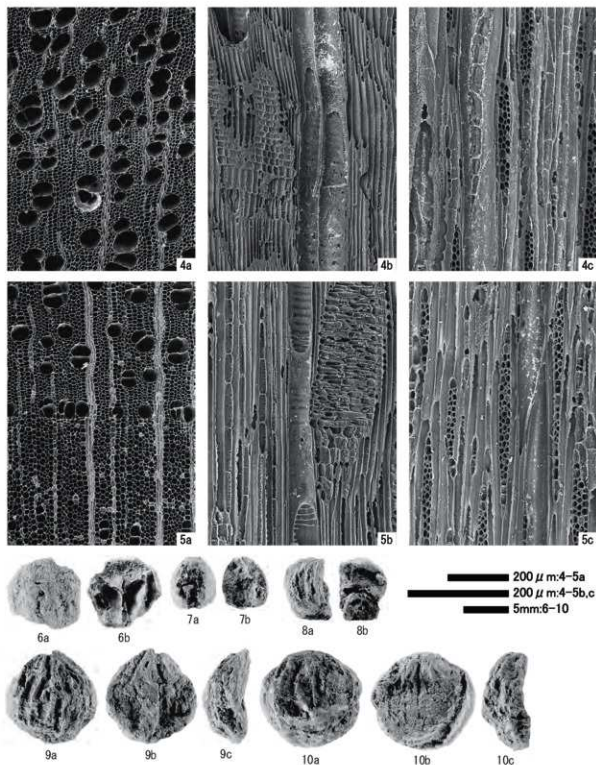


図版 1 テフラ・重鉱物・軽鉱物



1. コナラ属コナラ亜属コナラ節 (1:S101住居跡 炉北側床面)
 2. クリ (2:S102住居跡 炉内部)
 3. ヌルデ (5:S106住居跡 床面炭化物6)
 a:木口, b:柱目, c:板目

図版2 炭化材 (1)



4. ミズキ属 (8:S108住居跡 東壁際床面) a:木口, b:柾目, c:板目
 5. エゴノキ属 (6:S106住居跡 QSE床面) a:木口, b:柾目, c:板目
 6. オニグルミ 核 (7:S108住居跡 ベルト北1層)
 7. クヌギ 子葉 (6:S108住居跡 QNE炉脇床面)
 8. トチノキ 種子 (1:S106住居跡 炉燃焼部中央)
 9. クリ 子葉 (2:S106住居跡 QSE焼土下床面)
 10. クリ 子葉 (3:S106住居跡 QSE焼土下床面)

図版3 炭化材(2)・種実遺体

3 大畑Ⅲ遺跡出土黒曜石製遺物の原産地推定

杉原重夫（明治大学文化財研究施設運営委員）

金成太郎（明治大学文化財研究施設）

佐藤裕亮・弦巻千晶（明治大学文学部RA）

(1) はじめに

考古学研究では、遺物が遺跡へと至るまでの来歴を辿ることによって、個々の時代における人々の行動様式や流通関係に迫ることが可能となる。特に狩猟・採集によって生計を立てていたと考えられている石器時代においては、石器に使用する石材の原産地推定が空間的な人の動きに迫るための有効な分析方法となる。なかでも火山の噴出物として生成された黒曜石は、結晶構造を持たず珪晶の含有量が少ないことから元素組成が安定しており、このような黒曜石の岩石学的特質に着目して今日まで様々な理化学的分析方法を用いた原産地推定が行われている。特に蛍光X線分析装置を用いた分析は、装置の操作や測定の前処理が容易である点や特に資料を非破壊で測定できるなどといったメリットにより、考古資料の扱いに適している。また比較的短い時間で測定できるという点で、分析対象が出土遺物全般におよぶ石器研究においては非常に有効な測定手段といえる。以上のような経緯で今回も蛍光X線分析装置を用いた原産地推定を行った。石器石材（黒曜石・ササカイト等）の元素組成を根拠とした原産地推定のフローチャートを第1図に示す。

(2) 測定方法

蛍光X線法を用いて黒曜石の正確な元素分析値を得るには、内部が均質で表面形態が一律な試料を作成し、検量線法などによって定量的に分析を行うのが一般的である。そのためには試料を粉砕してプレスしたブリケットを作成するか、もしくは溶融してガラスビードを作成する必要がある。しかしながら遺跡から出土した遺物は、通常非破壊での測定が要求されるため上記の方法をとることは困難である。そのため、遺物に直接X線を照射する定性（半定量）分析が行われている。このような直接照射によって発生する蛍光X線の強度そのものは、試料の状態や装置の経年変化によって変動する可能性が高いが、特定元素の強度同士の比を採った場合はその影響は小さいと考えられている。今回は測定強度比をパラメータとして原産地推定を行った。

(3) 試料の前処理

比較用の産出地採取原石については、必要に応じて新鮮な破断面または研磨面を作製し超音波洗浄器によるクリーニングを行った。遺跡出土石器は多くの場合新鮮で平滑な剥離面があるため、試料表面をメラミンスポンジとアルコールで洗浄してから測定を行った。特に汚れがひどい遺物のみ超音波洗浄器を用いた。

(4) 装置・測定条件

蛍光X線の測定にはエネルギー分散型蛍光X線分析装置JSX-3100s（日本電子株式会社）を用いた。X線管球はターゲットがRh（ロジウム）のエンドウインドウ型を使用した。管電圧は30kV、電流は抵抗が一定となるよう自動設定とした。X線検出器はSi（ケイ素）/Li（リチウム）半導体検出器

を使用した。試料室内の状態は真空雰囲気下とし、X線照射面径は15mmとした。測定時間は240secである。測定元素は、主成分元素はケイ素 (Si)、チタン (Ti)、アルミニウム (Al)、鉄 (Fe)、マンガン (Mn)、マグネシウム (Mg)、カルシウム (Ca)、ナトリウム (Na)、カリウム (K) の計9元素、微量元素はルビジウム (Rb)、ストロンチウム (Sr)、イットリウム (Y)、ジルコニウム (Zr) の計4元素の合計13元素とした。また、X線データ解析ソフトには明治大学文化財研究施設製：JsxExtを使用した。

(5) 原産地推定の方法

黒曜石はケイ酸、アルミナ等を主成分とするガラス質火山岩であるが、その構成成分は産出地による差異が認められる。とりわけ微量元素のRb、Sr、Y、Zrでは産出地ごとの組成差がより顕著となっている。望月はこの産地間の組成差から黒曜石の産地推定が可能であると考え、上記の4元素にK、Fe、Mnの3元素を加えた計7元素の強度比を組み合わせることで産地分析を行っている(望月ほか1994、望月1997)。これら7元素による原産地分析の有効性はガラスビードを用いた定量分析によっても裏付けられている(嶋野ほか2004)。ここでも上記した望月の判別方法に準拠する形をとることとし、原産地推定のパラメータにRb分率 $[Rb強度 \times 100 / (A = Rb強度 + Sr強度 + Y強度 + Zr強度)]$ 、Sr分率 $(Sr強度 \times 100 / A)$ 、Mn強度 $\times 100 / Fe強度$ 、 $\log (Fe強度 / K強度)$ を用いて判別図を作製し、判別分析はZr分率 $(Zr強度 \times 100 / A)$ を加えて行った。

(6) 黒曜石原産地の判別

6-1. 判別図

判別図は、視覚的に分類基準が捉えられる点、および判定基準が分かりやすいというメリットがある。また測定結果の提示に際し、読者に理解しやすいという点も有効であろう。まず各産出地採取試料(基準試料)の測定データを基に2種類の散布図(Rb分率vs $Mn \times 100 / Fe$ 、Sr分率vs $\log (Fe / K)$)を作製し、各原産地を推定するための判別域を決定した。次に遺物の測定結果を重ね合わせて大まかな判別を行った。基準試料の測定強度比の平均値を表1に示す。

6-2. 判別分析

判別図や測定値の比較による原産地の推定では、測定者ごとの恣意的な判断を完全に排除することは難しい。そこで多変量解析の一つである判別分析を行った。判別分析では上記のパラメータを基にマハラノビス距離を割り出し、各原産地に帰属する確率を求めた。距離と確率とは反比例の関係にあり資料と各原産地の重点間の距離が最も短い原産地(群)が第一の候補となる。なお、分析用ソフトには明治大学文化財研究施設製：MDR1.02を使用した。また判別結果の参考資料として、各原産地(重点)間のマハラノビス距離を提示した(表2)。

(7) 黒曜石原産地の名称と地理的な位置づけ

北海道・東北地方の黒曜石原産地(付図1)の選定にあたっては、日本の黒曜石産出地データベース(杉原・小林2004、2006)を使用し、この中から既存の文献・資料を参考にして現地調査を行い、石器石材に利用可能と思われる黒曜石の産出地を選択した(金成ほか2007、2010)。

黒曜石原産地(obsidian source)の判別にあたっては、各産出地を火山体、島嶼、河川流域、岩石区等の地形・地質的条件によって枠組みを行い、これを「地区:area」と名づけ、現在黒曜石を産出する地点(露頭・散布地など)を「原石産出地(単に産出地とよぶ):point」とした。今回の原産地

推定に使用した「系：series」は、「地区」内の「産出地」のうち、蛍光X線分析の結果に地形・地質情報を参考にして判別された地理的に隣接する「産出地」群である。また、それぞれの「系」内の黒曜石産出地については、火道や貫入岩の位置、噴出物の産状や分布状態、黒曜石の岩石学的特徴（含有する珪晶鉱物、球顆の有無、色調、透明度など）についても検討を行い、この原産地設定が火山地質学的に有意義であることを確認している。ただし、同一の「系」内の産出地でも、複数の判別域が存在する場合や、異なる「系」同士で判別が困難な例も存在する。同一「系」内の地域において岩石学的に有意に元素比が異なる原石が混在して産出する場合は、「A、B、C…」の様に区分する。黒曜石産出地には噴出源に近い一次産出地のほか、河川や海流によって遠方に運ばれた二次産出地があり、ここでの判別域は必ずしも考古学的原産地（石器時代における採取地）を示すのではないことは言うまでもない。

表3 北海道・東北地方における黒曜石原産地の区分

地区(area)	系(series)	産出地(point)	産出量	
a)北海道地方	名寄地区	名寄系	智恵文川、忠烈布川、朝日川、下川橋	△
	白滝地区	赤石山系	赤石山、八号沢、球顆の沢、槻加沢、流紋沢川、槻加峠の巣沢、槻加湧別川、湧別川	◎
			十勝石沢系	十勝石沢の霧頭、十勝石沢川、白土の沢、あじさいの滝、IK霧頭、槻加峠の巣沢、槻加湧別川(野宿の沢)、湧別川
	社名淵地区	社名淵系	サナブチ川、湧別川	△
	生田原地区	生田原系	仁田布川、背谷牛山南東麓	○
	置戸地区	置戸山系	置戸山、訓子府川、墓地の沢川、常呂川	○
			所山系	所山、オンネアンズ川、墓地の沢川、常呂川
	ケショマップ地区	ケショマップ系	ケショマップ川、セノ沢(武利川)	△
	旭川地区	旭川系	高砂台(雨粉台)、近文台、	-
	滝川地区	滝川系	江部乙、秩父別、大和、美葉牛	-
	十勝地区	上士幌系	十一の沢、タウシベツ川、芽登川、旭ヶ丘、居辺川、音更川	○
			美萁系	十勝川、鎮糠川、佐枝川
	赤井川地区	赤井川系	土木川	○
	豊浦地区	豊浦系	豊泉	△
	b)東北地方	小泊地区	小泊系	小泊中学校、折腰内
西青森地区		西青森系	鷹森山、天田内川、新城川	-
岩木山地区		岩木山系	出来島、鳴沢川(建石町)、中村川、鶴ヶ坂	△
深浦地区		深浦系	六角沢、岡崎浜	△
男鹿地区		男鹿系	金ヶ崎、脇本	○
北上地区		北上系	掣石(小赤沢)、折居、花泉	-
月山地区		月山系	田代沢・大越沢、長防山、上野新田(小野木山)	○
湯の倉地区		湯の倉系	湯の倉	△
色麻地区		色麻系	東原	-
秋保地区		土蔵系	土蔵、水上南	-
			馬場町北系	馬場町北

産出量：◎多、○有、△少、-極少

(8) 石器の原産地推定結果

今回測定したのは、岩手県遠野市大畑Ⅲ遺跡（縄文時代中期・近世）から出土した黒曜石製遺物である。測定した遺物は9点であり、原産地が判別できた遺物は8点であった。

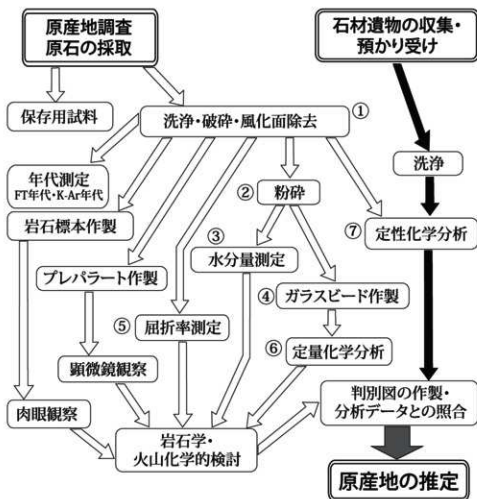
原産地推定の結果は、北上地区北上系Aが7点、男鹿地区男鹿系が1点であった。

(9) おわりに

黒曜石製遺物の原産地推定は、明治大学文化財研究施設に設置されている「黒曜石原産地推定システム」で行ったものである。なお、この報告書を参考に論文を作成する場合は、原産地推定の結果を遺物の出土状況からも検討していただきたい。

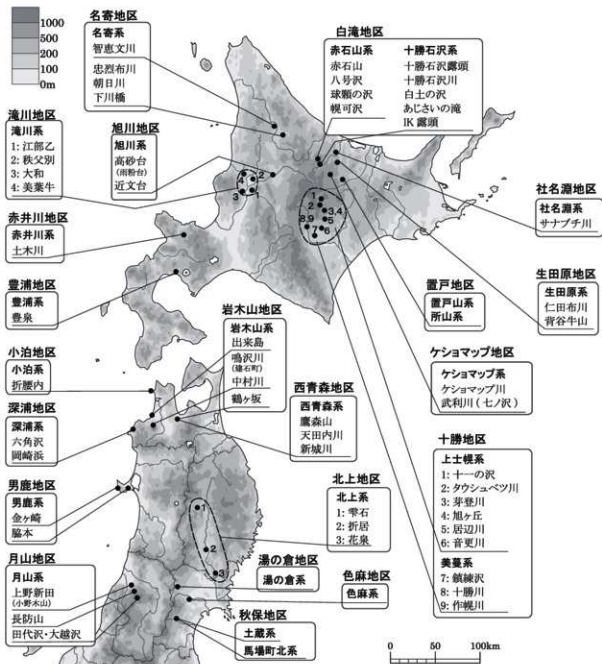
引用文献

- 金成太郎・杉原重夫・長井雅史・柴田 徹2007「北海道における黒曜石の原産地に関する定量・定性分析」日本文化財科学会第24回大会研究発表要旨集, pp.232-233.
- 金成太郎・杉原重夫・長井雅史・柴田 徹2010「北海道・東北地方を原産地とする黒曜石の定量・定性分析—黒曜石製遺物の原産地推定に関わる研究—」考古学と自然科学, 60, pp.57-81.
- 嶋野岳人・石原園子・長井雅史・鈴木尚史・杉原重夫2004「波長分散型蛍光X線分析装置による日本全国の黒曜石全岩定量分析」日本文化財科学会第21回大会研究発表要旨集, pp.140-141.
- 杉原重夫・小林三郎2004「考古遺物の自然科学的分析に関する研究—黒曜石産出地データベース—」明治大学人文科学研究所紀要, 55, pp.1-83.
- 杉原重夫・小林三郎2006「文化財の自然科学的分析による文化圏の研究」明治大学人文科学研究所紀要, 59, pp.43-94.
- 望月明彦1997「蛍光X線分析による中部・関東地方の黒曜石産地の判別」X線分析の進歩, 28, pp.157-168.
- 望月明彦・池谷信之・小林克次・武藤由里1994「遺跡内における黒曜石製石器の原産地別分布について—沼津市土手上遺跡BBV層の原産地推定から—」静岡県考古学研究, 26, pp.1-24.



- ① **洗浄・破砕・風化面除去**: 試料の洗浄, およびトリミングによって, 風化・酸化部位を除去する。
使用機器: 超音波洗浄機, Renfert basic master.
- ② **粉砕**: 試料が粉末になるまで鉄乳鉢, および攪拌攪潰機を用いて粉砕する。
使用機器: 石川式攪拌攪潰機AGB.
- ③ **水分量測定**: 試料を燃焼して原石に含まれる水分量を測定する。
測定機器: 京都電子工業カールフイッシャー水分計MKC-610, および水分気化装置ADP-512.
- ④ **ガラスビード作成**: 粉末試料をフラックス(融剤, 四ホウ酸リチウム; Li₂B₄O₇)とともに1100°C, 8分で熔融させ, ガラスビード(おはじ状のガラス板)を作製する。
使用機器: 日本サーモニクスNT2100.
- ⑤ **屈折率測定**: 既知の屈折率をもった浸液を用い, 透明~半透明試料の屈折率を測定する。屈折率は化学組成を反映しており, また少量かつ簡便な測定が可能。
測定機器: 京都フィッシュントラック温度変化屈折率測定システムRIMS2000.
- ⑥ **定量化学分析**: 波長分散型蛍光X線分析装置(WDX)を使用。測定元素はSi, Ti, Al, Fe, Mn, Mg, Ca, Na, K, P, Rb, Sr, Ba, Y, Zr, Nb, Th, V, Zn, Cr, Ni, Co。6試料の連続測定が可能。
測定機器: リガクRIX1000.
- ⑦ **定性化学分析**: エネルギー分散型蛍光X線分析装置(EDX)を使用。化学成分の存在比を非破壊, 非接触で測定している。16試料の連続測定が可能。
測定機器: 日本電子JSX-3100s.

第1図 石材遺物(黒曜石・サヌカイト)の原産地推定



付図1 石器時代における北海道・東北地方の黒曜石産地

表1 北海道・東北地方における黒曜石の測定値(強度比)

原産地		Rb分率	Sr分率	Zr分率	Mn×100/Fe	Fe/K
名寄系A: n=56	平均値:	29.8332	24.0450	34.2942	2.2027	1.9505
	標準偏差:	0.6177	0.5356	0.6872	0.0487	0.0290
名寄系B: n=11	平均値:	35.3175	12.4363	32.9297	1.5020	1.5687
	標準偏差:	0.5201	0.5459	0.4468	0.0599	0.0374
赤石山系: n=151	平均値:	46.1064	10.0669	24.1947	3.6799	1.2809
	標準偏差:	0.8980	0.7575	1.0007	0.1517	0.0569
十勝石沢系: n=116	平均値:	53.3228	4.0426	19.9294	4.5306	1.2274
	標準偏差:	1.0475	0.7975	1.1094	0.1110	0.0305
杜名淵系: n=20	平均値:	30.0002	13.2198	39.5429	3.2022	1.8748
	標準偏差:	0.5243	0.5775	0.6192	0.0592	0.0389
生田原系: n=63	平均値:	30.3818	9.7155	45.5441	1.6229	1.7969
	標準偏差:	0.6671	0.5115	0.8254	0.0473	0.0394
渡戸山系: n=25	平均値:	26.0770	21.6009	40.1146	3.0153	2.1485
	標準偏差:	0.6325	0.4841	0.8222	0.0608	0.0663
所山系: n=37	平均値:	35.8981	18.3673	30.9634	3.2615	1.3757
	標準偏差:	0.6374	0.5073	0.6809	0.0809	0.0392
ケシノマツ系: n=64	平均値:	27.3917	27.7661	32.5990	2.7875	2.4674
	標準偏差:	0.6934	1.0164	0.7488	0.1399	0.0306
旭川A・滝川系A: n=18	平均値:	31.0568	27.3119	28.9108	3.0865	2.0811
	標準偏差:	0.5544	0.5626	0.6414	0.0611	0.0703
旭川系B: n=10	平均値:	25.4016	31.9111	32.1185	2.9203	3.0803
	標準偏差:	0.6741	0.8834	1.3632	0.0501	0.0580
上士幌・美瑛系A: n=115	平均値:	40.0800	15.0582	26.3367	3.8147	1.3066
	標準偏差:	0.8822	0.7670	0.9569	0.0862	0.0392
美瑛系B: n=20	平均値:	31.6863	24.9799	29.8919	2.4020	2.1598
	標準偏差:	0.9950	0.5907	0.9268	0.0546	0.1406
赤井川系: n=42	平均値:	38.7798	16.1257	28.2118	4.8933	1.2322
	標準偏差:	0.8048	0.7357	0.9436	0.0754	0.0248
豊浦系: n=20	平均値:	23.9305	27.1562	36.4499	4.3797	1.7401
	標準偏差:	0.7532	0.7554	0.6161	0.1211	0.0415
小泊系: n=25	平均値:	46.4658	12.0293	26.5073	3.5296	0.9651
	標準偏差:	0.7599	0.5166	0.9849	0.1014	0.0191
西青森系: n=29	平均値:	40.3146	17.3977	25.5706	3.7344	1.4330
	標準偏差:	0.5080	0.5827	0.8576	0.0725	0.0264
岩木山系: n=52	平均値:	27.7673	30.4254	25.7264	12.9973	1.2363
	標準偏差:	0.9601	1.1595	1.0518	0.2586	0.0430
深浦系: n=40	平均値:	15.1647	0.7125	73.2569	2.2949	2.6968
	標準偏差:	0.4189	0.3923	0.6112	0.0754	0.0610
男鹿系: n=47	平均値:	40.4131	22.6536	21.9782	16.5470	0.8319
	標準偏差:	0.6591	0.6273	0.8569	0.1551	0.0166
北上系A: n=44	平均値:	19.3547	24.0818	41.9012	3.7985	2.8222
	標準偏差:	0.7931	0.9511	0.8548	0.1398	0.1166
月山系: n=55	平均値:	31.0560	28.7094	26.0881	11.9601	1.0478
	標準偏差:	1.4263	1.5951	1.4881	0.3412	0.0416
湯の倉系: n=16	平均値:	9.2363	35.7329	46.1112	2.6998	8.4943
	標準偏差:	0.8667	0.7128	0.5739	0.0338	0.1755
色麻系: n=21	平均値:	6.5862	32.4308	48.7309	5.3994	8.1681
	標準偏差:	0.5968	0.8226	0.7233	0.0675	0.1822
土蔵系: n=16	平均値:	7.1023	40.0162	40.9130	2.4707	17.9128
	標準偏差:	0.6311	0.6191	0.8704	0.0313	0.4082
馬場町北系: n=19	平均値:	6.7739	38.0019	42.5593	2.8996	13.1923
	標準偏差:	0.6103	0.8065	1.2039	0.0651	0.4966
四方峠系: n=29	平均値:	7.1579	39.9272	42.6650	4.5529	9.7784
	標準偏差:	1.0904	1.3484	1.1802	0.1359	1.0566
前川系: n=17	平均値:	12.1720	32.4789	46.5764	2.5111	4.4600
	標準偏差:	0.4614	0.6607	0.7001	0.0461	0.0782

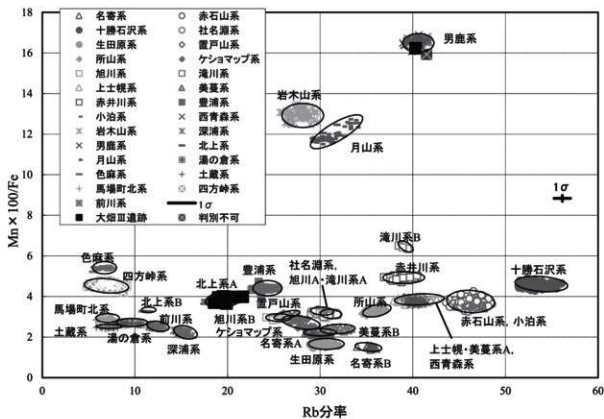


図 2-1 大畑Ⅲ遺跡の判別図 (Rb分率)

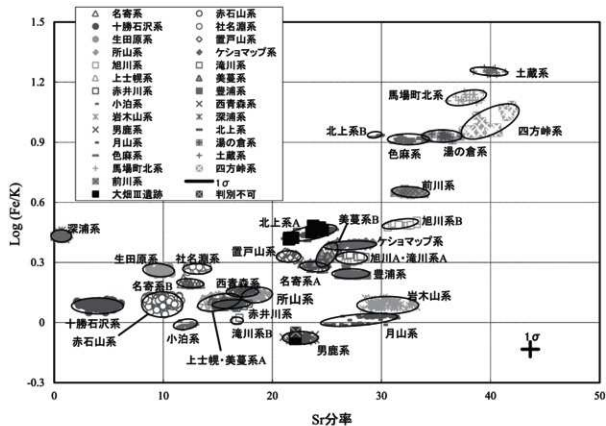


図 2-2 大畑Ⅲ遺跡の判別図 (Sr分率)

VI 総 括

1 縄文時代中期の集落

(1) 出土土器

今回の大畑Ⅲ遺跡調査では、調査区南東端の⑥区東尾根上において堅穴住居跡17棟、土坑20基等からなる縄文時代中期後葉の集落跡が検出された。遺物の大半は住居跡をはじめとする遺構に伴って出土している。従って出土土器も大木8b式～大木10式段階のものが主体となる。ここでは縄文中期後葉の土器について既往の土器編年研究成果（丹羽1981・丹羽1991・森2008等）を参照し以下の4類に分類し遺構時期決定の手がかりとする。

I類

大木9式
(古段階)



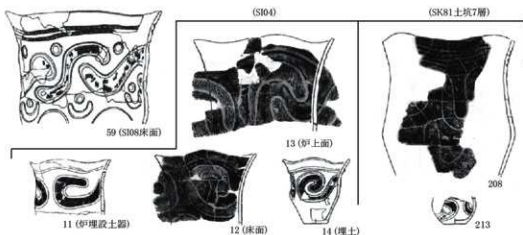
II類

大木9式
(新段階)



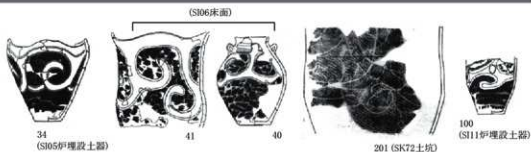
III類

大木10式
(古段階)



IV類

大木10式
(新段階)



第75図 縄文土器集成

第Ⅰ類 隆線による渦巻文が施文されるもの。

出土数は少なくSI16住居跡No141等破片資料が見られる。SI16住居跡ではこの他に柱穴上面、炉上面等から同類に該当する個体が複数出土する。断面三角形に調整された隆線で渦巻文等が施文され。概ね大木9式古段階に相当すると考えられるが、一部は破片資料のため大木8b式新段階と区別困難なものを含む。

第Ⅱ類 縦に延びる楕円形の文様が並列するもの。

SI10・SI15住居跡で良好なまとまりが見られる。SI10住居跡では床面～埋土中から小型～中型の深鉢が複数個体出土する（No91～97）。波状口縁頂部が外反する器形、沈線による縦長の楕円形文様が並列する文様構成、地文にRLR複節縄文を使用する点等が共通する。No95の壺形土器には隆帯の交点に渦巻状の突起が加えられる。SI15住居跡の床面出土No122、炉埋設土器No123は別個体だが縦位に並行する沈線区画が縦長の楕円形文様の一部となる。本類は大木9式新段階に相当する。

第Ⅲ類 沈線・隆線によって「C」字状、「S」字状の磨消文様が展開するもの。

東尾根上調査区出土の主体となる土器群で、SI04・SI08住居跡、SK81土坑をはじめとした複数遺構に良好なまとまりが見られる。SI04住居跡では炉埋設土器のNo11、炉上面のNo13他に見られるように外反する深鉢の胴部上半に横位に展開する曲線的な沈線文が描かれ、区画内部は地文充填手法が用いられる。無文の器面に地文充填された図形が描かれるという構成である。SI08住居跡床面のNo59でも斜めに延びる「S」字状のモチーフを主体として円形や「U」字状の付属的な文様が加えられる。頭部には内部に刺突列を伴う平行沈線や隆帯が波状に巡るものが多い。同様の特徴はSK81土坑7層出土資料No208他にも見られる。本類は大木10式古段階に相当する。

第Ⅳ類 沈線・隆線によって「J」字状、錨形等の磨消文様が展開するもの。

SI05住居跡炉埋設土器No34やSI06住居跡床面出土No40・41等が該当する。第Ⅲ類より量的には少なくなる。本類は地文部分内に沈線区画された曲線のかつ帯状の無文部が貫入するという文様構成を取る。無文部は上部や下部で分岐し、SI11住居跡炉埋設土器No100やSK72土坑出土No201等下端が波頭状に入り組むもの含まれる。概ね大木10式新段階に相当すると考えられる。

(2) 竪穴住居跡

前項の4分類を時期区分に置き換え1期～4期を設定する。各遺構別に土器出土状況をもとに時期区分に当てはめ、以下の変遷を想定した。

1期 SI16

2期 SI10・SI15・SI19・SK82

3期 SI03・SI04・SI07・SI08・SI09・SI12・SI13・SI14・SI17・SK81・SK83

4期 SI05・SI06・SI11・SI18・SK72

このうち、3期と判断したSI03・SI07・SI13・SI14は出土遺物の絶対数が少なく、上記区分はやや不確実である。またSI13はSI09に切られる重複関係にあるが、2期まで遡る根拠も見出し難いため3期と判断している。

以下、各住居跡の特徴を時期別に概観する。

1期 SI16は長方形の竪穴で中央に石囲炉が単独で設置される。主柱穴は短辺中央の竪穴中軸線上両端と長辺壁際に合計6基、亀甲形に配置される。

2期 SI19は引き続き長方形の外周を持つが、短辺側の主柱穴の位置はSI16と異なり短辺の中央から両端に移動している。全体では6基の主柱穴が梯子形に配置される。炉の位置も中央から片方に移動

1期

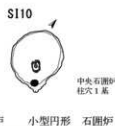


遺構図は縮尺1:200

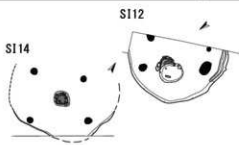
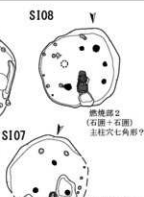
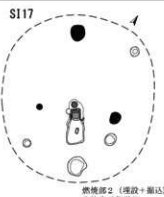
主柱穴と判断した柱穴を黒塗り済み

薄アミは燃焼面

2期



3期



4期



縄文
晩期後葉



弥生
後期



第76図 竈穴住居跡集成

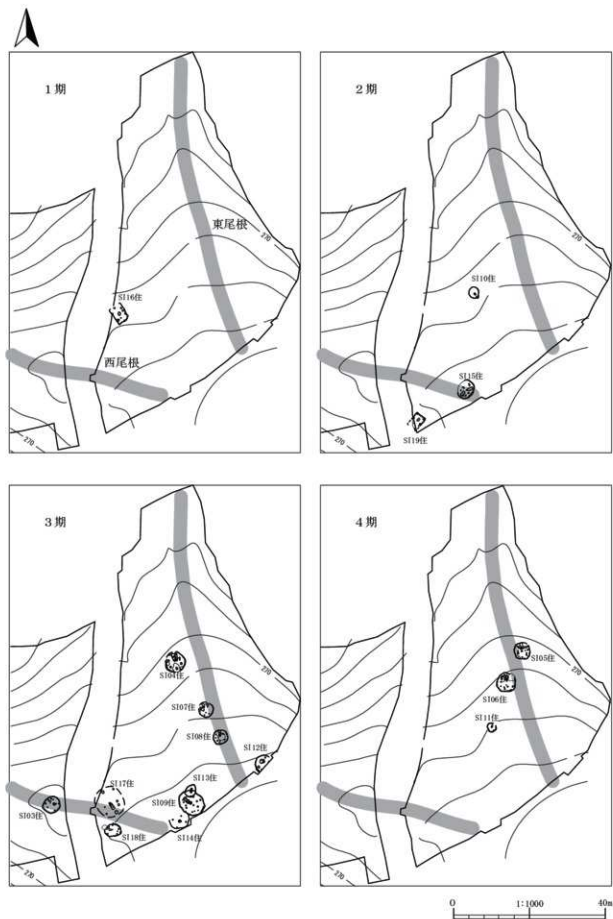
表12表 住居跡一覧表

遺構名	長さ	短径	平面形状	炉	支柱穴配置	時期	C14年代測定史料	備考
SI01	2.7m	2.6m	円形	地床炉 中央	壁柱穴	弥生後期	No.1	
SI02	3.5m	2.7m	楕円形	石囲炉 中央	配置不明	縄文晩期後葉	No.2	
SI03	4.7m	4.3m	楕円形	石囲炉 中央	配置不明	縄文中期3期		
SI04	5.5m	5.4m	円形	複式炉 土器埋設燃焼部+石囲燃焼部+掘り込み前庭部	五角形配置	縄文中期3期		
SI05	4.6m	4.3m	円形	複式炉 斜位土器埋設燃焼部+掘り込み前庭部	五角形配置 壁柱穴あり	縄文中期4期	No.4	
SI06	5.1m	5.0m	円形	複式炉 石囲燃焼部+掘り込み燃焼部	五角形配置	縄文中期4期	No.5-6-7	炉2基（新旧）
SI07	4.1m	3.9m	円形	複式炉 石囲燃焼部+掘り込み燃焼部	三角形配置 壁柱穴あり	縄文中期3期		
SI08	3.9m	3.8m	円形	複式炉 石囲燃焼部+石囲燃焼部+掘り込み燃焼部	七角形配置 壁柱穴あり	縄文中期3期	No.8-9	焼失住居 SK80より新
SI09	7.2m	5.9m	楕円形	複式炉 石囲燃焼部+掘り込み燃焼部+掘り込み燃焼部	五角形配置	縄文中期3期		SI13より新
SI10	3.1m	2.7m	円形	石囲炉 中央	一端1基	縄文中期2期	No.10-14	
SI11	2.5m	2.3m	円形	複式炉 土器埋設燃焼部+掘り込み前庭部	両端2基	縄文中期4期		SK78より古
SI12	4.8m	-	円形か	石囲炉 中央寄り	四角形配置か	縄文中期3期	No.11	南東側調査区外
SI13	3.4m	2.7m	楕円形	複式炉 石囲燃焼部+掘り込み前庭部	一端1基	縄文中期3期		SI09より古
SI14	5.0m程	-	楕円形か	石囲炉 中央	四角形配置か	縄文中期3期		北西側プラン不明
SI15	4.9m	4.1m	楕円形	複式炉 土器埋設燃焼部+掘り込み燃焼部+掘り込み前庭部	四角形配置か	縄文中期2期	No.12	炉2基 （同時存在か）
SI16	4.8m程	3.5m	長方形	石囲炉 中央	亀甲形配置	縄文中期1期	No.13	
SI17	7m以上	-	楕円形	複式炉 土器埋設燃焼部+石囲燃焼部+掘り込み前庭部	五角形配置か	縄文中期3期		堅穴プラン不明
SI18	4.4m	3.1m	楕円形	地床炉 中央	六角形配置か	縄文中期3期		立石を持つピット
SI19	4.3m程	3.0m	長方形	地床炉 中央寄り	六角形配置か	縄文中期2期		

しており、外周が長方形であることを除けば3期のSI18等と同一の構造と見て差し支えない。同段階で楕円形のSI15、小型円形のSI10が出現しており、長方形基調から円形・楕円形基調への転換期にあたるものと思われる。SI15では正立する土器埋設部を燃焼部として楕円形の掘り込み前庭部を有する複式炉を持ち、次の3・4期における複式炉を持つ住居跡の特徴が現れている。一方SI10は小型円形の住居跡で、中央付近に石囲炉が設置され支柱穴は堅穴外周に接する一端に1基のみである。3期としたSI13、4期のSI11とはほぼ同規模であり支柱穴配置も同様であることから、小型の堅穴住居跡が系列を構成する可能性が高い。

3期 10棟の住居跡がこの段階に属すると捉えられる。規模から7mを超える大型（SI09・SI17）、4～6m程度の中型（SI03・SI04・SI07・SI08・SI12・SI14・SI18）、小型（SI13）の3種に分かれ、中型は更に炉の構造から複式炉が設置されるもの（SI04・SI07・SI08）、中央部に石囲炉が設置されるもの（SI03・SI12・SI14）、楕円形で地床炉が設置されるもの（SI18）に細分される。複式炉を持つ5棟はいずれも炉と対向する堅穴中軸線上に支柱穴のうち1基が配置される。一方、中央に石囲を持つ3棟は、全周が判明していない2棟を含むため確実ではないが、炉を囲むように4基の支柱穴が方形に配置されると見られる。SI18は上述のようにSI19の堅穴プランが方形から楕円形に変化した状態と捉えられる。小型のSI13は石囲燃焼部に接続して掘り込みの前庭部を伴う複式炉が設置されるが、支柱穴はSI10と同様に1基のみである。

4期 中型円形で複式炉を持つSI05・SI06に加え、小型円形のSI11の3棟がこの段階に属する。SI05・SI06の全体的な構造、支柱穴配置は3期のSI04・SI08と類似し大きな差異は見いだせない。ただ



第77図 竪穴住居跡分布変遷

し、SI05の複式炉燃焼部には斜位土器埋設が設置される。大木10式期の北上川流域における特徴的な炉形態とされるが(千葉2005)、今回の調査区内ではこの1棟のみに限られる。SI11は中央に土器埋設の燃焼部と掘り込みの前庭部からなる小振りの複式炉が設置され、対向する2辺に2基の柱穴が配される。2期のSI10、3期のSI13との関連が強い構造と見られる。

上記のように時期順に概観したが、全体としては堅穴形状(長方形・楕円形・円形)、堅穴規模(大型・中型・小型)、支柱穴配置、炉の構造といった諸属性の組み合わせによる分類が可能であり、また細分によって抽出した「グループ」が一定の設計原理に基づいていると考えられる。同時に、この「グループ」が細別時期を越えて存続すること、複数のグループが同時存在もしくは入れ替わりながら消長することを指摘できる。具体的には2期段階での長方形から円形・楕円形への変化、3期段階での複式炉の盛行と中央石囲炉系列の同時存在、2期から4期にかけての小型系列の存続といった現象を挙げる事が可能である。

また、複式炉に着目すると燃焼部の数と構造から、

I a類: 燃焼部1箇所・土器埋設燃焼部を持つ (SI05・SI11)

I b類: 燃焼部1箇所・石囲燃焼部を持つ (SI06・SI07・SI13)

II a類: 燃焼部2箇所・1段目に土器埋設燃焼部を持つ (SI04・SI15・SI17)

II b類: 燃焼部2箇所・1段目に石囲燃焼部を持つ (SI08・SI09)

に細分される。II類は2期に属するSI15以外3期に比定されるが、I類は3期と4期が混在しI a類の2棟は4期に属する。大きな傾向としては燃焼部数の減少(2箇所→1箇所)、土器埋設燃焼部を採用する割合の増大、といった現象がうかがえる。複式炉構造における複数のタイプの同時併存と大木9式段階から大木10式段階につれての炉自体の簡略化、土器埋設燃焼部の増加は、北上川流域における中期後葉の特徴として既に指摘されており(中村1982、駒木野2004、菅野2005)、今回の調査区内での変化もこれに共通する。

ここで時期別に分解した住居跡分布状況(第77図)を見ると、1期から3期までは西尾根寄りに住居跡が分布するのに対し4期では東尾根に偏在しており、集落の中心部が移動している可能性を指摘できる。また、各時期共に尾根筋を中心とした分布になるようである。遺構数の多い3期では東西の2尾根の方向と同様にハの字形に住居跡が分布する。南東側の調査区外に遺構分布が延びていると想定しても環状配置となることは考えにくく、狭い尾根上に立地する集落における当該期の傾向(酒井1991)と合致する。土坑は細別時期に当てはめることが困難であり第77図には示していないが、住居跡とはほぼ同様の分布状況を示す。従って、縄文中期後葉の居住域を中心とした遺構分布区域は概ねさしわたし60~80m程度の範囲に収まると見られる。

2 全体の状況

今回の調査で判明した事項を概ね時代順に列挙する。

縄文時代前期初葉 調査区南西部①区斜面下部から繊維土器片が少量出土する。遺構は確認されない。

縄文時代前期中葉 調査区東部⑥区尾根上から大木2式段階土器片が少量出土する。また①区斜面下部にTo-cuが上部に堆積する土坑(SK40)が1基のみ単独で存在する。

縄文時代中期中葉 調査区北西部平坦面①区から大木8式段階土器片の出土がある。遺構は確認されない。

縄文時代中期後葉 調査区南東部⑥区尾根上を中心に集落が形成される。詳細は前項に記載した通りだが、大木9式段階から大木10式段階にかけての住居跡17棟、及び同時期と推定される土坑群等からなり、4期にわたる変遷過程を追うことができる。遺物では礫石器の多出が目立ち、特に凹石（39点／剥片を含めた石器総数283点のうち14%）、石皿・台石類（47点／同17%）は石鏃・石匙といった剥片石器類の総計（64点／22%）よりも多い。集落は比較的短期間の存続と見られ、縄文時代後期初頭以降には継続しない。

縄文時代後期前葉～中葉 西尾根上等で散発的に土器片の出土がある。遺構は確認されない。一方、西尾根③・④区を中心に分布する陥し穴状遺構群については時期比定が困難だが、これまでの溝状の陥し穴に関する研究成果（田村1987・平野2007等）を参照すると縄文時代後期前葉までに構築されたものが中心となるようであり、本遺跡においても下限年代は同様の時期を想定すべきかと思われる。その場合、中期後葉における東尾根の集落と同時存在であったかどうかの問題となるが判断材料は得られていない。

縄文時代晩期後葉 縄文時代中期末以来の遺構空白期間を経て、本段階で西尾根突端部分に堅穴住居跡（SI02）が築かれる。この周囲に分布する土坑にも同時期のものが含まれると思われる（SK55等）。

弥生時代後期 調査区西側の低地①区に堅穴住居跡（SI01）、及び円形の土坑群（SK02・04他）が分布する。土坑群は土壌墓の可能性があり、小規模な集落が形成されていたものと考えられる。

18世紀後半～20世紀 西尾根中央付近から墓域が検出された。斜面下の民家に関わる屋敷墓である。また調査区西端平坦地には溜池、井戸、水路が構築される。時期は不確実だが近世後半～近代におさまると見られる。

以上、今回の大畑Ⅲ遺跡調査成果を概観した。中でも縄文時代中期後葉の集落遺跡は旧宮守村域内では希少な事例であり、調査例の蓄積している北上盆地との比較検討により地域的な独自色や共通性がどう見られるか、また立地や自然環境と縄文集落の関わり等を考察する材料となろう。

引用・参考文献

- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター2011『新田Ⅱ遺跡』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第572集
 菅野智則2005『縄文時代中期集落の構造』『文化』第69巻第1・2号 pp.112-133
 菅野智則2006『北上川流域における中期後半集落の研究－炉構造による住居跡形態の差異－』『宮城考古学』第8号 pp.93-104
 駒木野智寛2004『複式炉の研究－岩手県内における複式炉の地域別分布傾向とその分析－』『紀要』XXⅢ pp.41-60（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
 酒井宗孝1991『岩手県における縄文時代中期の集落遺跡』『よねしろ考古』第7号 pp.44-61
 田村壮一1987『陥し穴状遺構の形態と時期について』『紀要』Ⅷ pp.25-44（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
 千寿直樹2005『東北地方における斜位土器埋設複式炉』『宮城考古学』第7号 pp.115-136
 遠野市1974『遠野市史』第一巻
 遠野市教育委員会2002『新田Ⅱ遺跡』遠野市埋蔵文化財調査報告書第13集
 遠野市教育委員会2006『張山遺跡』遠野市埋蔵文化財調査報告書第8集
 遠野市教育委員会2008『市内遺跡詳細分布調査概報Ⅲ－宮守町跡地区－』遠野市埋蔵文化財調査報告書第5集
 中村良幸1982『複式炉について』『考古風土記』第7号 pp.77-89
 丹羽茂1981『大木式土器』『縄文文化の研究』第4巻 pp.43-60
 丹羽茂1991『中期大木土器様式』『縄文土器大観Ⅰ 草創期 早期 前期』pp.346-352
 平野祐2007『東北地方南部における縄文時代陥し穴の形態と地域色』『紀要』XXⅤ pp.61-78（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
 水原義人1998『跡見三区小誌（第一編）郷土の伝承と碑』跡見三区自治会発行
 森幸彦2008『大木9・10式土器』『総覧 縄文土器』pp.360-357

写真図版



遺跡周辺空撮(西上空から)



遺跡周辺空撮(南上空から)



西端低地①区(E→)



西尾根西斜面②区(SE→)

写真図版 2 調査区 (1)



西尾根南東部④区(W→)



西尾根北斜面④区(E→)



東尾根北部⑤・⑥区(S-1)



東尾根南部遺構集中域⑥区(N-1)

写真図版 4 調査区 (3)



S101 全景 (W→)



S101 断面 (S→)



S101 炉 (W→)



S101 P1断面 (W→)



S102 全景 (SW→)



S102 断面 (S→)



S102 P1 断面 (S→)



S102 炉断面 (E→)



S103 全景 (E→)



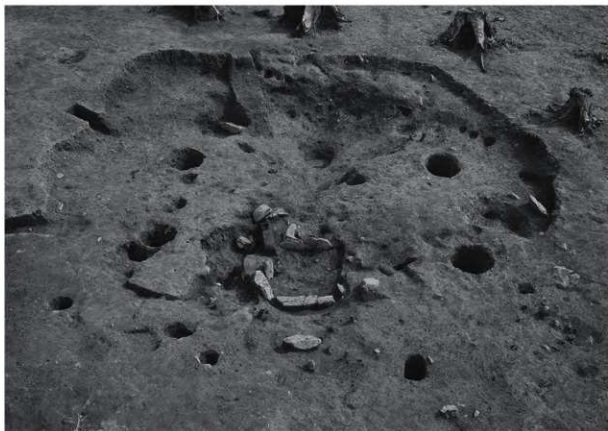
S103 断面 (E→)



S103 炉 (SE→)



S103 P 2 断面 (S→)



S104 全景 (N→)



S104 P 1 石皿出土状況 (S→)



S104 P 2 石皿出土状況 (S→)



S104 P 3 断面 (N→)



S104 P 4 断面 (N→)

写真図版 8 S104 (1)



S104 断面 (N→)



S104 炉付近遺物出土状況 (N→)



S104 炉付近遺物出土状況 (E→)



S104 炉燃烧部断面 (N→)



S104 炉埋設土器断面 (E→)



S105 全景 (N→)



S105 断面 (E→)



S105 炉全景 (SE→)



S105 炉埋設土器 (E→)



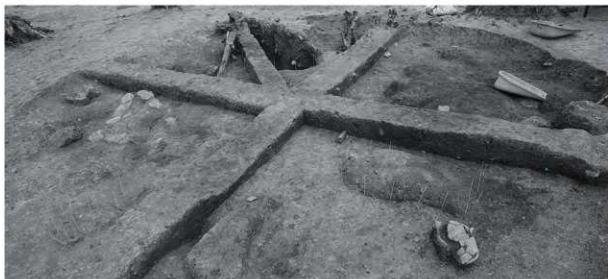
S106 全景 (NW→)



S106 断面 (S→)



S106 断面 (W→)



S106 烧土・遗物出土状况(SW→)



S106 炉全景(N→)



S106 炉埋土断面(SE→)



S106 炉燃烧部断面(N→)



S106 炉2全景(NW→)



S106 南壁際土器出土状況(W→)



S106 床面扁平礎出土状況(NW→)



S106 P 1 断面(S→)



S106 P 2 断面(S→)



S106 P 3 断面(S→)



S106 P 4 断面(S→)



S106 P 5・6・10断面(W→)



S106 P12-13断面(NW→)



S107 全景 (N→)



S107 断面 (E→)



S107 炉燃烧部断面 (S→)



S107 床面中央磙 (SE→)



S108 全景 (N→)



S108 断面 (S→)



S108 断面 (W→)



S108 焼土・遺物出土状況 (NE→)



S108 炉全景 (N→)



S108 炉燃烧部底面裸敷状況 (N→)



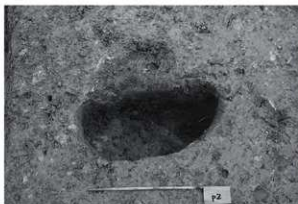
S108 炉燃烧部断面 (NW→)



S108 炉内土器出土状況 (SE→)



S108 P 1 断面 (W→)



S108 P 2 断面 (W→)



S108 P 3・8 断面 (W→)



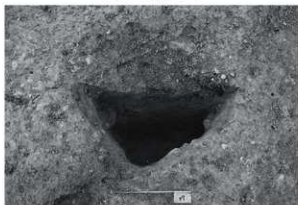
S108 P 4 断面 (W→)



S108 P 5 断面 (W→)



S108 P 6 断面 (W→)



S108 P 7 断面 (W→)



S108 精査状況



S109 全景 (N→)



S109 断面 (W→)



S109 炉全景 (N→)



S109 炉断面 (W→)



S110 全景 (NW→)



S110 断面 (SW→)



S110 炉 (NE→)



S111 全景 (NW→)



S111 断面 (NW→)



S111 炉埋設土器 (W→)



S112 全景 (N→)



S112 断面 (N→)



S112 炉検出状況 (SW→)



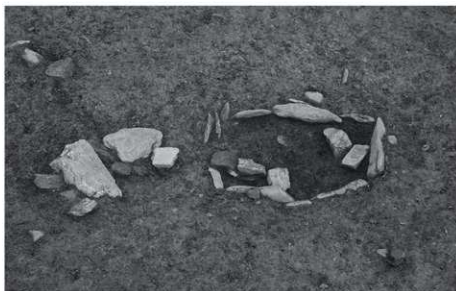
S112 炉石組露出 (W→)



S113 全景 (W→)



S113 断面 (W→)



S113 炉 (W→)



S114 全景 (N→)



S114 壁際 (NW→)



S114 炉 (N→)



S115 全景 (NE→)



S115 断面 (N→)



S115 断面 (W→)

写真図版24 S115 (1)



S115 炉1 全景 (N→)



S115 炉1 断面 (W→)



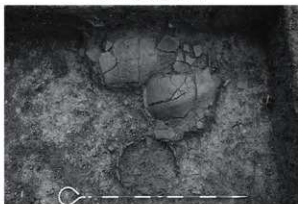
S115 炉1 土器埋設部断面 (W→)



S115 炉2 全景 (S→)



S115 炉2 断面 (E→)



S115 床面中央部土器出土状況



S116 全景 (S→)



S116 全景 (N←)



S116 全景 (E→)



S116 断面 (SW→)



S116 炉 (E→)



S117 全景 (SE→)



S117 炉 (SE→)



S117 炉断面 (SW→)



S117 P5 断面 (S→)



S118 全景 (SW→)



S118 断面 (NW→)



S118 炉 (SW→)



S118 P15立石 (E→)



S119 全景 (NE→)



S119 全景 (W→)



S119 伊断面 (NW→)



SX01 全景 (E→)



SX01 断面 (S→)



SX01 断面 (W→)



SX01 P1 (S→)



SK01 断面 (S→)



SK01 完掘 (S→)



SK02 断面 (S→)



SK02 完掘 (N→)



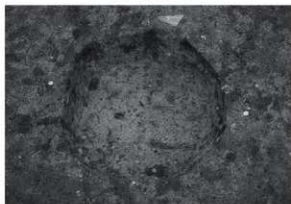
SK03 断面 (SW→)



SK03 完掘 (S→)



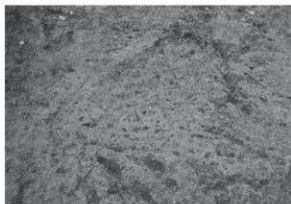
SK04 断面 (S→)



SK04 完掘 (S→)



SK05 断面 (SW→)



SK05 完掘 (S→)



SK06 断面 (S→)



SK06 完掘 (S→)



SK07 断面 (N→)



SK07 検出 (N→)



SK08 断面 (S→)



SK08 完掘 (W→)



SK09 断面 (W→)



SK09 完掘 (W→)



SK10 断面 (S→)



SK10 完掘 (S→)



SK11 断面 (S→)



SK11 完掘 (S→)



SK12 断面 (S→)



SK12 完掘 (W→)



SK13 断面 (S→)



SK13 完掘 (S→)



SK14 断面 (S→)



SK14 完掘 (S→)



SK15 断面 (S→)



SK15 完掘 (S→)



SK18 断面 (W→)



SK18 完掘 (W→)



SK19 断面 (N→)



SK19 完掘 (N→)



SK20 断面 (SE→)



SK20 完掘 (S→)



SK21 断面 (S→)



SK21 完掘 (S→)



西端低地作業状況



SK22 完掘 (N→)



SK23 断面 (S→)



SK23 完掘 (S→)



SK32 断面 (NW→)



SK32 完掘 (NE→)



SK33 断面 (SE→)



SK33 完掘 (SE→)



SK34 断面 (S→)



SK34 炭化材出土状況 (SE→)



SK39 断面 (SE→)



SK39 完掘 (SE→)



SK40 断面 (SE→)



SK40 完掘 (SE→)



SK41 断面 (NW→)



SK41 完掘 (NW→)



SK42 断面 (W→)



SK42 完掘 (W→)



SK43·SK49 断面 (E→)



SK43·SK49 完掘 (N→)



SK44 断面 (S→)



SK44 完掘 (SW→)



SK45 断面 (W→)



SK45 完掘 (NW→)



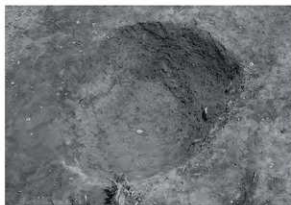
SK47 断面 (NW→)



SK47 完掘 (NW→)



SK48 断面 (W→)



SK48 完掘 (W→)



SK50 断面 (N→)



SK50 完掘 (N→)



SK51 断面 (N→)



SK51 完掘 (NE→)



SK52 断面 (NW→)



SK52 完掘 (N→)



SK53 断面 (W→)



SK53 完掘 (N→)



SK54 断面 (SW→)



SK54 完掘 (NW→)



SK55 断面 (SE→)



SK55 完掘 (S→)



SK61 断面 (E→)



SK61 完掘 (NW→)



SK65 断面 (SE→)



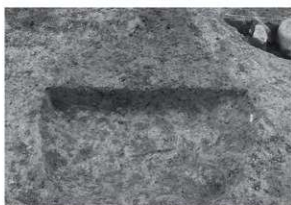
SK65 完掘 (E→)



SK66 断面 (SE→)



SK66 完掘 (SE→)



SK67 断面 (W→)



SK67 完掘 (S→)



SK68 断面 (SW→)



SK68 完掘 (SW→)



SK70 断面 (E→)



SK70 完掘 (N→)



SK72 断面 (E→)



SK72 完掘 (N→)



SK72 土器出土状況 (NW→)



西尾根北斜面調査状況



SK73 断面 (NW→)



SK73 完掘 (W→)



SK74 断面 (NW→)



SK74 完掘 (NW→)



SK75 断面 (E→)



SK75 完掘 (E→)



SK76 断面 (S→)



SK76 完掘 (N→)



SK77 断面 (W→)



SK77 完掘 (N→)



SK78 断面 (W→)



SK78 完掘 (E→)



SK79 断面 (W→)



SK79 完掘 (W→)



SK80 断面 (S→)



SK80 完掘 (W→)



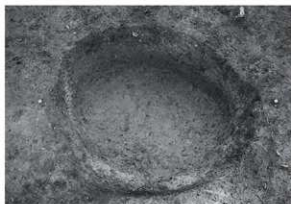
SK81 断面 (N→)



SK81 完掘 (NW→)



SK82 断面 (E→)



SK82 完掘 (W→)



SK83 断面 (E→)



SK83 完掘 (N→)



SK81 土器出土状况 (E→)



SK83 土器出土状况 (S→)



SK84 断面 (W→)



SK84 完掘 (W→)



SK85 断面 (W→)



SK85 完掘 (W→)



SK87 断面 (W→)



SK87 完掘 (W→)



SK88 断面 (S→)



SK88 完掘 (E→)



SK89 断面 (N→)



SK89 完掘 (N→)



西尾根上陥し穴群(E→)



陥し穴群調査状況

写真図版48 陥し穴状遺構(1)



SK16 完掘 (NW→)



SK17 完掘 (SE→)



SK24 完掘 (W→)



SK25 完掘 (W→)



SK16 断面 (S→)



SK17 断面 (SE→)



SK24 断面 (S→)



SK25 断面 (S→)



SK26 完掘 (NE→)



SK27 完掘 (N→)



SK28 完掘 (NW→)



SK29 完掘 (NW→)



SK26 断面 (NW→)



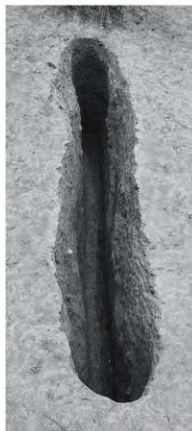
SK27 断面 (E→)



SK28 断面 (S→)



SK29 断面 (SE→)



SK30 完掘 (NE→)



SK31 完掘 (N→)



SK35 完掘 (SE→)



SK36 完掘 (SE→)



SK30 断面 (E→)



SK31 断面 (S→)



SK35 断面 (SE→)



SK36 断面 (NW→)



SK37 完掘 (SE→)



SK38 完掘 (NW→)



SK56 完掘 (SE→)



SK57 完掘 (SE→)



SK37 断面 (SW→)



SK38 断面 (NW→)



SK56 断面 (SE→)

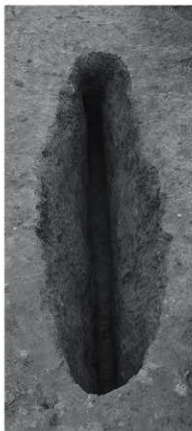


SK57 断面 (SE→)

写真図版52 陥し穴状遺構 (5)



SK58 完掘 (E→)



SK59 完掘 (E→)



SK60 完掘 (W→)



SK62 完掘 (E→)



SK58 断面 (SE→)



SK59 断面 (E→)



SK60 断面 (E→)



SK62 断面 (E→)



SK63 完掘 (E→)



SK64 完掘 (E→)



SK69 完掘 (E→)



SK71 完掘 (SE→)



SK63 断面 (E→)



SK64 断面 (E→)



SK69 断面 (E→)



SK71 断面 (SE→)

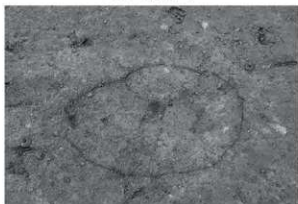
写真図版54 陥し穴状遺構 (7)



SF01 検出 (W→)



SF01 断面 (SW→)



SF02 検出 (N→)



SF03 検出 (N→)



SF04 検出 (S→)



SF04 断面 (SW→)



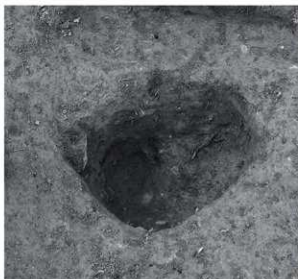
SF05 検出 (E→)



SF05 断面 (E→)



S001 配石断面 (E→)



S001 配石掘方完掘 (N→)



SD01 溝完掘 (E→)



SD01 溝断面 (S→)



SD02 溝完掘 (SE→)



SD02 溝断面 (N→)



SD03 溝全景 (NW→)



SD05 溝全景 (W→)



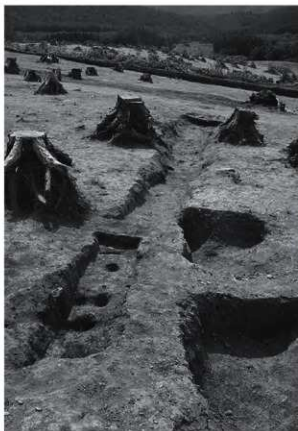
SD04 溝全景 (NW→)



SD04 溝断面 (NW→)



SD06 溝全景 (E→)



SD08 溝全景 (E→)



SD07 溝西半 (E→)



SD09 溝東半 (W→)



P036 断面 (N→)



P036 完掘 (N→)



P037 断面 (S→)



P037 完掘 (N→)



P038 断面 (E→)



SX07 風倒木痕断面 (NW→)



SX33 風倒木痕断面 (NW→)



北斜面風倒木痕検出状況



①区沢跡1 東半(W→)



①区沢跡1 西半(E→)



①区沢跡1 断面(NE→)



⑥区尾根上沢跡2
検出状況(S→)



⑥区尾根上沢跡2北半(N→)



⑥区尾根上沢跡2断面(N→)



西尾根上墓域 1 (SE→)



西尾根上墓域 1 (SW←)

写真図版62 近世墓 (1)



4号墓 (W→)



7号墓 (NW→)



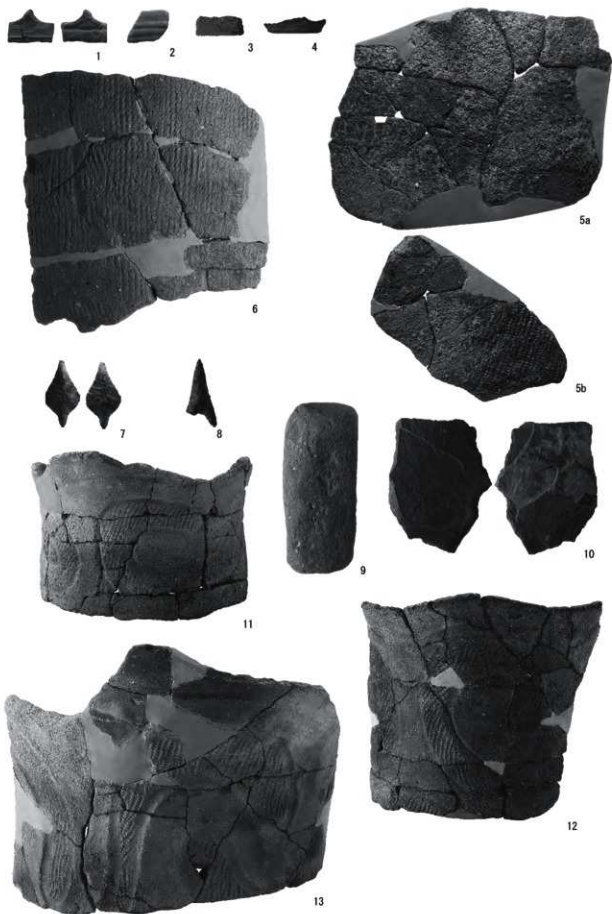
12・13号墓 (SW→)
右が12号墓



12・13号墓 (NW→)



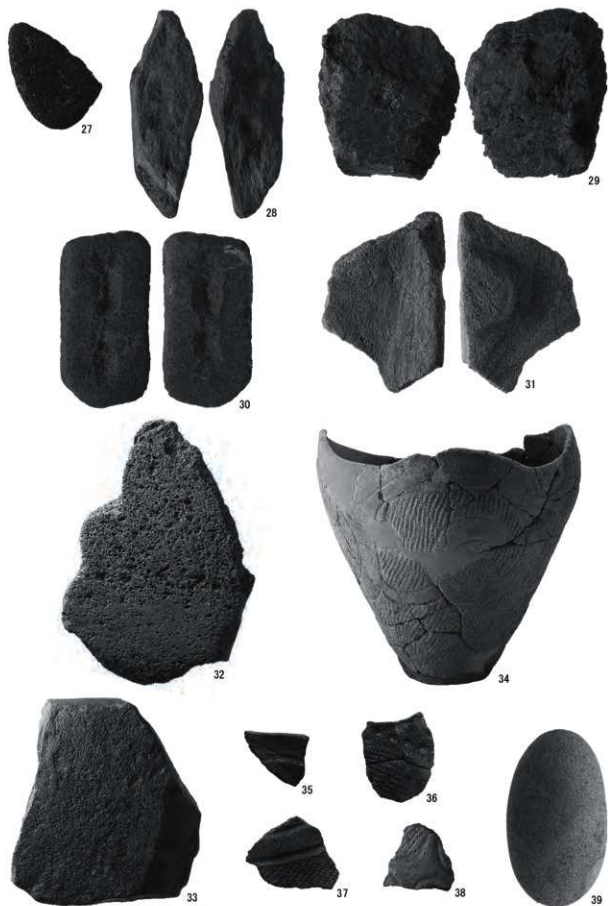
12・13号墓検出面石群 (SW→)



写真図版64 出土遺物 (1)



写真図版65 出土遺物 (2)



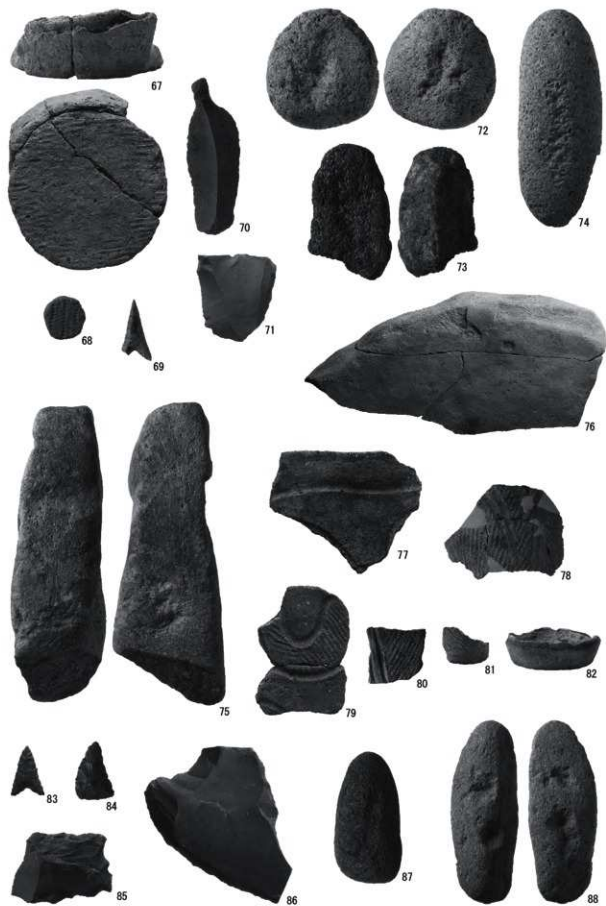
写真図版66 出土遺物 (3)



写真図版67 出土遺物(4)



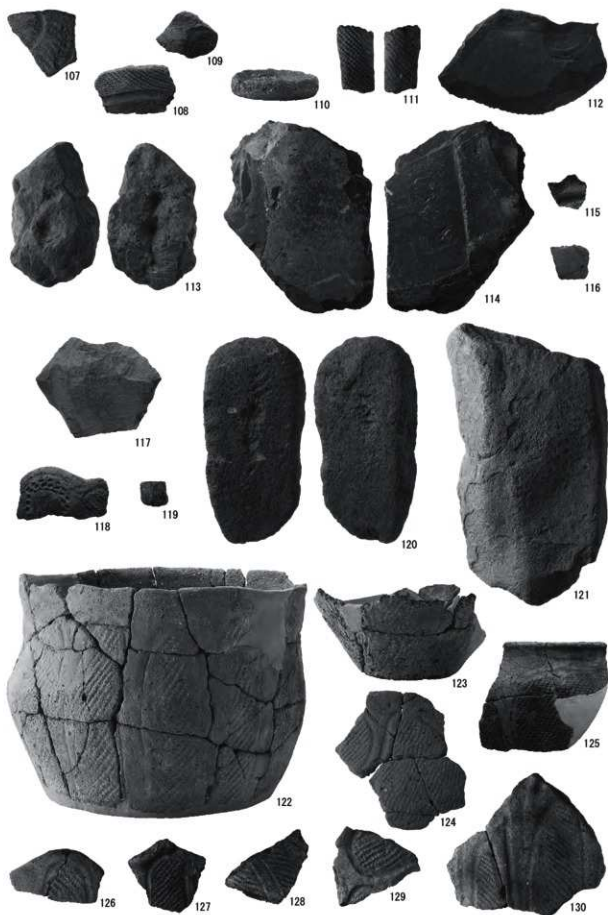
写真図版68 出土遺物 (5)



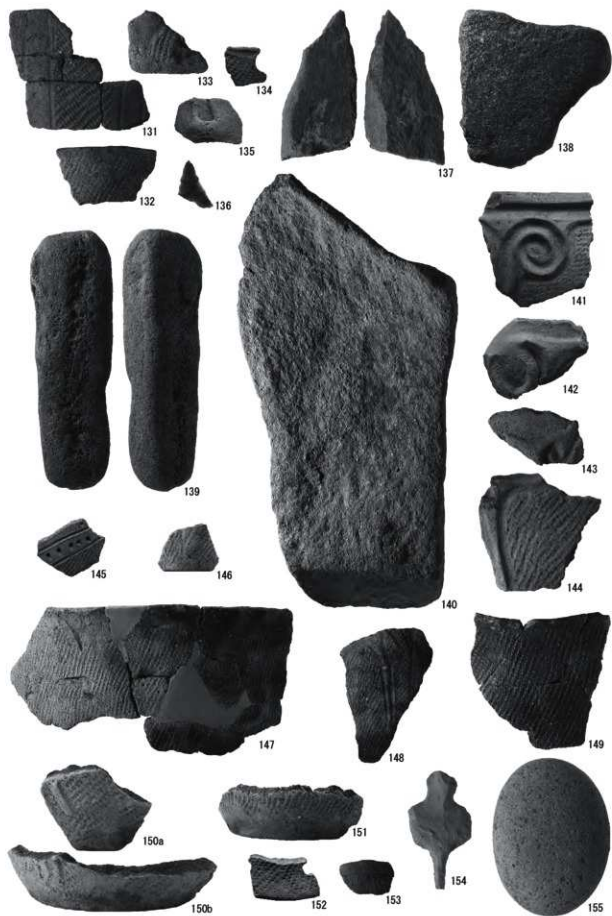
写真図版69 出土遺物 (6)



写真図版70 出土遺物 (7)



写真図版71 出土遺物 (8)



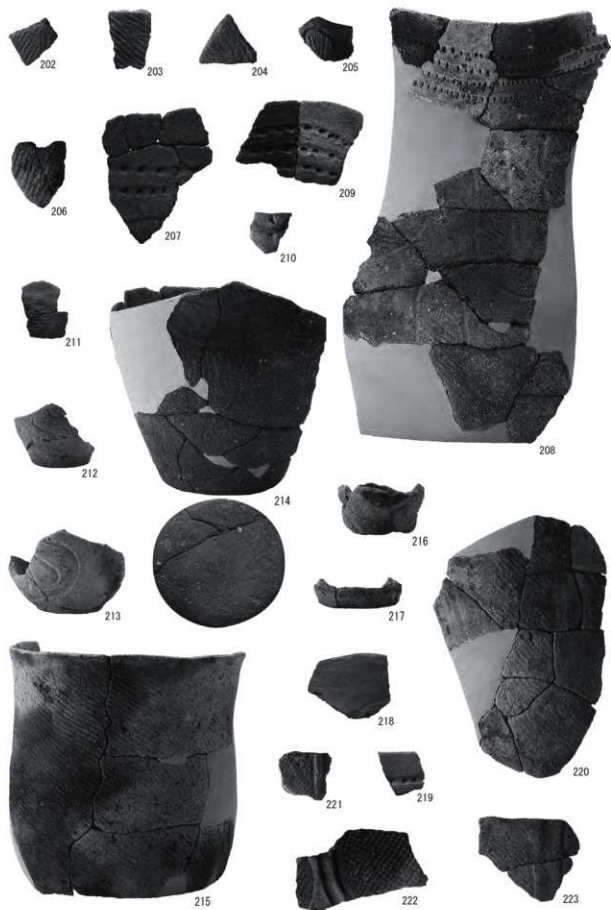
写真図版72 出土遺物 (9)



写真図版73 出土遺物 (10)



写真図版74 出土遺物 (11)



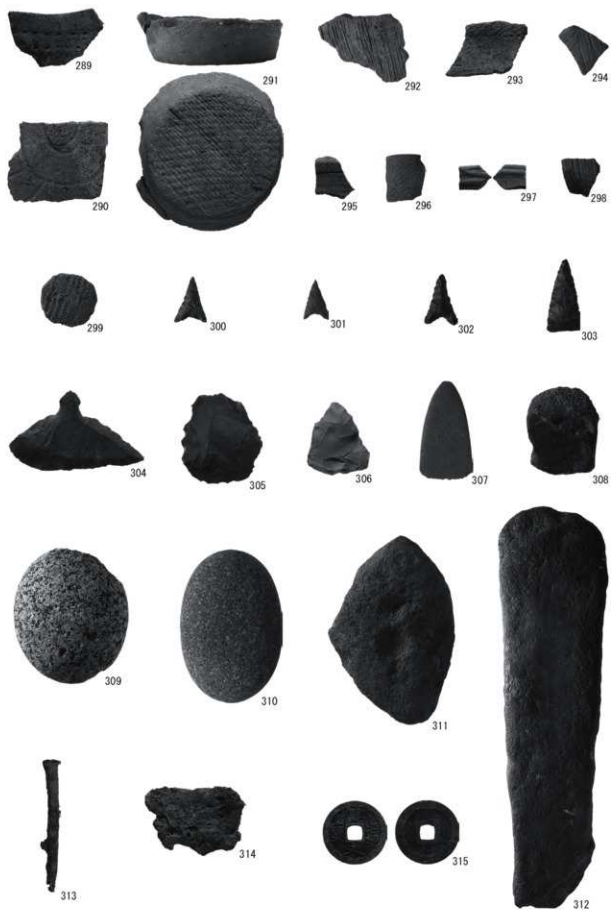
写真図版75 出土遺物 (12)



写真図版76 出土遺物 (13)



写真図版77 出土遺物 (14)



写真図版78 出土遺物 (15)



1号墓



2号墓



4号墓



4号墓



5号墓



7号墓



9号墓

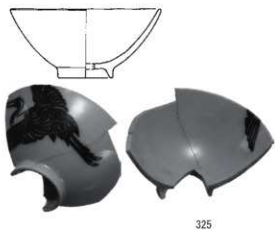
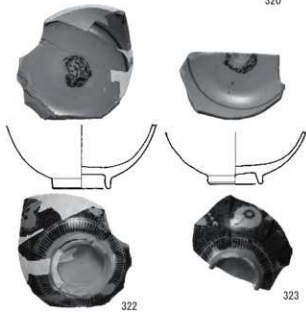
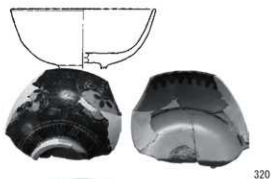


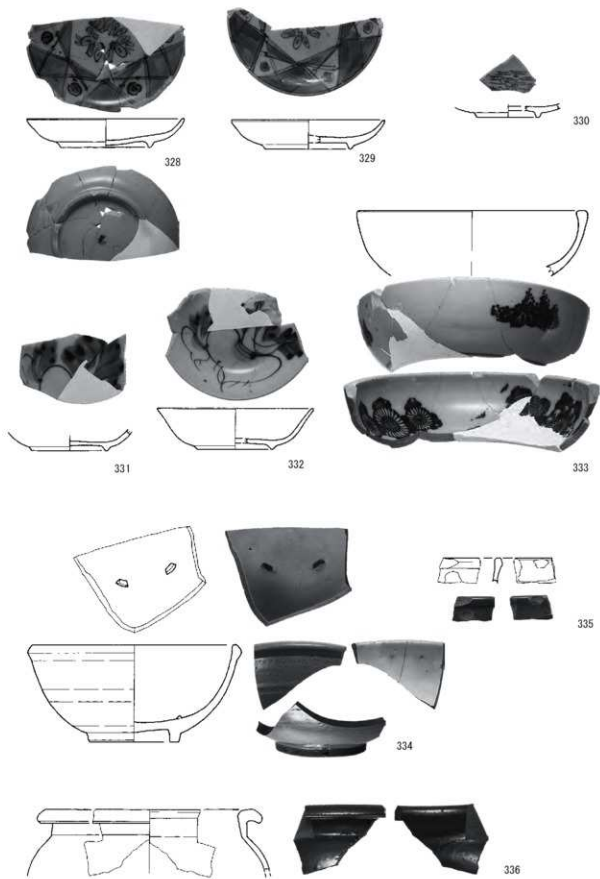
10号墓



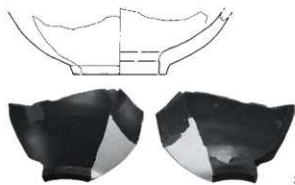
12号墓

写真図版80 出土遺物 (17) 近世墓副葬品②





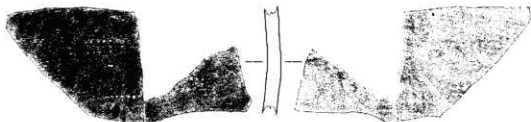
写真図版82 出土遺物 (19)



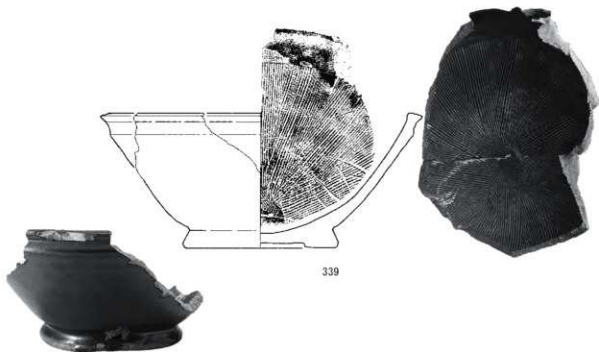
337



338a



338b



339

報告書抄録

ふりがな	おおばたけのいせきはつちょうさほうこくしょ							
書名	大畑Ⅲ遺跡発掘調査報告書							
副書名	東北横断自動車道釜石秋田線間連続遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第606集							
編集者名	高木 晃・北田 勲							
編集機関	公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	2013年2月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大畑Ⅲ遺跡	岩手県遠野市 宮守町下郷沢 33-21044か	03208	NE30-2300	39度 17分 41秒	141度 24分 21秒	2011.04.20 ～ 2011.10.03	18,005㎡	東北横断自動車 道釜石秋田線 に係る発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
大畑Ⅲ遺跡	集 落 跡	縄文時代	堅穴住居跡	18棟	縄文土器 (前期初頭・ 中期中葉～ 末・晩期後 葉) 土製品 石器 炭化堅果類・炭化材	縄文時代中期後葉の集落跡。 尾根上の平坦面を中心に凹 形。長方形の堅穴住居跡群 検出。複数の焼部からなる 複式炉、土器埋設部を伴 う複式炉等がある。		
			土坑	20基				
			陥し穴状遺構	24基				
			配石遺構	1基				
弥生時代	堅穴住居跡	1棟	弥生土器 (後期)					
近世	土坑	2基						
不明	土坑	溝跡	配石遺構	1基	陶磁器			
			土坑墓	12基	銭貨			
			土坑	4基	金属製品			
			溝跡	2条				
要 約			溝跡	2条				
			土坑	37基				
			溝跡	5条				
縄文時代中期後葉の集落跡。尾根上の平坦面を中心に凹形、長方形の堅穴住居跡群から構成される。住居跡群から離れた尾根上には溝状の陥し穴状遺構群検出。更に西側の低位面には弥生時代後期の堅穴住居跡と凹形土坑、近世後半～近代の溜池と考えられる堅穴状遺構等がある。								

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第606集

大畑Ⅲ遺跡発掘調査報告書

東北横断自動車道釜石秋田線関連遺跡発掘調査

印刷 平成25年2月22日

発行 平成25年2月25日

編集 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電話 (019) 638-9001

発行 国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
〒020-0066 岩手県盛岡市上田四丁目2-2
電話 (019) 624-3131

(公財)岩手県文化振興事業団
〒020-0023 岩手県盛岡市内丸13番1号
電話 (019) 654-2235

印刷 小松総合印刷株式会社
〒020-0827 岩手県盛岡市鉾屋町15番4号
電話 (019) 624-1374